

頭註 國譯本草綱目

第十二冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目第十二冊例

一、本冊には本草綱目獸部第五十卷上・下畜類、第五十一卷上・下獸類・鼠類・寓類・怪類、第五十二卷人部を收載した。

一、校訂、並に病名・術語の註解は凡て監修白井光太郎博士親ら擔當された。 地理釋、及び字解音訓等の一部分は譯者の註記である。

一、藥名標目下の和名・學名・科名の考定は、岡田信利氏主として之に任じ、農學士木村重氏もまた之に參じ、その木村氏の考定に係るものは皆その姓名を署して責任を明にした。

一、頭註の和名・學名・生產に關する異同の考證は、すべて木村農學士の執筆に成り、またいづれも署名して責任を明にした。

一、李時珍本草綱目五十二卷國譯の業は本冊を以てその蕆を告げたのであるが、考定・校正の都合上、刊行に際して屢〻前後の序を易へ、遂に穀・菜・果、木部は本冊より後ることとなつたのであるが、これまた期を接して順次刊行し、完璧を得ることの將

に近きにあることを慶ぶものである。

昭和六年十月十五日

駒込の假寓にて

鈴木眞海記

頭註國譯本草綱目　第十二册

目次

本草綱目獸部第五十卷下

畜類 下

本草綱目獸部第五十一卷上

獸類　上

本草綱目獸部第五十一卷下

本草綱目人部第五十二卷

本草綱目獸部

第五十卷上

本草綱目獸部目錄　第五十卷

李時珍曰く、獸とは四足にして毛あるものの總稱である。地の產であつて、(一)豢養するものを畜といふ。素問に『五畜を益となす』とあるがそれである。周制には、庖人は六畜――馬、牛、雞、羊、犬、豕――六獸――麋、鹿、狼、麕、兎、野豕である――を供し、その死、生、鮮、(二)薨の物を辨じ、獸人はその名物を辨じ、凡そ祭祀、賓客にはその死獸、生獸を供し、皮、毛、筋、骨を(三)玉府に入れ、冥氏は猛獸を攻め、穴氏は(四)蟄獸を攻めるといふことがある。嗚呼、聖人の生を養ひ、死に事へ、物を辨じ、物を用うるの道、愼み且つ備はれりと謂ふべきである。後世では、黄羊、黄鼠の如き、現に高貴の供御となし、(五)犏尾、貂皮は盛に利用され、山獺の特異、狗寶の功能、いづれも服食物として須ゐられつつあるのだが、典籍にはその記載を失ひ、羵羊に就ての問に答へ得るものは孔子だけ、鼮鼠に就いて詳しい智識のあるは終軍だけであつたといふ有樣だから、地生の羊、彭侯の肉などいふに至つては、よほどの博識の人でなければ明確ならしめることは六ヶ敷い。況や、物の種種樣樣なる性、

(一)豢ハ穀ヲ以テ養フヲ云フ。
(二)薨トハ乾イタモノ。
(三)玉府ハ天子ノ倉庫。
(四)蟄獸トハ熊羆ノ屬、冬藏スルモノヲ云フ。
(五)犏ハ犛牛ヲ云フ。

理の相異、人がそれに對し最も愼重を要すべき採、否に就ての用意に於てをやである。それはただその名を多く識つてゐる位の程度では覺束ないことだ。されば此には、諸種の獸類中の膳食、藥物、服器の材料となすべきもの凡て八十六種を獸類の部とし、畜、獸、鼠、寓、——怪の五類に分類した。——爾雅の釋獸には鼠屬と寓屬とあり、邢昺の註に『猴類は漸く人に肖て山林に寄寓す。故に寓屬といふ』とある。——舊本の獸部三品共五十八種の內、本書は五種を倂入し、一種を鱗部に移し入れ、一種を禽部に入れ、蟲部から三種を移し入れた。

神農本草經十五種　梁の陶弘景註。

名醫別錄十二種　梁の陶弘景註。

唐本草八種　唐の蘇恭。

本草拾遺十五種　唐の陳藏器。

炮炙論一種　宋の雷斅。

蜀本草一種　蜀の韓保昇。

開寶本草四種　宋の馬志。

嘉祐本草一種　宋の掌禹錫。

圖經本草一種　宋の蘇頌。

證類本草一種　宋の唐愼微。

本草衍義一種　宋の寇宗奭。

日用本草一種　元の吳瑞。

食物本草一種　明の汪穎。

食鑑本草一種　明の寗原。

本草綱目二十三種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　呉普本草　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對
唐甄權藥性　孫思邈千金　唐李珣海藥　楊損之刪繁
蕭炳四聲　唐孟詵食療　南唐陳士良食性　宋人大明日華
金張元素珍珠囊　李杲法象　王好古湯液　元朱震亨補遺
明汪機會編　王綸集要　陳嘉謨蒙筌

獸の一　畜類二十八種

豕 本經　狗 本經　羊 本經　大尾羊、胡羊、洮羊、羋羊、封羊、
地生羊、羵羊を附す。　黄羊 綱目　牛 本經　馬 本經
驢 唐本　騾 食鑑　駝 開寶　酪 唐本
酥 別錄　醍醐 唐本　乳腐 嘉祐　阿膠 本經
黄明膠 綱目　牛黄 本經　鮓荅 綱目　狗寶 綱目
底野迦 唐本　諸血 拾遺　諸朽骨 拾遺　震肉 拾遺

敗鼓皮 別錄　氊 拾遺　六畜爪甲蹄 本經　六畜心 綱目

諸肉有毒 拾遺　解諸肉毒 綱目

右附方　舊一百五十六、新五百三十七。

獸の一　畜類二十八種

豕（本經下品）

和名　ぶた
學名　Sus scrofa, var. domestica, Briss.
科名　ゐのしし科



〔豕〕
——豚は小さい——

【釋名】 猪（本經） 豚（同上） 豭 音は加（カ）である。 彘 音は滯（テイ）である。 豶 音は墳（フン）である。 時珍曰く、按ずるに、許氏の說文に『豕の字は、毛あり足あつて後に尾ある形の形象だ』とある。林氏の小說には『豕は不潔を食ふものだから豕と謂つたのだ。坎を豕となす。水畜であつて性は下に趨る。穢を喜むものだ。牡を豭といひ、牙といひ、牝を彘といひ、豝——音は巴（ハ）——といひ、貗——音は婁（ロウ）——といふ。牡にして去勢したものを豶といひ、四箇の蹄の白いものを豥豬といひ、高さ五尺あるを豟——音は厄（ヤク）——といひ、豕の子

を豬といひ、豚といひ、豰——音は斛（コク）——といひ、一子を特といひ、二子を師といひ、三子を豵（そう）といひ、末子を么（えう）といひ、生れて三月目のものを豯（けい）といひ、六月目を䝋（そう）といふ』とある。何承天の纂文には『（一）梁州では豱——音は攝（セフ）——といひ、河南では彘（てい）といひ、（二）吳楚では豨——音は喜（キ）——といひ、漁陽では大豬を豝（は）といひ、（三）齊徐では小豬を豯——音は鋤（ショ）——といふ』とある。

○頌曰く、按ずるに、揚雄の方言には『（四）燕、朝鮮地方では豬を豭と呼び、（五）關東では彘といひ、或は豕といふ。南楚では豨といひ、吳揚では豬といふ。その實は一種のものだ』とある。禮記にはこれを剛鬣（がうれふ）といつてある。崔豹の古今注にはこれを參軍といつてある。

集解

○頌曰く、凡そ豬は、骨細く、筋多く、高大にして重量百餘斤あり、物を食ふこと至て寡（すくな）く、甚だ畜養し易く、甚だ生息し易いものだ。

○○時珍曰く、豬は全國到る處で畜（か）つてゐるが、しかし各〻不同があつて、（六）青、兗（えん）、徐、淮（わい）に產するものは耳が大きい。燕、冀に產するものは皮が厚い。梁、雍（よう）に產するものは足が短い。遼東に產するものは頭が白い。豫州に產するはものは味（くちはし）が短い。

（一）梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。
（二）吳楚ハ今ノ江蘇、安徽地方。後漢ノ頃ノ稱ナリ。漁陽ハ草部雜草類百花草ノ註ヲ見ヨ。
（三）齊徐ハ山東省歷城縣ヨリ江蘇省徐州ニ亙ル一帶ノ地ヲ指ス。
（四）燕ハ草部隰草類燕脂ノ註ヲ見ヨ。
（五）關東ハ函谷關以東、今ノ河南省北部ヲ指ス。南楚ハ今ノ湖北省南部、湖南省北部ヲ指ス。吳揚ハ江蘇ノ南半部地方。
（六）青、兗、徐、淮ハ山東省西半部、江蘇省北半部、及ビ安徽省ノ一部ヲ指ス。燕冀ハ河北省、南滿洲

地方ヲ指ス。梁雍ハ陝西省ノ南半部。豫州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(七)本草彙言ニ亥ニ作ル。

江南に産するものは耳が小さく、これを江豬といふ。嶺南に産するものは白くして極めて肥えてゐる。豬は孕んで四个月で生れ、畜にあつては(七)水に屬し、卦に在ては坎に屬し、禽に在ては室星に應ずる。

豭豬肉 【氣味】 【酸し、冷にして毒なし。○凡そ豬肉は、苦し、微寒にして小毒あり。○江豬肉は、酸し、平にして小毒あり。○豚肉は、辛し、平にして小毒あり】別錄に曰く、豭豬肉は疾を治す。凡そ豬肉は能く血脈を閉ぢ、筋骨を弱くし、人の肌を虛す。久しく食つてはならぬ。病人、金瘡の者に尤も甚しい。

思邈曰く、他の豬肉を久しく食へば人をして子精を少からしめ、宿病を發し、豚肉を久しく食へば人をして全身の筋肉が碎痛して乏氣せしめ、江豬を多く食へば人體を重からしめる。脯にすれば少し腥氣がある。

詵曰く、久しく食すれば藥を殺し、風を動じ、痰を發する。傷寒、瘧疾、痰痼、痔漏の諸疾はこれを食へば必ず再發する。

時珍曰く、北豬は味薄く、煮れば汁が淸んでゐる。南豬は味厚く、煮れば汁が濃くして毒が尤も甚しい。藥に入れるには純黑の豭豬を用ゐる。凡そ白豬、花豬、豥

豬、牡豬、病豬、黄臕豬、米豬はいづれも食つてはならぬ。黄臕は煮れば汁が黄になり、米豬は肉中に米がある。說文に『豕が星下に食すれば息米を生ず』とあり、周禮に『豕の盲視して交睫するは星なり』とあるは、いづれもこれを指したのだ。

○烏梅、桔梗、黄連、胡黄連と反す。これを犯せば人をして瀉利せしめ、また蒼耳を犯せば人をして風を動ぜしめる。生薑と食合せれば面䵟を生じ、風を發する。蕎麥と食合せれば毛髪が落ち、風病を患ふ。葵菜と食合せれば少氣する。百花菜、吳茱萸と食合せれば痔疾を發する。胡荽と食合せれば人の臍を爛す。牛肉と食合せれば蟲を生ずる。羊肝、雞子、鯽魚、豆黄と食合せれば滯氣する。黿鼈肉と食合せれば人體を傷める。凡そ豬肉を煮るに皂莢子、桑白皮、高良薑、黄臘を配合すれば風氣を發せぬ。舊い籬篾を焚けば熟し易い。

主治　【狂病の久しく癒えぬを療ず】(別錄)　【丹石を壓し、熱毒を解す。肥熱の人が食ふに宜し】(拾遺)　【腎氣虛竭を補す】(千金)　【水銀風、并に土坑の惡氣に中りたるを療ず】(日華)

發明　時珍曰く、按ずるに、錢乙の小兒の疳病を治する麝香丸は豬膽で和し

(八)大觀ニ虛風所致ノ四字ヲ虛肥故ノ三字ニ作ル。
(九)按ズルニ補ノ下ニ陰字ヲ脫ス。

て丸にし、豬肝湯で服し、痟渴のものは豬肉湯、或は燖豬湯で服するのであつて、その意味は、蓋し豬は水に屬して氣は寒であり、能く火熱を去る點を利用したもののやうだ。

○弘景曰く、豬は使用することの最も多いものだが、ただ肉は多食してはならぬ。人をして暴に肥らしめる。蓋し(八)虛風からの結果である。

震亨曰く、豬肉の補氣に就いて、世俗に(九)補するといふその考へ方は誤つてゐる。ただ陽を補するだけのものだ。ここにいふ場合の虛損は陽に就いていふのではなく陰に就いていふのであつて、肉を以て陰を補するは火を以て水を濟ふことである。蓋し肉の性は胃に入れば濕熱を作し、熱は痰を生じ、痰が生ずれば氣が降らずして諸種の病證が發生するものだ。諺に『豬は薑で食はねば大風を發し、中年にして氣血が衰へ、顏面に黑䵟を發する』といつてある。

韓悉曰く、凡そ肉には補の功力があるが、ただ豬肉には補がない。これは一般に習慣性となつてゐるために生じた特殊現象だ。

附方 舊五、新十五。

【禁口痢疾】臘肉脯を煨熟して食ふが妙である。(李樓奇方)

【小兒の(一〇)刮腸】痢疾で禁口し閉目し、至つて重きには、精豬肉一兩を薄く切つて香しく炙き、膩粉末半錢を上に鋪いて食はせる。或は鼻頭に置いて香を聞かせれば自然にそれを食ふ欲望を起すものだ。(活幼口議)【上氣欬嗽】煩滿するには、豬肉を切つて鎚子にし、豬脂で煎熟して食ふ。(心鏡)【浮腫脹滿】食事を攝らぬには、豬脊肉一雙を切り、生で蒜、薤で食ふ。(心鏡)【身腫して心を攻めるもの】生豬肉を漿で洗つて壓して乾し、切つて膾にして蒜、薤で喫ふ。一日三回。氣を下し、風を去る。これは外國の方である。(張文仲方)【破傷風腫】新たに屠殺した豬肉を熱に乘じて片に劃き、患部に貼つて連りに換へる。三片にしてその腫が立ろに消く。(簡便)【(一一)白虎風病】豬肉三串を用ゐ、大麻子一合、酒半盞を相和して口に含んで上に噀き、肉を擘いて病處に向けて『相州の張如意、張得興、是れ汝白虎の本師、急に出よ』と呪文を唱へてから、その肉を床上に置き、痊えたときその肉を路頭に送る。神驗がある。(近效)【風狂して歌ひ笑ふもの】行走して休まぬには、豭豬肉一斤を煮熟し、切つて膾にして醬を和して食ひ、或は羹、粥、炒にして任意に服す。(食醫心鏡)【丹石の毒を解す】發熱し、衰弱し、危篤なるには、肥豬肉五斤、葱、薤半斤を煮て食

(一〇)刮腸ハ濃血ヲ下ス病氣。

(一一)白虎風病ハ急性關節僂麻質斯。

ひ、或は臛にして食ふ。必ず腹鳴して毒が下り、水で淘れば沙石が出るものだ。出盡れば癒える。(千金翼)【鍾乳の毒を解す】下利して止まぬには、豬肉を食へば癒える。(千金翼)【石英を服する法】白石英一斤を袋に盛り、水三斗で四升に煎じ、豬肉一斤と鹽豉で煮て食ふ。一日一回。(同上)【傷損で飲食不能のもの】凡そ打撲傷損で三五日間飲食物の口に入らぬには、生豬肉二大錢を打ち爛らし、洗つて血水を去り、再び擂り爛して陰陽湯で和し、半錢を雞毛で咽内に送入し、それを陰陽湯で灌ぎ下す。生じてゐる食蟲がその香を聞いて瘀血を齎開して上り、胸中が自然に開解する、これは損血が凝聚し、心間の蟲がその血を飽食し、他物をば來つて探らぬから起るものである。これを騙通の法といふ。(鄧氏)【打傷の青腫】豬肉を炙いて搨る。(千金)【小兒の重舌】三戶の家で屠殺した豬の肉を取り、指ほどの大いさに切つて舌を摩する。その兒は立ろに啼く。(千金方)【小兒の痘瘡】豬肉の煮汁で洗ふ。(譚氏方)【小兒の火丹】豬肉を切片して貼る。【漆瘡の癢きもの】豬肉を喫ひ、穄穀を嚼んで塗るがよし。(千金)【男、女の陰蝕】肥豬肉の煮汁で洗ふ。二十斤に過ぎずして瘥える。(千金方)【山中を行くに蛭を辟ける】山中の草木の枝上には石蛭なるものがゐて、

（一二）飲膳正要ニ疾上ニ痰字アリ。

人の足に著けば肌を穿ち、肉中に入つて人體を害する。ただ蠟豬膏に鹽を和して足の脛、趾に塗つて置けばその蟲が著かない。（千金方）【竹刺の肉に入りたるとき】多年の燻肉を切片して包裹すれば出る。（救急方）

豭豬頭肉　已下いづれも豭豬を用ゐるが良し。豶豬でもよし。氣味【毒あり】時珍曰く、按ずるに、生生編に『豬肉の毒はただ首に在る。故に病あるものがこれを食へば風を生じ、（一二）疾を發するのだ』とある。

主治【寒熱、五癃、鬼毒】（千金）【五味と共に煮て食へば、虛乏の氣力を補し、驚癇、五痔を去り、丹石を下す。また風氣を發する】（食療）

臘豬頭【燒灰は魚臍瘡を治す】

發明　時珍曰く、按ずるに、名醫錄に『學究任道が黑く腫れて狹くして長い形狀の體瘡を病んだとき、北醫王通が「これは魚臍瘡といふものだ、一は風毒の蘊結が因となり、二は氣血の凝滯が因となり、三には誤つて人汗を食つたことが因となつてかやうな狀態の瘡が生ずるものだ」といつて、ある奇異なる散藥を傅け、日に數囘易へさせると癒えた。その處方を懇望すると、王通は「それはただ雪玄の一

味だけだ」といつた。そこで任は雪立なるものに就いて諸方の人人に訪ねても、一向にそれを知るものがなかつたが、名醫郝允といふ人が「聖惠方に、この病を治するに臘豬頭の燒灰を雞卵白で調へて傅けるとあるがこのものだ」といつた』とある。又、圖纂に『五月の戊辰の日に豬頭で竈を祀れば求むるところ意のままになる。臘豬耳を梁上に懸ければ何不足なき豐な生活が出來る』とあるが、これはやはり厭禳の意味のある物だ。

項肉　俗に槽頭肉と名けるもので、肥えて脆く、能く風を動ずる。【主治】【酒積の面黄、腹脹には、一兩を切つて泥の如くにし、甘遂末一錢を合せて丸に作り、紙で裹んで香しく煨き、それを食つて酒で送下する。(一三)酒布袋を利出するものだ】(時珍)記載は普濟にある。

(一四)**脂膏**　【修治】時珍曰く、凡て凝つたものをば肪といひ、脂といふ。釋けたものをば膏といひ、油といふ。臘月に煉淨して貯藏したものを用ゐる。

恭曰く、十二月の上の亥の日に取つて新瓶に入れ、百日間(一五)亥の地に埋めて用ゐる。これを臘脂と名ける。一升毎に雞子白十四箇を入れるが更に良し。

(一三)酒布袋ハ飲酒家ノ腹中ニ生ズル特殊ノ病袋ナラン。

(一四)大觀ニハ肪ニ作ル。

(一五)亥地トハ亥ノ方位ノ地ヲイフカ。

弘景曰く、水を入れてはならぬ。臘月のものは幾年經つても腐敗しない。項下の膏は負革肪と名け、道家で五金を煉るに使用する。

氣味　【甘し、微寒にして毒なし】烏梅、梅子と反す。**主治**　【煎じた膏藥は斑蝥、芫青の毒を解す】（別錄）【地膽、亭長、野葛、硫黃の毒、諸肝の毒を解し、腸、胃を利し、小便を通じ、五疸、水腫を除き、毛髮を生ず】（時珍）【冷結を破り、宿血を散ず】（孫思邈）【血脈を利し、風熱を散じ、肺を潤ほす。膏藥に入れば諸瘡に主效がある】（蘇頌）【蟲を殺し、皮膚風を治す。惡瘡に塗る】（日華）【癰疽を治す】（蘇恭）【皮膚を悅くし、手膏として用ゐれば皸裂せぬ】（陶弘景）【胎產衣の下らぬには、酒で多く服するが佳し】（徐之才）○【鬐膏として用ゐれば、髮を生じ、面を悅くする】（別錄）

附方　舊五、新二十八。【傷寒時氣】豬膏を彈丸ほど溫水に溶かして一日三回服す。（肘後方）【五種の疸疾】黃疸、穀疸、酒疸、黑疸、女勞疸である。黃蘗汁のやうな黃汗を出すには、豬脂一斤を溫熱にして服す。一日三回。利して癒えるものだ。（肘後方）【赤、白帶下】煉豬脂三合、酒五合を煎沸して頓服する。（千金方）【小便不通】

豬脂一斤、水二升を煎じ、三沸して飲めば立ろに通ずる。(千金方)【關格閉塞】豬脂、薑汁各二升を微火で煎じ、二升になつたとき酒五合を入れて和煎して分服する。(千金)【痘瘡便祕】四五日に及ぶものには、肥豬臕一塊を水で煮熟し、豆の大いさほどに切つて與へて食はせる。自然に藏府が滋潤し、痂疕が落ち易く、兒を損ずることがない。(陳文中方)【卒中五尸】仲景は、豬脂を雞子一箇ほど、苦酒一升を煮沸して灌いだ。(肘後方)【諸肝の中毒】豬膏一升を頓服する。(千金方)【髮を食つたために瘕となつたもの】心腹が痛み、咽間を蟲が上下するやうに覺え食と油とを嗜み食ふものである。豬脂二升、酒三升を煮て三沸して服す。一日三回。【上氣欬嗽】豬肪四兩を煮て約百沸し、切つて醬、醋を和して食ふ。(心鏡)【肺熱の暴瘖】豬脂油一斤を煉り、白蜜一斤を入れて再び煉り、少頃して濾淨して冷まし、不時に一匙づつ挑げ取つて服すれば癒えて無疾になる。常服すればやはり肺を潤ほす。(萬氏方)【小兒の噤風】初生百日以內の小兒にして噤口し、口中に蝸牛か或は黃頭白蟲の如きもののあるには、薄豬肪を擦れば消する。(聖惠方)【小兒の蚘病】羸瘦するには、豬膏を服す。(千金方)【產後の虛汗】豬膏、姜汁、白蜜各一升、酒五合を五回煎じて五回下

し、方寸ヒづつを服す。（千金翼）【胞衣不下】豬脂一兩、水一盞を煎じ、五七沸して服ますれば下るものだ。（聖惠方）【（一六）吹奶寒熱】豬肪を冷水に浸して搨し、熱すれば易へる。立ろに效がある。（子母祕錄）【髮の（一七）落ちて生えぬもの】酢、泔で洗淨して布で揩り熱し、臘豬脂に生鐵を入れて煮て三沸したものを全面に塗る。（千金翼）【冬期の唇裂】煉つた豬脂を日每に塗る。（十便良方）【熱毒の手を攻むるもの】脫けるほど腫痛するには、豬膏に羊屎を和して塗る。（外臺）【手、足の皴破】豬脂を熱酒中に舂いて洗ふ。（千金方）【代指疼痛】豬膏に（一八）白墡土を和して傅ける。（小品方）【口瘡で咽を塞ぐもの】豬膏、白蜜一斤、黃連末一兩を合煎して取つた汁を熬稠し、一日五回、棗ほどづつを服す。（千金）【疥瘡の蟲あるもの】豬膏で芫花を煎じて塗る。（肘後）【鼠瘻、瘰癧】豬膏に生地黃を淹けて煮て六七沸して塗る。【漏瘡の合せぬもの】豬膏紙に臘豬脂を粘し、晝五回、夜三回瘡中に納れる。（千金翼）【漆瘡の痒きもの】豬膏を頻りに塗る。（千金）【咽喉骨哽】脂膏一團を呑む。瘥えぬときは更に呑む。（千金方）【身體、面部の疣目】豬脂で揩つて少し血を出さす。これ以上に神驗あるものはない。（千金）【誤つて鐵釘を呑みたるとき】豬脂を飽くまで多く食ふ。自然に裹んで出

（一六）吹奶ハ乳癰。
（一七）落、大觀ニ薄ニ作ル。
（一八）白墡土ハ白堊ヲ云フ。

（一九）大觀ニ肪下ニ肉字アリ。

（二〇）風眩ハ眩運。

る。（普濟方）【雜物の目に入りたるとき】豬脂を煮て水面の油の如きものを取り、仰臥して枕を去り、鼻中に點ずる。數囘に過ぎずして物と俱に出る。（聖惠方）【蜈蚣の耳に入りたるとき】豬肪（一九）を炙いて耳を掩へば自ら出る。（梅師）【蟲蟻の耳に入りたるとき】方法は上に同じ。【發背、發乳】豬脂を切片して冷水に浸して貼り、一日に四五十片易へる。甚だ妙である。（急救方）

腦 氣味 【甘し、寒にして毒あり】時珍曰く、禮記には『豚を食ふには腦を去る』とあり、孫眞人の食忌には『豬腦は男子の陽道を損じ、房に臨んで事を行ふ能はざらしめる。酒後は就中食つてはならぬ』とあり、延壽書には『今一般に鹽酒で豬腦を食ふが、これは自ら賊を引き入れるものだ』とある。

主治 【（二〇）風眩、腦鳴、凍瘡】（別錄）【癰腫に主效があり、紙上に塗つて貼り、乾けば易へる。手、足の皸裂出血を治するには、酒に溶化して洗ひ、併に塗る】（時珍）

附方 新一。【喉痺の已に破れたるもの】瘡口の痛むには、豬腦髓を蒸熟し、薑、醋を入れて喫へば癒える。（普濟方）

髓 氣味 【甘し、寒にして毒なし】主治 【撲損、惡瘡】（頌）【小兒の解

顱、頭瘡、及び臍腫、眉瘡、瘑疥に塗る。服すれば骨髓を補し、虛勞を益す】(時珍)

發明　時珍曰く、按ずるに、丹溪の虛損を治する補陰丸は、多く豬脊髓を用ゐて和して丸にする。その目的は腎、命に通じ、骨を以て骨に入り、髓を以て髓を補するに在る。

附方　新七。【骨蒸勞傷】豬脊髓一條、豬膽汁一箇、童尿一盞、柴胡、前胡、胡黃連、烏梅各一錢、韭白七根を共に七分に煎じて溫服する。三服に過ぎずしてその效神の如きものだ。(瑞竹堂方)【小兒の顱解】豬牙車骨を煎じて髓を取り、三日間傅ける。(千金方)【小兒の臍腫】豬頰車髓十二銖、杏仁半兩を研つて傅ける。(千金)【小兒の眉瘡】豬頸骨髓六七箇、白膠香二錢を共に銅器に入れて熬稠し、冷えるを待つて末にし、麻油で調へて塗る。【小兒の瘑瘡】豬牙車骨の年久しきものを槌き碎き、炙いて髓を出し、熱し取つて塗る。(小品)【小兒の頭瘡】豬骨中の髓で膩粉を和して劑とし、火中で香しく煨いて研末し、先づ溫鹽水で洗淨してから敷く。また(二一)肥瘡の汗の出るものをも治す。(普濟方)【小兒の(二二)疳瘡】方は上に同じ。

血　氣味【鹹し、平にして毒なし】思邈曰く、澀し、平なり。時珍曰く、

(二一)肥瘡、一名濃窩瘡。
(二二)疳瘡、一名陰疳。

(二三)絶傷、心經衰弱ノ甚シキモノヲ云フカ。

地黄、何首烏の諸補藥を服するものはこれを忌む。能く陽を損するといふことだ。黄豆と共に食へば滯氣する。

【主治】【生血は、賁豚暴氣、及び海外瘴氣を療ず】(日華)【中風(二三)絶傷、頭風、眩運、及び淋瀝】(蘇恭)【卒に下血して止まぬには、淸酒を和して炒つて食ふ】(思邈)【淸酒で炒つて食へば嘈雜の蟲あるものを治す】(時珍)【丹石を壓し、諸毒を解す】(呉瑞)

【發明】時珍曰く、按ずるに、陳自明は『婦人の嘈雜はいづれも血液、涙、汗が變じて痰となるもので、或はこれを血嘈といふものだといふ。多く豬血を炒つて食へば癒える』といつた。蓋し血を以て血を導いて原に歸せしめる意味であつて、これも確に一說であるが、しかしまた蚘蟲があるために嘈雜を作すものもあり、蟲は血腥を得れば飽きて伏するものだ。

【附方】新五。【交接陰毒】腹痛して死せんとするには、豭豬血を熱に乘じて酒に和して飮む。(肘後)【中滿腹脹】朝は食事を攝るが暮には食事不能なるには、鹽、水の著かぬ豬血を漉して水分を去り、晒乾して末にし、酒で服す。洩を取つて甚だ

（二四）淀花、詳ナラズ、淀綠、卽綠青ノ粉末ヲ云フカ。

效がある。（李樓奇方）【杖瘡出血】豬血一升、石灰七升を和剤して灰に燒き、再び水で和して丸にしてまた燒き、凡そ三回繰返してから末にして敷くが效がある。（外臺）【射罔の中毒】豬血を飲めば解す。（肘後）【蜈蚣の腹に入りたるとき】豬血を灌ぎ、或は飽食して少頃して桐油を飲む。吐出するものだ。

心血　主治　【朱砂末を調へて服すれば驚癇、癲疾を治す】（吳瑞）【卒惡死、及び痘瘡倒靨を治す】（時珍）

發明　時珍曰く、古方で驚風、癲癇、痘疾を治するに多く豬心血を用ゐたのは、蓋し心を以て心に歸し、血を以て血を導くの意味、尾血を用ゐたのは、その動いて息まぬを取つたもので、豬は水畜であつてその血は性寒にして能く毒を解し、陽を制するものだからである。韓飛霞は『豬心血は能く藥を引いて本經に入る。事實その物が補するものでない』といつた。沈存中の『豬血は龍腦を得れば直ちに心の經に入る』といふがそれである。

附方　新三。【心病邪熱】蕊珠丸――豬心血一箇、（二四）淀花末一匙、硃砂末一兩を共に研つて梧子大の丸にし、二十丸づつを酒で服す。（奇效）【痘瘡黑陷】臘月に豶

豬心血を瓶に取り收めて乾し、一錢づつに龍腦少量を入れ、研り勻ぜて酒で服す。須臾にして紅活する神效がある。乾血のない場合は生血を用ゐる。(沈存中方)【婦人の催生】開骨膏——豬心血で乳香末を和し、梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、東に向つて酒で一丸を呑む。なほ下らぬときは再服する。(婦人良方)

尾血 [主治]【痘瘡倒靨には、一匙で龍腦少量を調へて新汲水で服す。又、中惡卒死を治す】(時珍)

[附方] 舊一、新一。【中惡卒死】豬尾を斷つて血を取つて飲み、幷に豚を縛つて枕すれば活きる。これは長桑君が扁鵲に授けた法として魏夫人傳に記載がある。(肘後方)【蛇が七孔に入つたとき】母豬尾を割いてその血を滴し入れれば出る。(千金方)

心 [氣味]【甘く鹹し、平にして毒なし】頌曰く、多く食へば心氣を耗する。吳茱萸と食ひ合せてはならぬ。[主治]【驚邪、憂恚】(別錄)【虛悸、氣逆、婦人產後の中風、血氣驚恐】(思邈)【血不足、虛劣を補す】(蘇頌)【五臟は小兒の驚癇出汗に主效がある】(蘇恭)

[發明] 劉完素曰く、豬は水畜である。故に心は恍惚を鎮めるのだ。

【附方】　舊一、新三。　【心虛自汗】睡らぬには、豮豬心一箇、血を帶びたものを破開し、人參、當歸各二兩を入れ、煮熟して藥を去つて食ふ。數服に過ぎずして癒える。(證治要訣)　【心虛嗽血】沈香末一錢、半夏七箇を豬心中に入れ、小便で紙を濕して包んで煨熟し、半夏を去つて食ふ。(證治要訣)　【產後の風邪】心虛し、驚悸するには、豬心一箇を豆豉汁で煮て食ふ。(心鏡)　【急心疼痛】豬心一箇を、每(二五)歲胡椒一粒を入れて鹽、酒と共に煮て食ふ。

肝　藥に入れるには子肝を用ゐる。【氣味】【苦し、溫にして毒なし】　時珍曰く、服藥中の人は食つてはならぬ。魚鱠と食合せれば癰疽を生ずる。鯉魚腸子と食合せれば人の神を傷める。鵪鶉と食合せれば面鼾を生ずる。延壽書に『豬は殺される時に驚氣が心に入り、絕氣が肝に歸するものだ。いづれも多く食つてはならぬ。必ず人を傷める』とある。

【主治】　【小兒驚癇】(蘇恭)　【切つて生にて薑、醋で食へば脚氣に主效がある。徹し洩するものだ。先に利しつつあるものは服してはならぬ】(藏器)　【冷勞臟虛、冷洩久滑、赤、白帶下を治す。一箇を薄く(二五)批いて訶子末を搵し著けて炙き、再び搵

(二五)歲ハ恐クハ劑ノ誤。

(二六)大觀ニ批下ニ之ノ字アリ。

し再び炙いて末半兩を用ゐ盡し、空腹に細に嚼んで陳米飮で送下する】(蘇頌)【肝を補し、目を明にし、肝虚浮腫を療ず】(時珍)

【發明】時珍曰く、肝は血を藏することを主るものだ。故に諸血病にはこれを用ゐて嚮導として肝に入る。千金翼に痢疾を治する豬肝丸といふがあり、脫肛を治する豬肝散といふがあり、諸種の眼目の方に多く豬肝の散がある。いづれもこの意味だ。

【附方】舊六、新八。【休息痢疾】豶豬肝一具を切片し、杏仁を炒つて一兩を用ゐ、清淨な鍋にその肝を一重、杏を一重入れ、童尿二升を入れて文火で煎じ乾し、一日一回それを取つて食ふ。(千金)【浮腫脹滿】食物の落付かぬには、豬肝一具を洗つて切り、葱、豉、薑、椒を著けて炙いて食ふ。或は單に羹に煮るもよし。(心鏡)【身體、面部の卒腫】生豬肝一具を細切して醋で洗ひ、蒜、醋を入れて食ふ。鹽を用ゐてはならぬ。(二七)【腫が足から起るもの】方法は上に同じ。【風毒脚氣】豬肝を生膾にして食つて利を取る。(二八)【水腫溲澀】豬肝尖三塊、菉豆四撮、陳倉米一合を水で共に粥に煮て食ふ。毒は小便から出る。【中蠱腹痛】支太醫の祕方では、豬肝一

(二七)大觀ニ此處ニ肘後方ノ三字アリ。
(二八)大觀ニ此處ニ心鏡ノ二字アリ。

具、蜜一升を共に煎じ、二十回に分服する。或は丸にして服す。(肘後)【食事を攝ると汗の出るもの】これは脾、胃の虚である。豬肝一斤を薄く切つて瓦で焙じ乾して末にし、白粥を煮て布で絞つた汁で多くの人の手で梧子大の丸にし、一日五回、空心に五十丸を飲下する。(心鏡)【遠視力の乏しきもの】肝虚である。豬肝一具を細切して皮膜を去り、葱白一握と豉汁で羹にし、熟するを待つて雞子三箇を投じて食ふ。(普濟方)【肝熱目赤】瘆痛するには、豬肝一具を薄く切つて水で洗淨し、五味で食ふ。(食醫心鏡)【牙疳危急】豬肝一具を煮熟し、赤芍藥末を蘸けて任意に食ひ、後に平胃散二三貼を服すれば效がある。(節要)【婦人の陰痒】豬肝を炙いて納れる。蟲が出て來るものだ。(肘後)【打撲の青腫】豬肝を炙いて貼る。(千金)【急勞疾悴】朝夕に寒熱し、驚悸し、煩渇するには、獖豬肝一具を絲に切り、生甘草末十五兩を用ゐ、鐺中に肝を一重布いて甘草末を摻り、幾重にも重ねて末の盡るを度とし、童尿五升で文武火で煮乾し、搗き爛らして多くの人の手で梧子大の丸にし、空心に二十丸から漸次に三十丸まで增加して米飮で服す。(聖惠方)

脾　俗に聯貼と名ける。［氣味］【澀し、平にして毒なし】時珍曰く、諸獸の

(二九)大觀ニ米下ニ水字、煮下ニ如ノ字アリ。

脾は味が泥のやうである。土に屬するものだといふことが明だ。思邈曰く、凡そ六畜の脾は人間一生食つてはならぬ。【主治】【脾、胃の虛熱には、陳橘紅、人參、生薑、葱白、陳米(二九)と共に羹に煮て食ふ】(蘇頌)

【附方】新二。【脾積痞塊】豬脾七箇を用ゐ、各箇を新針で刺し爛して皮硝一錢づつを擦り、七箇を共に瓷器に盛つて七日間置いて鐵器で焙じ乾し、又、水紅花子七錢と共に搗いて末にし、空心に無灰酒で調へて服す。一年以下の病は一服で癒える。五年以下のものは二服、十年以下のものは三服。(保壽堂方)【不定時に發作する瘧】胡椒、吳茱萸、高良薑各二錢を末にし、豬脾一條を膾にして炒熟し、その一半には藥末を滾ぜ、一半には滾ぜず、墨で兩者を標記し、いづれも餛飩にして煮熟し、藥のあるものをば呑み、藥のないものをば嚼み下す。一服にして效がある。(衞生家寶方)

肺【氣味】【甘し、微寒にして毒なし】頌曰く、大麻仁と配合するが良し、白花菜と食合せるときは人をして氣滯せしめ、霍亂を發せしめる。八月に飴を和して食へば冬になつて疽を發する。【主治】【肺を補す】(蘇頌)【肺虛欬嗽を療する

には、一具を竹刀で切片し、麻油で炒熟して粥と共に食ふ。又、肺虚嗽血を治するには、煮て薏苡仁末を蘸けて食ふ】（時珍）記載は要訣の諸方にある。

腎　俗に腰子と名ける。［氣味］【鹹し、冷にして毒なし】思邈曰く、平なり。日華曰く、腎を補するものではあるが、久しく食へば人をして子を少からしめる。詵曰く、久しく食へば人をして腎を傷めしめる。頌曰く、冬期には食つてはならぬ。人の眞氣を損じ、兼ねて虚瘇を發する。

［主治］【腎氣を理し、膀胱を通ずる】（別錄）【膀胱水臟を補し、膝を暖め、耳聾を治す】（日華）【虚を補し、氣を壯にし、積滯を消す】（蘇頌）【冷利を除く】（孫思邈）【消渴を止め、産勞の虚汗、下痢、崩中を治す】（時珍）

［發明］時珍曰く、豬腎に就いて、別錄では『腎氣を理し、膀胱を通ずるもの』といひ、日華はまた『水臟膀胱を補し、腰膝を暖める』といひ、又『腎を補するものではあるが、久しく食へば人をして子を少からしめる』といひ、孟詵はまた『久しく食へば人をして腎虚せしめる』といひ、いづれもの説がかやうに矛盾するは何故であるか。蓋し豬腎は性寒であつて命門の精氣を補することは不能なものだ。方

（三）大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。

藥にこれを用ゐるのはその引き導く力を借るだけのものである。別錄に『理す』『通ず』の文字で表したのは如何にも適正を得てゐる。日華の腰膝を暖め、膀胱水臟を補すの說は正しくない。腎に虛熱あるものは食つて宜いが、腎氣虛寒のものの場合は宜きものでない。今は一般にこの意味に深い理解を缺き、往往にして豬腎を食つて補の功があるものと考へてゐるが、右の關係に愼重な注意を要する。又、千金に消渴を治する豬腎薺苨湯があり、腎虛、勞損の諸病を補する腎瀝湯があり、方は甚だ多く、いづれも豬羊腎の煮湯で藥を煎じる。これはいづれも引き導くの意味で用ゐてあるのだ。

附方　舊四、新十九。【腎虛遺精】汗多く、夜中鬼物と交接するには、豬腎一箇を切開して膜を去り、附子末一錢を入れて濕紙で裹んで煨熟し、空心に食つて酒一盃を飮む。三五服に過ぎずして效がある。（經驗方）【腎虛陰痿】羸瘦し、精衰へ、力少きには、豶豬腎一對を切片し、枸杞葉半斤と豉汁一盞で椒、鹽で共に羹に煮て食ふ。（經驗（三）方）【腎虛腰痛】豬腰子一箇を切片して椒、鹽で淹け、腥水を去つて杜仲末三錢を中に入れ、荷葉で包んで煨いて食ひ酒で飮下す。（本草權度）【閃肭腰痛】豶豬

腎一箇を批片して鹽、椒で淹け、甘遂末三錢を入れ、荷葉で包んで煨いて食ひ酒で飲下す。（儒門事親）【老人の耳聾】豬腎一對を膜を去つて切り、粳米二合、葱白二根、薤白七根、人參二分、防風一分を末にし、共に粥に煮て食ふ。（奉親養老方）【老人の脚氣】嘔逆するには、豬腎一對を醋、蒜、五味で調理して一日一回食ふ。或は葱白、粳米と共に粥に煮て食ふもよし。（奉親養老方）【卒然の腫滿】豬腎を批開して甘遂末一錢を入れ、紙で裹んで煨熟して食ふ。小便の利するが效果の現れである。利せぬときは再服する。（肘後方）【肘傷冷痛】豬腎一對、桂心二兩、水八升を三升に煮て三回に分服する。（肘後）【卒に起つた欬嗽】豬腎二箇、乾薑三兩、水七升を二升に煮て少しづつ服して汗を取る。（肘後方）【久嗽の痊えぬもの】豬腎二箇に椒二十八粒を入れて水で煮て喫ふ。（張文仲方）【心氣虛損】豬腰子一箇を水二碗で一碗半までに煮て切碎き、人參、當歸各半兩を入れて八分に煮取り、腰子を喫つて汁で送下する。なほ盡きぬときは滓と共に丸にして服す。（百一選方）【酒積面黃】腹が脹つて消かぬには、豬腰子一箇を七刀に批開し、葛根粉一錢をそれに摻つて合定し、一邊毎に三回半炙き、手扯で六塊にし、空心に喫つて米湯で送下する。（聖濟總錄）【久泄の止まぬもの】

（三一）軀啼ノ軀ハ曲身ノコト、腹ガ痛ンデ啼クコト。

猪腎一箇を批開して骨碎補末を摻り、煨熟して食ふ。神效がある。（類湖集簡方）【赤、白下痢】腰痛するには、猪腎二箇を研り爛し、陳皮、椒、醬を入れて餛飩にして空心に食ふ。（食醫心鏡）【赤、白帶下】常に猪腎を炙いて食ふ。（張文仲方）【崩中漏下】方は上に同じ。【產後の蓐勞】寒熱するには、猪腎一對を細片に切り、鹽、酒を拌ぜ、先づ粳米一合、葱、椒で粥を煮て鹽、醋で調和し、腰子を盆の底に鋪いてそれにその熱粥を傾け入れて蓋ひ、奄生粥を作るやうにして食ふ。（濟生）【產後の虛汗】發熱し、肢體の疼痛するをば蓐勞とも名づける。永類鈐方では、猪腎一對を切り、水三升、粳米半合、椒、鹽、葱白で粥に煮て食ふ。〇梅師では、猪腎を葱、豉と共に和して臛にして食ふ。【小兒の（三一）軀啼】初生小兒五十日以内に胎寒で腹痛し、軀啼し、弄舌し、微熱して驚くは癇の徵候である。猪腎一具、當歸一兩を焙じ、淸酒一升で七合に煮取り、晝三回、夜一回、杏仁ほどづつを與へて嚥ませる。（聖惠方）【小兒の頭瘡】猪腰子一箇を批開して心、膜を去り、五倍子、輕粉末等分を中に入れ、沙糖と麪とで固濟し、炭火で炙き焦して末にし、淸油で調へて塗る。（經驗良方）【傳尸勞瘵】猪腰子一對、童尿二盞、無灰酒一盞を新瓷瓶に盛つて泥で封じ、炭火で午後八

時から午前零時まで溫養して止め、五更の初刻に溫熱するを待つて取り、開いてその酒を飲み、腰子を食ふ。病の篤きものも只一个月で效がある。平日瘦怯なるものもこれを用うるがよし。蓋し血を以て血を養ふのであつて、甚だ金石草木の藥に勝る。(邵眞人經驗方)【癧疽發背】初期には、豶豬腰子一雙を飛麪と共に搗いて泥のやうにして塗れば癒える。

䏰　音は夷(イ)である。また胰とも書く。時珍曰く、一名腎脂といふ。兩腎の中間に生じて脂に似て脂に非ず、肉に似て肉に非ざるもの、乃ち人間、及び動物の命門、三焦の發源たる部分である。肥えたものは多く、瘦せたものは少い。蓋し頤養はそれに賴るものだといふ意味で頤といつたのだ。

氣味　【甘し、平にして微毒あり】頌曰く、男子が多食すれば陽を損ずる。

主治　【肺痿欬嗽には、棗肉を和して酒に浸して服す。また痃癖羸瘦を治す】(藏器)〇又、膏に合せ、繒帛を練る。【肺氣乾脹の喘急を療じ、五藏を潤ほし、皺皰、皯䵟を去り、斑蝥、地膽の毒を殺し、冷痢で虛となつたものを治す】(蘇頌)【一切の肺病、欬嗽膿血の止まぬには、薄竹筒に盛つて煻火中で煨熟し、食前にこれ

を咳ふが良し】(心鏡)【乳汁を通ずる】(之才)

附方 舊二、新九。【豬胰酒】冷痢の久しく瘥えぬものを治す。これは脾氣の不足で暴冷が脾に入り、舌上に瘡を生じ、飲食に味なく、或は食物を攝ると還つて吐き、小腹が雷鳴し、時時に心悶し、皮が乾いて細に浮き起り、膝、脛が酸痛し、羸痩して次第に鬼氣を成すものである。また婦人の血氣不通、逆飲、憂煩、四肢無力、男子の痃癖、兩肋が虛脹し、變じて水氣となるもの、これを服すればいづれも效がある。この方は傳尸の方から出たものだ。豬胰一具を細切して青蒿葉と和し、無灰酒一大升で微火で溫め、藥が熟したとき胰中に納れて盡く消し、また桂心末一小兩を酒中に納れ、毎朝一小盞づつを溫服し、正午と夜間と各再び一服する。甚だ效驗がある。麪、油膩等の食物を忌む。(崔元亮海上方)【腹內氣塊】豬胰一具を炙き、玄胡索末を蘸けて食ふ。(衛生易簡方)【肺氣欬嗽】豬胰一具を苦酒で煮て食ふ。二服に過ぎぬ。(肘後方)【二十年の嗽】豬胰三具、大棗百個を酒五升に秋、冬は七日、春、夏は五日間漬け、滓を絞り去つて七日に服し盡す。鹽を忌む。【遠年の肺氣】豬胰一具、膩粉一兩を瓷瓶で固濟して上に一竅を殘し、煨いて烟を盡して末にし、

（三二）挼字、大觀ニ從フ。

二錢づつを漿水で服す。【石藥を服したための發熱】豬胰脂一具を水に觸れぬやうにして火で炙いて汁を取り、三合づつを晝夜五六服する。石は大便に隨つて下る。（總錄）【眼の雲を撥ひ翳を去る】豬胰子一箇重量五錢、蕤仁五分、青鹽一錢を共に千杵搗いて泥のやうにし、少量づつを點ける。膜翳を取下して奏效する。（孫氏集效方）【赤白癜風】豬胰一具を酒に一時浸し、飯上で蒸熟して食ふ。十具に過ぎずしてよし。（壽域方）【面粗醜黑】皮厚き皯䵳のものには、豬胰五具、蕪菁子二兩、杏仁一兩、土瓜根一兩を淳酒に浸して夜塗り朝洗ふ。老いたるは少くなり、少きは白くなること神の如き效驗がある。（肘後）【手足の皴裂】酒を以て豬胰を（三二）挼み洗ひ。幷に傅ける。（肘後）【唇が燥いて緊裂するもの】豬胰を酒に浸して搽る。（葉氏摘玄方）

肚【氣味】【甘し、微溫にして毒なし】【主治】【中を補し、氣を益し、渴を止め、暴痢虛弱を斷つ】（別錄）【虛損を補し、勞蟲を殺す。黃糯米を釀して蒸し搗いて丸にし、勞氣、幷に小兒の疳蚘黃瘦の病を治す】（日華）【骨蒸熱勞、血脈不行。羸を補し、氣を助ける。四季に食ふがよし】（蘇頌）【積聚癥瘕を消し、惡瘡を治す】（吳普）

【發明】時珍曰く、豬は水畜であつて胃は土に屬する。故に方藥ではこれを用ゐて虛を補するは胃を以て胃を治するのだ。

【附方】舊二、新九。【虛羸の補益】豬肚一具に人參五兩、蜀椒一兩、乾薑一兩半、葱白七箇、粳米半升を納れて密縫し、煮熟して食ふ。（千金翼）【水瀉の止まぬもの】豶豬肚一箇に蒜を入れて煮爛し、膏に搗いて梧子大の丸にし、二十丸づつを米飲で服す。丁必卿は『予は每日五更に必ず一回水瀉し、あらゆる藥も效がなかつたが、この方に平胃散末三兩を入れて丸にして服して平安を得た』といつてある。（普濟）【消渴飲水】晝夜に數斗の水を飲むものには、心鏡では、雄豬肚一箇を煮て汁を取り、少量の豉を入れ、渴するときに飲む。肚を食つてもよし、粥に煮てもよし。○仲景の豬肚黃連丸――消渴を治す。雄豬肚一箇に黃連末五兩、栝樓根、白粱米各四兩、知母三兩、麥門冬二兩を入れて縫合し、蒸熟して搗いて梧子大ほどの丸にし、三十丸づつを米飲で服す。（食醫心鏡）【老人の脚氣】豬肚一箇を洗淨して片に切り、水で洗つて布で絞り乾し、蒜、椒、醬、醋、五味を和して常に食ふ。また熱勞を治す。（養老方）【胎氣の溫養】胎が九个月に達した證候の見えたとき、豬肚一箇を五味

で普通の如く調理して煮て食ふ。全部を食ひ盡す。(千金髓)【赤白癜風】豬肚一箇を白煮して一頓に食ひ盡す。房事を忌む。(外臺)【疥瘡痒痛】豬肚一箇を皂莢と共に煮熟し、莢を去つて食ふ。(救急)【頭瘡白禿】普濟では、新に破つた豬肚を洗はずに熱して榻する。須臾にして蟲が出る。出盡きぬときは再び試みる。○孫氏方では、豬肚一箇に砒一兩を入れて扎定し、黃泥で固濟して煆いて性を存して末にし、油で和して傅け、椒湯で洗ふ。【蟲牙疼痛】新に殺した豬肚尖上の涎を絹に包んで咬む。數回すれば蟲が出盡きて癒える。唐氏は枳殼末を拌ぜた。

腸　**氣味**　【甘し、微寒にして毒なし】**主治**　【虛渇、小便數。下焦の虛竭を補す】(孟詵)【小便を止める】(日華)【大、小腸の風熱を去るにこれを食ふがよし】(蘇頌)【腸を潤ほし、燥を治し、血痢、臟毒を調へる】(時珍)○【洞腸は、人の洞腸挺出して血多きを治す】(孫思邈)洞腸とは廣腸のことである。

附方　新三。【腸風臟毒】救急では、大腸一條に(三三)芫、荽を納れて煮て食ふ。○奇效では、豬臟に黃連末を納れて煮爛し、搗いて梧子大の丸にし、三十丸づつを米飲で服す。○又ある方では、豬臟に槐花末を滿てて縛定し、醋で煮爛して梧桐子

(三三)芫荽ハ芫花ト胡荽ノ二物。

（三四）脬ハ尿胞、即チ膀胱。

大ほどの丸にし、二十丸づつを溫酒で服す。【脇熱血痢】方法は上に同じ。【臟寒洩瀉】身體だるく、食慾の減ずるには、豬大臟一條の脂を去つて洗淨し、吳茱萸末を塡滿して縛定して蒸熟し、搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。（奇效良方）

（三四）**脬** 胞とも書く。［氣味］【甘く鹹し、寒にして毒なし】［主治］【夢中遺尿、疝氣墜痛、陰囊濕痒、玉莖に生じた瘡】

［發明］ 時珍曰く、豬胞の主治がいづれも下焦の病にあるは、やはり類を以て從ふものだ。蘄州のある妓女が轉脬を病んで小便が不通となり、腹が鼓のやうに脹ること數月にして死に垂たる狀態にあつたとき、ある醫師が豬脬を吹き脹らしてその端に翎管を著け、それを陰孔に揷入して脬の中の氣を吹き入れた。すると大いに尿が出て病が癒えた。この法は羅天益の衞生寶鑑に記載されてある。それを知る者は存外少れだが、まことに巧みな思ひつきの方法である。

［附方］ 新八。【夢中遺尿】豬脬を洗ひ、炙いて食ふ。（千金）【產後の遺尿】豬胞、豬肚各一箇を用ゐ、糯米半升を脬の中に入れ、更にその脬を肚の中に入れ、五味と共に煮て食ふ。（醫林集要）【產後の尿床】方法は上に同じ。【疝氣墜痛】豬脬一

箇を洗つて小茴香、大茴香、破故紙、川楝子等分を填滿し、青鹽一塊を入れて縛定し、酒で煮熟して食ひ、酒で飲下し、その藥をば焙じ搗いて丸にして服す。【消渇の度なきもの】乾豬胞十箇を剪破して蒂を去り、燒いて性を存して末にし、一錢づつを溫酒で服す。(聖濟總錄)【腎氣囊癢】豬尿胞を火で炙き、鹽、酒で吃ふ。(救急)【玉莖に生じた瘡】臭腐するには、豬胞一箇を中の尿を一半を去つて一半を留め、紅く煆いた新磚で焙じ乾して末にし、黃丹一錢を入れ、三五回それを摻れば瘥える。豫め葱椒湯で洗つてから用ふべきものである。(奇效方)【白禿癩瘡】洗ひ刮つて淸淨にし、豬胞で熱に乘じて裹む。蟲を引き出すものである。

膽　氣味　【苦し、寒にして毒なし】　主治　【傷寒熱渴】(別錄)【骨熱勞極、消渴。小兒五疳に蟲を殺す】(蘇頌)【小兒の頭瘡に敷く。大便不通を治するには、葦筒を用ゐて下部に三寸納れて灌ぐ。立ころに下る】(藏器)【小便を通じ、惡瘡に敷き、疳䘌を殺し、目赤、目瞖を治し、目を明にし、心臟を淸し、肝、脾を涼ず。湯に入れて髮を沐すれば膩を去つて光澤にする】(時珍)

發明　成無己曰く、仲景は豬膽汁に醋少量を和して穀道中に灌ぎ、大便を通

ずるに神效があつた。蓋し酸苦は陰を益し、燥を潤ほして便を瀉するものである。又、少陰下痢が止まずして厥逆して脈なく、乾嘔して煩するものを治するに、白通湯に豬膽汁を加へたものを主として用ゐた。蓋し寒熱の逆なるものを調へるには冷熱を並行すべきものである。そこで熱物を冷服すれば嗌を下つて後に冷の體が消し去つてから熱の性が發する。故に病氣が自ら癒えるのである。それが人尿、豬膽の鹹、苦の物を白通の熱劑中に和した理由であつて、その氣をして相從つて拒格の患なからしめる所以である。又曰く、霍亂病で、吐下が已に斷え、汗が出て厥し、四肢が厥急し、脈が微にして絕えんとするものには、通脈四逆湯に豬膽汁を加へたものを主として用ゐた。蓋し陽氣が非常に虛して陰氣だけが獨り勝つものには、純ら陽藥を與へては陰氣が格拒するために入ることを得ない恐がある。故に豬膽汁を加へたのであつて、苦は心に入つて脈を通じ、寒は肝を補して陰を和するから格拒せぬやうになるのである。

汪機曰く、朱奉議が傷寒五六日にして瘢出するを治するものに豬膽雞子湯といふがある。

時珍曰く、方家で豬膽を用ゐるは、その寒が能く熱に勝ち、滑が能く燥を潤ほし、苦が能く心に入り、また能く肝、膽の火を去る點を取るのである。

附方　舊六、新十四。

【少陰下利】利して止まず、厥逆して脈なく、乾嘔するものには、白通湯に豬膽汁を加へたものを主として用ゐる。葱白四莖、乾薑一兩、生附子一箇、水三升を一升に煮取り、人尿五合、豬膽汁一合を入れて分服する。(仲景傷寒論)【或は瀉し、或は止むもの】久しくして癒えぬには、二聖丸——黃連、黃蘗末各一兩を豬膽を煮熟して和して菉豆大の丸にし、兒の大、小を量つて米飲で服す。(總微論)【赤、白下痢】十二月に豬膽百箇にいづれも黑豆を盛り納れ、麝香少量を著けて陰乾し、五七粒づつを末にして生薑湯で調へて服す。(奇效方)【(三五)濕䘌下痢】止まずして乾嘔し、羸瘦して多く睡り、額の(三六)赤さには、膽汁に薑汁、釅醋を和して下部に灌ぎ、捻して醋氣を上に咽喉に至らしめて止める。五色の惡物、及び蟲を下して癒えるものだ。(拾遺)【熱病蟲䘌】上下するには、豬膽一箇を醋一合で煎沸して服す。蟲は立ろに死ぬ。(梅師)【瘦病欬嗽】豬膽に人尿、薑汁を和し、橘皮、訶梨勒皮と共に煮て汁を飲む。(拾遺方)【小便不通】豬膽一箇を熱酒に和して服す。〇又、

(三五)大觀ニ濕䘌ヲ濃血ニ作ル。
(三六)大觀ニ赤ヲ黃ニ作ル。

(三七)鹽碌、一名碌鹽。

(三八)風瘡ハ猩紅熱又ハ假性麻疹。

(三九)出風ハ急ニ皮膚上ニ顯出スルコト風ノ如クナルヲ云フ。

豬膽の汁のある中に陰頭を籠住する。一二時で汁が入つて自ら通ずる。【消渇の度なきもの】雄豬膽五箇、定粉一兩を共に煎じて芡子大の丸にし、一日二回、二丸づつを含み溶して嚥下す。(聖濟總錄)【傷寒癍出】豬膽雞子湯――豬膽汁、苦酒各三合、雞子一箇を合煎し、三沸して分服する。汗が出て癒える。(張文仲方)【疔瘡惡腫】十二月の豬膽を風乾し、生葱を和して搗いて傅ける。(普濟方)【目翳、目盲】豬膽を文火で煎稠して黍米大の丸にし、一粒づつを目中に納れるが良し。【目赤腫痛】豬膽汁一箇に(三七)鹽碌五分を和して點ける。(普濟方)【火眼赤痛】豬膽一箇、銅錢三文を共に盞內に入れて蒸し乾し、膽を取つて粟米大の丸にして眼中に入れて置く。(聖惠方)【髮の白を拔いて黑に換へる】豬膽を孔中に塗れば黑い毛が生える。(聖惠方)【小兒初生】豬膽を湯に入れて浴すれば瘡疥が生ぜぬ。(姚和衆)【產婦の(三八)風瘡】(三九)出風に因る。早く豬膽一箇、柏子油一兩を和して傅ける。(杏林摘要)【湯火傷瘡】豬膽で黃蘗末を調へて塗る。(外臺)【瘭疽の汁の出るもの】手、足、肩、背に纍纍として赤豆のやうなものが生じたるには、剝き淨めて豬膽を塗る。(千金)【喉風閉塞】臘月初一日に豬膽を大小に拘らず五六箇取り、黃連、青黛、薄荷、殭蠶、白礬、朴硝各五

錢をその膽の中に裝入して青紙で包み、地に四方、深さ各一尺の孔を掘つて竹を横へ、その中にこの膽を懸けて物で蓋ひ、立春の日に至るを候つて取出し、風の吹くを待ち、膽皮、青紙を去り、研末して密封して貯藏し、少量づつを吹き入れる。その神驗あること萬金不傳の方である。（鄧眞人經驗方）

膽皮　主　治　【目翳が二重にある如きには、皮を取つて曝乾し、箭の太さほどに兩股の繩にして灰に燒き、火毒を出して點ける。三五回に過ぎずして瘥える】（時珍）記載は外臺祕要にある。

膚　汪機曰く、豬膚に就いては、王好古は『豬の皮だ』といひ、吳綬は『豬を燖る時に刮下す黑膚だ』といひ、二說同じくないが、今、禮運疏を調べて見るに『革は膚內の厚皮なり、膚は革外の厚皮なり』とあるから吳氏の說が正しい。淺膚の意味だ。

氣　味　【甘し、寒にして毒なし】　主　治　【少陰下痢、咽痛】（時珍）

發　明　張仲景曰く、少陰の下痢、咽痛、胸滿、心煩には、豬膚湯が主效がある。豬膚一斤、水一斗を五升に煮て汁を取り、白蜜一升、白粉五合を入れて香しく熬り、六回に分服する。成無已曰く、豬は水畜であつて、その氣は先づ腎に入つて

少陰の客熱を解す。白蜜を加へるは燥を潤ほし、煩を除くため、白粉を加へるは氣を益し、利を斷つためである。

耳垢 ［主治］【蛇傷、狗咬に塗る】（別錄）

鼻唇 ［氣味］【甘く鹹し、微寒にして毒なし】多く食へば風を動ずる。

［主治］【上唇は凍瘡痛痒を治す】（思邈）【湯に煎じ、蜀椒目末半錢を調へて夜服すれば盜汗を治す】（宗奭）【鼻は日中の風翳を治す。灰に燒き、一日二回、方寸匕を水で服す】（時珍）記載は千金にある。

舌 ［主治］【脾を健にし、不足を補し、人をして能く食せしめる。五味と和して汁に煮て食ふ】（孟詵）

靨 音は掩（エン）である。俗に咽舌と名けるもののことだ。また豬氣子と名ける。王璽は『豬の喉系下に在る肉團で、一箇の大いさ棗ほどで微し扁く、色は紅い』といつた。［主治］【項下の癭氣には、瓦で焙じて研末し、毎夜一錢づつを酒で服す】（時珍）

［發明］羊靨の條下を見よ。

附方　新二。【癭氣】杏林摘要では、豬靨七箇、酒麴三錢を水瓶中に入れて一夜露し、取出して炙いて食ふ。二服にして效がある。○醫林集要では、開結散——豬靨を焙じて四十九箇、沈香二錢、眞珠を砂罐で煆いて四十九粒、沈香二錢、橘紅四錢を末にし、就寢時に二錢づつを冷酒で徐徐に服す。五服で效が現れる。重きものも一料で癒える。十二月末日に調劑する。酸、鹹、油膩、澀氣の物を忌む。

齒　氣味【甘し、平なり】主治【小兒の驚癇には五月五日に取つて灰に燒いて服す】(別錄)【又、蛇咬を治す】(日華)【牛肉の中毒には、灰に燒いて水で一錢を服す。又、痘瘡倒陷を治す】(時珍)

骨　主治【馬肝、漏脯、菓菜の諸中毒には、灰に燒き、一日三回、水で方寸匕を服す。頰骨は、燒灰は痘陷を治し、煎汁を服すれば丹藥の毒を解す】(時珍)

附方　新三。【消渴疾を治す】豬脊湯——豬脊骨一尺二寸、大棗四十九箇、新蓮肉四十九粒、炙甘草二兩、西木香一錢、水五椀と共に煎じて汁を取り、渴するとき飮む。(三因方)【浸淫諸瘡】豬牙車骨の年久しきものを椎破し、燒いて脂を出さしめ、熱に乘じて塗る。(普濟方)【下痢紅白】臘豬骨を燒いて性を存して研末し、三錢

(四〇)犗去ハ去勢。

(四一)陰陽易病ハ熱病ガ夫婦ノ間ニ傳染スル場合ヲ云フ。

を溫酒で調へて服す。

豚卵　【釋名】　**豚顚**(本經)　**豬石子**　別錄に曰く、陰乾して敗壞せぬやうに貯藏する。頌曰く、豚卵とは豬子のことであらう。

時珍曰く、豚卵とは牡豬の外腎のことだ。牡豬は小なるとき多く(四〇)犗去する。故に豚卵といふ。濟生方に豬石子といつてあるそのものだ。三因の消渴を治する方中にある石子薺苨湯、產後の蓐勞を治する石子湯に、いづれも豬腎を用ゐて石子としたのは誤だ。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】　【主治】　【驚癇、癲疾、鬼疰、蠱毒に寒熱を除く。賁豚、五癃、邪氣、攣縮】(本經)　【陰莖中の痛を除く】(孫思邈)　【(四一)陰陽易病、少腹急痛を治す。二箇を熱酒で吞めば瘥える】(時珍)　又、古今錄驗の五癇を治する莨菪散中に用ゐてある。

【附方】　新一。【驚癇中風】壯熱し、掣瘲し、舌を吐き、沫を出すには、豚卵一雙を細切し、當歸二分と醇酒三升で一升に煮て分服する。(普濟)

母豬乳　時珍曰く、搾取法は、馴れた豬が兒に乳を飲ませる時を待つて後脚を提

げ、急に手で捋んで承けて取る。この方法以外では取れないものだ。

【氣味】「甘く鹹し、寒にして毒なし」【主治】「小兒の驚癇、及び鬼毒の去來寒熱、五癃。綿に蘸けて吮ふ」（蘇恭）「小兒の天弔、大人の豬雞癇病」（日華）

【發明】時珍曰く、小兒の體は純陽に屬し、その驚癇もまた風熱に生ずる。豬乳は氣が寒であつて、この場合は寒を以て熱を治するのである。これを正治といふ。故に錢乙は『初生小兒には滿一个月まで豬乳を頻に滴すが最も佳し』といひ、張煥は『小兒初生に乳なきときは豬乳を代用する。一个月以上飲ませれば驚癇、痘疹の患を免れるやうになる』といひ、楊士瀛は『小兒の口噤して開かぬには、豬乳を飲ませるが甚だ良し』といつた。一个月以內の初生兒の胎驚には、硃砂、牛乳少量と共に口中に抹するが甚だ妙である。この法は諸家の方書には用ゐることを認められてないが、予はこれを傳へてゐる。東宮吳觀察の子がこの病のときこれを用ゐて奏效した。

蹄　已下いづれも母豬のものを用ゐる。【氣味】「甘く鹹し、小寒にして毒なし」【主治】「煮汁を服すれば乳汁を下し、あらゆる藥毒を解す。傷撻の諸敗瘡

を洗ふ】(別錄)【肌膚を滑にし、寒熱を去る】(蘇頌)【羹に煮て用ゐれば乳脈を通じ、癰疽を托し、丹石を壓す。煮た清汁で癰疽を洗ひ、熱毒を潰ければ毒氣を消し、惡肉を去るに有效だ】(時珍) 外科精要にある癰疽を洗ふ豬蹄湯の數方は、豬蹄の煮汁を用ゐ、油を去つて種種の藥を煎じて蘸し洗ふのである。

【附方】 舊五、新二。【婦人の乳無きもの】外臺では、母豬蹄一具を水二斗で五六升に煮て飲む。或は通草六分を加へる。○廣濟では、母豬蹄四箇を水二斗で一斗に煮取り、土瓜根、通草、漏蘆各三兩を入れ、再び六升に煮て滓を去り、葱、豉を納れて粥にし、或は羹にして食ふ。或は身體微熱し、少し汗が出れば佳し。なほ通ぜぬときは再び試みる。【癰疽發背】母豬蹄一雙、通草六分を綿に裹み、羹に煮て食ふ。(梅師)【乳發の初期】方は上に同じ。【天行熱毒】手、足を攻めて腫痛し、斷れんとするには、母豬蹄一具を毛を去り、水一斗、葱白一握と煮た汁に少量の鹽を入れて漬ける。(肘後)【老人の面藥】顏を光澤ならしめる。母豬蹄一具を漿に煮て膠のやうにし、夜顏に塗り曉方洗ひ去る。(千金翼)【硇砂で陰を損じたもの】豬蹄一具、浮萍三兩、水三升を汁半升に煮て漬け、冷えたとき取出して粉を傅ける。(外臺)

(一二)懸蹄甲　一名豬退。思邈曰く、酒に半日浸して炙き焦して用ゐる。時珍曰く、按ずるに、古方には、左蹄甲を用うとしたものがあり、また後蹄甲を用うとしたものもあるが、その意味は判らない。

氣味　【鹹し、平にして毒なし】　**主治**　【五痔、伏熱の腹中に在るもの、腸癰內蝕】(本經)　【赤朮と共に烟に燒いて薫ずれば一切の惡瘡を辟ける】(仲景)

附方　舊二、新五。【肺氣駒喘】猪爪甲二枚を灰に燒いて研り、麝香一分を入れて共に研り、茶で服す。(普濟)　【喘を定め、痰を化す】豬蹄甲四十九箇を洗淨し、一甲每に半夏、白礬各一字を納れ、罐に盛つて固濟し、赤く煆いて末にし、麝香一錢匕を入れ、半錢づつを粳米飲で服す。(經驗良方)　【火欬喘息】豬蹄甲四十九箇を瓶に盛つて天南星一箇を入れて蓋ひ、鹽泥で固定し、煆いて烟の出るを度として取出し、欵冬花半兩、麝香・龍腦少量を入れて研り勻ぜ、一錢づつを食後に桑白皮の煎湯で服す。これを黑金散と名ける。(總錄)　【小兒の寒熱】及び熱氣に中りたるには、豬後蹄甲を灰に燒き、乳汁で一撮を調へて服す。一日二服。(千金)　【痘瘡の目に入りたるとき】豬蹄爪甲を灰に燒き、湯に浸し濾淨して洗ふ。甚だ效がある。(普濟方)　【瘢痘

(一二)懸蹄ハ蹄中ノ懸起シ地ニ著カザルモノ。和名けづめ。

で翳の生ずるもの】半年已上のものは一个月にして效を取る。一个年のものは治瘥せぬ。豬懸蹄三兩を瓦瓶で固濟して煅き、蟬蛻一兩、羚羊肉一分を末にし、一歲の病兒には一字づつ、三歲已上は三錢づつを溫水で調へて服す。一日三服。(錢氏小兒方)

【小兒の白禿】豬蹄甲七箇を各箇に白礬一塊、棗兒一箇を入れて燒いて性を存して研末し、輕粉を入れて麻油で調へて搽る。五回に過ぎずして癒える。

尾 【主治】【臘月のものを灰に燒いて水で服すれば喉痺を治す。豬脂で和して赤禿髮落に塗る】(時珍) 記載は千金にある。

毛 【主治】【灰に燒いて麻油で調へて湯火傷に塗り、竅を殘して置いて毒を出せば痕がなくなる】(時珍) 記載は袖珍にある。

【附方】新一。【赤白崩中】豬毛の燒灰三錢を、黑豆一椀、好酒一碗半を一碗に煮て調へて服す。

屎 一名豬零。日華曰く、東行牡豬のものを良しとす。頌曰く、今一般にはまた南行豬零を取つて太乙丹を合はせる。時珍曰く、古方には豭豬屎を用ゐたものもあり、各〻その方に隨つて用ゐた。豬零とはその形が纍纍としたもので零落として下

つてゐるからだ。

氣味　【寒にして毒なし】**主治**　【寒熱、黃疸、濕痺】(別錄)【蠱毒、天行熱病に主效がある。いづれも一升を取つて浸した汁を頓服する】(日華)【燒灰は痘瘡を發し、驚癇を治し、熱を除き、毒を解し、瘡を治す】(時珍)【血溜、出血止まぬには、新屎を取つて壓する】(吳瑞)

發明　時珍曰く、御藥院方の痘瘡黑陷を治する無價散、錢仲陽の急驚風癇を治する猩猩丸にいづれもこれを用ゐてある。その熱を除き毒を解する功力を取つたものだ。

附方　舊一、新十六。【小兒の客忤】偃啼し、顏の靑きには、豭豬屎二升を水で絞つた汁を溫めて浴する。【小兒の夜啼】豬屎の燒灰で淋取した汁で兒を浴し、幷に少量を服す。(聖惠方)【小兒の陰腫】豬屎五升を煮熱し、袋に盛つて腫上に置く。(千金方)【霧露瘴毒】頭痛し、心煩し、項强し、顫掉し、吐かんとするには、新豬屎二升、酒一升の絞汁を暖服して汗を取れば瘥える。(千金)【豬肉の中毒】豬屎の燒灰方寸匕を水で服す。(外臺)【婦人の血崩】老母豬屎を灰に燒き、三錢を酒で服す。(李

樓方）【一切の解毒】母豬屎を水に和して服す。（千金）【攪腸沙痛】母豬が兒を生む時に抛下した糞を日光で乾して末にし、白湯で調へて服す。【口唇に核を生じたるもの】豬屎の汁を絞つて溫服する。（千金方）【白禿髮落】臘月豬屎の燒灰を敷く。（肘後）【疔瘡の腹に入りたるもの】牡豬屎に水を和して汁を絞り、三合を服すれば立ろに瘥える。（聖惠方）【十年の惡瘡】母豬屎を燒いて性を存して傅ける。（外臺方）【惡肉を消蝕する】臘月豶豬糞を燒いて性を存して一兩、雄黃、檳榔各一錢を末にして敷く。（直指方）【胻疽の靑爛】腨、脛の間に生じ、惡水淋漓として年を經て瘡が冷敗し、深疽となつて靑黑色を呈し、健全な肉が虛腫し、あらゆる藥を用ゐても瘥えず、或は瘥えてもまた發するには、先づ藥で惡肉を蝕し去つて後に豭豬屎散を用ゐるが甚だ效がある。豬屎を燒いて硏末し、瘡孔に滿て納れ、白汁の出るを吮ひ去つて更に傅ける。惡肉があるときは再び蝕し去つて傅ける。平癒するまでを期とする。實驗上效があつた。（千金方）【男、女の下疳】母豬糞を黃泥で包んで煆いて性を存して末にし、米泔で洗淨して搽る。立ろに效がある。（簡便單方）【雀瘻の蟲あるもの】母豬屎を灰に燒き、臘月豬膏で和して敷く。蟲が出るものだ。（千金方）【赤遊火丹】母豬屎を

水で絞つてその汁を服し、幷に傅ける。（外臺）

燖豬湯　［主治］　【諸毒蠱魘を解す】（蘇頌）　【產後の血刺心痛で死せんとするには、一盞を溫飮する】（汪機）　【消渴を治するには、濾淨して一碗を病人に知らしめずして飮ませる。又、諸瘡を洗ふが良し】（時珍）

豬窠中草　［主治］　【小兒の夜啼には、密かに母に知らしめぬやうにして席下に安く】（日華）

豬を縛つた繩　［主治］　【小兒驚啼の發歇不定なるには、臘月のものの燒灰少量を水で服す】（藏器）

狗（本經中品）

和名　いぬ
學名　Canis familiaris, Linne.
科名　いぬ科

［釋名］　**犬**（說文）　**地羊**　時珍曰く、狗は叩であつて、吠える聲に物を叩くやうな節がある。或はその性質が苟且なものだから狗と謂ふので、韓非に『蠅營、狗苟』とあるがそれだともいふ。尾が卷いてゐて懸蹄のあるものを犬といふ。犬の字

はその形を象したものだ。故に孔子は『犬の字を視ると狗を畫いたやうに見える』といつたのである。齊地方では地羊と名ける。俗間ではまたこれを諱み、狗を稱するに龍をつけて呼び、烏龍、白龍などの呼名がある。許氏の説文には『毛多きを尨といひ、喙長きを獫——音は斂(レン)——といひ、喙短きを猲——音は歇(カツ)——と



〔狗〕

いひ、去勢せるを猗といひ、高さ四尺なるを獒といひ、狂犬を猘——音は折(セツ)——といひ、一子を生ずるを獿といひ、玂——音は其(キ)——といひ、二子を獅といひ、三子を猣といふ』とある。

〔集解〕時珍曰く、狗は種類が甚だ多い。その用途に三種あつて、田犬といふは喙の長いもので獵に特長があり、吠犬といふは喙の短いもので、守り、番をするに特長があり、食犬といふは體が肥えたもので食料に供する。凡そ本草に用ゐるものはみな食犬である。犬は三个月を以て生れ、畜に在つては木に屬し、卦にあつては艮に屬し、禽に在つては婁星に應ずる。豺はこれを見れば跪き、虎はこれを食へば

醉ひ、犬は番木鼈を食へば死ぬ。物の性にはかうした制伏の關係がある。又、遼東に鷹背狗といふがある。これは鷹は三卵を產み、一は鷹となり、一は鵰となり、一は犬となるのであつて、禽が獸を乳むといふことは古より未だ聞かざるところだが、鷹の條に詳記してある。又、老木の精に黑狗のやうで尾なきものがあつて、彭侯と名け、烹て食へる。無情が有情に變化したもので、精靈の變化である。

肉　黃犬を上とする。黑犬、白犬はこれに次ぐ。

氣味　【鹹く酸し、溫にして毒なし】商陸と反し、杏仁を畏れる。蒜と共に食へば人を損ずる。菱と共に食へば癲を生ずる。

思邈曰く、白犬と海鮋を食合せれば必ず惡病に罹る。

時珍曰く、鮋は小魚である。道家では犬を地厭といつて食はない。凡そ犬は炙いて食つてはならぬ。人をして消渴せしめるものだ。妊婦がこれを食へば生れる子が聲が出なくなる。熱病後に食へば死ぬ。服食をなす人は食ふことを忌む。○九月に犬を食つてはならぬ。神を傷める。○瘦犬には病があり、猘犬は發狂し、自死犬は有毒であり、懸蹄犬は人を傷め、赤股にして躁ぐものは氣が臊である。犬の目の赤

いものはいづれも食つてはならぬ。

【主治】 【五臟を安じ、絕傷を補し、身を輕くし、氣を益す】(別錄) 【腎に宜し】(思邈) 【胃氣を補し、陽道を壯にし、腰膝を暖め、氣力を益す】(日華) 【五勞、七傷を補し、陽事を益し、血脈を補し、腸、胃を厚くし、下焦を實し、精髓を塡てる。五味を和して空心に食ふ。凡そ犬を食ふには血を去つてはならぬ。血を去つては力が少けて人を益せぬ】(孟詵)

【發明】 弘景曰く、白狗、烏狗を藥に入れる。黃狗肉は大いに虛勞を補す。牡の肉が就中勝れてゐる。

大明曰く、黃犬は大いに人を補益するが、他の種のものは補の力が微弱だ。古には『薯蕷は涼にして能く補し、犬肉は暖にして補せぬ』といつた。さうはいつてあるが、服して見れば結局は益がある。但しこの動物は穢物を食ふところから食はないものが多い。

震亨曰く、世間では、犬は能く勞損、陽虛の疾を治すといふが、しかしそれを藥に入れる病は多くは陰虛である。陽が果して虛するならば死に何の造作はない。手

を掛けるまでもないことだ。

時珍曰く、脾、胃は土に屬し、暖を喜み寒を惡む。犬の性は溫、暖にして能く脾、胃の虛寒の疾を治す。脾、胃が溫和して腰腎に(一)癮を受けるのである。本來平常が氣壯にして火多き人の場合にはこれを忌むべきものである。丹溪は獨り陰虛を指して說を立ててゐるが、矯激な偏見に過ぎた。濟生に眞陽の虛憊、諸虛の證を治する黃犬肉丸といふがある。それには多くの藥を使用するが、ここには載せない。

附方　舊三、新五。【戊戌酒】大いに元氣を補す。黃犬肉一隻を一伏時煮て泥のやうに搗き、汁を和し拌ぜ、糯米三斗を炊き、麴を入れて普通の酒を釀すやうにし、熟するを候つて每早朝空心に飮む。（養老方）【戊戌丸】男子、婦人一應の諸虛不足、骨蒸潮熱等の證を治す。黃童子狗一隻を皮毛、腸肚を去つて外腎と共に砂碙中に入れ、酒、醋八分、水二升を用ゐ、地骨皮一斤、前胡、黃芪、肉蓯蓉各四兩を入れて共に一日煮て藥を去り、再び一夜煮て骨を去り、再び煮て肉を泥のやうに擂つて濾し、當歸末四兩、蓮肉、蒼朮末各一斤、厚朴、橘皮末十兩、甘草末八兩を和して千杵搗いて梧子大の丸にし、五七十丸づつを空心に鹽酒で服す。（乾坤祕韞）【脾、胃の

（一）飲膳正要、本草洞詮、癮ヲ蔭ニ作ル。

(三)大觀ニ米ニ作ル。

虛冷】腹滿し、刺痛するには、肥狗肉半斤を(三)水で鹽豉と共に粥に煮、頻りに一二頓食ふ。(心鏡)【虛寒瘧疾】黃狗肉を臛に煮て五味を入れて食ふ。【氣水鼓脹】狗肉一斤を切り、米を和し粥に煮て空腹に食ふ。(心鏡)【浮腫尿濇】肥狗肉五斤を熟蒸して空腹に食ふ。(心鏡)【中惡の卒死】白狗を破つて心上に搨すれば活る。(肘後方)【痔漏の蟲あるもの】鈐方では、狗肉の煮汁を空腹に服す。能く蟲を引き出す。○危氏では、熱犬肉に藍汁を蘸けて空心に食ふ。七日にして效がある。

蹄肉 【氣味】【酸し、平なり】【主治】【煮た汁は能く汁乳を下す】(別錄)

血 白狗のものが良し。【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】弘景曰く、白狗血は、白雞肉、烏雞肉、白雞肝、白羊肉、蒲子羹等と和して食へばいづれも人を病ませる。時珍曰く、黑犬血を蟹に灌いで燒けば鼠が集まる。

【主治】【白狗血は癲疾の發作を治す。烏狗血は產難、橫產で血が上に心を搶くを治す。酒に和して服す】(別錄)【五臟を補し安ずる】(日華)【熱飲すれば虛勞吐血を治し、又、射罔の毒を解す。點眼すれば痘瘡の目に入りたるを治す。又、傷寒熱病で發狂して鬼を見るもの、及び鬼擊病を治し、諸邪魅を辟ける】(時珍)

(三)瑯琊ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。
(四)穰ノ誤ナラン。

【發明】時珍曰く、術家では犬を地厭といひ、能く一切の邪魅、妖術を禳辟する。按ずるに、史記に『秦の時、狗を殺して四門に磔けて災を禦ぎ、血犬を殺してその血で門に題して不祥を辟けた』とあるところから見ると、古からかやうなことがあつたのだ。又、華佗別傳に『(三)瑯琊のある女子が右股に瘡を病み、痒いが痛まず。癒えてもまた作つた。その時佗が、稻(四)糖色の一犬疋を取り、馬に繋いで馬を五十里走らせてから、その犬の頭を斷つて患部の痛い部分へ合はせた。すると須臾にして皮中に一條の蛇がゐて動き出したのを鈎で引き出した。長さ三尺ばかりのものであつた。七日にして病が癒えた』とある。これはまた異常なる病證だが、狗の血を用ゐたのはその血の腥でその蟲を引き出したものだ。

【附方】舊二、新四。【熱病發狂】傷寒、時氣溫病で、六七日にして極度の熱で發狂し、鬼を見、走らんとするには、白狗を背から破つて血を取り、熱に乘じて胸に攤し、冷えれば去る。これは垂死のものの治療にも用ゐて活きる。白犬が無いときはただ純色のものを用ゐてもよし。(肘後方)【鬼擊の病】脇腹絞痛し、或は直ちに吐血し、衄血し、下血する。一名鬼排といふ。白犬の頭から熱血一升を取つて飲む。

（百一方）【小兒の卒癇】白犬を刺してその血一升を飲む、幷に身に塗る。（葛氏方）【卒に起つた瘑瘡】常時に兩脚の間に生ずるには、白犬血を塗れば立ろに癒える。（肘後方）【兩脚の癬瘡】白犬血を塗れば立ろに瘥える。（奇效）【疔瘡惡腫】白犬血を取つて頻りに塗るが有效だ。（肘後）

心血　主治　【心痺、心痛には、取つて蜀椒末を和して梧子大の丸にし、一日五回、五丸づつを服す】（時珍）記載は肘後にある。

乳汁　白犬のものが良し。主治　【十年の靑盲には、白犬が子を生んでまだ目の開かぬ時の乳を取つて頻りに點ける。狗の子が目を開くと同時に瘥える】（藏器）【赤禿髮落には、頻りに塗るが甚だ妙である】（時珍）

附方　新二。【髮の白さを拔く】白犬乳を塗る。（千金）【禁酒法】白犬乳を酒で服す。（千金）

脂　幷に**䐈**　白犬のものが良し。主治　【手足の皴皺、面脂に入れば皯黯を去る。五金を柔にする】（時珍）

腦　主治　【頭風痺、鼻中の瘜肉、下部の䘌瘡】（別錄）【猘犬の咬傷には、その

咬んだ犬の腦を取つて敷く。後に再發しない】(時珍) 記載は肘後にある。

附方 新一。【眉髮の火瘢】毛の生えぬには、蒲灰を正月の狗腦で和し、一日三回づつ敷けば生える。(聖惠方)

涎 主治 【諸骨硬、脫肛、及び誤つて水蛭を呑みたるもの】(時珍)

附方 新三。【諸骨哽咽】狗涎を頻りに骨上に滴らせば自ら下る。(仇遠稗史)【大腸脫肛】狗涎を抹すれば自ら上る。(扶壽精方)【誤つて水蛭を呑みたるとき】蒸餠半箇を絞り出した狗涎で喫ふ。二三箇を連續して食へばその物は自ら散ずる。(德生堂方)

心 主治 【憂恚の氣。邪を除く】(別錄)【風痺、鼻衄、及び下部の瘡、狂犬の咬傷を治す】(日華)

腎 氣味 【平にして微毒あり】 時珍曰く、內則に『犬を食ふには腎を去る』とあるは人に利あらぬためだ。主治 【婦人產後の腎勞で瘧の如きもの。その婦人の體熱するには豬腎を用ゐ、體冷なるには、犬腎を用ゐる】(藏器)

肝 時珍曰く、按ずるに、沈周の雜記に『狗肝は色が泥土のやうで臭味もやはりそれのやうだ。故に人が土上を夜行すると肝氣が動ずる。蓋し相感するのだ』とあ

(五) 夏至後第三庚日ヲ上伏トス。

り、又、張華の物類志には『狗肝で土を和して竈に泥れば、婦、妾をして孝順ならしめる』とあつて、狗肝の土に應ずるの說と符合する。

主治 【肝と心、腎とを共に搗いて狂犬の咬傷に塗る。又、脚氣攻心を治するには、切つて生で薑醋で進める。洩を取るのであつて、豫め洩しつつあるものは用ゐてはならぬ】(藏器)

附方 舊一、新一。【下痢腹痛】狗肝一具を切つて米一升に入れ、粥に煮て五味を合せて食ふ。(心鏡)【心風發狂】黃石散——狗肝一具を批開し、黃丹、硝石各一錢半を研り勻ぜて肝內に擦り納れ、麻で縛定して水一升で煮熟し、細に嚼んでその汁で送下する。(楊氏家藏)

膽 青犬、白犬のものが良し。**氣味** 【苦し、平にして小毒あり】斅曰く、鮭魚を樹に挿めば立ろに乾枯する。狗膽を塗れば却つて前に勝つて榮える。

主治 【目を明にする】(本經) 鼎曰く、(五)上伏の日に膽を採つて酒で服するのである。【痂瘍惡瘡に敷く】(別錄)【鼻齆、鼻中の瘜肉を療ず】(甄權)【鼻衄、聤耳に主效があり、消渴を止め、蟲を殺し、積を除き、能く血を破る。凡そ血氣痛、及び

傷損には、熱酒で半箇を服す。瘀血が盡く下る」(時珍)【腸中の膿水を去る。又、通草、桂を和して丸にして服すれば、人をして隱形せしめる」(孟詵)

【發明】 愼微曰く、按ずるに、魏志に『河內の太守劉勳の娘が左膝に瘡痒を病んだとき、華佗が視て、繩で犬の後足を繫いで歩行けぬやうにし、犬の腹を斷つて膽を取り、それを瘡口に向けると、須臾にして蛇のやうな長さ三尺の蟲が瘡上に出て病が癒えた』とある。

【附方】 舊二、新七。 【眼赤澀痒】犬膽汁を目中に注ぐが效がある。(聖惠)【肝虛目暗】白犬膽一箇、螢火蟲十四箇を陰乾し、末にして點ける。(聖惠)【目中の膿水】上伏の日に犬膽を採つて酒で服す。(聖濟總錄)【聤耳で膿の出るもの】狗膽一箇、枯礬一錢を調勻し、綿で裹んで耳內を塞ぐ。三四回で痊える。(奇效良方)【髮の白きを拔いて黑に換へる】狗膽汁を塗る。(千金)【血氣撮痛】忍び難きには、黑狗膽一箇を半乾半濕にして剜り開いて篦子で排し、菉豆大の丸にして蛤粉を衮し、四十丸づつを鐵を淬した酒で送下する。痛は立ろに止む。(經驗方)【反胃吐食】男子、婦人、老

人、少者、遠年のもの、近日のものに拘らず、五靈脂末を黄狗膽汁で和して龍眼大の丸にし、一丸づつを好酒半盞に磨り溶して服す。三服に過ぎずして效がある。(本事)【痞塊疳積】五靈脂を炒つて烟を盡し、眞阿魏を砂を去り、研末して等分を黄雄狗膽汁で和して黍米大の丸にし、三十丸を空心に口津で嚥む。羊肉、醋、麪を忌む。(簡便)【赤、白下痢】臘月の狗膽一百箇を一箇毎に黑豆を入れて充滿し、麝香少量を入れ、一箇づつを赤痢には甘草、白痢には乾薑の湯で送下する。(奇效良方)

牡狗陰莖 [釋名]【狗精を六月上伏の日に取つて百日間陰乾したものである】(別錄)

[氣味]【鹹し、平にして毒なし】思邈曰く、酸し。[主治]【傷中、陰痿不起を强熱せしめ、大いに子を生ます。婦人の帶下十二疾を除く】(本經)【絕陽、及び婦人の陰瘻を治す】(日華)【精髓を補す】(孟詵)

陰卵 [主治]【婦人の十二疾には、灰に燒いて服す】(蘇恭)

皮 [主治]【腰痛には、炙熱した黄狗皮で裹む。頻りに用ゐて瘥を取る。燒灰は諸風を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、淮南萬畢術に『黑犬の皮、毛の燒灰を揚げれば天風が止まる』とあるところを見ると、風を治すといふ意味は此に取つたものだ。

毛　【主治】【產難】（蘇恭）【頸下の毛は小兒の夜啼に主效がある。紅絹の囊に盛つて兒の背上に繫ける】（藏器）【燒灰一錢を湯で服すれば邪瘧を治す。尾の燒灰を犬傷に敷く】（時珍）

【附方】舊一。【湯火傷瘡】狗毛を細に剪り、烊した膠で和して敷く。痂が落ちて瘥える。（梅師）

齒　【氣味】【平にして微毒あり】【主治】【癲癇寒熱、卒風痱。伏日に取る】（別錄）【磨汁は犬癇を治す。燒き研り醋で和して發背、及び馬鞍瘡に敷く。人齒と共に灰に燒いて湯で服すれば、痘瘡倒陷を治するに效がある】（時珍）

頭骨　黃狗のものが良し。【氣味】【甘く酸し、平にして毒なし】【主治】【金瘡に血を止める】（別錄）【燒灰は久痢、勞痢を治す。乾薑、莨菪と和して烟の出るまで炒り、丸にして十丸を空心に白飲で服するが極めて效がある】（甄權）【燒灰は陽を壯にし、瘧を止める】（日華）【癰疽、惡瘡、解顱、婦人の崩中帶下を治す】（時珍）【頷

(六)大觀ニ驗下ニ後字アリ。

骨は小兒の諸癇、諸瘻に主效がある。燒灰を酒で服す】(蘇恭)

附方 舊三、新十。【小兒の久痢】狗頭の燒灰を白湯で服す。(千金)【小兒の解顱】黃狗頭骨を炙いて末にし、雞子白で和して塗る。(直指)【赤、白久痢】臘月の狗頭骨一兩半を灰に燒き、紫笋茶末一兩と末にし、二錢づつを米飮で服す。(聖惠方)【赤、白帶下】止まぬには、狗頭の燒灰を末にし、一日三回、一錢づつを酒で服す。(聖惠)【產後の血亂】四肢に奔入し、幷に遺墮するには、狗頭骨灰二錢を酒で服す。甚だ效がある。(經驗(六)方)【打損の接骨】狗頭一箇を燒いて性を存して末にし、熱醋で調へて塗り、暖に臥す。(衞生易簡)【附骨疽瘡】狗頭骨を烟に燒いて日毎に熏ずる。(聖惠)【癰疽癤毒】狗頭骨灰、芸薹子等分を末にし、水で和して敷く。(千金)【惡瘡の瘉えぬもの】狗頭骨灰と黃丹末と等分を敷く。(壽域方)【肉を長じ、肌を生ずる】老狗の頭腦骨を瓦で炒つて二兩、桑白皮一兩、當歸二錢半を末にし、麻油で調へて敷く。(直指)【鼻中の瘜肉】狗頭灰方寸匕、苦丁香半錢を研末して吹く。直ちに化けて水となる。或は硇砂少量と共にするが就中妙である。(朱氏集驗)【夢中泄精】狗頭鼻梁骨を燒いて研り、就寢時に一錢を酒で服す。【頭風白屑】痒さには、狗頭骨の

燒灰の淋汁で沐する（聖惠方）

骨　白狗のものが良し。［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【燒灰は肌を生ずる。馬瘡に敷く】（別錄）【燒灰は諸瘡瘻、及び妬乳、癰腫を療ず】（弘景）【燒灰は虛を補し、小兒の驚癇、客忤を治す】（蜀本）【煎汁と米とで煮た粥は婦人を補し、子あらしめる】（藏器）【燒灰を米飮で日日に服すれば休息久痢を治す。豬脂で調へて鼻中の瘡に敷く】（時珍）

［附方］　舊二。【產後の煩懣】食事不能なるには、白犬骨を燒いて研り、水で方寸匕を服す。（千金翼）【桃李の哽咽】狗骨を湯に煮て頭上に摩る。（子母祕錄）

屎　白狗のものが良し。［氣味］【熱にして小毒あり】丹房鑑源に『白狗糞で銅を煮る』とある。［主治］【疔瘡には水で汁を絞つて服す。諸毒の口へ入れてならぬものを治す】（蘇恭）【瘭疽で骨に徹して痒きには、病者に知らさぬやうにして燒灰を瘡に塗る。又、臘豬脂で和して瘻瘡、腫毒、疔腫に敷けば根を出す】（藏器）【燒灰を服すれば痘瘡倒黶を發し、霍亂、癥積を治し、心腹痛を止め、一切の毒を解す】（時珍）

（七）大觀ニ肘後ヲ梅師ニ作ル。

【發明】時珍曰く、狗屎で諸病を治するは、いづれもその解毒の功力を取るだけのものだ。

【附方】舊三、新五。【小兒霍亂】卒に起つたものには、白狗屎一丸の絞汁を服す。【心痛で死せんとするもの】狗屎を炒つて研り、二錢を酒で服するが神效がある。【勞瘧、瘽瘧】久しく癒えぬには、白狗糞の燒灰を發作の前に冷水で二錢を服す。（聖惠方）【月水不調】婦人產後に月水の往來が乍ち多く乍ち少きには、白狗糞を燒いて末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。（千金）【魚肉で癥と成つたもの】幷に諸毒を治す。狗糞五升を燒いて末にし、綿に裹んで五升の酒中に二晝夜浸して淸を取り、一日三回服する。癥はそれで出る。（外臺）【漏脯の中毒】犬屎を燒いて末にし、方寸匕を酒で服す。（七）（肘後）【發背癰腫】白犬屎半升を水で絞つて汁を取つて服し、滓を敷く。一日二回。（外臺）【疔瘡惡腫】牡狗屎を五月五日に灰に燒き、塗り敷いて數易へる。又、馬鞍瘡を治するに神驗がある。（聖惠）

屎中粟 白狗のものが良し。一名白龍沙。【主治】【噎膈、風病、痘瘡倒陷。能く毒を解す】（時珍）

附方 新二。【噎膈で食事不能のもの】黄犬を數日間乾餓せしめて生粟、或は米乾で飼ひ、その糞を排洩するを侯つてその中の米、粟を淘り、洗ひ淨めて粥に煮、薤白一握を入れ、泡熱して薤を去り、沈香末二錢を入れて食ふ。(永類鈐方)【痘瘡倒黶】白狗、或は黑狗一疋を生粟米で飼つて屎を下すを候ち、まだ消化せぬ米を取つて末にし、麝香少量を入れ、新汲水で二錢を服す。(保幼大全)

屎中骨 主治 【寒熱、小兒の驚癇】(別錄)

羊 (本經中品)

和名 ひつじ
學名 Ovis aries, Linne.
科名 牛科

校正 別錄には羊乳を別に揭げてあるが、此には併せて一條とした。

釋名 **羖** また牯とも書く。**羝** 音は低(テイ)である。**羯** 時珍曰く、說文に『羊の字は頭、角、足、尾の形を象したもので、孔子は「牛、羊の字は形似を以てしたものだ」といつた』とある。董子は『羊は祥である。故に吉禮にこれを用ゐる』

といつた。牡羊を羖といひ、羝といひ、牝羊を䍧といひ、牂——音は臧(ジヤウ)——といひ、白きを羒といひ、黒きを羭といひ、毛多きを羖䍽といひ、胡羊を羦羺とい



〔羊〕

ひ、角なきを羶といひ、䍫といひ、去勢せるを羯といひ、羊子を羔といひ、羔の五个月のものを羜——音は宁(チヨ)——といひ、六个月のものを𦍩——音は務(ボウ)——といひ、七个月のものを羍——音は達(タツ)——といひ、また一年經過せぬものを𦏁——音は兆(テウ)——といふ。内則にはこれを柔毛といひ、また少牢といふ。古今注にはこれを長髯主簿といつてある。

集解　別錄に曰く、羖羊は(一)河西に生ずる。

弘景曰く、羊に三四種あつて、藥に入れるには青色の羖羊を勝れたものとし、次は烏羊である。羦羺羊、及び虜中の無角羊などいふはただ食料に供するだけで、藥としては都下のものに及ばない。しかしその乳、髓は肥好なものだ。

頌曰く、羊は種類の甚だ多いもので、羖羊にもやはり褐色、黒色、白色のものがある。毛の長さ一尺餘のものはまた羖䍽羊ともいふ。北方では大羊を(二)引としてそ

(一)河西ハ今ノ陝西省ノ北半。

(二)引トハ引導、即チ先導者ノ意味ナラン。

れを羊首といひ、また羊頭といふ。

詵曰く、河西の羊が最も佳く、(三)河東の羊も好いのであるが、その羊を南方へ移して飼つて見ると筋力が自ら勞損する。補益の功力のあるわけがなささうだ。現に南方の羊は野草、毒草を多く食ふ。故に江浙の羊は味がなくて痰を發するのであるが、南方人はそれを食つても別段のことがない。ただ(四)淮南の州郡にはともすると北方の羊に亞ぐほどのがある。北方の羊を南方に移して一二年經てばやはり食料に堪へなくなるのだから、南方の羊に至つては尚更いふまでもないことだ。蓋し土地の關係がさうなのである。

宗奭曰く、羖攊羊は陝西、河東に產し、就中狠健なもので、毛が最も長くして厚く、藥に入れて最も佳いのであるが、食料としては北地の無角白大羊に及ばない。又、(五)同、華地方に產する小羊は食料として諸羊の上位にある。

時珍曰く、江南に產するものは吳羊といひ、頭と身と相等くして毛が短い。(六)秦、晉に產するものは夏羊といひ、頭が小さく身が大きくして毛が長く、その地では一般に二歲にしてその毛を剪つて氈物を作り、その羊を綿羊と呼ぶ。廣南の(七)英州に

(三)河東ハ今ノ山西省ノ地ナリ。

(四)淮南ノ州郡ハ草部山草類赤箭天麻ノ淮南ノ註參照。

(五)同州ハ石部凝水石ノ註、華ハ花乳石ノ註ヲ見ヨ。

(六)秦晉ハ今ノ陝西、山西地方。

(七)英州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

産する一種の乳羊は仙茅を食ひ、極めて肥えて(八)血肉の分がない。これを食へば甚だ補の功果がある。諸種の羊はいづれも孕んで四个月にして生れ、その目には(九)神がなく、その腸は薄くして縈曲してゐる。畜に在ては火に屬するものだから、繁殖し易くして性熱である。卦に在ては兌に屬するものだ。故に外柔にして內剛である。その性濕を惡み燥を喜み、鉤吻を食へば肥り、仙茅を食へば肪がつき、仙靈脾を食へば淫し、躑躅を食へば死ぬ。物相互の間にある適、不適の關係には測るべからざるものがある。(一〇)契丹ではその骨を灼いて事を占ひ、それを羊トといふ。やはり一種の靈妙があると見える。その皮は極めて薄いもので、南番ではそれに字を書き、吳地方では繪を書いて燈に作る。

附錄 **大尾羊** 時珍曰く、羊の尾は皆短いものだが、(一一)哈密、及び(一二)大食諸番には大尾羊といふのがある。毛細く、皮薄く、尾上が旁に廣がり、重量一二十斤あるもので、運搬には車に積載する。唐書にはこれを靈羊といひ、毒を療ずるものとしてある。

胡羊 方國志に『大食國に胡羊を產する。高さ三尺餘、その尾は扇のやうだ。每

(八)典籍便覽云、乳羊出英州廿地多仙茅羊食茅擧體悉化爲肪不復有血肉食之宜人。
(九)神トハ光彩ヲ云フ。
(一〇)契丹ハ滿洲、蒙古地方。
(一一)哈密ハ鱗部蛇類蛇角ノ註ヲ見ヨ。
(一二)大食ハ水部廿露蜜ノ註ヲ見ヨ。

歲春期に脂を割き取つて再び縫合して置く。取らねば脹れて死ぬものだ』とあり、葉盛の水東日記に『(一三)莊浪衞は(一四)雪山に近い地方で、䍧羊といふを產する。土人は毎歲その脂を取るのだが、久からずしてまた脂が肥滿する』とある。

洮羊　臨洮の諸地に產し、大なるものは重量百斤のものがある。郭義恭の廣志に『西域の驢羊といふは大いさ驢ほどある』とあるはこの羊の類である。

䍪羊　此思の切(シ)に發音する。○西北の地に產する。その(一五)皮蹄は黍を割くに用ゐられる。

封羊　その背に(一六)肉封があつて駝のやうなものだ。(一七)涼州の郡縣に產する。また駝羊とも呼ぶ。

地生羊　西域に產する。劉郁の出使西域記に『羊臍を土中に種ゑて水を漑いで置くと、雷を聞いて臍が生える。その臍は地に連つてゐるのだが、生長してから木聲で驚かすと斷れ離れて歩行き出し、草を嚙ふ。秋になるとその臍の肉を食へる。また壠種羊と名ける種類のものもある』とある。段公路の北戸錄には『(一八)大秦國に地生羊といふがある。その羔は土中から生ずるので、國人は墻を築いてそれを園ふ。臍

(一三)莊浪衞ハ草部毒草類大黃ノ註ヲ見ヨ。
(一四)雪山ハ祁連山ヲ指ス。
(一五)字彙ニ蹄皮可ニ以割レ漆トアリ。
(一六)肉封ハ隆起ヲ云フ。
(一七)涼州ノ郡縣ハ石部雄黃ノ涼州ノ註參照。
(一八)大秦國ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

(一九)漠北ハ外蒙古、シベリヤ地方ヲ指ス。

は地と連つてゐて、割けば死ぬものだ。しかしただ馬を走らせ鼓を撃つて駭かすと驚き鳴いて臍が絶ち斷れ、水草を逐ふて行くものだ』とある。呉策の淵穎集には『西域では地に羊が生える。脛骨を土中に種ゑ、雷聲を聞くとその骨の中から羊子が生れ、馬を走らせて驚かすと臍が脱ける。その皮は褥になる。あるひは。(一九)漠北地方では羊角を種ゑると生えて、大いさ兎ほどの肥美なものになるともいふ』とある。この三説にはやや相異があつて、果してその種ゑるものが何物であるか判然せぬが、劉郁の説が正しいらしい。兎も角も神異な事實であつて、造化の微妙といふべきだ。

羵羊　土の精であつて、その肝は土である。雌、雄があり、物を食はない。季桓子が嘗て土を掘つてこれを得たといふことだ。又、千歳の樹の精もまた青羊といふ。

羊肉　［氣味］　【苦く甘し、大熱にして毒なし】　詵曰く、温なり。頌曰く、本經には甘しといひ、素問には苦しといつてあるが、蓋し本經では味を以て言ひ、素問では理を以て言つたので、羊は性は熱にして火に屬するから苦に配したのである。羊の齒、骨、五臟はいづれも温、平であるが、ただ肉だけは性が大熱である。

○時珍曰く、熱病、及び天行病、瘧疾、病後にこれを食へば必ず發熱して危篤に

陷る。妊婦がこれを食へば子をして多熱ならしめる。白羊にして頭の黑きもの、黑羊にして頭の白きもの、獨角のものにはいづれも毒があつて、食へば癰を生ずる。禮に『羊の(二〇)泠毛にして(二一)毳なるものは羶し』とある。又、羊を煮るに杏仁、或は瓦片を入れると糜し易い。胡桃を入れると臊くなくなる。竹䶉を入れると味を助ける。羊の中毒は甘草湯を飲めば解す。銅器で煮たものは、男子には陽を損じ、女子には暴下する。物の性にはかやうな特異のあることに注意せねばならぬ。

汪機曰く、半夏、菖蒲と反す。蕎麪、豆腐と共に食へば痼疾を發する。醋と共に食へば人の心を傷める。

【主治】【中を暖める。(二二)字乳の餘疾、及び頭腦大風で汗を出し、虛勞し、寒冷するには、中を補し、氣を益し、心を安じ、驚を止める】(別錄)【痛を止め、產婦を利す】(思邈)【風眩、瘦病、男子の五勞、七傷、小兒の驚癇を治す】(孟詵)【胃を開き、力を健にする】(日華)

【發明】頌曰く、肉は多く湯劑に入れる。胡洽方にある大羊肉湯といふは、婦人產後の大虛、心腹絞痛、厥逆を治するもので、醫家で適用する大方である。

(二〇)泠ハ毛ノ亂レモツレタ貌。
(二一)毳ハ獸ノ細毛。
(二二)字乳ハ哺乳生育スルヲ云フ。

宗奭曰く、仲景の寒疝を治する羊肉湯は、服して奏效せぬものがない。ある婦人が冬期に產して寒が子戶に入り、腹下が痛んで按ずることも出來なかつた。これは寒疝である。醫は抵當湯を投じようとしたのであるが、予はその非なることを主張し、仲景の羊肉湯から水を減じて二服させるとそれで癒えた。

李杲曰く、羊肉は有形の物にして能く有形の肌肉の氣を補す。故に『補は弱を去るもので、人參、羊肉の屬である。人參は氣を補し、羊肉は形を補す。凡そ味の羊肉に同じきものはいづれも血虛を補するので、蓋し陽生ずれば陰が長ずるのだ』といつてある。

時珍曰く、按ずるに、開河記に『隋の大總管麻叔謀が風逆を病んで起坐不能であつたとき、煬帝は太醫令巢元方に命じてそれを診察させた。元方が視て「風が腠理に入つたので、病は胸臆にある。嫩く肥えた羊を蒸熟して藥を摻つて食はすべきもので、それで瘥える」といつたので、その言の通りにすると劑を盡さずして痊えた。それ以後毎に羊羔を殺して杏、酪、五味と共に日毎に數箇を食つた』とある。これで觀ると羊肉の補虛の功はますます證である。

附方　舊八、新十六。【羊肉湯】張仲景が寒勞虛羸、及び產後の心腹疝痛を治したものである。肥羊肉一斤を水一斗で汁八升に煮取り、當歸五兩、黃芪八兩、生薑六兩を入れて二升に煮取り、四回に分服する。胡治の方では黃芪がなく、千金方では芍藥がある。(金匱要畧)【產後の厥痛】胡治の大羊肉湯――婦人產後の大虛、心腹絞痛、厥逆を治す。羊肉一斤、當歸、芍藥、甘草各七錢半を用ゐ、水一斗で肉を煮て取つた汁七升に諸藥を入れ、二升に煮て服す。【產後の虛羸】腹痛、冷氣不調、及び腦中風で汗の自ら出るには、白羊肉一斤を切り、普通の如く調理して食ふ。(心鏡)【產後の帶下】產後中風の絕孕、帶下赤白には、羊肉二斤、香豉、大蒜三兩を水一斗で五升に煮取り、酥一升を納れて更に二升に煮て服す。(千金方)【崩中で垂死のもの】肥羊肉三斤、水二斗を一斗三升に煮て、生地黃一升、乾薑、當歸三兩を入れ、三升に煮て四回に分服する。(千金)【虛寒の補益】碎いた白石英三兩を精羊肉一斤で包み、その外部を荷葉で裹定し、一石の米に入れて蒸熟し、取出して石英を去り、葱、薑を和して小餛飩にし、毎日空腹に一百箇づつを冷漿水で呑む。甚だ補益する。(千金翼)【陽を壯にし、腎を益す】白羊肉半斤を切り、生で蒜、薤を用ゐて三日に一

回食ふ。甚だ妙である。(心鏡)【五勞、七傷】虛冷するには、肥羊肉一腿を密に蓋ふて煮爛し、汁を絞り取つて服し、幷に肉を食ふ。【骨蒸久冷】羊肉一斤、山藥一斤を各〻爛煮して泥のやうに研り、米を入れて粥に煮て食ふ。(飮膳正要)【骨蒸傳尸】羊肉を一拳大の量を煮熟し、皂莢一尺を炙き、無灰酒一升で銅鐺內に入れて煮て三五沸し、滓を去つて黑錫一兩を入れ、病人をして先づ肉の汁を啜らせてからそれを一合服す。馬尾のやうな蟲を吐いて效を擧げるものだ。(外臺)【虛寒瘧疾】羊肉で作つた臛餠を飽くまで食ひ、更に酒を飮んで暖臥し汗を取る。燕國公が嘗てこれで奏效した。(集驗方)【脾虛の吐食】羊肉半斤を生に作つて蒜、薤、醬、豉、五味を和拌し、空腹に食ふ。(心鏡)【虛冷反胃】羊肉を脂を去つて生に作り、蒜、薤で空腹に食ふ。立ろに效がある。(外臺)【胃を壯にし、脾を健にする】羊肉三斤を切り、粱米二升と共に煮て五味を下し、粥にして食ふ。(飮膳正要)【老人の膈痞】飮食の落付かぬには、羊肉四兩を切り、白麪六兩、橘皮末一分を薑汁で搜ぜ、普通の方法のやうに五味を入れ、每日一回、臛に作つて食ふ。大いに效がある。(多能鄙事)【胃寒下痢】羊肉一片、莨菪子末一兩を和し、綿で裹んで下部に納れる。二回で瘥える。(外臺方)

(二三)一脚ハ足一本分ノコトカ。

【身體、面部の浮腫】商陸一升、水二斗を一斗に煮取つて滓を去り、羊肉一斤を切つてそれに入れて煮熟し、葱、豉、五味を投じて臛の方法のやうに調理して食ふ。(肘後方)【腰痛、脚氣】木瓜湯――腰、膝痛、脚氣を治す。羊肉(二三)一脚、草果五箇、粳米二升、回回豆、卽ち胡豆半升、木瓜二斤の汁を取り、砂糖四兩、鹽少許を入れ、肉を煮て食ふ。(正要)【消渇の利水】羊肉一脚、瓠子六箇、薑汁半合、白麪二兩を鹽、葱と共に炒つて食ふ。(正要)【損傷の靑腫】新しい羊肉を貼る。(千金方)【婦人の乳無きもの】羊肉六兩、麞肉八兩、鼠肉五兩を臛にして啖ふ。(崔氏)【傷目靑腫】羊肉を煮熟して熨す。(聖惠方)【小兒の土を嗜み食ふもの】市中で羊肉一斤を買ひ、繩で縛り付けてその家まで地上を拽いて運び、それを洗淨し炒炙して食はす。或は煮汁もよし。(姚和衆)【頭上の白禿】羊肉を脯を作る方法のやうにして香しく炙き、熱して搨する。數回に過ぎずして瘥える。(肘後方)

頭、蹄　白羊のものが良し。[氣味]【甘し、平にして毒なし】大明曰く、涼なり。震亨曰く、羊頭、蹄肉の性は極めて水を補す。水腫の人がこれを食へば百に一も癒えない。

【主治】【風眩、瘦疾、小兒の驚癇】(蘇恭)【腦熱頭眩】(日華)【心を安じ、驚を止め、中を緩にし、汗を止め、胃を補し、男子の五勞骨熱を治す。熱病後に食ふがよし。冷病の人は多食してはならぬ】(孟詵) ○心鏡に『已上の諸證には、いづれも白羊頭を或は蒸し、或は煮、或は膾して食ふが宜し』とある。【腎虛精竭を療ず】

【附方】新三。【老人の風眩】白羊頭一具を普通のやうに調理して食ふ。【五勞、七傷】白羊の頭蹄一具を淨治し、更に稻草を烟に燒いて黃色になるまで薰じ、それを水で煮て半熟にし、胡椒、畢撥、乾薑各一兩、葱、豉各一升を納れ、再び煮て藥を去つて食ふ。一日一具づつ七日にして癒える。(千金)【虛寒の腰痛】羊頭蹄一具、草果四箇、桂一兩、薑半斤、(二四)哈昔泥を豆一粒ほどを胡椒で煮て食ふ。(正要)

皮【主治】【一切の風、及び脚中の虛風。虛勞を補す。毛を去つて羹、臛にして食ふ】(孟詵)【濕皮に臥せば打傷青腫を散ず。乾皮を燒いて服すれば蠱毒下血を治す】(時珍)

脂 青羊のものが良し。【氣味】【甘し、熱にして毒なし】丹房鑑源に『銀を柔くし、銅を軟くする』とある。【主治】【生脂は下痢脫肛を止め、風毒、產後の腹

(二四)哈昔泥ハ阿魏。

中絞痛を去る】(思邈)【鬼疰を治す】(蘇頌)○胡治方に、靑羊脂丸といふがある。【遊風、及び黑皯を去る】(日華)【熱脂は賊風、痿痺、飛尸に主效があり、溫氣を辟け、勞痢を止め、肌膚を潤ほし、蟲を殺し、瘡癬を治す。膏藥に入れば肌肉、經絡に透り、風熱毒氣に徹する】(時珍)

附方　新十三。【下痢腹痛】羊脂、阿膠、蠟各二兩、黍米二升を粥に煮て食ふ。(千金)【妊娠下痢】羊脂を棊子ほど十箇を溫酒一升で日に三回服す。(千金)【虛勞口乾】千金では、羊脂一雞子大、淳酒半升、棗七箇を七日間漬けて食ふ。立ろに癒える。○外臺では、羊脂雞子大を半升の酢中に一宿納れ、汁を絞つて含む。【卒汗の止まぬもの】牛、羊脂を溫酒に溶化して頻りに服す。(外臺)【脾横で爪の赤きもの】羊脂を煎じて摩る。(外臺)【産後の虛羸】人をして肥白、健壯ならしめる。羊脂二斤、生地黃汁一斗、薑汁五升、白蜜三升を飴のやうに煎じ、一盃づつを一日三回溫酒で服す。(小品)【婦人の陰脫】羊脂を煎じて頻りに塗る。(廣利方)【發背の初期】羊脂、豬脂を切片して冷水に浸して貼り、熱すれば易へる。數日にして瘥える。(外臺)【牙齒の疳䘌】黑羖羊脂、莨菪子等分を盃中に入れ、烟に燒いて口を張つて熏ずる。(千

金方）【小兒の口瘡】羊脂で薏苡根を煎じて塗る。（活幼心書）【豌豆の疥の如きもの】赤黒色なるには、青羊脂を煎じて摩る。（千金方）【赤丹の疥の如きもの】治せねば死に至る。青羊脂を摩れば數回で癒える。（集驗）【誤つて釘、鐵を呑みたるとき】豬、羊脂を多く食ふ。久しくすれば自ら出る。（肘後）

血　白羊のものが良し。【氣味】【鹹し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、夏子益の奇疾方に『凡そ豬、羊血を久しく食つて鼻中に毛が生じ、それが一晝夜に五寸も長くなり、漸次に繩のやうになつて忍び難く痛み、摘み去つても復た生ずるものは、ただ乳石、硇砂等分を丸にし、就寢時に十丸を服すれば自ら落ちる』とある。

【主治】【婦人の血虛中風、及び產後の血悶で絕せんとするには、一升を熱飲すれば活きる】（蘇恭）【一升を熱飲すれば、產後の血攻を治し、胎衣を下し、卒驚の九竅出血を治し、莽草の毒、胡蔓草の毒を解す。又、一切の丹石の毒發を解す】（時珍）記載は延壽の諸方にある。

【發明】時珍曰く、外臺に『凡そ丹石を服する人は羊血を食ふことを忌む。十

年服餌しても一回これを食へばそれまでの藥功が亡失する。この物は丹砂、水銀、輕粉、生銀、硇砂、砒霜、硫黃、乳石、鍾乳、空青、曾青、雲母石、陽起石、孔公孼等の毒を制する功能のあるもので、凡そ毒發なることを自覺した場合には、一升を刺し取つて飮めば直ちに解す。又、地黃、何首烏の諸補藥を服するものもまたこれを忌む』とある。嶺表異錄には、この物が胡蔓草の毒を解する功能のあることを言つてある。羊血のかやうな解毒の功用に就いて、本草にいづれも言及してないのは確かに缺典である。

附方　舊二、新五。

【衄血】一个月に亙つて止まぬには、羊血を刺し取つて熱飮すれば瘥える。(聖惠) 【產後の血攻】或は下血して止まず、心悶し、面青く、身冷えて絕せんとするには、新羊血一盞を飮む。二三服で妙である。(梅師) 【大便下血】羊血を煮熟して醋を拌ぜて食ふ。最も有效だ。(吳球便民食療) 【硫黃の毒發】氣悶するには、羊血一合を熱服すれば效がある。(聖惠方) 【菹を食ふとき蛭を呑んだもの】蛭が臟血を嗽つて腸痛し、黃瘦するものである。熱した羊血一二升を飮み、翌早朝豬脂一升を化して飮む。蛭はそれで下る。(肘後方) 【誤つて蜈蚣を呑みたるとき】豬、

羊血を刺して灌げば吐出する。昔、ある町家の婦が火吹竹を吹くとき、竹の中にゐた蜈蚣が腹に入つた。婦は地に仆れて號叫し、非常な恐怖狀態に陷つたが、道人劉復眞がこの法を用ゐて癒えた。（三元延壽書）【妊娠胎死】死胎が出ぬもの、及び胎衣が下らぬもの、產後の諸疾で狼狽するものには、羊血を刺し取つて一小盞を熱飲する。極めて效がある。（聖惠方）

乳　白羖のものが佳し。

氣味　【甘し、溫にして毒なし】

主治　【寒冷虛乏を補す】（別錄）【心、肺を潤ほし、消渴を治す】（甄權）【虛勞を療じ、精氣を益し、肺、腎の氣を補し、小腸の氣を和す。脂を合せて羹に作つて用ゐれば、腎虛、及び男、女の中風を補す】（張鼎）【大腸を利し、小兒の驚癇を治す。これを含めば口瘡を治す】（日華）【心の卒痛を治するにはこれを溫服するがよし。又、蚰蜒の耳に入りたるときは、これを灌げば化けて水となる】（孟詵）【大人の乾嘔、及び反胃、小兒の噦啘、及び舌腫を治す。いづれも時時にこれを溫服する】（時珍）【蜘蛛咬の毒を解す】頌曰く、劉禹錫の傳信方に『貞元十年、崔員外のいつたことだが、ある人が蜘蛛に咬まれ、腹が妊娠のやうに大きくなり、全身から絲が出た。その家ではそれを棄て

たので乞食(こじき)になつてゐたが、ある僧が羊乳を啖(す)はせると幾ばくもなくして疾が平癒したといふ』とある。

【發明】弘景曰く、牛、羊の乳は實に腎を補すものである。故に北方人はこれを食ふので多くは肥えて健(すこやか)だ。

恭曰く、北方人の肥えて健なるは鹹、腥(せい)のものを食はないからであつて、地方風土が然らしめるのだ。飲む乳に何の關係があらうか。陶氏は知識が十分でなかつたので屢〻かやうなことをいふ。

時珍曰く、地方風土と飲食物と兩(ふたつなが)ら相資(よ)るものだ。陶氏の說は固より偏してゐるが、蘇氏の說もやはり過(あやま)つてゐる。丹溪は、反胃(ほんゐ)の人は時時これを飲むがよしといつたが、それはその物の胃脘(ゐくわん)を開き、大腸の燥する點を取つたものだ。

【附方】舊一、新二。【小兒の口瘡】羊乳を少しづつ濾し入れて含む。數回にして癒える。(小品方)【漆瘡の痒きもの】羊乳を傅ける。(千金翼)【顏の黑きを白くする】白羊乳三升、羊胰(やうい)三副を和して搗き、毎夜洗淨してからこれを塗つて翌朝洗ひ去る。(總錄)

腦 〔氣味〕【毒あり】詵曰く、風病を發する。酒に和して服すれば、人の心を迷はせ、風疾と成る。男子がこれを食へば精氣を損じて子を少くする、白羊にして頭の黑いものの腦を食へば腸癰となる。

〔主治〕【面脂、手膏に入れれば皮膚を潤ほし、皯䵟を去る。損傷、丹瘤、肉刺に塗る】（時珍）

〔附方〕新二。【瘤の如き發丹】生綿羊腦と朴消とを共に研つて塗る。（瑞竹堂方）

【足指の肉刺】刺し破り、新酒酢で羊腦を和して塗る。一合で癒える。（古今錄驗）

髓 〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【男子、婦人の傷中、陰陽氣の不足。血脈を利し、經氣を益す。酒で服す】（別錄）【風熱を却け、毒を止める。久服しても人體を損ぜない】（孫思邈）【酒に和して服すれば、血を補し、婦人の血虛風悶に主效がある】（孟詵）【肺氣を潤し、皮毛を澤かにし、瘢痕を滅する】（時珍） 刪繁の肺虛の毛悴を治する酥髓湯中にこれを用ゐてある。

〔附方〕新五。【肺痿骨蒸】煉羊脂、煉羊髓各五兩を煎沸し、煉蜜、及び生地黃汁各五合、生薑汁一合を入れて手を休めず攪きまぜながら微火で熬つて膏にし、每

日空心に一匙づつを溫酒で調へて服す。或は粥に入れて食ふ。(飲膳正要)【目中の赤翳】白羊髓を傅ける。(千金)【舌上に生じた瘡】羊の脛骨中の髓に胡粉を和して塗るが妙である。(聖惠)【白禿頭瘡】生羊骨髓で輕粉を調へて搽る。豫め瘡を泔水で洗淨する。一日二回、數日にして癒える。(經驗方)【痘痂不落】痘瘡の痂疕を落さずして瘢を滅する方。羊閤骨髓を煉つて一兩、輕粉一錢を和して膏にして塗る。(陳文仲方)

心　已下いづれも白羝羊のものを用ゐるが良し。氣味【甘し、溫にして毒なし】日華曰く、孔あるものは人を殺す。主治【憂恚膈氣を止める】(別錄)【心を補す】(藏器)

附方　新一。【心氣鬱結】羊心一箇、咱夫蘭、卽ち回回紅花を浸した水一盞に鹽少量を入れて徐徐に心上に塗り、炙熱して食ふ。人をして心を安にし、多く喜ばしめるものである。(正要)

肺　氣味【心に同じ】詵曰く、三月から五月までは、その中に馬尾のやうな狀態で長さ二三寸の蟲がゐるから必ずこれを去らねばならぬ。去らねば人をして下痢せしめるものだ。

【主治】【肺を補し、欬嗽を止める】(別錄)【傷中に不足を補し、風邪を去る】(思邈)【渇を治し、小便數を止める。小豆葉と共に煮て食ふ】(蘇恭)【肺氣を通じ、小便を利し、水を行り、毒を解す】(時珍)

【附方】舊一、新六。【久嗽肺痿】燥を作すには、羊肺湯――羊肺一具を洗淨し、杏仁、柿霜、眞豆粉、眞酥各一兩、白蜜二兩を和匀してその肺中に灌ぎ、それを白水で煮て食ふ。(葛可久方)【欬嗽上氣】積年にして死に垂たるには、莨菪子を炒熟し、羊肺を切つて曝して等分を末にし、七月七日の醋を拌ぜ、毎夜二方寸匕を服して粥飲で飲下す。隔日に一服。(千金)【水腫尿短】靑羖羊肺一具を微し燥り、切り曝して末にし、莨菪子一升を三斗の醋に漬けて搗き爛し、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、食後に四丸を麥門冬飲で服す。小便が大いに利して佳し。(千金)【小便頻數】下焦の虛冷である。羊肺一具を切つて羹にし、少量の羊肉を入れ、鹽豉を和して食ふ。三具に過ぎずしてよし。(集驗方)【渇利の止まぬもの】羊肺一具に少し肉を入れ、鹽豉を和して羹にして食ふ。三具に過ぎずして癒える。(普濟方)【中蠱の解毒】生羊肺一具を割開し、雄黃、麝香等分を入れて呑む。(濟生方)【鼻中の瘜肉】羊肺湯――乾羊

肺一具、白朮一兩、肉蓯蓉、通草、乾薑、芎藭各二兩を末にし、食後に五兩を米飲で服す。(千金方)

腎　氣味　【心に同じ】　主治　【腎氣虛弱を補し、精髓を益す】(別錄)　【腎虛の耳聾、陰弱を補し、陽を壯にし、胃を益し、小便を止め、虛損盜汗を治す】(日華)　【脂を合せて作つた羹は勞痢を療ずるに甚だ效がある。蒜、薤でこれを一升食へば癥瘕を療ず】(蘇恭)　【腎虛、消渴を治す】(時珍)

發明　時珍曰く、千金、外臺、深師の諸方に、腎虛、勞損、消渴、脚氣を治する腎瀝湯といふがあり、方は甚だ多いが、いづれも羊腎の煮湯を用ゐて藥を煎ずるのである。蓋しこの物を用ゐて嚮導の作用をなさしめる爲めで、各その類に從ふたものである。

附方　舊二、新六。【下焦の虛冷】脚膝に力無く、陽事不能なるには、羊腎一箇を煮熟し、米粉六兩を和して錬つて乳粉にし、空腹に食ふが妙である。(心鏡)　【腎虛で精の竭きたるもの】羊腎一雙を切つて豉汁の中に入れ、五味、米糅を用ゐて羹粥にして食ふ。(心鏡)　【五勞、七傷】陽虛無力には、經驗では、羊腎一對を脂を去つて

切り、肉蓯蓉一兩を一夜酒に浸して皮を去り、和して羹にして葱、鹽、五味を下して食ふ。○正要では、陽氣衰敗で腰脚疼痛するもの、五勞、七傷を治す。羊腎三對、羊肉半斤、葱白一莖、枸杞葉一斤を用ゐ、五味と共に煮た汁に米を入れて粥にして食ふ。【虛損勞傷】羊腎一箇、米一升、水一斗を九升に煮て一日三回服す。(肘後方)【腎虛の腰痛】千金では、羊腎を膜を去つて陰乾して末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。○正要では、腰の卒痛を治す。羊腎一對に咱夫蘭一錢を水一盞に浸した汁に鹽少量を入れたものを塗抹し、徐徐に炙熟して空腹にそれを食ふ。【老人の腎硬】老人の腎藏虛寒、內腎結硬で、補藥を服して見ても入らぬものを治す。羊腎子一對、杜仲の長さ二寸、濶さ一寸のもの一片を共に煮熟して空心に食ふ。人の內腎を柔軟ならしめるものだ。然る後に補藥を服す。(雞峯備急方)【腸を破つて腸の出た場合】香油を手に抹して送入し、人參、枸杞子の煎汁を溫淋し、羊腎粥を十日間喫へば癒える。(危氏)

羊石子 卽ち羊の外腎である。 主治 【腎虛精滑】(時珍) 本事方の金鎖丹にこれを用ゐてある。

肝　青羖羊のものが良し。

氣味　【苦し、寒にして毒なし】頌曰く、溫なり。弘景曰く、豬肉、及び梅子、小豆と食合せれば人の心を傷める。思邈曰く、生椒と食合せれば人の五臟を傷め、最も小兒を損ずる。苦筍と食合せれば青盲を病む。妊婦がこれを食へば生れる子をして厄多からしめる。

主治　【肝を補し、肝風虛熱、目赤暗痛、熱病後の失明を治す。いづれも子肝七箇を用ゐ、生に作つて食ふが神效がある。また切片して水に浸して貼る】（蘇恭）

【蠱毒を解す】（吳瑞）

發明　時珍曰く、按ずるに、倪維德の原機啓微集に『羊肝の肝を補するは、肝と合して肝の經に引入するのである。故に專ら肝の經に邪を受けた病を治するのだ。現に羊肝丸の目を治するに有效なるに徵すべきである』といつてある。

汪機曰く、按ずるに、三元延壽書に『凡そ目疾を治するには、青羊肝を用ゐるを佳しとする。ある人は八十餘歲であつたが、瞳子が瞭然として夜間細字を讀んだ。その人のいふところに據ると「別に服藥したわけではない。ただ幼少の時から畜類、獸類の肝を食はなかつただけだ」といつた。或る者は、本草に羊肝は目を明にする

(二五)大觀ニ膜上ニ脂字アリ。

とあるところからその話を疑問としたが、蓋し羊肝の目を明にするのはその性であつて、他の肝ではさうでないのだ。凡そ畜類、獸類は屠殺に遭ふ刹那に忿氣が肝に聚るものである。肝の血が目に利せぬはさもあるべきことだ』とある。

附方 舊四、新十一。

【目赤熱痛】物を看るに紗を隔てたやうなるは、肝を補し、精を益すべきものである。青羊肝一具を切つて洗ひ、五味を和して食ふ。(心鏡)【肝虛目赤】青羊肝を薄く切り、水に浸して呑むが極めて有效である。(龍木論)【病後の失明】方は上に同じ。【小兒の赤眼】羊肝を薄く切片し、井水に浸して貼る。(普濟)【翳膜羞明】淚の出るは肝の經に熱があるためである。青羊子肝一具を竹刀で切り、黃連四兩を和して梧子大の丸にし、一日三回、食事と時間を遠く隔てて七十丸を茶湯で服す。鐵器、豬肉、冷水を忌む。(醫鏡)【目病で䀮䀮たるもの】銅器で青羊肝を煮てその器の上を麪餠で覆ひ、その餠に人の眼ほどの孔二箇を鑽り明け、その上に目を向けて熏ずる。三回に過ぎぬものだ。(千金方)【目病失明】青羖羊肝一斤を(二五)膜を去つて切片し、新しい瓦器に入れて炕り乾し、決明子半升、蓼子一合と共に炒つて末にし、一日三回、方寸匕を白蜜漿で服す。三劑に過ぎずして目が明に

なり、一年に達すれば能く夜間文字を見得る。（食療）【遠視不能】羊肝一具を膜を去つて細切し、葱子一勺を入れて炒つて末にし、水で煮熟して滓を去り、米を入れて粥に煮て食ふ。（多能鄙事）【青盲內障】白羊子肝一具、黃連一兩、熟地黃二兩を共に搗いて梧子大の丸にし、一日三回、七十丸づつを食事に時間を隔てて茶で服す。崔承元が內障を病んで失明したとき、ある人がこの方を惠んで德に報い、それを服して遂に視力を回復した。（傳信方）【牙疳腫痛】羯羊肝一具を煮熟し、赤石脂末を蘸けて任意に食ふ。（醫林集要）【虛損勞瘦】新豬脂を煎じて一升を取り、葱白一握を入れて黃に煎じて早朝に服し、三日間それを服してから、枸杞一斤、水三斗の煮汁に羊肝一具、羊脊膂肉一條、麴末半斤を入れ、葱、豉を添へて羹に作つて食ふ。（千金方）【病後の嘔逆】天行病後に、嘔逆して食へば直ちに反出するには、青羊肝を生に作つて淡食する。三回に過ぎずして食つたものが出なくなる。（外臺）【休息痢疾】五十日以上一二年瘥えず、變じて疳となり、泔淀の如きものを下すには、生羊肝一具を絲に切り、三年の醋の中に入れて呑む。心悶するときは止め、悶せぬときは更に服す。一日間物を食つてはならぬ。或は薑、薤と共に食ふもよし。二三具以上用ゐる要な

し。(外臺)【小兒の癇疾】青羊肝一具を薄く切つて水で洗ひ、五味、醬を和して食ふ。

【婦人の陰䘌】痒さには、羊肝を納れて蟲を引く。(集簡方)

膽　青羖羊のものが良し。〔氣味〕【苦し、寒にして毒なし】〔主治〕【青盲、目を明にする】(別錄)【赤障、白翳、風涙眼に點ける。蠱毒を解す】(甄權)【疳濕、時行熱、熛瘡を療ず。醋と和して服するが良し】(蘇恭)【諸瘡を治し、能く身體の血脈を生かす】(思邈)【蜜と共に九回蒸して赤風眼に點けるが有効である】(朱震亨)

〔發明〕時珍曰く、肝は目に竅を開くもので、膽汁が減ずれば目が暗くなる。目なるものは肝の外候、膽の精華である。故に諸膽いづれも目病を治するのだ。夷堅志に記載してある二百味草花膏は、爛弦風赤眼で涙が流れて光に近けぬもの、及び一切の暴赤目疾を治するもので、羖羊膽一箇の中に蜂蜜を入れて蒸し、乾くを待つて硏つて膏にし、少量づつを含み、竝に點ける。一日にして涙が止まり、二日にして腫が消き、三日にして病が定まる。蓋し羊は百草を食ひ、蜂は百花を採るものだから二百花草なる名稱があるのだ。又、張三丰眞人の碧雲膏は、臘月に羖羊膽十餘箇を取つて蜜を裝滿し、紙で套籠して簷下に懸け、霜の出るを待つて掃き下して

點ける。神效のあるものだ。

附方　舊三、新四。【病後の失明】日に二回羊膽を點ける。（肘後）【大便祕塞】羊膽汁を灌入すれば通じる。（千金）【物で目を傷めた場合】羊膽二箇、雞膽三箇、鯉魚膽二箇を和勻して日毎に點ける。（聖惠方）【顏面の黑皯皰】羖羊膽、牛膽各一箇を淳酒三升で煮て三沸し、每夜塗る。（肘後）【產婦の面皯】產婦の顏が雀卵のやうな色になりたるには、羊膽、豬胰、細辛等分を煎じて三沸し、夜塗つて翌朝漿水で洗ふ。（錄驗）【代指の痛むもの】崔氏は『代指といふは五臟の熱注で起るものだ。熱湯中に七回刺し込み、冷水中に三回刺し込んでから、羊膽を塗る。立ろに癒えて甚だ有效だ』といつた。（外臺方）【小兒の疳瘡】羊膽二箇を醬汁に和して下部に灌ぐ。（外臺）

胃　一名羊膍胵。　**氣味**　【甘し、溫にして毒なし】　思邈曰く、羊肚を飯、飲に和して久しく食へば、人をして多く淸水を唾せしめ、反胃となり、噎病を作す。

主治　【胃反。虛汗を止め、虛羸を治す。小便數は、羹にして三五回食へば瘥える】（孟詵）

附方　舊一、新六。【久病虛羸】肌肉が生ぜず、水氣が脇下に在つて飲食不能

となり、四肢煩熱するものには、羊胃一箇、白朮一升を切り、水二斗で九升に煮取り、一日三回、九回に分服する。三劑に過ぎずして瘥える。(張文仲方) 【中を補し、氣を益す】羊肚一箇の中に羊腎四箇、地黄三兩、乾薑、昆布、地骨皮各二兩、白朮、桂心、人參、厚朴、海藻各一兩五錢、甘草、秦椒各六錢を末にして入れて縫合し、蒸熟し搗き爛して晒して末にし、方寸匕を酒で服す。(千金) 【中風虛弱】羊肚一具、粳米二合に椒、薑、豉、葱を和して羹にして食ふ。(正要) 【胃虛消渴】羊肚を爛煮して空腹に食ふ。(古今錄驗) 【下虛の尿牀】羊肚を水に入れて煮熟し、空腹に食ふ。四五頓で瘥える。(千金) 【項下の瘰癧】羊脺脛を灰に燒いて香油で調へて敷く。【蛇傷の手腫】剝取したばかりの糞の入つたままの羊肚一箇に一箇の口を割き穿ち、それに手を入れて浸す。痛が止み、腫が消く。(集要)

脬 主治 【下虛遺尿には、水を盛り入れて炙熟し、空腹に食ふ。四五回で癒える】(孫思邈)

胰 白羊のものが良し。主治 【肺燥の諸瘡瘍を潤ほす。面脂に入れば鼾黯を去り、肌膚を澤かにし、瘢痕を滅する】(時珍)

附方　新三。【遠年の欬嗽】羊胰三具、大棗百箇を酒五升に七日間漬けて飲む。(肘後方)【婦人帶下】羊胰一具を酢で洗淨して空心に食ふ。三回に過ぎず。魚肉、滑するものを忌む。犯せば死亡する。(外臺)【痃癖瘢痕】羊胰二具、羊乳一升、甘草末二兩を和勻して塗り、翌早朝豬蹄湯で洗ひ去る。(千金)

舌　主治　【中を補し、氣を益す】正要では、羊舌二枚、羊皮二具、羊腎四箇を蘑菰、糟薑と羹にし、肉汁で食ふ。

靨　即ち會咽である。氣味　【甘く淡し、溫にして毒なし】主治　【氣癭】(時珍)

發明　時珍曰く、按ずるに、古今に癭を治するに多く豬、羊の靨を用ゐてある。やはりその類に從つて效果を期待する意味であつた。故に王荊公の癭の詩に『內療煩羊靨』の句がある。しかし、癭には氣、血、肉、筋、石の五種あつて、かの靨は肺に屬し、肺は氣を司るものだから、氣癭の證はこれを服すれば或は奏效するだらうが、他の癭では恐らくやはり效力が少いであらう。

附方　舊一、新二。【項下の氣癭】外臺では、羊靨一具を脂を去り、酒に浸し

て炙熟し、それを含んで汁を嚥む。一日一具づつ七日にして瘥える。○千金では、羊靨七箇を陰乾し、海藻、乾薑各二兩、桂心、昆布、逆流水邊の柳髮各一兩と末にし、蜜で芡子大の丸にし、一丸づつを含んで津を嚥む。○雜病治例では、羊靨、豬靨各二箇を用ゐ、昆布、海藻、海帶各二錢を洗つて焙じ、牛旁子を炒つて四錢を末にし、右の二靨と搗き和して彈子大の丸にし、一丸づつを含み化して汁を嚥む。

睛　[主治]　【目赤、及び翳膜には、曝乾して末にして點ける】（時珍）　記載は千金にある。【熟羊眼中の白珠二箇を細石上で棗核と和し磨り、その汁を目翳羞明に點ける。三四日間頻に用ゐれば瘥える】（孟詵）

[發明]　時珍曰く、羊の眼には瞳がない。その睛が目を治しさうにも思はれぬが、その神は内に藏されてあるといふのかも知れぬ。

筋　[主治]　【塵物の目に入りたるには、よく嚼んで眥中に納れて仰臥すれば出る】（千金翼）

羖羊角　青色のものが良し。[氣味]　【鹹し、溫にして毒なし】　別錄に曰く、苦し、微寒なり。取るに一定の時期はない。濕に中らしめてはならぬ。濕へば有毒

(二六)縮トハ不純物、夾雜物ヲ排除シ、凝收スルノ意ナラン。(二七)賀州ハ鱗部龍類蚺蛇ノ註ヲ見ヨ。

である。甄權曰く。大寒なり。○兎絲が使となる。鑑源に『羖羊角灰は賀を(二六)縮する』とある。賀とは錫のことで、(二七)賀州に産するから賀といふのだ。

主治　【青盲に目を明にし、驚悸、寒洩を止める。久しく服すれば心を安じ、氣を益し、身を輕くする。疥蟲を殺す。山に入つてこれを燒けば惡鬼、虎狼を辟ける】(本經)【百節中の結氣、風頭痛、及び蠱毒吐血、婦人産後の餘痛を療ず】(別錄)【これを燒けば蛇を辟け、灰は漏下を治す。熱を退け、山障、溪毒に主效がある】(日華)

附方　舊三、新七。【風疾で恍惚たるもの】心煩し、腹痛し、或は時に悶絕してまた甦るものには、青羖羊角屑を微し炒つて末にし、時に拘らず一錢を溫酒で服す。(聖惠)【氣逆煩滿】水羊角を燒いて研り、方寸匕を水で服す。(普濟方)【吐血喘欬】青羖羊角を炙き焦して二箇、桂末二兩を末にし、一日三回、一匕づつを糯米飲で服す。(同上)【産後の寒熱】心悶し、極脹するあらゆる病。羖羊角を燒いて末にし、方寸匕を酒で服す。(子母祕錄)【水洩の相當長期に亙るもの】羖羊角一箇に白礬末を塡滿して燒いて性を存して末にし、二錢づつを新汲水で服す。(聖惠方)【小兒の癇疾】羖羊角を燒いて性を存し、酒で少量を服す。(普濟)【赤禿で髮の落ちるもの】羖羊角、

(二八)鋌ハ鐵ヲ云フ。
(二九)赤山之精ノ精ハ鐵精ヲ云フ。
(三〇)鏟ハ鑱ノ誤、アラカネ。

牛角を灰に燒き、等分を豬脂で調へて敷く。(普濟)【赤疵瘰子】身體、面部に卒に赤疵が生じ、或は瘰子が腫起するものは治療せねば生命に關する。羖羊角を灰に燒き、雞子淸で和して塗るが甚だ妙である。(肘後)【打撲傷痛】羊角灰に沙糖水を拌ぜて瓦で焙じ焦して末にし、二錢づつを熱酒で服し、同時に痛處を揉む。(簡便)【脚氣疼痛】羊角一副を燒いて末にし、熱酒で調へて塗つて帛で裹み、汗を取る。永く發せない。

齒 三月三日に取る。[氣味]【溫なり】[主治]【小兒の羊癇寒熱】(別錄)

頭骨 已下いづれも羖羊のものを用ゐるが良し。[氣味]【甘し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、張景陽の七命に『耶溪の(二八)鋌、(二九)赤山の精は消するに羊骨を以てし、(三〇)鏟するに鍛成を以てす』とあり、註に『羊頭骨は能く鐵を消かす』とある。[主治]【風眩、瘦疾、小兒の驚癇】(蘇恭)

脊骨 [氣味]【甘し、熱にして毒なし】[主治]【虛勞、寒中の羸瘦】(別錄)【腎虛を補し、督脈を通じ、腰痛、下痢を治す】(時珍)

[附方] 舊一、新八。【老人の胃弱】羊脊骨一具を槌き碎き、水五升で汁二升に煎じ取り、靑粱米四合を入れ、粥に煮て常に食ふ。(食治方)【老人の虛弱】白羊脊骨

一具を剉砕して水で煮て汁を取り、枸杞根を剉んで一斗、水五斗で一斗五升に煮取つた汁を合せ、骨と共に煮て五升までになつたとき骨を去つて瓷盒に盛り、一合づつに温酒一盞を和して調へて服す。(多能鄙事)【腎虚腰痛】心鏡では、羊脊骨一具を槌き砕き、煮て蒜、薤を和して食ふ。少量の酒を飲むが妙である。〇正要では、羊脊骨一具を槌き砕き、肉蓯蓉一兩、草果五箇と水で煮た汁に葱、醤を入れて羹にして食ふ。【腎虚耳聾】羖羊脊骨一具を炙いて研り、磁石を七回煅いて七回醋に淬し、白朮、黄芪、乾薑を炮き、白茯苓一兩、桂三分と末にし、五錢づつを水で煎じて服す。(普濟)【虚勞白濁】羊骨を末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。(千金)【小便膏淋】羊骨を焼いて研り、楡白皮の煎湯で二錢を服す。(聖惠方)【洞注下痢】羊骨灰方寸匕を水で服す。(千金方)【疳瘡の漏と成りたるもの】膿水の止まぬには、羊羔兒骨を鹽泥で固濟して煅き、研末して五錢に麝香、雄黄末各一錢を入れ、それで瘡口を填める。三日にして外部が必ず合する。(總微論)

尾骨　主治　【腎を益し、目を明にし、下焦の虚冷を補す】(正要)

附方　新一。【虚損の昏、聾】大羊尾骨一條を水五碗で半分に煮減らし、葱白

五莖、荊芥一握、陳皮一兩、麪三兩を入れて煮熟して汁を取り、麪を搜ぜて索餅にし、羊肉四兩と共に煮熟し、五味を和して食ふ。(多能鄙事)

脛骨　音は行(カウ)である。䯒とも書く。また䯗骨と名け、胡人は頗兒必と呼ぶ。藥に入れるには煆いて性を存して用ゐる。**氣味**【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、性熱である。宿熱ある人は食つてはならぬ。○鑑源には『羊䯗骨は硇を伏す』とある。

主治【虛冷勞】(孟詵)【脾弱、腎虛で攝精不能のもの、白濁。濕熱を除き、腰脚を健にし、牙齒を固くし、䵟䵴を去り、誤つて銅錢を呑みたるを治す】(時珍)

發明　杲曰く、齒は骨の餘、腎の標である。故に牙疼に羊脛骨を用ゐるは補するためである。

時珍曰く、羊脛骨灰は鏡を磨くに用ゐられ、羊頭骨は鐵を消かすに用ゐられる。故に誤つて銅、鐵を呑んだ場合にこれを用ゐるは、その相制する關係を應用するのだ。按ずるに、張景陽の七命に『耶溪の鋌、赤山の精、消するに羊骨を以てし、鏕するに鍛成を以てす』といひ、註に『羊頭骨は能く鐵を消かす』とある。又、名醫

錄に『(三一)漢上の張成忠の娘が七八歲の時、誤つて金環子一雙を呑み、胸膈が忍び難く痛んで非常に憂懼したが、ある銀細工職人が炒末した藥三錢を米飮で服ませると、翌朝大便から取り下した。その方を懇望したところ、それは羊脛灰の一物のみだつた』とある。談野翁にもこの方があつた。いづれも明敏な叡智に依る理論と經驗との到達し得る妙處である。

附方 新十一。【牙に擦り、齒を固くする】食鑑では、火で煅いた羊脛骨を末にし、飛鹽二錢を入れ、共に研勻して日日に用ゐる。○又ある方では、白羊脛骨灰一兩、升麻一兩、黃連五錢を末にして日日に用ゐる。○瀕湖方では、羊脛骨を燒き、香附子を黑燒にして各一兩、靑鹽を煅き、生地黃を黑く燒いて各五錢を研つて用ゐる。【濕熱牙疼】羊脛骨灰二錢、白芷、當歸、牙皂、靑鹽各一錢を末にして擦る。(東垣方)【脾虛の白濁】過慮のために脾を傷め、脾が精を攝することが不能となつたためにこの疾となる。羊脛骨灰一兩、薑制の厚朴末二兩を麪糊で梧子大の丸にし、一日二回、百丸づつを米飮で服す。一には茯苓一兩半を加へる。(濟生方)【虛勞瘦弱】(三二)頴兒必四十箇を水一升で煮つて大半を減じ、滓、及び油を去り、凝るを待つて任

(三一)漢上、未詳。

(三二)頴兒必ハ脛骨ノ胡人方言。

意に食ふ。(正要)【筋骨攣痛】羊脛骨を酒に浸して服す。【月水の斷えぬもの】羊の前左脚脛骨一條を紙で裹んで泥で封じ、乾してから赤く煅き、棕櫚灰等分を入れ、一錢づつを温酒で服す。【䵟黯醜陋】人の顔面、身體が黧黑で皮が厚く、狀貌の醜きを治す。羖羊脛骨を末にし、雞子白で和して敷き、翌朝白粱米泔で洗ふ。三日にして素のやうになり、神效がある。(肘後)【誤つて銅錢を呑みたるとき】羊脛骨を灰に燒き、稀く煮た粥で食ふ。神效がある。(談埜翁方)【咽喉骨硬】羊脛骨灰一錢を米飮で服す。(聖惠)

懸蹄

毛 主治 【轉筋には醋で煮て脚を裹む】(孟詵) 又、氈の項を見よ。

鬚 羖羊のものが良し。主治 【小兒の口瘡、蠼螋尿瘡には、灰に燒いて油で和して敷く】(時珍) 記載は廣濟にある。

附方 新二。【香瓣瘡】顔面、耳邊に生じ、浸淫して水を出し、久しく癒えぬには、羖羊鬚、荊芥、乾棗肉各二錢を燒いて性を存し、輕粉半錢を入れ、瘡を洗拭してから清油で調へて搽る。二三回で必ず癒える。(聖惠方)【口吻瘡】方は上に同じ。

溺　［主治］【傷寒熱毒が手、足を攻め、腫痛して斷れんとするには、一升に鹽豉を和し、搗いて漬ける】(李時珍)

屎　青羖羊のものが良し。［氣味］【苦し、平にして毒なし】時珍曰く、粉霜を制す。

［主治］【燔けば小兒の洩痢、腸鳴、驚癇に主效がある】(別錄)【燒灰は聤耳を理す。幷に竹刺の肉に入りたるを罯ひ、箭鏃の出ざるを治す】(日華)【燒灰の淋汁で頭を沐すれば、十回に過ぎずして髮が生え、長く黑くなる。雁肪と和して頭に塗るも良し】(藏器)　○頌曰く、屎を鯽魚の腹中に納れて瓦缶で固濟し、灰に燒いて髮に塗れば生え易くして黑くなり、甚だ效がある。【湯に煮て下部に灌げば、大人、小兒の腹中の諸疾、疳熱、大、小便不通を治す。烟に燒いて鼻を熏ずれば、中惡の心腹刺痛を治す。また諸瘡中毒、痔瘻等を熏ずる。骨蒸を治するにいよいよ良し】(蘇恭)

［附方］　舊五、新十六。【疳痢で死せんとするもの】新羊屎一升を水一升に一夜漬けて汁を絞つて頓服する。正午には物を食ふやうになる。極めて重きものも三服に過ぎない。(總錄)【嘔逆酸水】羊屎十箇、酒二合を一合に煎じて頓服する。なほ定

らぬときは更に服す。(兵部手集)【反胃嘔食】羊糞五錢、童尿一大盞を六分に煎じ、滓を去つて三回に分服する。(聖惠)【小兒の流涎】白羊屎を頻に口中に納れる。(千金)【心氣疼痛】發病後經過の長短を問はず、山羊糞七箇、油頭髮一團の燒灰を酒で服す。永く根を斷つ。(孫氏集效方)【妊娠熱病】靑羊屎を研り爛して臍に塗る。それで胎氣を安ずる。(外臺祕要)【傷寒肢痛】手、足が脫けんとするほど疼くには、羊屎の煮汁を取つて漬け、瘥えれば止める。或は豬膏で和して塗るも佳し。(外臺)【時疾陰腫】囊も莖も熱腫するには、羊屎、黃蘗の煮汁で洗ふ。(外臺)【疔瘡惡腫】靑羊屎一升を水二升に少時漬け、煮沸して汁を絞り、一升を頓服する。(廣濟方)【裏外臁瘡】羊屎を燒いて性を存して研末し、輕粉を入れて塗る。(集要)【痘風瘡證】羊屎の燒灰を淸油で調へて敷く。(全幼心鑑)【小兒の頭瘡】羊糞の煎湯で洗淨してから、羊糞の燒灰と屋上懸煤とを淸油で調へて塗る。(普濟)【頭風白屑】烏羊糞の煎汁で洗ふ。(聖惠)【髮毛の黃赤】羊屎の燒灰を臘豬脂で和し、晝三回、夜一回塗る。黑くなれば止める。(聖惠方)【木刺の肉に入りたるとき】乾羊屎の燒灰を豬脂で和して塗る。それと氣付かぬ間に自ら出る。(千金)【箭鏃の肉に入りたるとき】方は上に同じ。【反花惡

瘡】鯽魚一尾の腸を去つて羯羊屎を塡滿し、燒いて性を存し、先づ米泔で洗つてから搽る。【瘰癧の已に破れたるもの】羊屎を燒いて五錢、杏仁を燒いて五錢を研末し、豬骨髓で調へて搽る。(海上)【濕瘡浸淫】新羊屎の絞汁を塗り、乾いたものを烟に燒いて熏ずる。(聖濟總錄)【雷頭風病】羊屎を焙じて研り、二錢を酒で服す。(普濟方)【慢脾驚風】活脾散——羊屎二十一箇を炮き、丁香一百粒、胡椒五十粒と末にし、半錢づつを、六年間東方から日光に照らされた壁土の煎湯で調へて服す。(聖濟錄)

羊胲子　乃ち羊の腹中に在る草の積塊である。【主治】【翻胃には、煆いて性を存し、毎一斤に棗肉、平胃散末一半を入れて和勻し、一錢づつを空心に沸湯で調へて服す】(葉氏摘玄)

黃羊(綱目)

和名　きすぢばらのひつじ
學名　Antilope (Gazella) gutturosa, Pallas.
科名　牛科

【釋名】 **羳羊**　音は煩(ハン)である。**蠒耳羊**　時珍曰く、羊にして腹が黃を帶びてゐるからかく名けたのだ。或は幼稚なるを黃といふので、この羊は肥つて小さい

（一）關西ハ禽部水禽類鶬雞ノ註ヲ見ヨ。
（二）桂林ハ金部粉錫ノ註ヲ見ヨ。
（三）臨洮ハ石部鹵石類硇砂ノ註ヲ見ヨ。

から名けたのだともいふ。爾雅にこれを羳といつたのは西番に産するからである。その耳が甚だ小さいので、西方の地ではこれを䵝耳（けんじ）といふ。

集解　時珍曰く、黃羊は（一）關西、西番、及び（二）桂林の諸處に産し、四種あつて、形狀は羊と同じであるが、ただ低く小さく、肋が細く、腹下が黃色を帶び、角は羖羊に似て、喜（この）んで沙地に臥す。沙漠に生じ、能く走り、善く臥し、獨居して尾の黒いものをば黒尾黃羊と名ける。野草中に生じ、或は數十頭まで羣居するものをば黃羊と名ける。（三）臨洮（りんてう）の諸處に産し、甚だ大きくして尾が麞鹿（しやうろく）に似たものをば洮羊と名ける。その皮はいづれも衾褥（きんじよく）になる。南方の桂林に産するものは深褐色で、脊が黒くして白斑があり、鹿に近似してゐる。



〔黃　羊〕

肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】正要に『湯に煮て味が少い、腦は食つてはならぬ』とある。主治　【中を補し、氣を益し、勞傷、虛寒を治す】（時珍）

髓　主治　【補益の功は羊髓に同じ】（正要）

本草綱目獸部第五十卷上　終

本草綱目獸部 第五十卷 下

獸の一

牛（本經中品）

和名　うし
學名　Bos taurus, Linne.
科名　うし科

校正　別錄上品の牛乳、拾遺の犢臍屎を此には一條に併記した。

釋名　時珍曰く、按ずるに、許愼は『牛は件である。牛を大牲といふ。以て(一)件事分理すべきである。その文字は角と頭との三の封きものと尾との形を象したものだ』といつた。周禮にはこれを大牢といつてある。牢とは畜を養ふ室のことで、牛の牢は大きく、羊の牢は小さい。故にいづれもその牢の名を呼ぶのである。內則にはこれを一元大武といふ。元は頭の意味、武は足跡の意味だ。牛は肥えれば迹の大なるもので、史記に牛を稱して四蹄といひ、今一般に牛を稱して一頭といふやうな意味である。梵書にはこれを瞿摩帝といつてある。

（一）件事分理、段註說文ニ『事トハ能ク事ヲ事トスルヲ謂フ。牛ハ耕ニ任ズルナリ。理トハ其ノ文理分析ス可キヲ謂フ。庖丁牛ヲ解クニハ天理ニ依ル』トアリ。

牛の牡をば牯といひ、特といひ、犅といひ、犒といひ、牝をば𤛛といひ、牸といひ、南牛を牾といひ、北牛を榛といひ、純色のものを犧といひ、黒きを犥といひ、また白きを㹁といひ、赤きを𤙭といひ、駁なるを犂といひ、去勢せるを犍といひ、また牿といひ、角なきを犝といひ、子を犢といひ、生れて二歳なるを㸬といひ、三歳なるを犙といひ、四歳なるを牭といひ、五歳なるを㸳といひ、六歳なるを犕といふ。

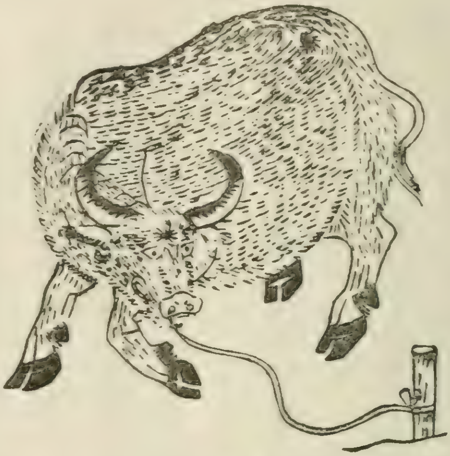
集解　藏器曰く、牛には數種あつて、本經には黄牛、烏牛、水牛を言はず、ただ牛とだけ言つてあるが、南方の地では水牛を牛といひ、北方の地では黄牛、烏牛を牛といふ。牛は種類が既にかやうに異ふのだから、その用途も當然區別されねばならぬわけだ。

時珍曰く、牛には榛牛、水牛の二種あつて、榛牛は小さいが水牛は大きく、榛牛には黄、黒、赤、白、駁雜の數色があり、水牛は色が青蒼で腹が大きく、頭が鋭り、その狀態が豬に類し、角は矛を擔つたやうで、能く虎と鬪ふ。やはり白色のものもある。(二)鬱林地方ではこれを州留牛といふ。又、(三)廣南にある稷牛といふは、卽ち果下牛のことで、形が最も卑く小さい。爾雅に犤牛といひ、王會篇に紈牛といつてある

(二) 鬱林ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。
(三) 廣南ハ廣州以南。

はこの牛だ。

牛は齒が下にあつて上になく、その齒の數から考へるとその年が判るもので、三歳には二齒、四歳には四齒、五歳には六齒となり、六歳以後には每年脊骨の節が一づつ換つて行く。牛の耳は聾(ろう)であつて、音を聽くには鼻で聽く。牛の瞳は竪について橫でない。その鳴聲は牟(ムー)といふ。項の垂れた部分を胡といひ、蹄肉を衛といひ、(四)百葉を膍(ひ)といひ、(三)角胎を鰓(さい)といひ、鼻木を桊といひ、嚼んで復た出した草を齝(ち)といひ、腹中でまだ消化せぬ草を聖齏(せいせい)といふ。



(牛)
──水牛は大きい──

牛は畜に在つては土に屬し、卦に在つては坤(こん)に屬し、土は緩にして和なるものだからその性が順である。造化權輿に『乾陽を馬となし、坤陰を牛となす。故に馬蹄

(四)百葉ハ牛羊ノ胃。
(三)角胎ハフクロヅノ。

は圓く、牛跡は拆けてゐる。馬が病めば臥すは陰が勝つためであり、牛が病めば立つは陽が勝つためである。馬が起つに前足を先にし、臥すには後足を先にするは陽に從ふのであり、牛が起つに後足を先にし、臥すには前足を先にするは陰に從ふのである。乾は健、坤は順だからといふことのみを根據として說をなすは、蓋しその一面を知るだけのことだ』とある。

黃牛肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】

弘景曰く、犍牛だけが勝れたもので、青牛を良しとする。水牛はただ食料に供するだけのものである。

日華曰く、黃牛肉には微毒がある。これを食へば藥毒を發するが、病を動ずる點では水牛ほどでない。

詵曰く、黃牛は病を動ずる。黑牛は就中食つてはならぬ。牛なるものは耕作上の資をなすものだから多く殺してはならぬ。牛の死したものの場合、血脈が已に絕え、骨髓が已に竭きたものは食つてはならぬ。

藏器曰く、牛の病死したものは痼疾、痃癖を發し、人をして洞下し、疰病とならぬ

（六）瘡ハ惡臭也。

（七）大觀ニ惡上ニ咬人ノ二字アリ。

しめる。黒牛にして頭の白いものは食つてはならぬ。獨肝のものには大毒があつて、人をして痢血して死に至らしめる。北方の地では牛が痩せると多く鼻から蛇を灌ぐので獨肝になるのだが、水牛にはそれがない。

時珍曰く、張仲景が『牛が蛇を啖へば毛髮が白くなつて後に順になる』といつたものはそれであつて、その毒に中つた場合はただ人乳を以て解し得るものだ。內則には『牛の夜鳴くものならば（六）瘡臭があつて食はれない。病死したものには大毒があつて、人をして疔を生じ、暴かに死亡せしめる』とあり、食經には『牛の自死した白首のものを食へば人を殺す。疥牛を食へば痒を發する。黄牛、水牛の肉を豬肉、及び黍米酒と合せて食へば、いづれも寸白蟲を生ずる。韭、薤と合せて食へば人をして熱病せしめる。生薑と合せて食へば齒を損ずる。牛肉を煮るに杏仁、蘆葉を入れば爛れ易い。これは相適合する關係に因るのだ』とある。

詵曰く、（七）惡馬が牛肉を食へば馴れる。やはり物の性に因るのである。

主治　【中を安じ、氣を益し、脾、胃を養ふ】（別錄）【腰脚を補益し、消渴、及び唾涎を止める】（孫思邈）

【發明】　時珍曰く、韓懋は『牛肉の氣を補ふことは黃芪と同功だ』といつたが、丹溪朱氏の倒倉法論を觀て引照し類推するに牛の土を補するものなることが深く首肯される。現に牛は天下の日常の有用動物である故、嚴重の法で屠殺を禁じても、事實に於てその禁止が實行されぬのは、やはり肉が美味にして補の功があるのと、皮、角に用途があるに因するものだ。

朱震亨倒倉論に曰く、腸、胃は積穀の室である。故にこれを倉といふ。倒とは陳を推して以て新を致すの意味である。胃は土に屬し、物を受け入れるが自ら運用することが不能だ。七情、五味が中宮を傷めることがあれば、停痰と積血とが互に相纏糾し、發して癱瘓となり、勞瘵となり、蠱脹となり、形を成し、質を成し、窠となり、臼となり、そこからあらゆる病が生ずるのであるが、中宮が和を愆つたものは元來丸、散藥で除き去ることの不可能なものである。左の方は西域の異人から出たもので、その法は、黃肥牡牛肉二十斤を用ゐ、長流水で煮て糜となし、滓を去つて液を濾し取り、再び煮つて琥珀色にして取收め、一鍾づつ飲んで數十鍾まで飲む。寒い時期には溫飲する。それで病が上に在るときは吐せしめ、下に在るときは

利せしめ、中に在るときは吐して利せしめ、その人の如何に因つて變化し活用するのである。吐、利の後に渴するときは、その小便一二碗を服する。やはり殘餘の毒惡物を蕩滌する作用もあるものだ。かくて二日睡つたならば淡粥を食つて養ふ。半月にして精神が强健となり、沉痾が悉く亡くなるものだ。五年間は必ず牛肉を忌む。蓋し牛は坤土であつて、黃は土の色である。その本來の順なる作用を乾牡の作用に配合して働かせるものである。肉は胃の樂むところのものであつて、熟すれば液となり、一定の形態のないものとなる。故に能く腸、胃に由つて肌膚、毛竅、爪甲に透り、到らざる所なきものだ。病の表に在る場合は吐に因つてして汗を發し、淸道に在る場合には吐に因つて去り、濁道に在る場合には利に因つて除く。洪水が泛漲するやうにして陳莝のものが流に順つて去ること盎然、渙然たるもので、枯槁を潤澤ならしめて精神を爽快ならしめる。

○王綸曰く、牛肉は本來脾、胃を補するもので、吐、下の藥ではないのであつて、それのみを飮んで滿つるときは溢れるだけのものだ。補を借りて瀉するのである。故に病が去つて胃が補を得るといふのであつて、やはり奇法である。但し病が腸、

胃以外の場合には施し難いもののやうに思はれる。

附方　新五。【小刀圭】韓飛霞曰く、凡そ一切の虚病はいづれもこれを服するがよし。小牛犢兒のまだ交感せぬもの一頭を用ゐ、臘月の初八日、或は戊巳の日に屠殺し、血を去り毛を燖いて洗淨し、臟腑と共に寸分も遺さずに大銅鍋に入れて煮て、十斤毎に黄芪十兩、人參四兩、茯苓六兩、官桂、良薑各五錢、陳皮三兩、甘草、蜀椒各二兩、食鹽二兩、淳酒二斗を入れ、共に八分を標準として煮る。文火で泥のやうになるまで煮てその骨を皆搥き碎き、併せて濾して稠汁を取り、冷えるを待つて甕に盛り、土中に埋めて甕の面を露出して置く。凡そ飲食に中つたものはいづれも任意にこれを食ふ。或は酒で調へて服するが更に妙である。肥犬、及び鹿もいづれもこの法に依つて調製し得るものだ。【返本丸】諸虚百損を補す。黄犍牛肉を用ゐ、筋膜を去つて切片し、河水で數回洗つてから一夜浸し、翌日再び三回洗ひ、水が淸くなるまでを程度とする。かくて無灰好酒と共に罎中に入れて重泥で封じ固め、桑柴の文武火で一晝夜煮て取出す。黄沙のやうになれば佳いのである。黒く焦げては用をなさぬ。それを焙じ乾して末にし、適宜使用し得るのであつて、山藥を

（八）水牛　學名 Bubalus bubalis, (Linne)

鹽で炒り、蓮肉を心を去つて鹽で炒り、いづれも鹽を去り、白茯苓、小茴香を炒つて各四兩を末にし、牛肉半斤毎に藥末一斤を入れ、紅棗を蒸熟して皮を去つたものを和して搗いて梧子大の丸にし、一日三回、空心に五十丸づつを酒で服す。（乾坤生意）【腹中の痞積】牛肉四兩を切片し、風化石灰一錢をそれに擦つて蒸熟して食ふ。食物の痞積が自ら下るものだ。（經驗祕方）【腹中の癖積】黃牛肉一斤、恒山三錢を共に煮熟し、肉を食ひ汁を飲む。癖は必ず自消して甚だ效がある。（筆峯雜興）【牛皮風癬】毎に五更に牛肉一斤を炙いて食ひ、酒で輕粉を調へて敷く。（直指方）

（八）水牛肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】日華曰く、冷にして微毒あり。○宜忌は黃牛に同じ。

主治　【消渴。啘洩を止め、中を安じ、氣を益し、脾、胃を養ふ】（別錄）【虛を補して壯健にし、筋骨を強くし、水腫を消し、濕氣を除く】（藏器）

附方　舊二、新一。【水腫尿澀】牛肉一斤を蒸熟し、薑、醋で空心に食ふ。（心鏡）【手、足の腫痛】傷寒時氣の毒攻で手、足が斷れんとするほど腫痛するには、牛肉で裹めば腫が消いて痛が止まる。（范汪方）【白虎風痛】寒熱が發歇し、骨節が微腫するには、水牛肉脯一兩を黃に炙き、燕窠土、伏龍肝、飛羅麪各二兩、砒黃一錢を末に

し、少量づつを新汲水で和して彈丸大に作り、それで痛處を摩す。痛が止んだときは藥を取つて油を熱した鐺の中へ抛つ（聖惠）

頭蹄　水牛のものが良し。［氣味］【涼なり】食經に『冷を患ふ人は蹄中の巨筋を食つてはならぬ。多く食へば肉刺を生ぜしめる。［主治］【熱風を下す】（孟詵）

［附方］　舊一。【水腫】脹滿し、小便澀るには、水牛蹄一具を毛を去つて汁に煮、羹にして切つて食ふ。或は水牛の尾條を切つて腊にして食ふ。或は煮るも佳し。（食醫心鏡）

鼻　水牛のものが良し。［主治］【消渴には、石燕と共に煮て汁を服す】（藏器）【婦人の乳無きを治するには羹にして食ふ。兩日に過ぎずして無限に乳が下る。氣壯の人に就中效がある】（孟詵）【口眼喎斜を療ず。乾けると濕へるとに拘らず、火で炙き熱して患はぬ處を熨すれば漸次に止る】（宗奭）

皮　水牛のものが良し。［主治］【水氣浮腫、小便澀少には、皮を蒸熟して切り、豉汁を入れて食ふ。（心鏡）【熬つた膠が最も良し】阿膠の條に詳記する。

乳 〔氣味〕【甘し、微寒にして毒なし】弘景曰く、牸牛乳が佳し。恭曰く、牸牛乳は性平である。生で飲めば人をして利せしめ、熱して飲めば人の口を乾かしめるが、溫にして飲めばよし。水牛乳を酪に作れば濃厚で牸牛に勝る。石蜜を造るに必要なものだ。

藏器曰く、黒牛の乳は黄牛に勝る。凡そ乳を服するには、必ず煮て一二沸で停めて冷してから啜る。熱食すれば壅して頓服されない。酸物と相反するもので、人をして腹中癥結せしめる。冷氣の患者はこれを忌む。生魚と食合せれば瘕となる。時珍曰く、凡そ取るには物を以て撞けば得易い。その他、乳酪の條下に詳記する。

○蓁艽、不灰木を制す。

〔主治〕【虛羸を補し、渇を止める】（別錄）【心、肺を養ひ、熱毒を解し、皮膚を潤ほす】（日華）【冷補し、熱氣を下す。蒜を和して煎沸して食へば、冷氣痃癖を去る】（藏器）【熱風を患ふ人はこれを食ふが宜し】（孟詵）【老人は煮て食ふが益がある。薑、葱を入れば小兒の吐乳を止め、勞を補す】（思邈）【反胃熱噦を治し、勞損を補益し、大腸を潤ほし、氣痢を治し、疸黄を除く。老人には粥に煮るが甚だ宜し】（時珍）

【發明】震亨曰く、反胃噎膈、大便燥結は牛、羊の乳を時時に嚥むが宜く、いづれも四物湯を服するが上策である。人乳を用ゐてはならない。人乳には飲食物の毒と七情の火とがある。

時珍曰く、乳煎の蓽茇は痢を治するに有效だ。蓋し一は寒、一は熱にして能く陰陽を和するからである。按ずるに、獨異志に『唐の太宗が氣痢に苦み、衆くの醫治も奏效せず、詔を下して一般官民から求めることになつたとき、金吾長張寶藏が曾てこの疾に困んだ經驗があつて、上表に具に記述して乳煎蓽茇の方を上つた。帝はそれを服して立ろに癒えたので、宰臣に宣下して五品の官を與へられたが、魏徵がそれを不穩當な敍任のやうに思はれて、一个月餘そのままにして傳達方を控へてゐた。するとその間に帝はまた病が發つたので、またその藥を服せられて平癒した。その時帝は左右の者に「藥方を進めた者の功に對してまだ除授の沙汰が及んでないやうだが、如何なる次第であるか」と問ひ糺されたるに對し、魏徵が「實はまだ文官とすべきか武官とすべきかが解決せぬのであります」と答へると、帝は怒つて「宰相を治し得れば三品を授けても妨ない。余がその方に及ばぬといふ次第があるか」と

いつて卽座に三品の文官を與へ、鴻臚寺卿を授けられた。その方は、牛乳半斤、蓽茇三錢を共に煎じて半減し、空腹に頓服するのであつた』とある。

〔附方〕 舊三、新八。【風熱毒氣】煎じた牛乳一升、生の牛乳一升を和勻し、一日三回、空腹に服す。（千金方）【小兒の熱噦】牛乳二合、薑汁一合を銀器に入れて文火で煎じ、五六沸してから、その兒の大小を量つて與へ服ませる。【下虛消渴】心、脾中熱、下焦虛冷で小便多きには、牛、羊乳を三四合づつ飲む。（廣利方）【病後の虛弱】七歲以下、五歲以上の黃牛の乳一升、水四升を一升に煎じ取り、少しづつ飮んで十日に至つて止める。（外臺方）【勞損の補益】千金翼、崔尙書の方では、鍾乳粉一兩を袋に盛り、牛乳一升で三分の一に減ずまで煎じて袋を去り、一日三回その乳を飮む。〇又ある方では、白石英末三斤に黑豆を和して十歲以上の生犢牸牛に與へ、每日一兩づつ七日與へ食はせてその牛乳を取り、或は一升を熱服し、或は粥にして食ひ、その糞を肥料にして栽培した菜を食ふ。忌むものは何もなし。能く臟腑を潤ほし、肌肉を澤かにし、人をして壯健ならしめる。【脚氣痺弱】牛乳五升、硫黃三兩を三升に煎じ取り、三合づつを服す。羊乳でもよし。或は牛乳五合で硫黃末一兩

を煎調して服す。汗を取つて尤も良し。(肘後)【肉人怪病】人の項に五色で櫻桃のやうな形狀の瘡が生じ、破れると項から皮のまま分裂して剝脫し、それが足にまで達するものであつて、これを肉人と名ける。常に牛乳を飲めば自ら消する。(夏子益奇疾方)【重舌で涎を出すもの】特牛乳を飲む。(聖惠)【蚰蜒の耳に入りたるとき】牛乳を少しづつ滴入すれば出る。若し腹に入つた場合には、一二升を飲めば化して水となる。(聖惠方)【蜘蛛瘡毒】牛乳を飲むが良し。(生生編)

血　[氣味]【鹹し、平にして毒なし】[主治]【毒を解し、腸を利し、金瘡、折傷で死に垂たるを治す。又、水蛭を下す。煮て醋を拌ぜて食へば血痢、便血を治す】(時珍)

[發明]　時珍曰く、按ずるに、元史に『布智兒が太祖の回回征討軍に從軍したとき、數箇所に敵矢を負ひ、全身に流血して悶仆し、幾ど絶命せんとしたが、太祖が命じて一頭の牛の腹を剖き、その牛の腹中に納れて熱血中に浸すと間もなく甦つた』とあり、又『李庭が伯顏に從つて郢州を攻めたとき、左脇に傷いて矢が胷を貫き、幾ど絶命せんとしたが、伯顏が命じて水牛の腹を剖いてその中に納れると良

(九)職方ハ地方官ヲ云フ。

(一〇)走精黄病ハ女勞疸。

久して甦つた』とある。何孟春は『予が(九)職方に奉職中、各地の國境守備の將士に就いて訊ねて見たが、この術を知るものがなかつた。元史を讀まねば判らない』といつた。故に此に記載して緩急の場合の備とする。

附方 新一。【誤つて水蛭を呑んだとき】腸痛し、黄瘦するには、牛血一二升を熱飲し、翌朝豬脂一升を溶化して飲めば下出する。(肘後)

脂 黄牛のものが良し、煉つて用ゐる。 **氣味** 【甘し、溫にして微毒あり】多く食すれば瘤疾、瘡瘍を發する。○鑑源に『牛脂は銅を軟にする』とある。

主治 【諸瘡、疥癬、白禿。やはり面脂に入れる】(時珍)

附方 新五。【消渇の止まぬもの】栝樓根煎――生栝樓根を切つて十斤を水三斗で一斗までに煮て濾淨し、煉淨した黄牛脂一合を入れ、慢火で熬膏して瓶に取收め、一日三回、一杯づつを酒で服す。(總錄) 【腋下胡臭】牛脂で胡粉を和して塗る。三回で永く瘥える。(姚氏) 【食物の鼻に入つたとき】介介として痛んで出ぬには、牛脂を棗一箇ほど鼻中に納れて吸入する。脂が消けると物が隨つて出る。(外臺方) 【(一〇)走精黄病】面部、目倶に黄になり、多睡し、舌が紫になり、甚しきは顏面

が裂ける。爪甲の黑くなつた場合には死亡する。豉半兩、牛脂一兩を煎じて綿で裹んで烙すれば活きる。(一)黑皮一重を去つて濃煎した豉湯を飲む。(三十六黃方)

髓　黑牛、黃牛、牸牛のものが良し。煉つて用ゐる。［氣味］【甘し、溫にして毒なし】

［主治］【中を補し、骨髓を塡てる。久しく服すれば天年を增す】(本經)【五臟を安じ、三焦を平にし、絕(二)傷を續ぎ、氣力を益し、洩利を止め、消渴を去る。いづれも淸酒で暖服する】(別錄)【胃氣を平にし、十二經脈を通ずる】(思邈)【瘦病を治するには、黑牛髓、地黃汁、白蜜等分を煎じて服す】(孟詵)【肺を潤ほし、腎を補し、肌を澤にし、面を悅しめ、打傷を理し、損痛を擦るに甚だ妙である】(時珍)

［附方］　新三。【精を補し、肺を潤ほす】陽を壯にし、胃を助ける。煉牛髓四兩、胡桃肉四兩、杏仁泥四兩、山藥末半斤、煉蜜一斤を共に搗いて膏にし、瓶に盛つて湯で一日煮て、一匙づつを空心に服す。(瑞竹方)【勞損風濕】陸杭膏——牛髓、羊脂各二升、白蜜、薑汁、酥各三升を三回煎じ三回下して膏にし、隨意に溫酒で和して服す。(經心錄)【手、足の皴裂】牛髓を敷く。

(一)黑皮何物ノ黑皮カ解シガタシ。
(二)傷ハ陽ノ誤ナラン。

腦　水牛、黄牛のものが良し。［氣味］【甘し、溫にして微毒あり】心鏡に曰く、牛の熱病で死んだものはその腦を食つてはならぬ。腸癰を生ぜしめるものだ。

［主治］【風眩、消渴を治す】（蘇恭）【脾積、痞氣。皴裂を潤ほす。面脂に入れて用ゐる】（時珍）

［附方］新四。【吐血、咯血】五勞、七傷である。水牛腦一箇を紙に塗つて陰乾し、杏仁を煮て皮を去り、胡桃仁、白蜜各一斤、香油四兩を共に熬り乾して末にし、二錢匕づつを空心に燒酒で服す。（乾坤秘韞）【偏、正頭風】發病の遠近に拘らず、諸藥の奏效せぬものに神の如き效がある。白芷、芎藭各三錢を細末にし、黄牛腦子にその末を搽り、瓷器に入れ酒を加へて頓に煮熟し、熱に乘じて食ひ、全量を食ひ盡して一醉する。醒めればその病が失つたやうに癒えて甚だ效驗がある。（保壽堂方）【脾積痞氣】牛腦丸——男子、婦人の脾積痞病を治するに大いに神效がある。黄犍牛腦子一箇を皮、筋を去つて擂り爛らし、皮硝末一斤、蒸餅六箇を晒し研つて和勻し、糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に好酒で服す。一日三服、百日にして效驗がある。（聖濟總錄）【氣積で塊となつたもの】牛腦散——牛腦子一箇を筋を

去り、雄雞肫一箇を黄のあるままを、いづれも好酒に一夜浸して搗き爛らし、木香、沈香、砂仁各三兩、皮硝一碗を入れ、千杵搗いてから生銅鍋中に入れて文武火で焙じ乾して末にし、輕粉三錢を入れて勻ぜ、一日三回、二錢づつを空心に燒酒で服す。（同上）

心　已下黄牛のものが良し。　主治　【虛忘。心を補す】（別錄）

脾　主治　【脾を補す】（藏器）【臘月に淡煮して日に一回食へば痔瘻を治す。朴硝を和して脯にして食へば痞塊を消す】（時珍）記載は千金、醫通にある。

肺　已下水牛のものが良し。　主治　【肺を補す】（藏器）

肝　主治　【肝を補し、目を明にする】（別錄）【瘧、及び痢を治す。醋で煮て食ふ】（孟詵）【婦人の陰䘌にこれを納れば蟲を引く】（時珍）

腎　主治　【腎氣を補し、精を益す】（別錄）【濕痺を治す】（孫思邈）

胃　黄牛、水牛いづれも良し。　氣味　【甘し、溫にして毒なし】弘景曰く、靑牛の腸、胃と犬肉、犬血とを合せて食へば人をして病ましめる。　主治　【消渴、風眩。五臟を補す。醋で煮て食ふ】（詵）【中を補し、氣を益し、毒を解し、脾、

胃を養ふ】（時珍）

附方　新一。【蛇を噉つた牛の毒】牛肚を細切し、水一斗で一升に煮て服す。汗を取つて瘥える。（金匱要略）

膍　一名**百葉**　時珍曰く、膍の音は毗（ビ）である。その意味は比び列つてゐる有様をいつたものだ。牛、羊はあらゆる草を食ひ、他の獸類と異ふところがあるので、その胃には膍があり、肱があり、蜂窠がある。これも他獸と異ふ點だ。主治【熱氣、水氣。痢を治し、酒毒、藥毒、丹石毒の發熱を解す。肝と共に生に作つて薑、醋で食ふ】（藏器）

膽　臘月の黄牛、青牛のものが良し。弘景曰く、膽はもと黄條中に附してあつたが、今此に拔出した。類に從ふたわけである。氣味【苦し、大寒にして毒なし】主治【藥を丸にするによし】（本經）【心腹の熱渇を除き、下痢、及び口の焦燥を止め、目、精を益す】（別錄）【臘月に槐子を釀して服すれば目を明にし、疳濕を治するにいよいよ佳し】（蘇恭）【黑豆を釀して百日後に取出し、毎夜一箇づつを呑めば肝を鎭め、目を明にする】（藥性）【南星末を釀して陰乾したものは驚風を

治するに奇功がある】（蘇頌）【黄を除き、蟲を殺し、癰腫を治す】（時珍）

【發明】時珍曰く、淮南萬畢術に『牛膽を熱釜に塗れば釜が鳴る。牛膽を（一三）桂に塗ればその人が誰とも判らなくなる』とあり、註に『能く人の形を見まがへるやうに變へるのだ』とある。詳細はその本書を見よ。峋嶁には『蛙は牛膽を得れば鳴かぬ』とある。これはいづれも制するところの關係があるのだ。

【附方】舊一、新一。【殺疸食黄】牛膽汁一箇、苦參三兩、龍膽草一兩を末にし、少量の蜜を和して梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。【男子の陰冷】食茱萸を牛膽中に百日間納れて乾かしめ、十四箇づつを取つて嚼んで陰中に納れる。良久して火のやうになる。（千金）【痔瘻の水を出すもの】牛膽、蝟膽各一箇、膩粉五十文、麝香二十文を用ゐ、三味を和勻して牛膽中に入れ、四十九日間高所に懸けて置いて取出し、大麥大の丸にし、紙に撚り込んで瘡中に送入する。惡物の流出するがその效驗である。（經驗）

胞衣【附方】新一。【臁瘡の斂らぬもの】牛胞衣一具を燒いて性を存し、研つて摻る。（海上方）

（一三）桂ハ桂ノ誤。

（一四）呷氣ハ氣息ヲ吸引スルコト。

喉　白水牛のものが良し。［主治］【小兒の呷氣】（思邈）【反胃吐食を療ず。一具を取つて膜、及び兩頭を去り、逐節に醋に浸して炙き燥し、燒いて性を存し、一錢づつを米飲で服するが神效がある】（時珍）記載は法天生意にある。

［發明］時珍曰く、牛喉嚨は（一四）呷氣、反胃を治す。いづれも類を以て相從ふのである。按ずるに、普濟方に『反胃吐食で藥も食物も落付かず、結腸すること三五日から七八日に至つて大便が不通となる。かやうなものは必ず死亡する。昔、金州の周禪師が異人から傳ひ得た正胃散の方は十中八九まで痊える藥である。有識の諸士はこれを記憶して一般人命を救濟するがよし。白水牛喉一條を用ゐ、兩頭節、幷に筋、膜、脂、肉、及び阿膠のやうな黑片を去つて取收め、時に臨んで旋や炙り、米醋一盞に浸して微火で炙り乾して淬し、再び炙つて再び淬し、かくして醋を用ゐ盡すまで繰返して研末し、厚紙に包んで貯へる。或は陰濕に遇ふた場合には微火で烘いて再び取收め、右の病のものの場合、毎服一錢を食前に陳米飲で調へて服す。輕きは一服で立ろに效がある』とある。

靨　水牛のものが良し。［主治］【喉痺、氣癭。古方に多く用ゐてある】（時珍）

齒　主治　【小兒の牛癎】(外臺)

發明　時珍曰く、六畜の齒は六癎を治す。これはいづれもその類に從ふ意味で用ゐるのだ。耳珠先生の固牙法といふがあつて、それは牛齒三十箇を瓶に盛り、固濟して赤く煆いて末にし、水一盞で末二錢を煎じ、熱して含漱し、冷えたときは吐き去る。損動するものの場合は末を揩る。これもやはり類を以て從ふのだ。

牛角䚡　釋名　**角胎**　時珍曰く、これは角尖中の堅骨のことであつて、牛に䚡あるは魚に鰓あるが如きものだ。故にかく名けたのである。胎とは角の內部に在るものとの意味である。藏器曰く、水牛、黃犛牛のものを用ふべきもので、その他のものではいづれもそれに及ばない。久しく糞土の中に在つて白く爛れたものも佳し。

氣味　【苦し、溫にして毒なし】甄權曰く、苦く甘し。主治　【閉血、瘀血の疼痛を下す。婦人の帶下(一五)血には、これを燔いて酒で服す】(本經)【燒灰は赤、白痢に主效がある】(一六)(宗奭)【黃牛のものを燒いたものは、婦人の血崩、大便下血、(一七)血痢に主效がある】(宗奭)【(一八)水牛のものを燒いたものは、婦人の血

(一五)本經逢原ニ血下ニ崩字アリ。
(一六)大觀ニ藏器ニ作ル。
(一七)大觀ニ冷ニ作ル。
(一八)大觀ニ黃ニ作ル。

崩、赤、白帶下、冷痢瀉血、水洩を止める】(藥性) 【水腫を治す】(時珍) 千金の徐王酒にこれを用ゐてある。

【發明】 時珍曰く、牛角鰓は筋の粹、骨の餘であつて、鰓なるものはまた角の精である。乃ち厥陰、少陰の血分の藥であつて、これを燒けば性が澀る。故に血痢、崩中の諸病を止めるのだ。

【附方】 舊四、新二。 【大腸冷痢】 沙牛角鰓を灰に燒き、一日二回、二錢を飲で服す。(千金) 【小兒の滯下】 沙牛角鰓を灰に燒いて方寸匕を水で服す。(千金) 【大便下血】 黃牛角鰓一具を煆いて末にし、一日三回、豉の煮汁で二錢を服するが神效がある。(近效方) 【赤、白帶下】 牛角鰓を煙がなくなるまで燒き、附子を鹽水に七回浸して皮を去り、等分を末にし、空心に二錢匕づつを酒で服す。(孫用和方) 【鼠乳痔疾】 牛角鰓を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。(塞上方) 【蜂蠆の螫瘡】 牛角鰓を灰に燒き、醋で和して傅ける。(肘後方)

角 【氣味】 【苦し、寒にして毒なし】 之才曰く、平なり。 【主治】 【水牛のものを燔いたものは、時氣の寒熱頭痛を治す】(別錄) 【煎汁は熱毒、及び壯熱を治

す】(日華)　【牽牛のものは喉痺腫塞で死せんとするを治す。灰に燒いて一錢を酒で服す。小兒の乳の飲み振り惡くして喉痺らしきには、乳房に塗つて嚥ませれば瘥える】(蘇頌)　記載は崔元亮の方にある。【淋破血を治す】(時珍)

附方　舊二、新一。【石淋破血】牛角を灰に燒き、一日五回、方寸匕を酒で服す。(總錄)　【血の心に上逆するもの】煩悶し、刺痛するには、水牛角を燒いて末にし、方寸匕を酒で服す。(子母祕錄)　【赤禿髮落】牛角、羊角の燒灰等分を豬脂で調へて塗る。(聖惠方)

骨

氣味　【甘し、温にして毒なし】　**主治**　【燒灰は、吐血、鼻洪、崩中帶下、腸風瀉血、水瀉を治す】(日華)　【邪瘧を治す。燒灰を豬脂と共に疳瘡の口、鼻を蝕するものに塗るが有效である】(時珍)　記載は十便にある。

發明　時珍曰く、(一九)東夷では牛骨で吉凶を占卜し、大抵中らぬものはないといふ。牛は智を含むの物ではないが、骨には事に先ずるの靈がある。これを藥に入れて病を治すといふことも尤な次第だ。

附方　新二。【鼻中に生じた瘡】牛骨、狗骨を灰に燒き、臘豬脂で和して敷

(一九)東夷トハ今ノ遼東、朝鮮地方ヲ指ス。

く。(千金)【水穀痢疾】牛骨灰と六月六日の麹とを炒つて等分を末にし、方寸匕を飲で服す。これは御傳の方である。(張文仲方)

蹄甲 青牛のものが良し。

主治 【婦人の崩中、漏下赤白】(蘇恭)【燒灰を水で服すれば牛癇を治す。油で和して臁瘡に塗る。研末して臍に貼れば小兒の夜啼を止める】(時珍) 記載は集要の諸方にある。

附方 新五。【卒魘で寤めぬもの】青牛蹄、或は馬蹄を頭上にかざせば活きる。(肘後)【損傷の接骨】牛蹄甲一箇の中に乳香、沒藥各一錢を末にして入れて灰に燒き、黃米粉糊で和して膏にして敷く。(秘韞)【牛皮風癬】牛蹄甲、驢糞各一兩を燒いて性を存し、研末して油で調へ、抓破してから敷く。五七日で癒える。(蘭氏經驗方)【臁脛爛瘡】牛蹄甲の燒灰を桐油で和して敷く。(海上方)【玉莖に生じた瘡】牛蹄甲の燒灰を油で調へて敷く。(奚囊)

陰莖 黃牛、烏牛、水牛、いづれも宜し。

主治 【婦人の漏下赤白で子無きもの】(蘇恭)

牯牛卵囊

主治 【疝氣には、一具を煮爛し、小茴香、鹽少量を入れて拌ぜ

て食ふ】（吳球）

毛　主治　【臍毛は小兒の久しく步行せぬを治す】（蘇恭）【耳毛、尾毛、陰毛、いづれも淋閉を通ずる主效がある】（時珍）

發明　時珍曰く、古方に、牛の耳毛、陰毛、尾毛を淋を治するに多く用ゐてある。これは牛の性は順にして毛の性が下行するものだからではあるまいか。又、瘴病を治するは、蓋し禳辟の意味だ。

附方　舊一、新二。【淋疾の卒患】牛耳中の毛を燒き、半錢を取つて水で服す。尾毛でもよし。（集驗方）【小兒の石淋】特牛の陰頭の毛を灰に燒き、一日二回、一刀圭を漿水で服す。（張文仲方）【邪氣瘴疾】外臺では、黑牛尾を燒いて末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。○一には、牯牛の陰毛七本、黃荊葉七片を內關上に縛りつけて置くも效がある。

口涎　日華曰く、水で老牛の口を洗ひ、鹽を塗つて置くと少頃して出る。或は荷葉で牛の口を包んで耕作に驅使し、疲勞して出す涎を取る。　主治　【反胃嘔吐】（日華）【水で二匙を服すれば終身噎せぬ】（思邈）【小兒に吮はせれば客忤を治

す。一合を灌げば小兒の霍亂を治す。鹽少量を入れて一盞を頓服すれば喉閉口噤を治す】(時珍) 記載は外臺、胡居士の方にある。

附方　新七。【噎膈反胃】集成では、糯米末を牛涎で拌ぜて小丸にし、煮熟して食ふ。○危氏得效では、香牛飲——牛涎一盞に麝香少量を入れ、銀盞に入れて頓に熱し、先づ帛で緊く胃脘を束ねて氣喘を鎭靜せしめ、熱に乘じて飲む。同時に丁香汁を入れた粥を與へて食はす。○普濟では、千轉丹——牛涎、好蜜各半斤、木鼈仁三十箇を研末し、銅器に入れて稠く熬り、一日三回、兩匙づつを粥に和して與へて食はす。【小兒の流涎】東に行く牛の口中の涎沫を取り、口中、及び頤上に塗れば自ら癒える。(外臺方)【小兒の口噤】身熱し、沫を吐き、乳を飲めぬもの。方は上に同じ。(聖惠方)【目を損じ、睛を破りたるもの】牛口の涎を日に二回點けて風を避ける。黒睛の破れたものも瘥える。(肘後)【身體、面部の疣目】牛口涎を頻りに塗れば自ら落ちる。(千金)

鼻津　主治　【小兒が客忤に中りたるには水に少量を和して灌ぐ。又、小兒の鼻瘡、及び濕䘌に塗る】(時珍) 記載は外臺諸方にある。

耳垢　烏牛のものが良し。時珍曰く、鹽少量を牛耳中に入れて攪くすれば取り易い。主治【蛇傷、惡蛓の毒】(恭)　○蛓とは毛蟲のことだ。【癰腫を治し、まだ化膿せぬものはこれで封ずれば散る。疳蟲が鼻を蝕して生じた瘡、及び毒蛇に螫されたるには、いづれもこれを傅ける】(時珍)

附方　新三。【疔瘡惡腫】黑牛の耳垢を敷く。(聖惠方)　【脇漏で水を出すもの】止まぬには、烏牛の耳垢を傅ければ瘥える。【鼻衄の止まぬもの】牛耳中垢、車前子末等分を和勻して塞ぐが良し。(總錄)

溺　黃犍、牸牛、黑牯牛のものが良し。氣味【苦く辛し、微溫にして毒なし】之才曰く、寒なり。主治【水腫、腹脹、脚滿に小便を利す】(別錄)

附方　舊三、新五。【水腫尿澀】小品では、烏犍牛尿半升を空腹に飲む。小便が利して良し。○肘後では、黃犍牛尿を三升づつ飲む。老人、幼者は半減する。【水氣喘促】小便の澀るには、牸牛尿一斗、訶梨皮末半斤を用ゐ、先づ銅器で尿を三升までに熬つて末を入れ、丸にし得るまでに熬つて梧子大の丸にし、一日三回、三十丸づつを茶で服す。水、及び惡物を下して奏效するものだ。(普濟方)　【風毒脚

氣】銅器に烏(二〇)犢牛の尿三升を取つて飲む。小便が利すれば消く。(肘後)【脚氣脹滿】尿の澀るには、烏犢牛尿一升を取つて一日に分服し、消いたときは止める。(楊炎南行方)【氣脹の久患】烏牛尿一升を空心に温服する。氣が散じたときは止める。(二一)(廣濟方)【癥癖鼓脹】烏牛尿一升を微火で稠い飴のやうに煎じ、空心に棗ほどの量を服す。鳴轉して病が出るものだ。隔日に更に服す。(千金翼)【霍亂厥逆】烏牛尿二升を服す。(千金方)【刺傷が水に中つたもの】烏牛尿二升を服す。三服にして止む。(梅師)

屎 稀いものを牛洞と名ける。烏牯、黄牯牛のものが良し。【氣味】【苦し、寒にして毒なし】鏡源に曰く、牛屎は銅暈を抽く。火に燒いて能く一切の藥力を養ふ。【主治】【水腫、惡氣。乾いたものを燔いて鼠瘻惡瘡に敷く】(別錄)【灰に燒いて灸瘡の瘥えぬものに敷く】(藏器)【小兒の爛瘡、爛痘、及び癰腫の合せぬものに敷く。能く瘢痕を滅する】(時珍)【絞つた汁は、消渴、黄(二二)癉、脚氣、霍亂、小便不通を治す】(蘇恭)

【發明】時珍曰く、牛屎は熱を散じ、毒を解し、溲を利す。故に能く腫、疸、

(二〇)大觀ニ牸ニ作ル。
(二一)大觀ニ外臺祕要ニ作ル。
(二二)大觀ニ疸ニ作ル。

霍亂、疳痢、傷損の諸疾を治するのである。灰に燒けば濕を收し、肌を生じ、毒を拔く。故に能く癧疽、瘡瘻、爛痘の諸疾を治するのである。宋書に『孫法宗が頭瘡で苦んだとき、夜中ある婦人が現れて「自分は天の使だ。此度のことは元來善人に對して行はれたのではなく、使者が誤つてその方に罹病させたのだ。ただ牛糞を取つて煮て敷くがよし。それで效驗がある」といつた。そこでその言葉の通にすると果して瘥えた』とある。これはまた不思議な例の一である。

附方　舊七、新二十二。【水腫して尿の澀るもの】黄牛屎一升の汁を絞つて飮めば尿が利して瘥える。鹽を食つてはならぬ。（梅師）【濕熱黄病】黄牛糞を日光で乾して末にし、麪糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを食前に白湯で服す。（簡便方）【霍亂吐下】止まずして四肢逆冷するには、外臺では、黄牛屎半升を水二升で煮て三沸し、半升を服すれば止む。○聖惠では、烏牛糞の絞汁一合と生兒後百日の母の乳汁一合を和して溫服する。【疳痢で死に垂たるもの】新牛屎一升、水一升を攪ぜて澄ました汁を服す。三服に過ぎず。（必效方）【卒死して人事不省のもの】四肢收らぬには、牛洞一升を取つて溫酒を和して灌ぐ。或は濕へるものの汁を絞るもよし。これ

は扁鵲の法である。(肘後) 【卒に陰腎の痛むもの】牛屎の焼灰を酒で和して敷くが良し。(梅師) 【脚跟の腫痛】地に著け得ぬには、黄牛屎に鹽を入れて炒り熱して罨ふ。(王永輔惠濟方) 【妊娠腰痛】牛屎を焼いて末にし、一日三回、方寸匕を水で服す。(外臺) 【妊娠毒痛】〓牛屎を灰に焼き、一日三回、方寸匕を水で服し、幷に酢で和して封ずる。(千金方) 【腹中の胎兒死亡】濕牛糞を腹上に塗るが良し。(產寶) 【小兒の口噤】白牛糞を口中に塗つて瘥を取る。(總錄) 【小兒の夜啼】牛屎一塊を母に知らせぬやうにして席下に置く。(食療) 【小兒の頭瘡】野外にある久しく乾いた牛屎の壞れぬものを灰に焼き、輕粉、麻油を入れて調へて搽る。(普濟) 【小兒の白禿】牛屎で厚く封ずる。(秘錄) 【小兒の爛瘡】牛屎の焼灰で封ずる。瘢痕を滅す。(千金) 【痘瘡潰爛】王兗の白龍散——臘月の黃牛屎を焼いて白灰を取つて敷き、或はそれに臥す。痂疕し易くして瘢痕がなくなる。【癰腫の合せぬもの】牛屎を焼いて末にし、雞子白で和して封じ、乾けば易へる。神驗がある。(千金月令) 【鼠瘻瘰癧】千金では、五白散——白牛屎、白馬屎、白羊屎、白雞屎、白豬屎各一升を石上で焼いた灰を、漏蘆末二兩を豬膏一升で煎じ、亂髮一兩と共に熬り、五六沸して塗る。神驗がある。

○肘後では、鼠瘻の核があつて濃血あるものを治す。熱牛屎で一日三回封ずる。【蜣螂瘻疾】熱牛屎で封じ、日に數回易へる。蜣螂が出るものだ。（千金）【乳癰の初期】牛屎を酒で和して敷けば消する。（姚僧坦方）【燥癰瘡痒】熱牛屎を塗る。（千金）【瘡傷風水】痛み劇しくして死せんとするものには、牛屎を燒いてその烟で燻じ、汁を出さしむれば癒える。（外臺祕要）【跌磕傷損】黄牛屎を炒り熱し、それで封じて裹む。即效がある。（簡便）【湯火燒灼】濕牛屎を搗いて塗る。（姚和衆）【惡犬の咬傷】毒を洗淨してから、熱牛屎で封ずる。即時に痛が止まる。（千金）【蜂蠆の螫痛】牛屎を灰に燒き、苦酒で和して敷く。（千金方）【背瘡の潰爛】黄、黑牛糞の多年のものを晒し乾して末にし、百草霜を入れ、勻細して摻る。（談野翁方）

黄犢子臍屎　生れたばかりでまだ草を食はぬものから採收して乾す。

主治

【九竅、四肢の指岐の間から血の出るもの、これは暴怒に因るものだ。これを燒いて末にし、水で方寸匕を服す。一日四五服するが良し】（藏器）　姚僧坦方に記載がある。【中惡、霍亂、及び鬼擊吐血に主效がある。一升を酒三升に和して煮汁を服す】（時珍）　記載は肘後にある。

屎中の大豆 洗ひ晒して貯へて用ゐる。 [主 治] 【小兒驚癎、婦人難産】(蘇恭)

[附 方] 舊一、新二。【小兒の牛癎】白牛屎中の豆を日日に服するが良し。(總微論)

【婦人の難産】牛屎中の大豆一箇を兩片に擘き、その一片には父を書し、一片には子を書し、それを合せて水で呑む。立ろに産する。(昝殷産寶) 【齒の落ちて生えぬもの】牛屎中の大豆十四箇を小し豆の頭を開いて齒根に注ぐ。數回にして生える。(千金方)

聖虀 時珍曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄異に『廣の(三)容南では好んで水牛肉を食ひ、或は炮き、或は炙つて食ひ、訖ると聖虀を啜つて消化する。薑、桂、鹽、醋で調へて用ゐると腹がこれで脹らない。聖虀とは青苔のやうな狀態のものだ』とある。これは牛の腸、胃中でまた消化せずにある草のことだ。 [主 治] 【牛肉を食つて脹つた場合。牛肉の毒を解す】(時珍)

齝草 音は痴(チ)である。一名 **牛轉草** 卽ち牛が食つて復び出したもの、俗にいふ回噍である。 [主 治] 【汁を絞つて服すれば噦を止める】(藏器) 【反胃、霍亂、小兒の口噤風】(時珍)

[發 明] 時珍曰く、牛齝で反胃噎膈を治するは、その回噍するものの意味に關

(三)容南ハ容州以南ノ地方。容州ハ唐ニ置ク。今ノ廣西省、蒼梧道容縣ソノ地ナリ。

係せしめたものではあるが、多大に口涎で沾濡されたものだから主たる治功は涎の功と同じである。

【附方】新四。【反胃噎膈】大力奪命丸――牛噍草、杵頭糠各半斤、糯米一升を末にし、黄母牛の涎を取つて和して龍眼大の丸にし、煮熟して食ふ。砂糖二兩を入れるが就中妙である。（醫學正傳）【霍亂吐利】止まぬには、烏牛の齝草一團、人參、生薑各三兩、甜漿水一升半の煮汁五合を服す。（劉涓子鬼遺方）【小兒の流涎】牛噍草の絞汁を少しづつ與へて服ませる。（普濟方）【初生兒の口噤】十日以內のものには、牛口齝草の絞汁を灌ぐ。（聖惠）

鼻拳 音は卷（ケン）鼻を穿つ繩木である。

【主治】【木拳は小兒の癇に主效がある】（別錄）【消渴を治す。煎汁を服し、或は燒灰を酒で服す】（時珍）【草拳を燒き、研つて小兒の鼻下瘡に傅ける】（別錄）【燒灰を纏喉風に吹くが甚だ有效だ】（時珍）

【附方】新一。【消渴】牛鼻木二箇を洗つて剉み、男は牝牛のもの、女は牡牛のものを用ゐ、人參、甘草半兩、大白梅一箇、水四碗で三碗に煎じて熱服するが甚だ妙である。（普濟方）

馬（本經中品）

和名　うま
學名　Equus caballus, Linne.
科名　うま科

校正　別錄では上品に馬乳を掲げてあるが、本書ではこの一條に併記する

釋名　時珍曰く、按ずるに、許愼は『馬は武である。その文字は頭、髦、尾、足の形を象したものだ』といつた。牡馬を騭——音は質（シツ）——といひ、兒といふ。牝馬を騇といひ、騍といひ、草といふ。去勢せるを騸といふ。一歳なるを馵——音は弦（ケン）——といひ、二歳なるを駒といひ、三歳なるを騑といひ、四歳なるを駣——音は桃（タウ）——といふ。名稱と色別けが甚だ多く、爾雅、及び說文に詳述されてある。梵



〔馬〕

書では馬を阿濕婆といつてある。

［集解］　別錄に曰く、馬は雲中に出る。

弘景曰く、馬は色類が甚だ多いが、藥用としては純白なるものを良しとする。口も眼も蹄もみな白いものが俗中にも時に二三あるものだが、わづかの用途には必ずしもそれでなければならぬといふことはない。

時珍曰く、別錄には雲中の馬を良しとしてあるが、雲中とは今の(一)大同府のことで、概して西北方のものが勝れてゐる。東南の地のものは劣弱でそれに及ばない。馬は月に應ずるもので、それゆゑに十二月にして生れる。その年齡は齒で判別がつく。畜に在つては火に屬し、辰に在つては午に屬する。或は、卦に在つては乾に屬し、金に屬する。馬の眼光が人の全身を照すものはその齒が最も小さく、光が愈よ近いほど齒が愈よ大いともいふ。馬は杜衡を食へば善く走り、稻を食へば足が重くなり、鼠屎を食へば腹が脹り、雞糞を食へば骨眼を生ずる。殭蠶、烏梅で牙を拭へば物を食はなくなり、桑葉を與へれば齒が脫ける。鼠狼皮を槽に掛けて置いても物を食はなくなり、海馬骨に遇へば步行せず、豬槽で飼糧を與へ、石灰を馬槽に泥り、

(一)山西省ノ大同府。

(二)駒ヲ落ストハ墮胎ノ事ナランカ。

(三)夜眼ハ前足ノ關節、內側ニアル俗ニタコト云フモノ。

(四)漏ハ臭氣アルヲ云フ。

馬汗を門に著ければ、いづれも馬をして(二)駒を落さしめる。獼猴を厩に繫げば馬の病を辟ける。いづれも物の理がさうあらしめるのだ。

肉　純白なる牡馬のものを良しとする。［氣味］【辛く苦し、冷にして毒あり】詵曰く、小毒あり。士良曰く、大毒あり。思邈曰く、毒なし。

○日華曰く、ただ煮れば食へるものだが、その他の方法で食つては消化し難い。清水で搦洗して血を盡してから煮るのであつて、さうせねば毒が出ずして疔腫を患ふ。或は、冷水で煮て、釜に蓋をしてはならぬともいふ。

鼎曰く、馬にして角の生えたもの、馬にして(三)夜眼なきもの、白馬にして蹄の青きもの、白馬にして頭の黒きもの、いづれも人をして癲せしむるものだから食つてはならぬ、馬鞍下の肉の色黒きもの、及び馬の自死せるもの、いづれも人を殺すものだから食つてはならぬ。馬の脊が黒くして臂の斑なものは(四)漏するから食つてはならぬ。

蕭炳曰く、痢を患ひ、疥を生じた人は食つてはならぬ。必ずますます劇しくなる。妊婦が食へば子をして月を過さしめる。乳母が食へば子をして疳瘦せしめる。

○詵曰く、倉米、蒼耳と共に食へば必ず惡病に罹つて十中の九まで死亡する。薑と共に食へば氣嗽を生ずる。豬肉と共に食へば霍亂となる。馬肉を食つて毒發し、心悶するときは清酒を飲めば解す。濁酒を飲めばますます劇しくなる。
弘景曰く、秦の穆公は『駿馬の肉を食つて酒を飲まねば必ず死ぬ』といつた。
時珍曰く、馬を食つて中毒した場合は、蘆菔汁を飲み、杏仁を食へば解するものだ。

主治　【傷中。熱を除き、氣を下し、筋骨を長じ、腰脊を強くし、壯健にして志強く、身を輕くし、飢ゑず、脯に作つたものは寒熱痿痺を治す】（別錄）【煮汁で頭瘡白禿を洗ふ】（時珍）　記載は聖惠にある。

附方　舊一。【豌豆瘡毒】馬肉を煮て澄した汁で洗ふ。（兵部手集）

鬐膏　鬐は項の上である。白馬のものが良し。　**氣味**　【甘し、平にして小毒あり】　鑑源に『馬脂は五金を柔にする』とある。　**主治**　【髮を生ずる】（別錄）【面皯、手足の皴粗を治するに脂澤に入れて用ゐる。偏風の口喎僻を療ず】（時珍）

發明　時珍曰く、按ずるに、靈樞經に『卒口僻急は、頰筋に寒あれば急引し

て頰移り、頰筋に熱あれば縱緩して收まらず。桑鉤を以て鉤し、生桑灰を以て坎中に置いて坐し、馬膏を以てその急頰を熨し、白酒を以て桂末を和してその緩頰に塗り、且つ美酒を飮み、炙肉を噉ひ、これを爲すこと三拊するのみ』とある。靈樞には註本がないので、世間多くはこの方の妙を知らないが、竊に謂ふに、口頰の喎僻といふは風が血脈に中つたものだ。手、足の陽明の筋は口に聯絡し、太陽の筋の目に聯絡すると落ち會ふのであつて、寒すれば筋が急して僻し、熱すれば筋が緩して縱する。故に左が寒に中つたときは右に逼熱し、右が寒に中つたときは左に逼熱するのだ。寒は急し、熱は緩するもので、急すれば皮膚が頑痺し、營衞が凝滯するのである。治法は、急するをば緩にし、緩するをば急にすべきものだから、馬膏の甘、平、柔、緩を用ゐてその急を摩し、それでその痺を潤ほしてその血脈を通じ、桂、酒の辛、熱、急、束を用ゐてその緩に塗り、それでその營衞を和してその經絡を通じたのである。桑は能く風痺を治し、節竅を通ずるもので、病の上部に在るには酒がこれを行り、甘はこれを助ける。故に美酒を飮み、炙肉を噉ふといつたわけである。

乳　時珍曰く、漢時代には馬乳で酒を造り、桐馬といふ官を置いた。桐は音同（ドウ）であつて、挏撞して成るものとの意味である。氣味【甘し、冷にして毒なし】思邈曰く、性は冷利である。魚鱠と共に食へば瘕となる。主治【渴を止め、熱を治す】（別錄）【酪に作つたものは性溫であつて、飲めば肉を消化する】（蘇恭）

心　已下いづれも白馬のものを用ゐるが良し。主治【喜く忘れるもの】（別錄）肘後方に、心昏多忘を治するに、牛、馬、豬、雞の心を乾して末にし、方寸匕を酒で服す。一日三服すれば一を聞いて十を知るとある。○詵曰く、痢を患ふものが馬の心を食へば痞悶してますます甚しくなる。

肺　主治【寒熱。小兒の莖萎】掌禹錫曰く、小兒に莖萎といふことはない。誤りらしい。時珍曰く、按ずるに、千金方には小兒の二字がない。

肝　氣味【大毒あり】弘景曰く、馬肝、及び鞍下の肉は人を殺す。時珍曰く、按ずるに、漢の武帝は『肉を食つても馬肝をば食ふな』といひ、又『文成は馬肝を食つて死んだ』といふ。韋莊は『馬を食つて肝を留める』といつた。これで見

るとその毒なることが察せられる。方家では豉汁、鼠屎でこれを解す。

附方 新一。【月水不通】心腹滞悶し、四肢疼痛するには、赤馬肝一片を炙いて研り、毎食前に熱酒で一錢を服し、通じたならば止める。(聖惠)

腎 時珍曰く、按ずるに、熊太古の冀越集に『馬には墨が腎に在り、牛には黃が膽に在る。造物の特殊な力の現れだ』といつた。これはやはり牛黃、狗寶の類のもので、功用があるものに相違あるまいと思ふが、惜いかな從前から一般に知られなかつた。兎も角此に記して後の參考に供する。

白馬陰莖 修治 藏器曰く、凡そこれを採つて貯へるには、銀色にして無病なる白馬の春期交尾期に於ける勢力强盛の絶頂期のものを取るべきもので、生で取つて百日間陰乾して用ゐる。

斅曰く、これを使用するときには、銅刀で七片に破り、生羊血を拌ぜて半日晒して乾し、粗布で皮、及び乾血を去り、挫碎して用ゐる。

氣味 【甘く鹹し、平にして毒なし】主治 【傷中、絶脈で陰起らざるもの。志を强くし、氣を益し、肌肉を長じ、肥健にし、子を生ましめる】(本經)【小兒

の驚癇】(別錄)【男子の陰氣を益す】詵曰く、陰乾して肉蓯蓉と等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、空心に四十丸づつを酒で服す。一日二回、百日にして效が現れる。甄權曰く、男子の陰痿に主效があり、房中術に特にこれを用ゐる。

駒胞衣　[主治]【婦人月經の通ぜぬには、煆いて性を存して末にし、毎服三錢に麝香少量を入れ、空腹に新汲水で服す。三服に過ぎずして良し】(孫氏集效)

眼　白馬のものを生で殺して取る。[氣味]【平にして毒なし】[主治]【驚癇、腹滿、瘧疾】(別錄)【小兒の魃病には、母に與へて帶びしめる】(蘇恭)

夜眼　足膝の上に在る。馬はこれがあつて能く夜中步行するものだ。故にかく名けたのである。[主治]【卒死尸厥、齲齒痛】(時珍)

[附方]　舊一、新二。【卒死尸厥】白馬の前脚の夜目二箇、白馬尾十四本を合せて燒き、苦酒で小豆大ほどの丸にし、二丸を白湯で灌ぎ下す。須臾にして再服すれば甦る。(肘後)【蟲牙齲痛】馬の夜眼を米粒ほど綿に裹んで孔中に納れ、涎の出るを吐き去る。永く根源を斷つ。或は生附子少量を加へる。○玉機微義では、馬の夜眼を燒いて性を存して敷く。立ろに癒える。

牙齒　已下いづれも白馬のものを用ゐるが良し。［氣味］【甘し、平にして小毒あり】［主治］【小兒の馬癇には水に磨つて服す】（別錄）【燒灰を唾で和して癰疽、丁腫に塗る。根が出て奏效する】（藏器）

［附方］　舊一、新三。【腸癰のまだ成らぬもの】馬牙の燒灰を雞子白で和して塗る。（千金方）【疔腫のまだ破れぬもの】白馬の齒を灰に燒き、先づ針で腫を刺し破つてからその灰で封じ、濕麪で腫處を圍ひ、醋で洗ひ去る。根が出て大いに效驗がある。（肘後）【赤根疔瘡】馬の牙齒を搗いて末にし、臘猪脂で和して敷く。根が出る。燒灰でもよし。（千金方）【蟲牙の痛み】馬牙一箇を煆き熱して醋中に投ずること七回、冷えるを待つてそれを含めば止まる。（唐瑤經驗方）

骨　［氣味］【毒あり】［主治］【灰に燒いて醋で和し、小兒の頭瘡、及び身體上の瘡に傅ける】（孟詵）【邪瘧を止める。灰に燒いて油で和し、小兒の耳瘡、頭瘡、陰瘡、瘭疽で漿が出て火で灼くやうなるに傅ける。乳房に敷いて兒に飲ませれば夜啼が止む】（時珍）　記載は小品、外臺の諸方にある。

［附方］　舊一。【瘟疫の氣を辟ける】紅絹の袋に馬骨を盛つて佩びる。男は左、

(五)年、大觀ニ午ニ作ル。

(六)匡ハ牀ノ誤、牙牀ハ齒グキ。

女は右。(肘後方)

頭骨 [氣味] 【甘し、微寒にして小毒あり】韓保昇曰く、大熱なり。藏器曰く、頭骨を(五)年地に埋めれば蠶に宜し。上流に浸せば水中に蜞蚛が絶える。

[主治] 【眠を喜むもの。人をして睡らざらしめる。灰に燒き、晝三回、夜一回、方寸匕を水で服す。枕にするも良し】(別錄)【齒痛を治す。灰に燒いて頭、耳の瘡に傅ける】(日華)【馬汗の氣の瘡に入つて痛腫するを療ず。灰に燒いて傅ければ白汁が出て良し】(時珍)

[附方] 新三。【膽虛で眠らぬもの】馬頭骨灰、乳香各三兩、酸棗仁を炒つて二兩を末にし、三錢づつを溫酒で服す。(聖惠)【膽熱で多く眠るもの】馬頭骨灰、鐵粉各一兩、朱砂半兩、龍腦半分を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを竹葉湯で服す。(聖惠方)【臁瘡の潰爛】三四年のものには、馬牙(六)匡骨を燒いて研り、先づ土窖中の小便で數回洗つてから搽る。

脛骨 [氣味] 【甘し、寒にして毒なし】[主治] 【煆いて性を存したものは陰火を降す。中氣不足のものに用ゐて黃芩、黃連に代へ得る】(朱震亨)

（七）大觀ニ衄下ニ血字アリ。
（八）大觀ニ白崩上ニ瘻下ノ二字アリ。
（九）大觀ニ癲ヲ驚ニ作ル。

懸蹄　赤、白馬俱に使用する。〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】甄權曰く、熱なり。〔主治〕【驚邪、瘈瘲、乳難。惡氣、鬼毒、蠱疰、不祥を辟ける】(本經)【(七)衄內漏、齲齒を止める。赤馬のものは婦人の赤崩を治し、白馬のものは(八)白崩を治す】(別錄)【(九)癲癇、齒痛に主效がある】(劉本)【腸癰を療じ、瘀血、帶下を下し、蟲を殺す。又、灰に燒いて鹽少量を入れ、走馬疳蝕に摻るが甚だ良し】(時珍)　記載は鈎玄諸方にある。【赤馬のものは溫瘧を辟ける】(孟詵)

〔附方〕　舊四、新五。【損傷瘀血】腹に在るには、白馬蹄を烟が盡きるまで燒いて研末し、晝三回、夜一回、方寸匕を酒で服す。血が化して水となる。(劉涓子鬼遺方)【婦人の血痛】方は上に同じ。【五色帶下】白馬の左蹄を灰に燒き、一日三回、方寸匕を酒で服す。(外臺)【腸癰腹痛】その狀態は兩耳輪が甲錯き、腹痛し、或は臍を遶つて粟ほどの瘡があり、膿血を下すものだ。馬蹄灰を雞子白で和して塗れば毒氣を拔き出す。(千金)【蟲蝕で臍の爛れるもの】五臟が見えるやうになれば死ぬ。豬脂で馬蹄灰を和して綿で裹み、日に數回下部に導入すれば瘥える。(肘後方)【齲齒の疼痛】白馬蹄を削つて塞ぐ。三回に過ぎぬ。(千金方)【赤禿頭瘡】膿が出て晝は開

き夜は合するには、馬蹄を灰に焼いて生油で調へて塗る。(聖惠方) 【小兒の夜啼】馬蹄末を乳房に敷いて飲ます。(總錄) 【瘟疫の辟禳】 紅絹の嚢に馬蹄屑を盛つて佩びる。男は左、女は右。(肘後)

皮 〔主治〕 【婦人の臨産に赤馬の皮(一〇)が分娩を催して良し】(孟詵) 【小兒の赤禿を治す。赤馬皮、白馬蹄の焼灰を臘豬脂で和して傅けるが良し】(時珍) 記載は聖惠にある。

鬐毛 即ち騣である。一名鬣。〔氣味〕 【毒あり】 〔主治〕 【小兒の驚癇、婦人の崩中赤白】(別錄) 思邈曰く、赤には赤馬を用ひ、白には白馬を用ゐる。【灰に焼いて服すれば血を止める。惡瘡に塗る】(日華)

尾 〔主治〕 【婦人の崩中、小兒の客忤】(時珍)

〔發明〕 時珍曰く、馬尾は、濟生方の崩中を治する十灰散中に用ゐてあり、又、延壽書には『牙を刷くに馬尾を用ゐれば齒を疎損せしめる』とある。近來一般に多く焼灰で揩拭するが、最も齒齦を腐するものだから注意を要する。

〔附方〕 舊二。 【小兒の客忤】 小兒が馬毒に中つた客忤には、馬尾を焼き、その

(一〇)大觀ニ皮字下ニ銆之ノ二字アリ。

煙の前で每日熏ずる。瘥えたならば止める。(一一)(聖惠方)【腹中の蛇瘕】白馬尾を細切して酒で服す。初服には五分の一匕、次回には三分の一匕を服して更に二分の一匕を服す。頓服してはならぬ。人を殺すものだ。(千金翼)

腦 氣味 【毒あり】詵曰く、これを食へば人をして癲せしめる。

主治 【酒を斷つには、臘月のものを溫酒で服す】(孫思邈)

血 氣味 【大毒あり】詵曰く、凡そ生馬の血が人の肉中に入れば一二日にして腫起し、心に連及して死亡する。ある人は馬を剝ぎ手を傷め、血が肉に入つて一夜にして死亡した。

汗 氣味 【大毒あり】弘景曰く、瘡を患ふ人が馬汗、馬氣、馬毛、馬尿、馬屎に觸れるといづれもますます劇しくなる。詵曰く、馬汗が(一二)瘡に入り、毒が心を攻めて死せんとするものには、粟幹(一三)を燒いた灰の淋汁に浸して洗ふ。白沫が出るもので、それが毒氣である。嶺南で、ある者がこの方法を用ゐて奏效した。

附方 新二。【黥刺、雕靑】白馬汗を搽り、再び汗で水蛭末を調へて塗る。(子和)【飮酒を斷たんと欲するもの】馬汗を刮つて酒に和して服す。(千金)

(一一)大觀ニ簡要濟衆ニ作ル。

(一二)大觀ニ瘡上人字アリ。

(一三)大觀ニ幹下ニ草字アリ。

白馬溺　[氣味]【辛し、微寒にして毒あり】[主治]【消渇。癥堅積聚、男子の伏梁積疝、婦人の瘕積を破る。銅器に承けて飲む】(別錄)【頭瘡白禿を洗ひ、惡刺瘡を漬ける。日に十回し、癒えれば止める】(孟詵)【熱飲すれば反胃を治し、蟲を殺す】(時珍)

[發明]　時珍曰く、馬尿は癥瘕を治するに效驗があるもので、按ずるに、祖台之の志怪に『昔、ある人がその奴僕と共に心腹の痛む病を患つたが、僕が死んだのでそれを解剖して見ると、一疋の眼の赤い白鼈が出て來たので、活かして置いてさまざまの藥をその口に入れて見たが終に死なない。ところがある人が白馬に乘つて來てそれを見物してゐるうちに、その白馬が尿して鼈に著くと、鼈がその身を縮めたので、そこでその尿を灌いで見ると鼈は化けて水になつた。それから白馬の尿を服して疾が癒えた』とある。これがその徵效である。反胃もやはり蟲積のあるものだから、やはりこれが治する功能があるのだ。

[附方]　舊二、新七。【肉癥で肉食を欲するもの】白馬尿三升を飲む。肉を吐出するものだ。出ぬものは死ぬ。【髮を食つて瘕となつたもの】咽中に蟲がゐて上下

するやうに覺えるものがそれである。白馬尿を飮むが佳し。(千金)【伏梁心積】銅器に白馬尿一升を盛つて毎朝服するが妙である。(小品)【婦人の乳腫】馬尿を塗れば立ろに癒える。(産寶)【小兒の赤疵】身體上に生じたるには、馬尿で頻りに洗ふ。(千金)【蟲牙疼痛】その左右に隨つて馬溺を含む。三五回に過ぎずして瘥える。(千金)【骨を利し、牙を取る】白馬尿に茄の科を三日間浸して炒つて末にし、それを牙に點ければ直ちに落ちる。或は巴豆を煎じて牙に點けても落ちる。好き牙に近けてはならぬ。(鮑氏)【狐尿刺瘡】甚しく痛むものである。白馬尿を熱して漬ける。(千金)【痞塊心痛】殭蠶末二錢を白馬尿で調へて服し、並に塊に傅ける。(摘玄方)

白馬通　時珍曰く、馬屎を通といひ、牛屎を洞といひ、豬屎を零といふ。いづれもその名を諱んで呼んだものだ。すべて屎は必ず胴腸に達して出るものだから、通といひ、洞といふのであつて、胴とは廣腸のことである。

【氣味】【微溫にして毒なし】鑑源に『馬屎の煴火で一切の藥力を養ふ』とある。

【主治】【渇を止め、吐血、下血、鼻衄、金瘡出血、婦人の崩中を止める】(別錄)

【頂に敷けば衂を止める】(徐之才) 【汁を絞つて服すれば、産後の諸血氣、傷寒時疾を治す。吐、下するものである】(藏器) 【時行病が起つて陰陽を合して死せんとするものを治するには、絞汁三合を晝夜各二服する。又、杖瘡、打損傷瘡が風に中つて痛むものを治するには、炒り熱して包み、五十回熨す。極めて效がある】(孟詵) 【絞汁を灌げば中惡の卒死を治す。酒で服すれば産後の寒熱悶脹を治す。燒灰を水で服すれば久痢赤白を治す。豬脂で和して馬咬瘡、及び馬汗が瘡に入り、死馬を剝いて骨で刺傷し、毒攻で死せんとするものに塗る】(時珍) 記載は小品の諸方にある。

附方　舊五、新十五。

【吐血の止まぬもの】 白馬通を燒いて水に研り、汁を絞つて一升を服す】(梅師方) 【衂血の止まぬもの】 錄驗では、綿で白馬屎を裹んで塞ぐ。○千金では、赤馬糞の汁を絞つて一二升を飲み、並に鼻中に滴す。乾いたものを水に浸して用ゐてもよし。【口、鼻の出血】 赤馬糞を灰に燒き、一錢を溫酒で服す。(鈐方) 【久痢赤白】 馬屎一丸を灰に燒いて水で服す。(肘後方) 【中惡の卒死】 吐利して止まず、病の何なるや判明せぬには、大人、小兒に拘らず、馬糞一丸の汁を絞つて灌ぐ。乾いたものを水で煮てその汁を用ゐてもよし。これは扁鵲の法である。(肘後)

(一四)本經逢原ニ攪ヲ絞ニ作ル。

【(一四)攪腸沙痛】死せんとするには、馬糞を研つて汁を飮む。立ろに癒える。(經驗方)
【小兒の卒忤】馬屎三升を燒いて末にし、酒三斗で煮て二沸して汁を取り、それで病兒を浴し、風を避ける。(千金)【小兒の躽啼】顏が青く、腹の强するものは忤客氣である。新馬糞一團の汁を絞つて灌ぐ。(總錄)【傷寒勞復】馬屎を燒いて末にし、冷酒で方寸匕を服すればそれで效驗がある。(聖惠方)【四肢の熱毒攻】手、足が脫けるかと覺えるほど腫痛するには、馬屎を水で煮た汁に漬ける。(外臺)【風蟲牙痛】白馬屎汁を左右に隨つて含む。三口に過ぎずして癒える。(聖惠)【鼻齆で香臭を聞かぬもの】新馬屎汁を滿口に含んで灌入すれば通ずる。(聖惠)【筋骨の傷破】熱した白馬屎を傅ける。瘢がなくなる。(千金)【疔腫の傷風】腫れたるには、馬屎を炒つて瘡上を五十回熨するが極めて效がある。(聖惠方)【多年の惡瘡】或は痛痒して釁を生ずるには、馬糞、幷に齒を共に研り爛して傅ける。數回に過ぎぬ。武丞相が蜀にゐた時、脛に瘡があつて忍び難く痒かつたが、この方を用ゐて瘥えた。(兵部手集)【諸瘡の傷水】或は傷風、傷寒で劇しく痛むには、馬屎を烟に燒いて熏じ、汁を出さしむれば癒える。(千金方)【凍指で墮ちんとするもの】馬糞を水で煮て半日漬ければ癒える。

（千金）【積聚脹滿】白馬糞を蒜と共に搗いて膏にし、患部に傅ければ效がある。（活人心統）【一切の漏疾】白馬通汁を一升づつ服するが良し。（千金）

屎中の粟　主治　【金創。小兒の寒熱客忤で食事不能のもの】（蘇恭）【小兒の脇痛を治す】（時珍）○千金に馬通粟丸といふがある。

附方　舊一。【馬を剝いて毒に中つたもの】骨で刺破つて死せんとするものには、馬腸中の粟屎を搗いて傅け、屎で洗ふ。大いに效がある。絞汁を飲むもよし。（外臺）

白馬頭蛆　蟲部に記載してある。

馬絆繩　主治　【煎じた水で小兒の癎を洗ふ】（蘇恭）【燒灰を鼻中に生じた瘡に摻る】（時珍）

東行馬蹄下の土　弘景曰く、方術にこれを用ゐると、不貞な婦人の癡情關係が判る。時珍曰く、淮南萬畢術に『東行白馬蹄下の土と三戸の家の井中の泥とを合せて人の臍下に置けば、臥して起てなくなる』とある。

（一）女眞ハ鱗部無鱗魚類牛魚ノ註ヲ見ヨ。

驢（唐本草）

和名　うさぎうま
學名　Equus asinus, Linno.
科名　うま科

釋名　時珍曰く、驢は臚である。臚とは腹の前方のことで、馬は力が膊に在り、驢は力が臚に在るものだ。



〔驢〕

集解　時珍曰く、驢は頰長く、額廣く、耳磔ち、尾長く、夜鳴いて更に應じ、性善く馱負する。褐、黑、白の三色あるが、藥に入れては黑きものを良しとする。（一）女眞、遼東に產する野驢は驢に似て色が駁ち、鬃、尾が長く、骨格が太く、食つての功は驢と同じ。西方の地に產する山驢には羚羊のやうな角がある。これは羚羊の條に詳記した。東海の島中に產する海驢といふは能く水に入つて濡れぬ。又、海馬、

海牛、海豨、海獾(かいくわん)などいふ物もあつて、いづれもその皮を供用する。

藏器曰く、海驢、海馬は海のもので、皮毛を陸に置くといづれも風潮を候(み)て毛が起つ。物の性の然らしむる現象だ。

肉　已下通じて烏驢のものを用ゐるが良し。　氣味　【甘し、涼にして毒なし】思邈曰く、酸し、平なり。吳瑞曰く、驢肉を食つて荊芥茶(けいかいちや)を飲めば死ぬ。妊婦が食へば難産する。(二)鳧茈(ふし)と共に食へば人をして筋急せしめる。病死したものには毒がある。

主治　【心煩を解し、風狂を止める。酒に釀(かも)したものは一切の風を治す】(日華)【風狂、憂愁して樂まぬものに主效があり、能く心氣を安ずる。五味と共に煎て食ひ、或は汁で粥を作つて食ふ】(孟詵)【血を補し、氣を益し、遠年の勞損を治す。煮汁を空心に飲めば痔を療じ、蟲を引く】(時珍)【野驢の肉も同功である】(正要)

發明　宗奭曰く、驢肉を食へば風を動ずるもので、脂肥のものが就中(なかんづく)甚しく、屢〻その實驗がある。日華子はこれを一切の風狂を止めるといつたが、そのままには信憑(しんぴよう)し難い。

(二)鳧茈ハクロクワヰ。

(三) 風腫ハ風毒腫ノ咚、膿腫ヲ指ス。

頭肉 〔主治〕 【煮汁を二三升服すれば、多年の消渴を治して瘥えぬものなし。又、これを麹で漬けて酒に醞して服すれば、大風の動搖して伏せぬものを去る】(孟詵) 【亦た頭風、風屑を洗ふ】(日華) 【薑、虀と共に煮た汁を日毎に服すれば、黄疸であらゆる藥も治せぬものを治す】(時珍) 記載は張文仲方にある。

〔附方〕 舊一。【中風頭眩】心、肺に浮熱があり、肢軟し、骨疼き、言語がもつれ、身顫ひるには、烏驢頭一箇を普通の方法で調理し、豉汁で煮て食ふ。(心鏡)

脂 〔主治〕 【惡瘡、疥癬、及び(三)風腫に敷く】(日華) 【酒に和して三升を服すれば、狂癲で言語不能となり、意識錯亂せるを治す。烏梅と和して丸にし、多年の瘧を治す。未發時に二十丸を服す。又、生脂に生椒を和してよく搗き、綿で裹んで耳を塞げば積年の聾疾を治す】(孟詵) 【酒等分を和して服すれば卒欬嗽を治す。鹽を和して身體、手、足の風腫に塗る】(時珍) 記載は千金にある。

〔附方〕 舊一、新一。 【耳に滴して聾を治す】 烏驢脂少量、鯽魚膽一箇、生油半兩を和勻し、蔞葱の管中に七日間納れて置いて取出し、一日二回、耳中に滴す。(聖惠)
【眼中の瘜肉】 驢脂、白鹽等分を和勻し、兩の日の眥頭に注ぐ。一日三回、一个月で

痊える。（千金方）

髓　［氣味］【甘し、溫にして毒なし】［主治］【耳聾】（時珍）

［附方］新二。【多年の耳聾】重きものも兩三回、初期のものは一回用ゐれば效がある。驢の前脚の脛骨を打破り、日中に向けて瀝出する髓を瓷盒に盛つて取收め、綿に少量づつを點けて耳中に入れ、側臥して藥の行るを候つ。その髓は多く用ゐてはならぬ。白色のものを上とする。黃色のものは役に立たぬ。○又ある方では、驢髓を、針砂一合を水二合に十日間浸して取つた清水少量に和して攪き勻ぜ、少量を耳中に滴入し、外部には、四角な新磚半筒を赤く燒いて醋を潑け、それに磁石末一兩を鋪いて晩まで枕にする。此の如く三回試れば通ずる。（いづれも普濟方）

血　時珍曰く、熱血に麻油一盞を和し、攪ぜて沫を去つて煮熟すれば白色になる。これはやはり一の異常なる現象だ。昔はこの事實に言及したものがない。［氣味］【鹹し、涼にして毒なし】［主治］【大、小腸を利し、燥結を潤ほし、熱氣を下す】（時珍）

乳　［氣味］【甘し、冷利にして毒なし】思邈曰く、酸し、寒なり。

（四）［主 治］【小兒の熱急黄には、多く服して利せしめる】（唐本）【大熱を療じ、消渴を止める】（孫思邈）【小兒の熱急、驚邪・赤痢】（蕭炳）【小兒の癇疾客忤、天弔風疾】（日華）【卒心痛の腰、臍に連るには、三升を熱服する】（孟詵）【蜘蛛咬瘡には器に盛つて浸す。蚰蜒、及び飛蟲の耳に入りたるには、これを滴せば化けて水となるものだ】（藏器）【頻にこれを熱して飲めば氣鬱を治し、小兒の熱毒を解し、痘疹を生ぜぬ。黄連を浸して汁を取り、風熱赤眼に點ける】（時珍）記載は千金の諸方にある。

［附 方］舊一、新三。【心熱氣痛】黑驢乳三合を暖服し、日に再服する。（廣利方）【小兒の口噤】驢乳、猪乳各二升を一升五合に煎じて服す。（千金）【重舌で涎を出すもの】方は上に同じ。【撮口胎風】先づ兩乳の中間に三壯灸して後にこの方を用ゐれば大いに效驗がある。烏驢乳一合を用ゐ、東に引いた槐枝を長さ三寸のもの十本を取り、その一端を火で煨いて津を出し、拭き淨めてから右の乳中に浸し、その乳を取つて口中に滴す。甚だ妙である。（聖惠方）

陰莖 ［氣 味］【甘し、溫にして毒なし】［主 治］【陰を强くし、筋を壯にする】（時珍）

（四）原本［主治］ヲ脱ス。

(三)**駒衣**　[主治]　【酒を斷つには、煆いて研り、方寸匕を酒で服す】(外臺)

皮　[主治]　【膠に煎じて食へば、一切の風毒、骨節痛で呻吟して止まぬものを治す。酒に和して服するが更に良し】(孟詵)　【膠にして食へば、鼻洪吐血、腸風血痢、崩中帶下に主效がある。その生皮で瘧疾の人を覆ふが良し】(日華)　詳細は阿膠の條に記載してある。

[附方]　舊一、新一。【中風喎僻】骨疼し、煩躁するには、烏驢皮を用ゐ、毛を燖いて普通の方法で淨治し、蒸熟して豉汁中に入れ、五味を和して煮て食ふ。(心鏡)

【牛皮風癬】生驢皮一塊を朴硝で醃けてから灰に燒き、油で調へて搽る。これを一掃光と名ける。(李樓奇方)

毛　[主治]　【骨頭中の一切の風病には、一斤を黃に炒つて一斗の酒の中に投じて三日間漬け、空心に少しづつ飲んで醉はしめ、暖臥して汗を取り、翌日更に前の如くして飲む。陳倉米、麪を忌む】(孟詵)

[附方]　新二。【小兒の客忤】驢の膊上の旋毛を剪り取り、一彈子ほどを乳汁で煎じて飲む。(外臺)　【襁褓中風】驢背から前に交る脊中の毛を取り、一拇指大ほどに

(三)駒衣ハ驢馬ノ胞衣、卽エナ。

(六)腎風ハインキンタムシ。

麝香を豆ほど入れて乳汁で和し、銅器に入れて慢に炒つて末にし、乳汁で和して灌ぐ。(千金)

骨 主治 【湯に煮て歴節風を浴する】(孟詵) 【牝驢骨の煮汁を服すれば、多年の消渇を治するに極效がある】(時珍)

頭骨 主治 【灰に焼き、油で和して小兒の顱解に塗る】(時珍)

懸蹄 主治 【灰に焼いて癧疽に傅ければ膿水を散ずる。油で和して小兒の解顱に傅け、瘥えるを度とする】(時珍)

附方 舊一、新三。【(六)腎風下注】瘡を生じたるには、驢蹄二十片を灰に焼き、密陀僧、輕粉各一錢、麝香半錢と末にして傅ける。(奇效方) 【天柱毒瘡】脊大椎上に生じて大いさ錢ほどあり、赤色で水を出すものである。驢蹄二片、胡粉を熬つて一分、麝香少量を末にし、醋で和して塗り、乾くときは摻る。(聖惠) 【飲酒が原因で腸を穿ちたるもの】飲酒過度で腸に孔を穿つに至らんとするものには、驢蹄の硬い部分を水に削り下し、煮て濃汁を冷飲する。襄州の散將樂小蠻はこの方を得て奏效した。(經驗方) 【鬼瘧の止まぬもの】白驢蹄を剉んで炒り、砒霜と各二分、大黃四兩、

菉豆三分、雄黄一分、硃砂半分を研つて梧子大の丸にし、未發の早朝に二丸を冷水で服すれば止まる。七日間油を忌む。(肘後)

溺　[氣味]　【辛し、寒にして小毒あり】　[主治]　【蜘蛛咬瘡を浸すが良し】(藏器)　【反胃噎病、狂犬の咬傷、癬癘惡瘡を治す。いづれも多く飲んで瘥を取る。風蟲牙痛には頻にこれで含嗽するが良し】(時珍)　記載は千金の諸方にある。

[發明]　震亨曰く、ある婦人が噎を病んだとき、四物に驢尿を加へて與へ服ませ、それで蟲の生ずるを防いだところ、數十貼にして癒えた。

時珍曰く、張文仲の備急方に『幼年の頃、反胃を患つて羹、粥、諸物を食ふ毎に須臾にして吐出した。貞觀年中、許奉御兄弟、及び柴、蔣等の諸名醫が勅を奉じて調治したが、竟に治療不能で漸次に疲困し、もはや旦夕に絶命を候つといふ有樣だつた。ところが不圖ある衞士が「驢の小便を服むと極めて效驗がある」といつたのを聞き、早速二合を服して後に食事を攝つて見ると、從前の半分ほど吐いただけで止み、晡時に再び二合を服して粥を食つて見ると、それで定まつた。翌日その效果の次第を奏上すると、折柄宮中に五六人反胃を患ふ人があつて、同樣にこれを服して

（七）白玷風ハ白癜風ノコトヲ云フ。

いづれも瘥えた。この物はやや有毒だから、服する時過多にならぬやう注意を要し、熱飲すべきものである。病の深きものも七日にして效が現れるものだ。その後屢〻用ゐて效驗を擧げた』とある。

附方　新三。【狐尿刺瘡】烏驢尿を頓に熱して漬ける。（千金）【（七）白玷風】驢尿、薑汁等分を和勻して頻に洗ふ。（聖濟錄）【耳聾】人中白一分、乾地龍一條を末にし、烏驢駒尿一合と和勻して瓷器に盛り、少量づつを耳に滴入する。（聖惠）

屎　主治　【熬つて風腫、漏瘡を熨す。絞つた汁は心腹疼痛、諸疰忤、癥癖、反胃の止まぬもの、牙齒痛に主效がある。水腫を治するには五合づつを服するが良し】——人の身體上に爪の痕を附けて文字を畫いたやうに現れるものは燥水である。牝驢屎を用ゐる。文字のやうに現れぬものは溼水である。駁驢屎を用ゐる——（唐本）【燒灰を鼻に吹けば衄を止めるに甚だ效がある。油で和して惡瘡、濕癬に塗る】（時珍）

附方　新四。【卒心氣痛】驢屎の汁五合を絞つて熱服すれば止む。（肘後方）【經水の止まぬもの】及び血崩。黑驢屎を燒いて性を存し、麪糊で梧子大の丸にし、五七十丸を空心に黃酒で服するが神妙である。（集雲林醫鑑）【疔瘡中風】腫痛するに

は、驢屎を炒つて瘡上を五十回熨すれば極めて效がある。（普濟方）【小兒の眉瘡】黑驢屎を燒いて研り、油で調へて塗る。立ろに效がある。（聖惠方）

耳垢　［主治］【刮り取つて蠍螫に塗る】（崔氏）

尾（八）**軸垢**　［主治］【新久瘧の定期なきものには、水で洗つた汁で麪を和し、彈丸ほどの二箇の燒餅にし、未發前に一箇を食ひ、發作したとき一箇を食ふが效がある】（恭）

溺下泥　［主治］【蜘蛛傷に傅ける】（藏器）

驢槽　［主治］【小兒がむづかり哭いて止まぬには、姓の異ふ三人の婦にその兒を抱いて槽に臥させ、相當時刻が經てば止む。人に知らせぬやうにする】（藏器）

［發明］時珍曰く、錦囊の詩に『蟹を繫ぎ門に懸けて鬼疾を除き、驢を畫き壁に挂けて兒啼を止める』とある。これは關西地方では蟹殼を懸けて邪瘧を辟け、江左地方では倒に驢を畫いて挂けて夜啼を止めることを言つたものだ。驢槽で哭を止めると同じ意味で、いづれも厭禳の法である。

（八）大觀ニ尾ト軸トノ間ニ下字アリ。

騾（食鑑）

和名　らば（牡驢ト馬ト交尾シテ生ズルモノ）
英名　Mule
科名　うま科

【釋名】時珍曰く、騾は、古文では驘と書いた。馬に從ひ驘に從ふの諧聲である。

【集解】時珍曰く、騾は驢より大きくして馬よりも健く、その力は腰に在る。その後部には鎖骨があつて開けないところから子を產まないものだ。その類に五種あつて、牡驢と馬と交尾して生ずるものが騾である。牡馬と驢と交尾して生ずるものをば駃騠——音は決題（ケツタイ）——といひ、牡驢と牛と交尾して生ずるものをば馲駈——音は宅陌（タクハク）といひ、牡牛と驢と交つて生ずるものをば驕驉——音は謫蒙（タクモウ）——といひ、牡牛と馬と交尾して生ずるものをば駏驢といふのであるが、今は俗に通じて騾と呼んでゐる。

肉【氣味】【辛く苦し、溫にして小毒あり】甯原曰く、騾は性の頑劣なもので、肉は人體に益せぬ。妊婦が食へば難產する。

時珍曰く、古法には騾は用ゐられなかつたものだが、近頃は小說などに記述されてその方があるさうだ。按ずるに、呂氏春秋に『趙簡子は白騾を所有して甚だ愛してゐた。その臣陽城の胥渠が病のとき、醫師が「白騾の肝が手に入れば生きるが、さもなくば死ぬ」といつたのを簡子が聞いて「畜を殺して人を活すならば、それは結構なことではないか」といつて、騾を殺し肝を取つて胥渠に與へた。病はそれで癒えた』とある。これもやはり鬚を剪つて功臣を救つたといふ話と同じやうなことだが、此に記錄して醫療上の參考に供する。

蹄　主治　【難產には、灰に燒いて麝香少量を入れ、一錢を酒で服す】（普濟方）

屎　主治　【打損諸瘡、破傷中風で腫痛するには、炒り焦して裹んで熨し、冷えれば易へる】（時珍）

駝（宋開寶）

和名　らくだ
學名　Camelus bactrianus, Linno.
科名　らくだ科

釋名　**橐駝**（漢書）　**駱駝**　時珍曰く、駝は能く囊橐を負ふものだからかく名

(一)塞北ハ蒙古地。河西ハ陝西省ノ北半部。

(二)毼ハケムシロ。

(三)伏流トハ河流ガ地下ニ潛入シテ水ノ所在不明トナルモノニシテ沙漠地ニ多キ現象ナリ。

(四)露明トハ眼睛ノ突出シテヰルモノヲ云フ。

(五)于闐ハ石蜜玉ノ

けたので、地方音で駱駝と訛つたのだ。

集解 馬志曰く、野駝、家駝は(一)塞北、河西に產する。その脂は兩峯內に在るものだ。藥用としてはいづれもよし。



〔駝〕
── 野駝も同じ ──

頌曰く、野駝は西北の番界だけに產する。家駝といふは人家中に蓄養されて生息するもので、藥用としては野駝に及ばない。

時珍曰く、駝は馬のやうな狀態のもので、頭は羊に似て項長く耳垂れ、脚に三節あり、背に二箇の肉峯があつて鞍の形のやうになつてゐる。蒼、褐、黃、紫の數色があり、その嘶聲は圝と聞え、物を食ふにはやはり齝す。その性は寒に耐へ熱を惡むものだ。故に夏至には毛が減つて全部なくなる。その毛は(二)毼になる。その糞烟はまた直上に揚つて狼烟のやうに見える。その力は能く重きものを

負ふもので、千斤までも負ふて一日に二三百里を行く。又、能く泉源、水脈、風候を知るもので、凡そ(三)流が伏して水の所在が判らなくなつたとき、駝が足で踏む場所を掘つて見ると必ず水がある。大沙漠地には夏期に熱風が多く、旅行者がこれに襲はれるとそのために死亡するものだが、その熱風の襲來せんとするときは駝は必ず聚つて鳴き、口、鼻を沙中に埋めるので的確に豫知し得るものだ。駝の臥したとき腹が地に著かず、屈足し(四)露明のものをば明駝と名ける。最も能く遠路を行くものだ。(五)于闐には風脚駝といふがあつて、その歩速の疾きこと風の如く、一日に千里を行く。(六)土番には獨峯駝といふがあつて、西域傳に『(七)大月氏に一封駝といふを産する。脊上に一箇の峯のやうな隆起があつて封土のやうに見える。故に俗に封牛と呼ぶ。また犝牛ともいふ』とあり、穆天子傳にはこれを犎牛といつてある。嶺南の(八)徐聞縣、及び海、康のいづれにも産する。南史に『(九)滑國に兩脚駝といふがある』とあるそのものに就いては、諸家の說に未だ聞かざるところだ。

駝脂　即ち駝峯脂であつて、肉峯の中にある。これを峯子油といふ。藥用としては野駝のものを良しとする。宗奭曰く、家駝の峯、蹄は最も精なるものだ。世間で

註ヲ見ヨ。
(六)土番ハ禽部原禽類伏翼ノ註ヲ見ヨ。
(七)大月氏ハ古ノ國名、印度ノ恒河流域、カシミール、アフガニスタン、及ビ葱嶺東西ノ地ヲ領有ス。
(八)徐聞縣、今ハ廣東省高雷道ニ屬ス。海州ハ石部鹵石類食鹽ノ註、康州ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。
(九)滑國トハ五世紀ヨリ六世紀ニ亙リ、烏許水ヲ中心トシテ疏勒、康居、安息、大月氏ヲ征服シ、西ハ裏海、北ハシル河、東ハ于闐、南ハ印度河流域ヲ海ニ達スル廣大ノ地ヲ領有シタル嚈噠(エフタル)國ヲ指シタルモノノ如ク、滑國ナル稱ハソノ都城ナル大唐西域記ノ活國、即チ昆部斯城ノ地ヲ以テ稱セルモノナラント思ハル。

（二〇）糟食トハ酒糟ニテ漬ケタル食物ヲイフ。

（二一）大觀ニ肌ヲ皮ニ作ル。

（二二）戎人トハ西北方ノ蠻夷地方ヲ指ス。

は多く煮熟し、（二〇）糟食とする。［氣味］【甘し、溫にして毒なし】鑑源に曰く、能く五金を柔にする。［主治］【頑痺、風瘙、惡瘡、毒腫、死肌、筋皮の攣縮、筋骨の踠損には、火で炙つて摩す。熱氣を取り肉に透る。また米粉を和して煎餅にして食へば痔を療ずる】（開寶）【一切の風疾、皮膚の痺急、及び惡瘡腫、潰爛を治す。いづれも藥を和して傅ける】（大明）【虛勞風に冷積あるものに主效がある。燒酒で調へて服す】（正要）

［附方］ 新一。【周痺】野駝脂を錬淨して一斤に好酥四兩を入れて和勻し、每服半匙から一匙まで增加して一日三回服す。（聖濟總錄）

肉 ［氣味］【甘し、溫にして毒なし】［主治］【諸風に氣を下し、筋骨を壯にし、（二一）肌膚を潤ほし、惡瘡に主效がある】（大明）

乳 ［氣味］【甘し、冷にして毒なし】［主治］【中を補し、氣を益し、筋骨を壯にし、人をして饑ゑざらしめる】（正要）

黃 ［氣味］【苦し、平にして微毒あり】［主治］【風熱、驚疾】（時珍）

［發明］ 時珍曰く、駱駝の黃は牛黃に似てゐるが香しくない。（二二）戎人はこれ

を牛黃の贋物にするが、功力は牛黃に及ばない。

毛　主治　【婦人の赤白帶下に最も良し】(蘇恭)　【頷毛(がんもう)は痔を療ずる。灰に燒いて方寸匕を酒で服す】(時珍)　記載は崔行功の纂要にある。

附方　新一。【陰上の疳瘡】駝絨を灰に燒いて水で澄し、炒つた黃丹等分を入れて末にして搽る。卽效がある。(龔氏經驗方)

屎　主治　【乾して研り、鼻に嗃(か)へば衄を止める】(寇宗奭)　【烟に燒けば蚊、虱(しらみ)を殺す】(博物志)

(二)酪　音は洛(ラク)である。(唐本草)

和名　にうし(乳脂)
英名　Milk-fat of beast.

釋名　**湩**　音は董(ドウ)である。

集解　恭(きょう)曰く、牛、羊、水牛、馬の乳はいづれも酪に作り得る。水牛乳で作つたものは濃厚で味が犛牛(りぎゅう)に勝る。馬乳で作つた酪は性が冷であり、驢乳は就中冷であつて酪には作るに堪へない。

藏器曰く、酪には乾と濕とあつて、乾酪が更に強い。

(二)乳脂ノ例、乾酪、英名チース。濕酪、英名バツター。

(二)潼北トハ四川省潼川府北一帶ノ地ヲ指ス。

(三)飲膳正要ニ飴ニ作ル。

時珍曰く、酪は(二)潼北地方で多く造る。水牛、㹀牛、犛牛、羊、馬、駝の乳、いづれも作り得るのだが、藥用には牛酪を以て勝れたものとする。蓋し牛は乳がやはり多いからだ。按ずるに、飲膳正要に『製造法は、乳半杓を鍋の中で炒り、その餘の乳を入れて熬つて數十沸し、常に杓で縱橫に攪きまぜ、それを傾け出して罐に盛り、冷えるを待つて浮皮を掠め取つてそれを酥にし、舊い酪少量を入れて紙で封じてそのまま置けば出來る。又、乾酪の法は、酪を曬結して浮皮を掠め取り、再び晒して皮がなくなつたとき釜に入れて少時炒り、それを器に盛り、曝して塊になつたとき取收めて用ゐる』とある。

〔氣味〕【甘く酸し、寒にして毒なし】時珍曰く、水牛、馬、駝の酪は冷である。㹀牛、羊の乳の酪は溫である。詵曰く、冷を患ひ、痢を患ふものは食つてはならぬ。羊乳酪を(三)酢と合せて食へば上瘕となる。

〔主治〕【熱毒に渴を止め、解散し、發利し、胸中の虛熱、身體、面部の熱瘡、肌瘡を除く】(唐本)【煩渴熱悶、心膈熱痛を止める】(日華)【燥を潤し、腸を利し、腫を摩し、精血を生じ、虛損を補し、顏色を壯にする】(時珍)

【發明】時珍曰く、按ずるに、戴原禮は『乳酪は血液の屬であつて、血燥に宜きところのものだ』といつた。

【附方】舊三。【火丹癮疹】酪に鹽を和して煮熟し、それで摩すれば消する。（千金翼）【蚰蜒の耳に入りたるとき】華佗方では、牛酪を灌入すれば出る。腹に入つたものの場合には、一二升を飲めば化けて黃水となる。（廣利方）【馬が黑汗を出す場合】乾酪を水に化して灌ぐ。（藏器）

酥（別錄上品）

和名　ちちのまく（乳ノ膜、乳皮膜）
英名　Membranes of milk.

【釋名】酥油　北方の番族では馬思哥油と名ける。

【集解】弘景曰く、酥は外國に產し、やはり涼州から來る。本來は牛、羊の乳で作つたものだ。

恭曰く、酥は酪で作り、その性は酪と異ふのだが、牛酥は羊酥に勝り、その牛酥の內でも犛牛酥はまた家牛に勝る。

思邈曰く、犛牛、犛牛の乳のものを上とし、白羊のものがこれに次ぐ。

○詵曰く、水牛酥と羊酥とは同功で、その羊酥は牛酥に勝る。

○汪機曰く、牛乳は冷、羊乳は溫であつて、牛酥は寒を離れないから病の熱を兼ねるものに適し、羊酥は溫を離れないから病の寒を兼ねるものに適し、それぞれ特長がある。犛酥は勝れたものに相違ないが得難いものだ。

○時珍曰く、酥なるものは酪の表面に浮ぶもので作つたものだ。今は一般に白羊脂を雜ぜてあるから辨別に注意を要する。按ずるに、臞仙の神隱に『製造法は、乳を鍋に入れて煎じ、二三沸して盆内に傾け入れ、冷えてから表面に皮が結するを待つてその皮を取り、再び油を煎じ出し、滓を去つて鍋に入れて置けば酥油となる』とある。ある法では、乳を桶に盛り、木に板を著けて半日搗き、焦沫の出るものを撇め取り、焦皮を去れば酥となる。凡そ藥に入れるには微火で溶化し、濾淨して用ゐるが良し。

沙牛、白羊酥　氣味　【甘し、微寒にして毒なし】　主治　【五臟を補し、大、小腸を利し、口瘡を治す】(別錄)【胸中の客熱を除き、心、肺を益す】(思邈)【心熱、肺痿を除き、渇を止め、嗽を止め、吐血を止め、毛髮を潤ほす】(日華)【虛勞を

益し、臟腑を潤ほし、肌膚を澤かにし、血脈を和し、急痛を止め、諸瘡を治す。溫酒に化して服するが良し】(時珍)

犛牛酥　【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【諸風濕痺を去り、熱を除き、大便を利し、宿食を去る】(思邈)【諸膏に合せて風腫、踠跌、血瘀を摩す】(藏器)

【發明】時珍曰く、酥の本來は乳液であつて、燥を潤ほし、營を調へ、血と同じである。按ずるに、生生編に『酥は能く腹內の塵垢を除く。又、毒氣を追ふて毛孔の間に發出するものだ』とある。

【附方】舊二、新一。【蜂螫】酥を塗るが妙である。(聖惠)【蟲咬】酥に血を和して塗る。(聖惠方)【眯目】酥少量を左右に隨つて鼻中に納れ、少頃の間頭を垂れて目中に流中せしめる。その物は淚と共に出る。(聖濟總錄)

醍醐　(唐本草)　和名　にうしゆ(乳酒)　英名　Kefir or koumiss.

【集解】弘景曰く、佛書に『乳は酪となり、酪は酥となり、酥は醍醐となる』とあつて、色が黃白で、餅に作つて甚だ甘肥なものがそれである。

恭曰く、醍醐は酥中から出るものであつて、酥の精液である。好酥一石に三四升の醍醐があるもので、熱し拌ぜ煉つて器中に貯へ、凝るを待つてその中に底に届くまで孔を穿つて置くと津が出る、それを取つたものである。陶氏が『黄白で、餅に作る』といつたのは事實によく通じて居らぬ說である。

韓保昇曰く、酥の中で、盛冬にも凝らず、盛夏にも融けずに在るものがそれだ。

宗奭曰く、酪を作る際に、上に一重凝るものが(一)酥であつて、(二)酥の上に(三)油のやうになるものが醍醐である。熬れば出るものだが多く得られない。極めて甘美なものだ。使用する場合はやはり少い。

斅曰く、醍醐なるものは酪の漿である。凡そ用ゐるには、重綿で濾過し、銅器で煎じて兩三沸して用ゐる。

藏器曰く、この物は性が滑で物に盛るとみな透るが、ただ雞子殼、及び壺盧に盛れば出ない。

氣味 【甘し、冷、利にして毒なし】 主治 【風邪、痺氣。骨髓を通潤する。摩藥になるもので、功は酥に優る】(唐本) 【精を添へ、髓を補し、中を益し、骨

(一)大觀、酪面ニ作ル。
(二)大觀ニ酪面ニ作ル。
(三)大觀ニ如油ノ上ニ其色ノ二字アリ。

を塡て、久しく服すれば天年を延べる。百錬すればいよいよ佳し】(孫思邈)【驚悸、心熱、頭疼に主效があり、目を明にする。腦の頂心に傅ける】(日華)【月蝕瘡を治し、瘡痂を潤養するに最も宜し】(宗奭)

【發明】 機曰く、酥、酪、醍醐は、性が概してみな潤滑なもので、血熱枯燥の人に適する。その功もやはり甚だ著しき相異はない。

【附方】 舊三、新二。【風虛濕痺】醍醐二兩を用ゐ、溫酒で一匙づつを服すれば效がある。(心鏡)【中風(四)煩熱】皮膚の瘙痒するには、醍醐四兩を用ゐ、一日一回半匙づつを溫酒で和して服す。【一切の肺病】咳嗽濃血の止まぬもの。好酥五(五)十斤を三遍煉ると醍醐が出るものだ。それを一日三回、一合づつ服し、瘥えるを度とする。神效がある。(六)(外臺方)【鼻中の涕血】三度煉つた酥中の精液を取り、日中三回、夜間一回、鼻中に灌ぐが良し。(外臺)【小兒の鼻塞】通ぜずして乳を飲めぬには、劉氏は、醍醐二合、木香、零陵香各四分を湯煎して膏にし、頭に塗り、并に鼻中を塞ぐ。(外臺)

(四) 大觀ニ寒ニ作ル。
(五) 大觀ニ十ノ字ナシ。
(六) 大觀ニ心鏡ニ作ル。

乳腐（宋嘉祐）

和名　らくたい（酪體）
英名　Curd.

釋名　乳餅

集解　時珍曰く、諸乳いづれも造り得るが、今はただ牛乳で造つたものだけを勝れたものとする。臞仙の神隱書に『乳餅を造る法は、牛乳一斗を絹で濾して釜に入れ、煎じて五沸して水で解き、醋を點し入れて豆腐の製法のやうにすると、漸次に結成する。それを漉し出し、帛で裹んで石で壓し、鹽を入れて甕底に收める。○又、乳團を造る法は、酪五升を煎滾して冷漿水半升を入れると必ず自ら塊になる。まだ塊らぬときは更に漿一盞を入れ、塊つたとき帛で包み搦め、乳餅のやうにして收める。○又、乳線を造る法は、牛乳を盆に盛り、晒して四邊に清水が出るやうになつたとき、煎じ熱して酸漿を點じて凝成させ、漉し出して數回揉み擦り、それを扯して塊にし、また釜に入れて盪し、取出して薄皮に捻成し、竹簽で數回捲扯し、掤定して晒乾し、油で燥熟して食ふ』とある。

氣味　【甘し、微寒にして毒なし】詵曰く、水牛乳は涼、犛牛乳は溫である。

【主治】〔五臓を潤ほし、大、小便を利し、十二經脈を益し、微しく氣を動ずる〕(孟詵) 〔赤、白痢を治するには、豆ほどの大いさに切つて麪を拌ぜ、酸漿水で煮て二十沸して頓服する。小兒が服すればいよいよ良し〕(蕭炳)

【附方】新一。〔血痢の止まぬもの〕乳腐一兩を漿水一鍾で煎じて服す。(普濟方)

阿膠 (本經上品)

和名 にかは
英名 Gelatin of Beast.

【釋名】傅致膠(本經) 弘景曰く、東阿に産するから阿膠と名けたのだ。

時珍曰く、阿井は今の山東兗州府陽穀縣の東北六十里に在る。卽ち古の東阿縣だ。そこには官舍があつて禁制となつてゐる。酈道元の水經註に『東阿にある井は大いさ輪ほどで、深さ六七丈あり、毎歲常に膠を煮て天府に貢納する』とあるが卽ちこの井だ。その井は濟水が注ぐところで、その井水を取つて煮た膠で濁水を攪ぜると淸む。故に人がこれを服すると、膈に下つて痰を疎し、吐を止める。蓋し濟水は淸くして重く、その性が下に趨る。故に淤濁、及び逆上の痰を治するのだ。

【集解】別錄に曰く、阿膠は東平郡の東阿縣に産する。牛皮を煮て作るものだ。

弘景曰く、今は(一)東都でやはり能く作る。用ゐる皮の老と少とで膠に清と濁とある。熬る時に必ず一片の鹿角を用ゐてそれで膠と成るので、さうせねば成らない。膠に三種あつて、清んで薄いものは畫家が用ゐ、清んで厚いものは覆盆膠と名けて藥に入れて用ゐる。濁つて黑いものは藥には入れず、ただ物に膠づけるだけのものだ。



〔阿膠〕

頌曰く、今は(二)鄆州でも能く作る。阿縣城北の井水で煮たものが眞物だが、その井は官禁で、眞膠は極めて得難い。商品は多くは僞物だ。膠は烏驢皮を阿井水で煎じて作つたものだけが佳いのである。當今方家で用ゐてゐる黄明膠は多くは牛皮であつて、本經にも阿膠はやはり牛皮を用ゐるとある。この二皮は通用してよいので

(一) 東都ハ河南洛陽。郡トアルハ或ハ部ノ誤カ。

(二) 鄆州ハ草部山草類赤箭天麻ノ註ヲ見ヨ。

あるが、ただ現今の牛皮膠は製作が甚だ粗末でただ物を膠づけるに役に立つだけだ。故に藥に入れるに堪へない。陳藏器が『諸膠いづれもよく風を療じ、泄を止め、虚を補するが、驢皮膠は風の主治に於て(三)最たるものだ』といつたのは此の阿膠であつて、諸膠に勝る所以である。

時珍曰く、凡そ諸膠を造る時期は十月から二三月までであつて、沙牛、水牛、驢の皮のものを上とし、豬、馬、騾、駝の皮のものがこれに次ぎ、それ等の舊皮や、鞋履等のものを下とする。いづれも生皮を取つて水に四日浸し、洗ひ刮つて極めて淸淨にし、熬煮して時時に攪きまはしながら絶えず水を添へ、爛れたとき汁を濾し、再び熬つて膠に成るので、それを盆に傾け入れて凝るを待つのであつて、その盆の底に近い部分を坌膠と名ける。膠を煎じた水の鹹く苦いものを妙とする。概して古方で用ゐてあるものは多くは牛皮であつて、後世には驢皮を貴んでゐる。僞造物はいづれも馬皮や舊革、鞍、靴の類を雜ぜるので、その氣が濁臭で藥に入れるに堪へない。黄透にして琥珀のやうな色のもの、或は光黒で瑿漆のやうなものを眞物とすべきであつて、眞物ならば皮臭がなく、夏期にも濕軟にならない。

(三)綱目、最チ是ニ作ル誤ナリ。大觀ニ據リ之チ改ム。

(四)洗、大觀ニ先ニ作ル。

(五)痛、本經ニ疼ニ作ル。

修治 弘景曰く、凡そ用ゐるには、いづれも火で炙る。

斅曰く、凡そ用ゐるには、(四)洗つて豬脂に一夜浸して取出し、柳木火上で炙燥(しやさう)し、研つて用ゐる。

時珍曰く、今の方法では、或は炒つて珠にし、或は麪で炒り、或は火で炙り、或は蛤粉(かふふん)で炒り、或は草灰で炒り、或は酒で化して膏にし、或は水で化して膏にする。それぞれその與へられた方に從ふべきものである。

氣味 【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、微温なり。張元素曰く、性は平、味は淡であつて、氣、味共に薄く、浮にして升る、陽であつて、手の少陰、足の少陽、厥陰の經に入る。○火を得て良し。薯蕷(しよよ)が使となる。大黄を畏れる。

主治 【心腹內崩、極端に勞して洒洒——音は蘚(セン)——として瘧の如き狀態となり、腰腹痛し、四肢酸(五)痛するもの、婦人の下血。胎を安ずる。久しく服すれば身を輕くし、氣を益す】(本經)【男子の小腹痛、虛勞羸瘦(るゐさう)、陰氣不足、脚酸で久しく立つ能はざるもの。肝氣を養ふ】(別錄)【筋骨を堅くし、氣を益し、痢を止める】(藥性)頌曰く、洩痢を止めるには、黄連(わうれん)、蠟を配合するが尤も佳し。【吐血、衄

血、血淋、尿血、腸風下痢、婦人の血(六)痛、血枯、經水不調、子無きもの、崩中帶下、産前産後の諸疾、男女一切の風病、骨節疼痛、水氣浮腫、虛勞の咳嗽、喘急、肺痿で膿血を唾するもの、及び癰疽腫毒を療ず。血を和し、陰を滋くし、風を除き、燥を潤ほし、痰を化し、肺を淸し、小便を利し、大腸を調へるの聖藥である」(時珍)

【發明】藏器曰く、諸膠いづれも風に主效があり、洩を止め、虛を補するが、驢皮のものは風の主效に於て最たるものだ。

宗奭曰く、驢皮で煎じた膠は、その皮膚の外に發散する點を取るのである。烏きものを用ゐるは、烏色は水に屬し、それで熱を制すれば風を生ずるの意味を取るのである。烏蛇、烏鴉、烏雞の類の如きもみなさうである。

時珍曰く、阿膠は大體に於てただ血と液とを補するものだ。故に能く肺を淸し、陰を益して諸證を治するのである。按ずるに、陳自明は『虛を補するには牛皮膠を用ゐ、風を去るには驢皮膠を用ゐる』といつた。成無己は『陰不足のものは補するに味を以てする。阿膠の甘は陰血を補するものだ』といつた。楊士瀛は『凡そ喘嗽を治するには、肺虛と肺實と、下すべきと溫むべきとを論ぜず、必ず阿膠を用ゐて

(六) 本草洞詮ニ崩ニ作ル。

(七)大觀ニ別字下ニ貯字アリ。

肺を安じ、肺を潤すべきものだ。その性が和平であつて肺の經の要藥である。小兒の驚風の後、瞳人の正しからぬものには、阿膠で人參を倍にして煎じて服するが最も良し。阿膠は神を育み、人參は氣を益するのである。又、痢疾は多く傷暑伏熱に因つて起るものだ。阿膠は太腸の要藥であつて、熱毒、留滯あるものの場合に能く疎導する。熱毒、留滯が無ければ平安になるものだ』といつた。これ等の數說は以て阿膠の蘊を發明するに足る。

【附方】 舊四、新十四。【癱緩偏風】癱緩風、及び諸風の手脚不遂、腰脚無力を治するには、驢皮膠を微し炙熟し、先づ葱豉粥一升を煮、(七)別にまた水一升で香豉二合を煮て滓を去り、それに膠を入れて更に煮て七沸し、膠が烊けて餳のやうになつたとき頓服し、それから先に煮た葱豉粥を暖めて喫ふ。かく三四劑を用ゐれば止まる。その場合粥の冷えたものを喫つては嘔逆するものだ。(廣濟方)【肺風喘促】涎が潮し、眼の竄するには、透明の阿膠を切つて炒り、紫蘇、烏梅肉を焙じ、研つて等分を水で煎じて服す。(直指)【老人の虛祕】阿膠を炒つて二錢、葱白三根を水で煎じ、蜜二匙を化し入れて溫服する。【胞轉淋閟】阿膠三兩、水二升を七合に煮て溫

服する。（千金方）【赤、白痢疾】黄連阿膠丸――腸、胃の氣虚で、冷熱調はず、赤、白を下痢し、裏急厚重し、腹痛し、小便の利せぬには、阿膠を炒つて水で化して膏にしたもの一兩、黄連三兩、伏苓二兩を末にし、搗いて梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを粟米湯で服す。（和劑局方）【吐血の止まぬもの】千金翼では、阿膠を炒つて二兩、蒲黄六合、生地黄三升、水五升を三升に煮て分服する。○經驗では、大人、小兒の吐血を治す。阿膠を炒り、蛤粉と各一兩、辰砂少量を末にし、藕節の搗汁に蜜を入れたもので調へて服す。【肺損嘔血】幷に胃を開く。阿膠を炒つて三錢、木香一錢、糯米一合半を末にし、一日一回、一錢づつを百沸湯に點てて服す。（普濟）【大衄の止まぬもの】口、耳倶に出すには、阿膠を蒲黄半兩で炒り、毎服二錢を水一盞、生地黄汁一合と合煎し、六分に煎じて溫服し、急に帛で兩乳を繫る。（聖惠）【月水不調】阿膠一錢を蛤粉で炒つて珠にし、研末して熱酒で服すれば平安になる。ある方では、辰砂末半錢を入れる。【月水の止まぬもの】阿膠を炒り焦して末にし、二錢を酒で服す。（祕韞）【妊娠尿血】阿膠を黄に炒つて末にし、食前に二錢を粥飲で服す。（聖惠）【妊娠血痢】阿膠二兩、酒一升半を一升に煮て頓服する。【妊娠下血】止

まぬには、阿膠三兩を炙いて末にし、酒一升半で煎じ化して服すれば癒える。○又ある方では、阿膠末二兩、生地黄半斤の擣汁に清酒二升を入れ、三回に分服する。(梅師方)【妊娠胎動】刪繁では、阿膠を炙き研つて二兩、香豉一升、葱一升を用ゐ、水三升で一升に煮取つて膠を入れて化して服す。○產寶では膠艾湯——阿膠で炒つた熟艾葉二兩、葱白一升、水四升を一升に煮て分服する。【產後の虛閟】阿膠を炒り、枳殼を炒つて各一兩、滑石二錢半と末にし、蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを溫水で服す。なほ通ぜぬときは再服する。(和劑局方)【年を經た久嗽】阿膠を炒り、人參と各二兩を末にし、毎服三錢を豉湯一盞、葱白少量を煎じて服す。一日三回。(聖濟總錄)

黃明膠(綱目)

和名 うしのにかは(牛皮膠)
英名 Gelatin of neat.

【釋名】**牛皮膠**(食療) **水膠**(外臺) **海犀膏**

【正誤】權曰く、白膠、一名黃明膠。

頌曰く、當今方家で用ゐてゐる黃明膠は多くは牛皮であつて、本經の阿膠もやは

り牛皮を用うとある。この二膠はやはり通用するのだが、ただ今の牛皮膠は製作が粗末だから用ゐるに堪へない。ただ物を膠づけるに用ゐるだけだ。而して鹿角膠は本經では白膠といつてある。處處で能く作るが、ただ功は牛膠に倍すといふのだから眞物は鮮いのである。

時珍曰く、按ずるに、本經には、白膠、一名鹿角膠、鹿角を煮て作る。阿膠、一名傅致膠、牛皮を煮て作るとあつて、その說明が甚だ明だ。黃明膠とは卽ち今の水膠のこと、牛皮で作つたもので、その色が黃にして明なものだ。白膠ではない。ただ阿井水で作つたものでないだけのことだ。甄權は黃明膠を鹿角白膠とし、唐愼微は又、黃明の諸方を采つてそれに附したが、いづれも誤である。ここにその誤を正して阿膠の後に附した。但しその功用はやはり阿膠と彷彿たるもので、苟も阿膠の手に入らなかつた場合には眞牛皮膠をやはり權りに用ゐて差支ない。その性味はいづれも平、補であつて、虛熱に適する。鹿角膠ならば性味が熱補であるから、虛熱の者に適するものではない。その區別に愼重な注意を要する。

氣味　【甘し、平にして毒なし】　**主治**　【吐血、衄血、下血、血淋、下痢、

妊娠胎動で血の下るもの、風濕の走注疼痛、打撲傷損、湯火灼瘡、一切の癰疽腫毒。血を活し、痛を止め、燥を潤ほし、大、小腸を利す】（時珍）

【附方】 新二十四。【肺痿吐血】黄明膠を炙き乾し、花桑葉を陰乾して各二兩を研末し、毎服三錢を生地黄汁で調へて服す。（普濟方）【肺破出血】或は嗽血して止まぬには、海犀膏、卽ち水膠一大片を黄に炙り、酥を塗つて再び炙つて研末し、白湯に三錢を化して服すれば止まる。（斗門方）【吐血、咯血】黄明膠一兩を切片して黄に炙り、新綿一兩を焼いて研り、一日二回、食後に一錢づつを米飮で服す。（食療）【衄血の止まぬもの】黄明膠を耎に盪して山根に貼る。髮際まで貼る。（三因）【妊娠下血】黄明膠二兩を酒で煮化して頓服する。（肘後方）【欬嗽の瘥えぬもの】黄明膠を炙いて研り、毎服一錢、人參末三錢、薄豉湯二盞、葱白少量を煎沸して嗽ぎ、時に溫めて呷ふ、三五口で止む。（食療）【腎虛失精】水膠三兩を研末し、酒二盌で化して服す。一日三服。（千金）【顏面の木痺】牛皮膠を化して桂末を和し、厚く塗る。一二分に塗るが良し。（葉氏摘玄方）【寒濕脚氣】牛皮膠一塊を細切し、麪で炒つて珠にして研末し、毎服一錢を酒で服す。その痛は立ろに止む。（萬氏）【風濕走痛】牛皮膠一兩、

薑汁半盃を共に化して膏にし、紙に攤して熱貼し、冷えれば易へる。甚だ效がある。一には乳香、沒藥一錢を加へる。（鄧筆峯方）【脚底の木硬】牛皮膠、生薑汁を化開して南星末を調へ、脚底に塗つて物を烘いて熨す。【尸脚拆裂】膠を烊して布に著け、烘いて貼る。（千金方）【破傷中風】黃明膠を燒いて性を存して研末し、酒で二錢を服して汗を取る。（普濟方）【跌撲傷損】眞牛皮膠一兩、乾冬瓜皮一兩を剉み、共に炒つて性を存して研末し、五錢づつを熱酒一鍾で調へて服し、同時に酒二三鍾を飲み、暖臥して微し汗すれば痛が止み、一宿にして故の通りに接がる。（蘭氏）【湯火傷灼】水で膠を煎じて糊のやうにし、冷して掃き塗る。（斗門）【一切の腫毒】已に成りたるもの、まだ成らぬもの。水膠一片を水に漬けて耎にし、頭に當る部分に孔を開けて貼る。まだ化膿せぬものは自消し、已に潰れたものは膿を自ら出す。（王燾外臺秘要）【諸般の癰腫】黃明膠一兩を水半升に化開し、黃丹一兩を入れて煮匀ぜ、翎につけて上に掃く。瘡口のまだ成らぬものにはその四圍に塗れば自消する。（本事方）【便毒の初期】水膠を溶化して塗れば散る。（直指方）【乳癤の初發】黃明水膠を濃醋に化して塗る。立ろに消く。（楊起簡便方）【背疽の初發】阮氏經驗方では、黃明牛皮膠四兩、酒

(一)隴西ハ石部鹵石類消石ノ註、晉地ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

一盌を重湯で頓に化して隨意に飲み盡す。飲めぬものは滾らした白湯で飲む。これを服すれば毒が內攻せず、惡症に傳化せぬ。○談埜翁試效方では、新瓦上で燒いて性を存して研末し、酒二盌で服す。○唐氏經驗方では、又、穿山甲四片を加へ、共に燒いて性を存する。極妙無比なさうである。【瘰癧結核】黑牛皮膠を溶化して攤膏にして貼る。已に潰れたものには膏を搓つて線にし、長さ一寸ばかりにして孔中に紝入し、頻りに換へ拭つて效を取る。(楊氏經驗)【小兒の痘瘢】黃明膠を炒つて研末し、一錢匕を溫酒で調へて服す。已に出たものはこれを服すれば瘢がなくなり、また出ぬものはこれを服して瀉下する。【物が耳に入つたとき】麻繩を剪り、剪り端を散して膠を著け、それで粘して徐に引き出す。(千金)

牛黃(本經上品)

和名　うしのたま
英名　Gall calculus of Cattle.

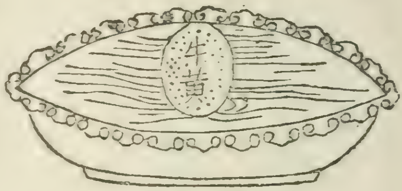
【釋名】丑寶　時珍曰く、牛は丑に屬する。故にその名を隱してかく呼んだのだ。金光明經にはこれを瞿盧折娜といつてある。

【集解】別錄に曰く、牛黃は(一)隴西、及び晉地に產する。特牛膽中から取るも

ので、それを百日間陰乾して燥かしめる。日月の光を見せしめてはならぬ。
善曰く、牛が死ねば黄が膽中に入る。雞子黄ほどのものだ。
弘景曰く、舊は、神牛にして出入に鳴吼するものにこれがあるので、夜視ると光があつて牛の角中に走入する。それを盆水で承けて吐かせると水中に墮落するものだといつたが、今は一般に多く膽中から取る。一子の大いさ雞子黄ほどで相重疊してゐる。藥物として高價なることこれ以上のものはない。一子、及び二三分で好きものの値五六千から一萬錢のものがある。(二)梁州、益州に多く出る。
恭曰く、牛黄は、今は(三)萊州、密州、淄州、青州、嶲州、戎州に產する。牛に黄のあるものは必ず多く吼え喚ぶ。(四)喝迫して取つたものは生黄といひ、最も佳し。黄に三種あつて、散黄といふは粒が麻豆ほどのものだ。(五)漫黄といふは雞卵中の黄糜のやうなもので、肝、膽の間に在る。圓黄といふは塊をなしたもので、形に大、小がある。いづれも肝、膽中に在るもので、多く榛特牛に生ずる。㹀牛にはまだ黄があるといふことを聞かぬ。
頌曰く、今は登、萊州に產する。その他の處にも或はあるが甚だ佳くない。凡そ

(二)梁州、益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(三)萊州ハ石部滑石ノ註、密州ハ石膏ノ註、淄州ハ雄黄ノ註、青州ハ雲母ノ註ヲ見ヨ。イヅレモ山東省ニ屬ス。嶲州ハ石部玉類青琅玕ノ註、戎州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(四)喝迫ハ急促ニ叱シ嚇スコト。
(五)大觀ニ慢ニ作ル。

牛にして黄あるものは身上に夜間光があり、眼は血のやうな色で、時にまた鳴吼し、人を恐懼さするものだ。又、水に照すことを好み、人が盆水で承け、その吐出するを伺つて喝迫すると水中に墮(六)下する。それを取つて百日間陰乾するのであるが、一子の大いさは雞子ほどで、重疊してゐて取り放せる。輕虛にして氣の香しいものが佳し。しかし一般には僞物が多いが、それを試驗するには、ただ手甲上に揩摩して甲に透つて黄になるものが眞物である。



〔牛　　黄〕

(七)雷曰く、この物に四種あつて、喝迫して取つたものをば生神黄と名け、殺死して角中に在るを取つたものをば角中黄と名け、牛の病死後に心中を剝いて取つたものをば心黄と名ける。これは初め心中に在つては黄漿汁のやうな狀態のもので、取つてから水中に投ずる。すると水に沾ふて硬くなり、碎蒺藜、及び豆や帝珠子のやうになる。それをいふのである。肝、膽中から取つたものをば肝黄と名ける。概してみな生黄の勝れたるに及ばない。

(六)下、大觀ニ落ニ作ル。

(七)數ニ作ルベシ。

宗奭曰く、牛黄は輕く鬆にして自然に微な香がある。西戎にある犛牛黄といふは堅くして香しくない。また駱駝黄といふものもあつて極めて得易く、やはり能く見擬ふものだからその審別に注意を要する。

修治　斅曰く、凡そこれを用ゐるには、搗いて細研して塵のやうにし、絹によく裹んで黄で嫩な牛の皮に裹んで一夜井中に、水から三四尺離して懸け、翌朝それを取る。

氣味　【苦し、平にして小毒あり】日華曰く、甘し、涼なり。普曰く、毒なし。之才曰く、人參が使となる。牡丹、菖蒲と配合すれば耳、目を利す。龍骨、龍膽、地黄、常山、蜚蠊を惡み、牛膝、乾漆を畏る。

時珍曰く、別錄に『牛黄は龍膽を惡む』とある。而るに錢乙の小兒の急驚、疳病を治する涼驚丸、麝香丸の二方ともにこれを用ゐてあるは矛盾のやうだが、龍膽は驚癇を治し、熱を解し、蟲を殺し、牛黄の主治と相近い。やはり肝の經の藥であつて、かく相惡まぬもののやうである。

主治　【驚癇寒熱、熱盛狂痓。邪を除き、鬼を逐ふ】（本經）【小兒の百病、諸

癇熱で口の開かぬもの、大人の狂顚を療ず。又、胎を墮す。久しく服すれば身を輕くし、天年を增し、人をして忘れざらしめる】（別錄）【中風の失音、口噤、驚悸、天行時疾、健忘、虛乏】（日華）【魂を安じ、魄を定め、邪魅を辟ける。卒中惡、小兒の夜啼】（甄權）【肝、膽を益し、精神を定め、熱を除き、驚痢を止め、惡氣を辟け、百病を除く】（思邈）【心を淸し、熱を化し、痰を利し、驚を涼ず】（寗原）【痘瘡が紫色になつて發狂し、譫語するものに用ゐるがよし】（時珍）記載は王氏方にある。

【發明】李杲曰く、牛黃は肝に入つて筋病を治す。凡そ中風が臟に入つたものには、必ず牛黃、腦、麝の劑を用ゐる。骨髓に入り、肌膚に透つてそれで風を引き出すものだ。風が腑、及び血脈に中つたものの場合にこれを用ゐては、風邪を引いて骨髓に流入する恐があり、油が麪に入つたやうにこれを出すことが不可能になる。

時珍曰く、牛の黃なるものは牛の病である。故に黃のある牛は多くは病んで死し易いのだ。諸種の獸類にはいづれも黃があるのであつて、人間の黃病もやはりそれである。その病が心、及び肝、膽の間に在つて凝結して黃となるのであつて、故に還つて能く心、及び肝膽の病を治す。正に人間の淋石がまた能く淋を治するやうな

ものだ。按ずるに、宋史に『宗澤が萊州の長官となつたとき、使者をして牛黄を取らしめた。その時澤は「方に、春疫癘があつて、牛がその毒を飲めば結して黄となるといふ。今年は和氣がよく行き渡つてゐるから牛に黄がない」といつた』とあるを觀ると、黄なるものが牛の病なること尤も徵すべきものである。

附方　舊四、新四。【三日目の初生兒】驚邪を去り、惡氣を辟ける。牛黄を(八)豆一粒ほどと赤蜜を酸棗ほどとを研り勻ぜ、綿に蘸けて兒に吮はす。一日に吮ひ盡さしめる。(姚和衆方)【(九)七日口噤】牛黄を末にし、淡竹瀝で一字を化して灌ぎ、更に豬乳を滴す。(外臺)【初生兒の胎熱】或は身體が黄になるものである。眞牛黄を豆一粒ほどに蜜を入れて膏に調へ、乳汁に化開して時時に兒の口中に滴す。兒の形色が實せぬものは多服させてはならぬ。(錢氏小兒方)【小兒の熱驚】牛黄を杏仁一箇ほどを竹瀝、薑汁各一合に和勻して與へて服ます。(總微論)【驚癇で舌を嚼むもの】迷悶し、目を仰ぐもの。牛黄を豆一粒ほど蜜水に研り和して灌ぐ。(廣利方)【小兒の驚候】小兒が積熱で毛が焦げ、睡語し、驚を發せんとするには、牛黄六分、硃砂五錢を共に研り、一錢を犀角の磨汁で調へて服す。(總微論)【腹痛夜啼】牛黄を豆一粒ほど乳

(八) 大觀ニ豆上ニ大字アリ。

(九) 大觀ニ七上ニ初生兒至ノ四字アリ。

汁に化して服し、臍下に田の字を書く。（聖惠方）【痘瘡黑陷】牛黃二粒、硃砂一分を研末し、蜜に臙脂を浸して汁を取つて調へて搽る。一日一囘。（王氏痘疹方）

鮓荅（綱目）

和名　けもののたんせき（獸類ノ膽石）
英名　Gall-stone of Beast.

集解　時珍曰く、鮓荅は、走獸、及び牛、馬、諸畜の肝、膽の間に生じ、肉囊に裹まれてあるもので、多きは一升ほどあるもあり、大なるは雞子ほど、小なるは栗や榛のやうだ。その狀態は白色で石に似てゐるが石でもなく、骨に似てゐるが骨でもなく、打破つて見ると層になつて疊つてゐるものだ。（一）嘉靖庚子の年、（二）蘄州で一黃牛を屠殺した時にこの物を得た。一般には知るものがなかつたが、ある外國僧が『これは非常に珍らしいものだ。牛、馬、猪などの畜類にいづれもあるもので、これは祈つて雨を降らせる。西域には祕密の咒文があつて、これを用ゐてその咒文を唱へると立ろに雨が降る。咒文を知らなくとも、ただ水に浸してこれを撥弄してもやはり雨が降るものだ』といつた。その後陶九成



〔鮓　荅〕

（一）嘉靖ハ明ノ世宗ノ年號、元年ハ世曆一五二二年ニ當ル。
（二）蘄州ハ草部濕草類艾ノ註ヲ見ヨ。

の輟耕錄に鮓荅の記載があるので、それを調べて見ると、卽ちこの物であつた。その記事には『蒙古地方では、雨を禱るにただ淨水一盃に石子數箇を浸し、淘り漉して玩弄し、密に咒語を唱へる。すると良久して雨が降る。その石子は鮓荅と名けるもので、大なるは雞卵ほど、小なるは不揃だ。これは走獸の腹中に產するもので、特に牛、馬から出たものが最も妙だ。蓋し牛黃、狗寶の類である』とある。又、按ずるに、京房の易占に『兵强く主武なるときは牛腹に石を生ず』とある。これに據れば鮓荅も狗寶も同一類のもので、ただ狗の腹に生ずるものを狗寶といふだけのことである。

【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】【主治】【驚癇、毒瘡】（時珍）

狗寶（綱目）

和名　いぬのたま
英名　Vosical calculus of dog.

【集解】時珍曰く、狗寶は癩狗の腹中に生ずる。狀態は白石のやうで青色を帶び、その理が層疊してゐる。やはり得難い物である。按ずるに、賈似道の悅生隨抄に『（一）任丘縣の民家に一疋の非常な惡犬があつて、後に病衰して衆くの犬のために

（一）任丘縣ハ唐ニ置ク、今ノ河北省津海道ノ任邱縣卽チソノ地ナリ。

噬み殺されたが、解剖して見るとその心が已に石のやうに化してゐたが、石ではなく、その重いことも石のやうで、膜に包み絡まつて寒灰のやうでもあり、その脈理を見るとやはり心のやうであつた。如何なる關係でかやうになつたものか判らないが、嘗て人間が石淋を患ふと刀斧でも破れない石塊が出來るといふことも聞いてゐる。又、嘗て龍の脛骨中の髓を見たが、いづれも白石であつた。虎の目光が地に落ちてやはり白石星の光をなし。氣が地に落ちると石に成るといひ、松もやはり石に化し、蛇、蟹、蠶もいづれも能く石になる。萬物にはかやうな變化があるから一概に斷ずるわけに行かない』とある。余(時珍)が嘗て靜に考へて見るに、牛の黄、狗の寶、馬の墨、鹿の玉、犀の通天、獸の鮓荅はいづれも動物の病であつて、それを人間が非常な珍奇なものとして取扱ふのだ。人間は物としての靈なるものではあるが、やはりこの病を免れぬのであるから、況や動物に於てをやである。人間が淋を病めば沙石があるといふは獸類の鮓荅のそれではあるまい



〔狗　寶〕

（二）波斯人ハ外國商人。
（三）閩中ハ福建省地方。
（四）般舟三昧トハ念佛三昧ノ行ヲイフ。
（五）優婆塞ハ梵語、漢ニハ居士ト譯ス。

か。人間が癖を病めば心に金石に似たものがあるは狗の寶のそれではあるまいか。これはいづれもその物の中に囿はれて化することの出來なかつたものである。故に禽鳥には生卵の石の如きものがあるのだ。

按ずるに、程氏遺書の記載には『ある（二）波斯人が（三）閩中で古塚を發いたとき、棺内のものすべてなくなつてゐたが、ただ心だけが石のやうに堅くなつてゐて、鋸で開いて見ると青碧に畫いた山水があり、傍に一人の女子がゐて、靚粧して欄に凭つてゐた。蓋しこの棺内の屍は女であつて、生前山を愛する癖があり、朝夕その意をそれに集注してゐた。それでかやうに融結したのだ』とあり、又、宋潛溪の文集の記載には『臨川の僧法循といふものは（四）般舟三昧の法を行つてゐたが、死後火葬すると、ただその心だけが化せず、五色の光を放出して高さ三寸の佛像があつた。その質は骨でもなく石でもなく、そして佛體のあらゆる部分が完備してゐた。又、徽水のある（五）優婆塞は禪觀の法を行つてゐたが、死後火葬すると、心内に觀音の像が包まれてゐて、それが彫刻したもののやう見えた』とある。それはいづれもその心志をある物に局め注がれて心志が分散せぬため、精靈の氣液が感應して形に凝るので

あつて、正に妊婦が異像を感ずると鬼胎となるの類の如きものだ。祥ではなくて病である。有情が無情に之くのである。

【氣味】【甘く鹹し、平にして小毒あり】【主治】【噎食、及び癰疽、瘡瘍】(時珍)

【附方】新四。【噎食病】數月癒えぬには、狗寶を末にし、一分づつを威靈仙二兩、鹽二錢と搗いて泥のやうにし、漿水一鍾を攪き勻ぜて滓を去つて調へて服す。一日二回、三日に過ぎずして癒える。後に補劑を服す。(杏林摘要)【狗寶丸】癰疽發背、諸毒の初期で壯熱、煩渇を覺えるには、癩狗寶一兩、臘月黑狗膽、臘月鯉魚膽各一箇、蟾酥二錢、蜈蚣を炙いて七條、硇砂、乳香、沒藥、輕粉、雄黃、烏金石各一錢、粉霜三錢、麝香一分を共に末にし、第一番に男兒を產んだ母の乳一合、黃臘三錢を熬膏したもので和して綠豆大の丸にし、一丸、或は三丸づつを、白丁香七箇を研つて新汲水で調へて送下し、暖臥して汗の出るを度とする。三服に過ぎずして立ろに效がある。後に白粥を食つて補ふ。(濟生方)【赤疔瘡】狗寶丸——狗寶八分、蟾酥二錢、龍腦二錢、麝香一錢を末にし、好酒で和して麻子大の丸にし、三丸づつ

を、生葱三寸と共に細に嚼んで熱葱酒で送下し、暖臥して汗を出すを度とし、後に流氣追毒藥を服し、抜毒膏を貼つて癧を取る。(通玄論)【反胃膈氣】丁丹(六)崔の祖傳狗寶丸——硫黄、水銀各一錢を共に炒つて金色にし、狗寶三錢を入れて末にし、雞卵一箇を白を去り黄を留めてその藥を和して攪き匀ぜ、紙で封じ泥固して煻火で半日煨いて取出し、研細して五分づつを燒酒で調へて服す。三服に過ぎずして效が現はれる。(楊氏頤眞堂方)

底野迦 (唐本草)

和名　テリアカ
學名　Theriaca.

【集解】恭曰く、西戎に產する。彼の地の者は、(一)豬膽で作つたものだといふ。狀態は久しくして壞れた丸藥のやうで赤黑色のものだ。胡人は時に中國へ將ち來ることがあつて、甚だ珍(二)重される。試用して見るに有效だ。

頌曰く、(三)宋の時、南海にやはりこのものが或はあつたらしい。

【氣味】【(四)苦し、寒にして毒なし】【主治】【百病、中惡、客忤、邪氣、心腹積聚】(唐本草)

(六)崔、一本崖ニ作ル。

(一)豬、大觀ニ諸ニ作ル。

(二)重、大觀ニ貴ニ作ル。

(三)宋トハ南朝劉宋ヲイフカ。

(四)大觀ニ苦上ニ辛字アリ。

諸血（拾遺）

和名　けもののち
英名　Blood of animals.

【集解】時珍曰く、獸、畜には水と陸との別があり、産地による特異があつて寒、熱、溫、涼が不同であり、有毒、無毒それぞれの差異がある。陳氏はそれを一概に諸血とし、一條を設けて記載したが、主療たる病に對する說明が甚だ明確でないやうに思はれる。姑くその舊のままを存して置くわけだが、そのそれぞれの血の主治はいづれもその本條を見よ。

【氣味】【甘し、平なり】【主治】【人身の血不足を補す。或は血枯を患ひ、皮上の膚が起ち、面に顏色なきはみな不足である。いづれも生で飮むがよし。又、諸藥毒、菌毒を解し、渴を止め、丹毒を除き、煩熱を去る】（藏器）

諸朽骨（拾遺）

和名　ふるきほね
英名　Exposed or worned bones of animals.

【集解】時珍曰く、朽骨とあるは何の骨をいふか分明でないが、やはり無毒なることの判知し得るものの骨を取ればよいのであらう。

主治　【骨蒸。○東墻の腐骨を醋に磨つて塗れば痕を滅せしめる。又、瀝瘍風、瘡癬の白爛せるものに塗る。東墻は陽に向ふところである】(藏器)【風牙痛を治し、水痢を止める】(時珍)

附方　舊一、新三。【骨蒸發熱】諸朽骨を多く取つて土氣を洗淨し、釜で煮て桃、柳枝各五斗を入れて煮枯し、再び棘針三斗を入れて半に煮減して滓を去り、酢漿水を和して煮て三五沸し、患者を正坐して髮を散ぜしめ、その湯を頂から淋ぐ。ただ熱するを佳しとする。若し心悶するときは少量の冷(一)粥を進める。大汗して惡氣を出すものである。汗が乾いたならば身體に粉して豉粥を食ふ。(拾遺)【水痢の止まぬもの】朽骨灰と六月六日の麴を炒つて等分を末にし、方寸匕を飲で服す。これは御傳の方である。(張文仲方)【風牙の痛むもの】東墻下の朽骨を削牙し、煻火中で煨き熱し、病む部分で咬む。冷えれば易へる。(外臺祕要)【打撲の青腫】墻上の朽骨を唾で和し、石上で磨つて塗り、乾けば易へる。(千金方)

震肉（拾遺）

和名　かみなりにうたれたるにく
英名　Flesh which was struck dead by lightning.

(一)粥、大觀ニ餅ニ作ル。

（一）大觀ニ驚字下ニ失心ノ二字アリ。

集解 藏器曰く、これは六畜が雷のために震撃されたもので、その事に因つて用ゐるのだ。時珍曰く、按ずるに、雷書に『雷震した六畜の肉は食つてはならぬ。人をして大風疾を成さしめる』とある。

主治 【小兒の夜(一)驚、大人の驚に因つて失心せるもの。脯にして食ふ】（藏器）

敗鼓皮 （別錄下品）

和名 やぶれたるたいこのかは
英名 Torn drum-skin.

校正 もとは草部に在つたが、宋本に移して獸部に入れたのである。

集解 宗奭曰く、これは敗れてぼろぼろになつたもののことで、何の皮と指定してない。馬皮でも驢皮でも作るものだが、黄牛皮のものを勝れたものとすべきである。唐の韓退之の所謂『牛溲、馬勃、敗鼓の皮、醫師收め畜へて用を待つて遺すことなし』とはこれだ。今はこれを用ゐる處方は甚だ少ないが、膠に煎ずるに尤も好し。

氣味 【平にして毒なし】 **主治** 【中蠱の毒】（別錄） 弘景曰く、燒いて屑

にして水で和して服すれば、病人が蠱主の姓名を喚ぶ。その姓名の本人から蠱を取れば瘥える。白蘘荷と同功である。【小便淋瀝を治し、月蝕耳瘡に塗る。いづれも灰に燒いて用ゐる】(時珍) 記載は藥對にある。

附方　舊三。【中蠱毒】梅師方に『凡そ中蠱毒で、或は鵞肝のやうな血を下し、或は吐血し、或は心腹切痛して物に咬まれるやうに覺えるものは、直ちに治療せねば人の五臟を食つて死に至る。果して蠱なるや否やを確めんとするには、ただ病人をして水中に(一)吐かせて見る。沈むものならば確だが浮くものは惡い。敗鼓皮を灰に燒いて方寸匕を酒で服す。須臾にして蠱主の姓名を呼ぶものだ』とある。○外臺祕要には『蠱を治するには、敗鼓皮を廣さ五寸、長さ一尺に取り、薔薇根を拇指の太さのもの五寸、水一升、酒三升とで二升に煮て服す。蠱蟲を下して癒えるものだ』とある。【月蝕瘡】集驗では、月蝕を救ふに、鼓皮を掌ほどの大いさにして一片を苦酒三升に一夜漬けてそれを塗る。或は灰に燒いて豬脂で調へて塗る。(外臺)

氈（拾遺）

和名　けおりもの、もうふ(毛織物、毛布)
英譯　Clothe and blanket made of wool.

(一)本經逢原ニ吐上ニ以唾ノ二字アリ。

【集解】 時珍曰く、氈の屬は甚だ多い。西北方の地に産し、いづれも畜毛で作るものだ。その白色のもの、黒色のものはその毛のもとのままの色だが、青、烏、黄、赤のものは染色だ。氈、毯、褐、罽、氍、毹、氆、氌など呼ぶ名稱はその織り上げた物に因つて命名したもので、概して藥に入れては著しい相異のあるものでない。

烏氈 【氣味】【毒なし】【主治】【火燒生瘡。水風に著けてはならぬ。血を止め、賊風を除くには、灰に燒いて二錢匕を酒で服す。産後に血が下つて止まぬを治す。久しくそれに臥せば人の脂、血を吸ひ、顔色を損じ、上氣する】（藏器）

【附方】新四。【墜損疼痛】故馬氈兩段、酒五升、鹽一抄を煮熱して裹み、冷えれば易へる。三五囘で瘥える。（廣濟方）【牙疳、鼻疳】氈褐を紅、黒に拘らず燒いて性を存し、白礬を燒き枯して各一錢、尿桶白鹼一錢半を燒き、共に研つて搽る。神效がある。（簡便）【夜夢魘寐】赤罽一尺を枕にすれば平安である。（肘後）【赤白崩漏】氈を灰に燒いて二錢を酒で服す。白崩には白氈を用ゐ、紅崩には紅氈を用ゐる。（海上）

六畜毛蹄甲（本經下品）

和名　かちくのひづめ
英譯名　Hoof of domestic animals.

【集解】弘景曰く、六畜とは牛、羊、豬、馬、雞、(一)駝をいふ。驢（ろ）、騾（ら）もやはりその類だが、それぞれ本條に已に主療の記述があるから、必ずしもここに掲げるに及ばぬ。

時珍曰く、これは本經に一の品として取扱つてあるものだから、姑（しばら）くそのまま古の蹟（あと）を存して置く。

【氣味】【鹹し、平にして毒あり】【主治】【鬼疰（きしゅ）、蠱毒、寒熱、驚癇、癲痓（てんし）、狂走。駝騾の毛尤も良し】（本經）

六畜心（綱目）

和名　かちくのしんざう
英譯名　The heart of the domestic animals.

【集解】時珍曰く、古方では、多く六畜の心を用ゐて心病を治した。その類に從つたのであるが、しかし又、殺す時に驚氣が心に入り、怒氣が肝に入るものだから、諸心は心を損じ、諸肝は肝を損ずるとの説もあり、これと相反してゐる。

(一)駝、大觀ニ狗ニ作ル。

〔主治〕【心昏し多忘のもの、心虚して痛を作すもの、驚悸し恐惑するもの】（時珍）

〔附方〕新二。【健忘】心孔が昏塞して多く忘れ、喜く誤るものには、牛、馬、豬、雞、羊、犬の心を取り、乾して末にし、一日三回、日に向つて方寸匕を酒で服す。一を聞いて十を知る。（外臺）【蛕蟲心痛】六畜心を生で切つて四切にし、縱横に路を割いて硃砂、或は雄黃を中に入れて呑む。蟲が死んで癒える。（集驗）

諸肉有毒（拾遺）

【牛の獨肝のもの】【黑牛の頭の白きもの】【牛、馬の疔を生じて死んだもの】
【羊の獨角のもの】【黑羊の頭の白きもの】【豬、羊の心、肝に孔のあるもの】
【馬に角の生えたもの】【白羊の頭の黑きもの】【馬の鞍下の黑肉】
【馬肝】【白馬の頭の黑きもの】【六畜の自死して首を北に向けたもの】
【馬の夜眼なきもの】【白馬の蹄の青きもの】【六畜の自死して口の閉ぢぬもの】
【猘犬の肉】【犬の懸蹄（一）あるもの】【六畜の疫病、瘡疥で死んだもの】

（一）大觀ニ犬下ニ有字ナク蹄下ニ肉字アリ。

【鹿の臆の白きもの】【鹿の文の豹の如きもの】【諸畜にして龍形を帶びたもの】【獸にして尾に岐のあるもの】【諸獸の足の赤きもの】【諸畜の肉中に米星のあるもの】【獸の竝頭のもの】【禽獸の肝の青きもの】【諸獸の毒箭に中つて死んだもの】【屋漏で沾ふた脯】【米甕中の肉脯】【六畜肉の熱血のまだ斷えぬもの】【祭肉の自動するもの】【諸肉の一夜たつてまだ煮ないもの】【六畜の五臟に草が著いて自ら動くもの】【脯の曝して燥かぬもの】【生肉で水の斂らぬもの】【六畜肉で鹹、酢をつけても變色せぬもの】【肉の煮ても熟せぬもの】【肉の煮熟して水の斂らぬもの】【六畜肉の地に墮ちても塵に沾れぬもの】【肉の水に落ちて浮くもの】【肉汁の器に盛つて氣を閉ぢたもの】【六畜肉の犬に與へて犬の食はぬもの】【乳酪で煎じた膾】

已上はいづれも食つてはならぬ。人を殺し、人を病ましめ、人をして癰腫、疔毒を生ぜしめる。

【諸心は心を損する】【諸脳は陽を損じ、精を滑する】【六畜の(二)脾は一生食つてはならぬ】【諸肝は肝を損する】【諸血は血を損じ、陽を敗る】【夏を經た臭脯は人の陰を痿し、水病となる】【魚の餒えたものは肉を敗る】【諸脂で燃す燈は目を損ずる】【本生命の肉は人をして神魂不安ならしめる】【春は肝を食はず】【夏は心を食はず】【秋は肺を食はず】【冬は腎を食はず】【四季脾を食はず】

諸肉の解毒（綱目）

六畜肉の中毒 六畜の乾屎末。伏龍肝末。黄蘗末。赤小豆の焼末。東壁土末。白扁豆。【いづれも水で服す】人の乳汁を飲む。頭垢一錢で服すれば死人を起たす。豆豉汁を服す。

馬肉の毒 蘆根汁。杏仁を嚼む。甘草汁。美酒を飲む。

（二）飲膳正要ニ皮ニ作ル。

馬肝の毒　豬骨灰。牡鼠屎。豆豉。狗屎灰。人頭垢。【いづれも水で服す】

牛、馬の疔を生ぜるもの　澤蘭根を水に擂る。豬牙灰を水で服す。生菖蒲を酒に擂る。甘菊根を水に擂る。甘草の煎湯を服す。汗を取る。

牛肉の毒　豬脂を湯に化して飲む。甘草湯。豬牙灰を水で服す。

獨肝牛の毒　人乳を服す。

狗肉の毒　杏仁を水に研つて服す。　**羊肉の毒**　甘草を水で煎じて服す。

豬肉の毒　杏仁の研汁。豬屎の絞汁。韭菜汁。朴消の煎汁。豬骨灰を水で調へる。大黃湯。

藥箭肉の毒　大豆の煎汁。鹽湯。

諸肉の過傷　その畜の骨灰を水で服す。生韭汁。芫、荽の煎汁。

肉食の不消化　還つてその肉を煮たときの汁を飲めば消化する。その食つた獸の腦を食つても消化する。

本草綱目獸部第五十卷下　終

本草綱目獸部

第五十一卷 上

本草綱目獸部目錄第五十一卷

獸の二　獸類三十八種

獅 綱目
虎 別錄、酋耳、駮馬、渠搜、黃腰を附す。
豹 別錄
貘 圖經 嚙鐵犴、狡兎を附す。
象 開寶
犀 本經
犛牛 綱目 犩牛、犝牛、海牛、月支牛、山牛を附す。
牦牛 綱目
野馬 綱目
野豬 唐本草
豪豬 綱目
熊 本經 羆、魋を附す。
麢羊 本經 山驢を附す。
山羊 日用
鹿 本經
麋 本經
雙頭鹿 拾遺
麂 開寶
麞 別錄
麝 本經
靈貓 拾遺
貓 蜀本草
貍 別錄
風貍 拾遺
狐 別錄
貉 衍義
貒 唐本草
貛 食物
木狗 綱目
豺 唐本草
狼 拾遺
兎 別錄
敗筆 唐本草
山獺 綱目
水獺 別錄
海獺 拾遺
膃肭獸 開寶

獸の二　獸類三十八種

獅（綱目）

和名　しし
學名　Felis leo, L.
科名　ねこ科



〔獅〕

釋名　狻猊　音は酸倪（サンゲイ）である。爾雅には狻麑と書いてある。虓　許交の切（ケウ）時珍曰く、獅は百獸の長である。故にこれを獅といつたのだ。虓とはその聲を象したものだ。梵書にはこれを僧伽彼といつてある。說文に『一名白澤』とあるが、現に瑞應圖を參照して見ると『白澤は能く言語する』とあるから獅ではない。

集解　時珍曰く、獅子は西域の諸國に產する。狀態は虎のやうだが小さくして黃色

(一)弭耳ハ耳ノタレタルコト。
(二)昂鼻ハ鼻ガタカクソルコト。
(三)耏髯ノ耏ハヒゲノコト。
(四)毛蟲ハ獸類。
(五)白狼山ハ熱河省塔溝縣ノ東南ニ在リ。
(六)伽毘耶國ハ印度ノ古國名ノ一。

だ。また金色の猱狗のやうでもあるが頭が大きくして尾が長い。また青色のものもある。銅頭、鐵額、鉤爪、鋸牙、(一)弭耳、(二)昂鼻で、目の光は電の如く、吼える聲は雷の如く、(三)耏髯がある。牡には尾上の茸毛が大きく斗ほどあつて、一日に五百里を走る。(四)毛蟲の長である。怒るときはその威が齒に在り、喜ぶときはその威が尾に在り、一たび吼えれば百獸が辟易し、馬はみな溺血する。爾雅には『この物は虎、豹を食ふ』といひ、虞世南は『この物は虎を拉しぎ、貔を呑み、犀を裂き、象を分つ』といひ、陶九成は『この物が諸禽獸を食ふには氣を以て吹く。すると羽毛が紛紛として落ちる』といひ、熊太古は『その乳が牛、羊、馬の乳中に入ると、みな化して水となる。この物が死んで後も虎、豹が敢てその肉を食はない。蠅もその尾に敢て集らない』といつてある。物の理にかやうな相異るところがあるからだ。ところが、博物志には『魏の武帝が(五)白狼山へ往つたとき、貍のやうな物が獅子の頭に跳びついて殺したのを見た』とあり、唐史には『高宗の時、(六)伽毘耶國から天鐵獸を獻じた。能く獅、象を擒にするものだ』との記載がある。して見ると、獅は猛悍なものだが、やはりそれを制するものもあるのだ。西域では獅を畜ひ、生後七

日以内にまだその目の開かぬうちに取つて馴らし習はせるのだが、やや成長してからでは馴らし難い。

屎　時珍曰く、陶氏が蘇合香に註して誤つて獅の屎だといつたのを、陳氏が正誤して『獅屎は極めて臭く、赤黒色のものだ』といつた。ここに參考として補記する。

【主治】これを服すれば、宿血を破り、百蟲を殺す。これを燒けば鬼氣を去る】（藏器）

虎（別錄中品）

和名　とら
學名　Felis (Panthera) tigrinus, L.
科名　ねこ科

【釋名】**烏䖘**　音は徒（ト）である。左傳には於菟と書き、漢書には烏檡と書いてある。　**大蟲**（肘後）　**李耳**　時珍曰く、虎とはその聲を象したものだ。魏子才は『その文字は虍に從ひ几に從ふ。この物の蹲踞せる形を象したもので、人に從ふは誤だ』といひ、揚雄の方言には『（一）陳、（二）魏の地方ではこれを李父といひ、（三）江淮、（四）南楚の地方ではこれを李耳といひ、或はこれを䳢䖘といふ。（五）關を中心とした

（一）陳ハ草部隰草類豨薟ノ註參照。
（二）魏ハ草部山草類紫草ノ註ヲ見ヨ。
（三）江淮ハ水部雨水ノ註ヲ見ヨ。
（四）南楚ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。
（五）關ハ函谷關。

(六)傴ハ爾雅註ニ樞ニ作ル。

東、西の地ではこれを伯都といふ』とある。余(時珍)が按ずるに、李耳といふは狸兒と書くべきだ。蓋し地方音の轉訛で、狸は李となり、兒が耳となつたのである。現に南方の地でやはり虎を貓と呼ぶが同じやうなわけである。郭璞は『虎は物を食ふとき耳に食ひ當ると止める。それで李耳といつたので、その諱に觸れるからだ』といひ、應劭は『南郡の李翁が虎に化けた。それで李耳と呼ぶのだ』といつたが、いづれも穿鑿不經の言である。爾雅には『虎は、毛の淺きを虥貓——音は棧(サン)——といひ、白虎を甝——音は含(カン)——といひ、黑虎を虪——音は育(イク)——といひ、虎に似て五指あるを貙——音は(六)傴(ク)——といひ、虎に似て眞に非ざるを彪といひ、虎に似て角あるを虒——音は嘶(セイ)——といふ』とある。

集解　頌曰く、虎は、本經には產地を記載してないが、今は多く山林地帶にはいづれもゐる。

時珍曰く、按ずるに、格物論に『虎は山獸の君であつて、形狀は猫のやうで大いさ牛ほどあり、地色は黃に、紋樣は黑く、牙は鋸のやう。爪は鉤り、鬚は健くして尖り、舌は大いさ掌ほどあつて倒に刺が生え、項が短く、鼻は齆り、夜間物を視る

（七）衝破ハ戰陣ニ利アルノ方角、日時。

には一方の目で光を放ち一方の目で物を看る。吼える聲は雷のやうで、吼えると從つて風が生り、百獸が震恐する』とあり、易卦通驗に『立秋に虎始めて嘯き、仲冬に虎始めて交はる』といひ、或は『月の暈するときに交る』といひ、又『虎は再交



〔虎〕

せず、孕んで七个月で生れる』といひ、又『虎は（七）衝破を知り、能く地に畫き、奇、偶を觀て以て食を卜ふ』ともいふ。現に世人はそれに效つて虎卜といふことを謂ふ。虎が物を噬むには月の旬の上、下に隨つて上旬には首を嚙み、下旬には尾を嚙む。他の動物を搏つときには三たび躍つてその物に中てる。それで斃さぬときはその物を捨てて了ふ。人間が虎に殺されると倀鬼といふものになつて虎の案内をして行く。虎は狗を食ふと醉ふ。狗なるものは虎に取つての酒である。羊角の烟を聞くと走るはその臭を惡むのだ。虎は人間や獸類を害するが、蝟鼠が能く虎を

制するところを見ると、智は大、小に因らぬものだ。獅、駮、酋耳、黃腰、渠搜は能く虎を食ふ。勢は强と弱とに因らぬものだ。抱朴子には『虎は五百歲になると白く變ずる。又、海中にゐる虎鯊は能く虎に變ずる。古は貙虎といふが人に變じ、貙人といふが虎に變じたといふ說があるが、やはり自から理のあることだ』とある。

附錄

酋耳　瑞應圖に『酋耳は虎に似て非常に大きく、生物を食はず、虎、豹を見ると直ちに殺す。太平のときに現はれるものだ』とある。郭璞は『卽ち騶虞のことだ。文の黑い白虎で、尾は身より長い』といつた。

駮　山海經に『駮は、形狀は馬のやうで、身は白く、尾は黑く、角が一本、牙は鋸のやう、能く虎、豹を食ふ』とあり、周書にはこれを玆白といひ、說苑には『師曠は「鵲は猬を食ひ、猬は鵕鸃を食ひ、鵕鸃は豹を食ひ、豹は駮を食ひ、駮は虎を食ふ」といつた』とある。

渠搜　逸周書に『渠搜は西戎の露犬であつて、能く虎、豹を食ふ』とある。一には『犴は胡犬であつて、能く虎を逐ふ』とある。

黃腰　蜀志に『黃腰と名ける獸は、身は鼬のやう、首は貍のやうなもので、成長

(八)大觀ニ邪上ニ除ノ字アリ。

すれば母を食ふ。形は小さいけれども能く虎、及び牛、鹿を食ふものだ』とある。又、孫愐は『彀——音は斛(コク)——といふは豹に似て小さく、腰以上は黄で以下は黒く、形は犬に類し、獼猴を食ふものだ。黄腰と名ける』といつた。

鼩鼠 猬の條下に記載してある。

虎骨 [修治] 頌曰く、虎骨は、頭、及び脛の骨を用ゐる。色の黄なるものが佳し。凡そ虎の身の數種のものはいづれも雄虎のものを用ゐるが勝るのである。藥箭で射殺したものは藥に入れられない。その毒は骨、血の間を浸漬して能く人を傷めるものだ。

時珍曰く、凡そ虎の諸骨を用ゐるには、いづれも搥き碎いて髓を去り、酥、或は酒、或は醋を塗る。それはそれぞれ方に示す方法に隨ひ、炭火で黄に炙いて藥に入れる。

[氣味] 【辛し、微熱にして毒なし】之才曰く、平なり。[主治] 【(八)邪惡の氣。鬼疰の毒を殺し、驚悸を止め、惡瘡、鼠瘻を治す。頭骨が就中良し】(別錄)【筋骨毒風で攣急し、屈伸し得ず、走注疼痛するを治し、尸疰腹痛、傷寒溫氣、溫瘧を

治し、犬咬毒を殺す】(甄權)【朱を雜ぜて符に畫けば邪を療じ、頭骨を枕にすれば惡夢魘を辟け、戸上に置けば鬼を辟ける】(陶弘景)【煮汁で浴すれば骨節の風毒腫を去る。醋を和して膝を浸せば脚痛腫を止める。脛骨が就中良し。初生小兒をこの煎湯で浴すれば惡氣を辟け、瘡疥、驚癇、鬼疰を去り、成長してから無病になる】(孟詵)【風を追ひ、痛を定め、骨を健にし、久痢脱肛、獸骨鯁咽を止める】(時珍)

【發明】頌曰く、李絳兵部手集には虎骨酒といふ臂脛痛を治するものがあり、崔元亮の海上方には腰脚不隨を治するにいづれも虎脛骨酒の方がある。

宗奭曰く、風の虎に從ふわけは、風は木であり虎は金であつて、木が金の制を受ければそれに從はざるわけに行かない。故に虎が嘯けば風が生ずるは自然の道理であつて、風病の攣急して屈伸し得ず、走疰するもの、骨節風毒、癲(九)疰、驚癇の諸病を治する所以はいづれも此の關係である。

汪機曰く、虎の強悍なるはみな脛に賴るのであつて、死んでも脛だけは屹立して仆れぬものだ。故に脚脛無力を治するにこれを用ゐる。

時珍曰く、虎骨は各部分通じて用ゐ得るもので、凡そ邪疰を辟け、驚癇、溫瘧、

(九)疰、大觀ニ疾ニ作ル。

瘡疽、頭風を治するには頭骨を用ふべきもの、手、足の諸風を治するには脛骨を用ふべきもの、腰、背の諸風は脊骨を用ふべきものである。それぞれその類に從ふのだ。按ずるに、吳球の諸證辨疑に『虎は陰であり風は陽であつて、虎嘯いて風生ずるは陽出て陰藏れる關係である。故にその骨は能く風を追ひ、膏を定める。虎の一身筋節の氣力はみな前足から出るものだから脛骨を勝れたものとする』とある。

附方　舊十、新八。【健忘、驚悸】預知散——虎骨を酥で炙き、白龍骨、遠志肉と等分を末にし、一日三回、生薑湯で服す。久しくすれば人をして聰慧ならしめる。（永類鈐方）【臂、脛の疼痛】虎骨酒で治癒する。病の深淺に拘らずいづれも效がある。虎脛骨二大兩を搗き碎いて黄に炙き、羚羊角屑一大兩、新芍藥二大兩を切り、この三物を無灰酒に浸して七日間養ひ、秋、冬はその日數を倍にする。每日空腹に一盃を飮む。若し服用を急ぐ場合には、銀器物を用ゐて火爐中で二三日煖め養つて急造して服するもよし。（兵部手集）【腰脚不隨】攣急し、冷痛するには、虎脛骨五六寸を取り、肉膜を刮り去つて酥を塗つて黄に炙き、細に搗いて絹袋に盛り、瓶に酒一斗を盛つてそれに浸し、煻火でそれを微溫にし、七日後に任意に飮む。微利する

もので、それで效がある。○又ある方では、虎の腰脊骨一具、前兩脚の全骨一具をいづれも石上で斧槌を用ゐて碎き、鐵床上に置いて文炭火で炙き、脂が出るを待つて無灰濃酒中に投じて密封し、春、夏は七日、秋冬は二十一日間の後、一日三回、任意に飮む。十年以上の患者も三劑に過ぎず、七年以上のものは一劑で必ず瘥える。(崔元亮海上方)【白虎風痛】走注し、兩膝熱腫するには、虎脛骨を酥を塗つて黃に炙き、黑附子を炮き裂いて皮を去り、各一兩を末にし、二錢づつを酒で服す。一日二回。(經驗良方)【歷節痛風】虎脛骨を酒で炙いて三兩、沒藥七兩を末にし、一日三回、二錢づつを溫酒で服す。(聖濟總錄)【歷節走痛】あらゆる節節がみな痛んで忍び難きには、虎頭骨一具を酥を塗つて黃に炙き、槌き碎いて絹袋に盛り、二斗の淸酒中に置いて五晝夜浸し、隨意に飮むが妙である。(聖惠方)【筋骨の急痛】虎骨を通草の煮汁で和し、空腹に半升を服して寢具を覆ふて臥す。少時して汗が出て奏效する。絕對に熱い食物を忌む。齒を損ずるものだ。小兒に(一〇)與へて食はせてはならぬ。齒が生えなくなる恐がある。(食療)【休息痢疾】(一一)年を經て癒えぬには、大蟲骨を取り、黃に炙き焦して末に搗き、一日三回、方寸匕を飮で服して效を取る。(張文仲方)

(一〇)大觀ニ小兒下ニ齒生未足ノ四字アリ。
(一一)年字、大觀ニ時ニ作ル。

【痔漏脱肛】虎脛骨二節を蜜二兩で赤く炙き、末に搗いて蒸餅で梧子大の丸にし、毎早朝に二十丸を溫酒で服して效を取る。（勝金）【肛門の凸出】虎骨を燒いて末にし、一日三回、方寸匕を水で服す。（外臺）【獸骨鯁咽】虎骨を末にして方寸匕を水で服す。（外臺）【惡犬の咬傷】虎骨を刮つて末にし、方寸匕を水で服し、幷に傅ける。（小品方）【湯火傷灼】虎骨を炙き焦して碎いて敷く。神效がある。（龔氏易簡方）【月蝕疳瘡】虎頭骨二兩を搗き碎き、豬脂一斤で熬膏して塗る。（神效方）【小兒の白禿】虎骨末を油で調へて塗る。（普濟）【足瘡嵌甲】橘皮湯で浸洗して輕く剪り去り、虎骨末を敷く。痛は直に止まる。（便民圖纂）【臁脛爛瘡】虀汁で洗ひ拭ひ、虎骨を刮つて末にして敷く。（便民圖纂）

威骨　藏器曰く、虎には威骨といふものがある。乙字のやうで長さ一寸、脇の兩傍に在るもので、肉を破つてこれを取る。尾端にもあるが脇の骨に及ばない。人をして威あらしめるもので、官の任に臨むにこれを帶びるが佳し、無官のものが帶びては人に憎まれる。

肉　［氣味］【酸し、平にして毒なし】宗奭曰く、微し鹹し。弘景曰く、俗方

に、虎肉を熱食すれば人の齒を壞るといふ。詵曰く、正月は虎を食つてはならぬ。神を傷める。時珍曰く、虎肉には土氣があつて、味は甚だ佳くないが、鹽で食へばややよし。

主治　【惡心で嘔せんとするもの。氣力を益し、唾多きを止める】(別錄)【これを食へば瘧を治し、三十六種の精魅を辟け、山に入つて虎がその人を見て畏れる】(孟詵)

附方　新一。【脾、胃の虛弱】惡心して飮食を欲せぬには、虎肉半斤を切り、葱、椒、醬で調へ、炙熟して空心に冷食する。(壽親養老方)

膏　主治　【狗嚙瘡】(別錄)【下部に納れて五痔下血を治す】(孟詵)【これを服すれば反胃を治す。煎じ消かして小兒の頭瘡白禿に塗る】(時珍)

附方　新一。【一切の反胃】虎脂半斤を切り、淸油一斤に瓦瓶で浸して一个月間氣の洩れぬやうに密封し、その油一兩づつに無灰酒一盞を入れて溫服し、瘥えるを度とする。油が盡きたときは再び添加する。(壽域神方)

血　主治　【神を壯にし、志を强くする】時珍曰く、獵人李次口は『虎の心血を熱刺して飮めば能く神志を壯にする』といつた。又、抱朴子には『三月三日に虎

血、雞血を殺取して等分を和合し、初生草といふ胡麻子に似たその實を取り、それで合せて用ゐれば形を變じ貌を易へ得る』とある。

肚 主治 【反胃吐食には、生のものを取り、洗はずに滓穢のついたまま新瓦で固めて煆いて性を存し、平胃散末一兩を入れて和勻し、三錢づつを白湯で服す。神效がある】(時珍) 記載は保壽堂方にある。

腎 主治 【瘰癧】時珍曰く、千金の瘰癧を治する雌黃芍藥丸中に用ゐてある。袁達の禽蟲述に『虎の腎は腹に懸り、象の口は頤に隱れる』とある。

膽 主治 【小兒の驚癇】(藏器) 【小兒の疳痢で神驚して不安なるには、水に研つて服す】(孟詵)

睛 修治 頌曰く、虎睛には僞物が多い。自ら獲つてこそ眞物として用ゐられる。

斅曰く、凡そ虎睛を使用するには、獵人に就いてよく調べ訊す必要がある。雌のものもあり、雄のものもあり、老いたものも嫩いものもあり、殺して取つたものもある。ただ毒に中つて自死したものは用ゐてはならぬ。能く人を傷めるものだ。虎

睛は、生羊血に一夜浸して漉出し、微火で焙じ乾して粉に搗いて用ゐる。

時珍曰く、千金に狂邪を治する虎睛湯、虎睛丸といふがあつて、いづれも酒で浸して炙き乾して用ゐてある。

【主治】【癲疾】（別錄）【瘧病、小兒の熱疾、驚悸】（孟詵）【驚啼、客忤、疳氣。心を鎭め、神を安ずる】（日華）【目を明にし、翳を去る】（時珍）

【附方】舊二、新一。【虎睛丸】癎疾で發作すると涎潮し、搐搦し、時に譫語をなすを治す。虎睛一對を微し炒り、犀角屑、大黃、遠志を心を去つて各一兩、梔子仁半兩を末にし、煉蜜で綠豆大の丸にし、二十丸づつを溫酒で服す。【小兒の驚癎】掣瘲するには、虎睛を細研して水で調へて灌ぐが良し。（經驗方）【小兒の夜啼】大蟲の眼睛一隻を散にし、竹瀝で少量を調へて與へて喫はす。（姚和衆方）【邪瘧で時に發作するもの】生虎睛一箇、臘月豬血少量、硃砂、阿魏各一分を末にし、端午の日の粽尖七箇で和して黍米大の丸にし、一丸づつを綿に包んで耳中を塞ぐ。男は左、女は右。（聖惠方）

虎魄　藏器曰く、凡そ虎は夜中物を視るに、一方の目で光を放ち、一方の目で物

を看るものだ。獵人がそれを候つて射ると、弩箭が纔に觸れんとした途端に目光が墮ちて地に入る。それを取つて見て石白の如きものならば確である。

宗奭曰く、陳氏の所謂乙骨の說や、目光が地に墮ちるといふ說は結局怪しいものだ。

時珍曰く、乙骨の說は怪しいことはない。目光の說も、やはり人が縊死すると魄が地に入り、そこを掘ると麩炭のやうな狀態のものが出ると同じやうな關係だ。按ずるに、茅亭客話に『獵人が虎を殺したとき、その頭と項の當つた場所に目印をつけ、月の黑い時にそこを一尺ほど掘り下げると石子、琥珀のやうな狀態のものが出る。これは虎の精魄が地下に淪入したもので、それゆゑに小兒の驚癇の疾に主效がある』とあつて、その說甚だ詳だ。寇氏はその關係に考察が達しなかつたのだ。

主治 【驚邪。惡を辟け、心を鎭める】(藏器)

鼻 主治 【癲疾。小兒の驚癇】(別錄) 【戶上に懸けると男を生ぜしめる】(弘景)

時珍曰く、按ずるに、河魚圖に『虎鼻を門中に一年間懸けて置き、それを取つて熬つて屑にし、婦人に飮ませると高貴な子を生む。他人、及びその婦人に知らせては

ならぬ。知られては效驗がない』とある。又『門上に懸ければ子孫に宜く、印綬を帶ばしめる』とある。これは古代に行はれた胎敎に、虎、豹を見せていづれも勇壯なものにあやかつたといふ意味と同じものだ。

牙　【主治】　【男子の陰瘡、及び疽瘻】(孫思邈)　【勞蟲を殺し、猘犬傷の發狂を治す。刮つて末にし、方寸匕を酒で服す】(時珍)

【附方】　新一。　【白虎風痛】大虎牙一副四個、赤足蜈蚣十條を酒に三日浸して晒し乾し、天麻二兩、乳香、沒藥各一兩、麝香半兩を末にし、一日三回、二錢づつを溫酒で服す。(聖濟總錄)

爪　頌曰く、爪、并に指骨、毛いづれも用ゐられる。雄虎のものを勝れたものとする。　【主治】　【小兒の臂に繫ければ惡魅を辟ける】(別錄)　時珍曰く、外臺には、惡魅を辟けるに、虎爪、蟹爪、赤朱、雄黃を末にし、松脂で和して丸にし、每早朝に焚くとある。

皮　一名皐毘。莊子に記載がある。　【主治】　【瘧疾】(藏器)　【邪魅を辟ける】(時珍)

〔發明〕時珍曰く、按ずるに、應劭の風俗通に『虎は陽物にして百獸の長である。能く鬼魅を辟ける。現に世間で、卒中惡病に皮を燒いて飲み、或は衣服に繫けるが、やはり甚だ效驗がある』とあり、起居雜記には『虎、豹の皮の上で睡れば人の神を驚かしめる。その毛が瘡に入れば大毒がある』とある。

鬚〔主治〕【齒痛】（弘景）酉陽雜俎に『許遠が齒痛のとき、仙人鄭思遠が虎鬚を拔いて揷んでやると痛が癒えた』とある。

屎〔主治〕【惡瘡】（別錄）【鬼氣】（藏器）【瘰疽、痔瘺を療ず。燒き研つて酒で服すれば獸骨鯁を治す】（時珍）

〔附方〕舊一。【瘰疽】手、足、肩、背に生じて累累として米のやうに起り、色白く、刮れば汁を出し、癒えても復た發するには、虎屎の白い部分を馬尿で和し、晒し乾して灰に燒いて粉す。（千金）

屎中の骨〔主治〕【屑にして火瘡を治す】（別錄）【破傷風】（時珍）

〔附方〕新一。【酒を斷つ】虎屎中の骨を灰に燒き、酒で方寸匕を服すれば飲まなくなる。（千金方）

(一)豹（別錄中品）

和名　へう
學名　Felis fontanieri A. M. Edw.
科名　ねこ科

【釋名】 **程**（列子） **失剌孫**　時珍曰く、豹は性暴なるものだから豹といふ。按ずるに、許氏の說文には『豹なるものは脊が長くして行くときは脊が豸豸然として隆くなり、司殺の形を具へたものだから、その文字は豸に從ひ勺に從ふのだ』とある。王氏の字說には『豹は性物を勺して取り、度を程つて食ふ。故に文字は勺に從ひ、又、名けて程といふ』とある。列子には『靑寧、程を生じ、程、馬を生ず』とあり、沈氏の筆談には『(二)秦地方では豹を程といふ。今でも(三)延州ではやはりさういふ。(四)東胡ではこれを失剌孫といふ』とある。

【集解】 弘景曰く、豹は至て稀にあるもので、藥に用ゐることも鮮い。ただ尾だけを貴ぶものだ。

恭曰く、陰陽家には豹尾神車駕といふがあり、鹵簿に豹尾車といふがあるが、それはさう名ける車が尊貴なので、眞物の豹尾そのものは何等貴ぶべきわけがない。

(一) 木村(重)曰ク、南方ニハ樹上生活ノウンペウ(雲豹) Panthera diardi Desmoul. アリ。

(二) 秦ハ今ノ陝西省ノ地。

(三) 延州ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。

(四) 東胡ハ滿洲、朝鮮ノ地ヲ指ス。

（五）河洛ハ河中ヨリ洛水ニ亙ル一帶ノ地。石部石中黃子ノ河中府、同部礜石ノ洛水ノ註參照。
（六）唐州ハ蟲部化生類蜈蚣ノ註ヲ見ヨ。
（七）鄧州ハ穀部稷粟類黍ノ註ヲ見ヨ。
（八）爾雅釋獸ニ云、貘白豹、註云、能舐食銅鐵及竹骨。

陶氏は如何なることを根據としたものか一向判らない。

頌曰く、今は（五）河洛、（六）唐、（七）鄧地方にゐることもある。しかし豹には數種あつて、山海經にある玄豹、詩にある赤豹は、尾が赤くして文の黑いものだ。爾雅には『（八）白豹、卽ち貘。毛白くして文黑し』とあり、郭璞註に『貘は能く銅・鐵を食ふ』とあつて、貘と同名では呼んであるが、藥に入れるはその何れの類か判明せぬ。古今の醫方にもこれを用ゐられたことは鮮だ。



〔豹〕
——貘は色が白い——

宗奭曰く、豹は毛が赤黃で、その文は黑く、錢ほどの中の空になつた型が次ぎ次ぎと比んでゐる。又、土豹といふがあつて、毛には更に紋がなく、色も赤くなく、その形も小さい。この物にはそれぞれ種類があるので、變形するわけのものではないのだ。聖人は假に喩へただけのことである。恐らく醫家の知らぬことだから記錄して置く。

時珍曰く、豹は遼東、及び西南の諸山に時にゐる。狀態は虎に似て小さく、面は

白く、頭は圓く、自らその毛の色彩を愛惜する。その文の錢のやうなものは金錢豹といひ、これは裘を作るに宜し。艾葉のやうな紋のものは艾葉豹といひ、前者に次ぐ。又、西域にある金線豹といふは文が金線のやうだ。水中には水豹といふ上に箕宿に應ずるものがゐる。禽蟲述に『虎三子を生じ、一は豹となる』とあるを見ると變ずるものもあるわけだ。寇氏はそれを知らなかつたと見える。豹は蛇と鼫鼠とを畏れるが、獅、駮、渠搜は能くそれを食ふ。淮南子に『蝟は虎をして申せしめ、蛇は豹をして止らしめる』とあつて、物にある相制の關係だ。廣志には『狐が死ねば丘に首し、豹が死ねば山に首する。本を忘れぬのだ。豹の胎は至つて美味なもので、珍物の一に入る』とある。

肉　【氣味】【酸し、平にして毒なし】思邈曰く、溫にして微毒あり。正月は食つてはならぬ。神を傷め、壽を損ずる。【主治】【五臟を安じ、絶傷を補し、身を輕くし、氣を益す。冬食へば人を利す】（別錄）【筋骨を壯にし、志氣を強くし、寒暑に耐へ、人をして猛健ならしめる】（日華）【鬼魅、神邪を辟け、腎に宜し】（孫思邈）

【發明】詵曰く、豹肉は人の志性を粗豪ならしめるもので、これを食ふと直ぐ

さう感ずるが、少頃して消化するとそれが定まる。久しく食つてもやはり同様に感ずるものだ。

宗奭曰く、この獸は猛捷なること虎に過ぎたるものだ。故に能く五臟を安じ、絶傷を補し、身を輕くし、筋骨を壯にするのである。

脂 〔主治〕【生髮膏に合せて朝塗れば暮に生える】（孟詵）【面脂にも入れる】（時珍）

鼻 〔主治〕【狐魅には狐鼻と共に水で煮て服す】（藏器） 時珍曰く、按ずるに、外臺には、夢中の鬼交、及び狐、狸の精魅を治すとして、崔氏方中に用ゐてあると記載してある。

頭骨 〔主治〕【燒灰の淋汁は頭風白屑を去る】（孟詵）【枕にすれば邪を辟ける】（時珍） 記載は五行志にある。

皮 藏器曰く、藉いて睡つてはならぬ。人の神を驚かすものだ。その毛が人の瘡中に入れば有毒だ。

時珍曰く、按ずるに、林邑記に『廣西の南方地方に唼臘蟲といふがあり、死人の

屍を食ひ、驅逐しされぬものだが、ただ豹皮で覆へば畏れて來なくなる』とある。

貘　音は陌(ハク)であつて、また貊とも書く。（宋圖經）

和名　ばく
學名　Tapirus indicus, Cuvier.
科名　ばく科

【校正】もとは豹の條下に附載してあつたが、本書では一條を分出した。

【釋名】時珍曰く、按ずるに、陸佃は『皮を坐毯、臥褥にすると能く膜外の氣を消耗するものだ。故に文字は膜に從ひ、その字劃を省いたのだ』といつた。

【集解】頌曰く、郭璞は『熊に似て頭小さく、脚卑く、黑白の駁文で、毛は淺くして光澤がある。能く銅、鐵、及び竹、骨、蛇、虺を舐り食ふ。その骨節は强直で、中が實して髓が少い』といつた。或は、爾雅の『貘は白豹なり』とあると同名だともいふ。唐の時代には多く貘を畫いて屏風を作つたもので、白樂天が贊や、序を書いたものもある。今は(一)黔、蜀、及び(二)峨眉山中に時に貘がゐる。鼻は象のやう、目は犀のやう、尾は牛のやう、足は虎のやうなもので、土地のものはよくこの

(一)黔ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(二)峨眉山ハ石部菩薩石ノ註ヲ見ヨ。

獸のために鼎や釜を食はれて了ふ。頗る山居の患をなすものだ。やはり捕つて藥にするが、その齒、骨は極めて堅く、刀斧や、椎、鍛鐵で打つと、打つ方の物がみな碎け落ちる。火にかけても燒けない。世間にはこれを取つて、佛牙、佛骨などと稱して俚俗を誑かすものがある。

時珍曰く、世に、羚羊角は能く金剛石を碎くといひ傳へてあるが、それはこの物だ。相畏の關係にあるだけである。按ずるに、說文には『貘は熊に似て黃白色、蜀中に出る』とあり、南中志には『貘は、大いさ驢ほど、形狀は熊に似た蒼白色のもので、力多く、鐵を千斤ほども舐り消かす。その皮は溫暖なものだ』とあり、埤雅には『貘は熊に似たもので、首は獅のやう、髮は豺のやう、鬐が銳く、脚が卑い。糞は刃物に作り得るもので、それで作つた刃物は玉を切れる。尿は能く鐵を消かして水にする』とある。又、嚙鐵、犴、昆吾兎などいふがあり、いづれも能く銅、鐵を食ふ。やはり貘の類だ。いづれも附錄する。

【附錄】 **嚙鐵** 時珍曰く、按ずるに、神異經に『南方にゐるある獸は、角や足や大いさや形狀は水牛のやうで、毛は漆のやうに黑く、鐵を食つて水を飲む。糞は刃

（一）吐火羅ハ禽部山禽類駝鳥ノ註ヲ見ヨ。

（二）昆吾ノ山ハ今ノ新疆省哈密ノ地ニ在リ。

物に作れるもので、その鋭利なること鋼のやうだ。名を囓鐵といふ』とあり、唐史には『（一）吐火羅から大獸を獻じた。高さ七尺、銅、鐵を食ひ、日に三百里を行く』とある。

豻　禽書に『豻は井星に應ずる胡狗であつて、形狀は狐のやうで黑く、身の長さ七尺、頭に一角を生じ、老いると鱗があり、能く虎、豹、蛟、龍、銅、鐵を食ふ。獵人もこれを畏れる』とある。

狡兎　拾遺記に『狡兎は（二）昆吾の山に生ずる。形は兎の如く、雄は黄、雌は白色で、丹石、銅、鐵を食ふ。昔、吳王の武庫中の兵器が悉く無くなつたことがあつて、その地を掘つて見ると二匹の兎を得た。一は白色、一は黄色で、腹中は腎、膽までみな鐵であつた。そこでそれを取つて劍を鑄たところが、玉を切つて泥を切るやうに鋭利だつた』とある。

皮　主治　【これに寢れば溫癘を驅り、濕氣、邪氣を辟け得る】（蘇頌）

膏　主治　【癰腫。能く肌、骨に透る】時珍曰く、段成式は『貘膏は性の利なるもので、銅・鐵、瓦器に盛つても悉く透るが、ただ骨に盛れば漏らない』といつた。

尿【主治】【銅、鐵を呑んで腹に入りたるには、水で和して服す。直ちに化して水となる】

象（宋開寶）

和名 ざう
學名 Elephas indicus, L.
科名 ざう科

【釋名】時珍曰く、許愼の說文に『象の字の篆文は耳、牙、鼻、足の形を象したものだ』とあり、王安石の字說には『象牙は雷に感じて文が生じ、天象は氣に感じて文が生ずる。故に天象にもこの字を用ゐたのだ』とある。南越志には『象は雷聲を聞けば牙花が暴出し、逡巡として復た沒す』とある。古語に『犀は月を望むに因つて紋角に生じ、象は雷を聞くが爲に花牙に發す』といふ。**伽耶** 記載は北戸錄にある。



〔象〕

(一)交趾ハ今ノ交趾支那ノ地、潮循ハ今ノ廣東省潮循道ノ地ナリ。

(二)十二肖トハ十二支ノ禽ヲ指スナリト云フ。

(三)荊蠻ハ今ノ雲南地方。楚粤ハ湖南、廣東、廣西地方。拂林ハ草部山草類水仙ノ註ヲ見ヨ。大食ハ水部廿露蜜ノ註ヲ見ヨ。

【集解】頌曰く、爾雅に『南方の美なるものに梁山の犀、象あり』とあるが、今は多く(一)交趾、潮、循の諸州に產し、彼の地ではこれを捕へてその肉を爭ひ食ふ。肥えたもので炙にするに堪へるといふことだ。陳藏器は『象には(二)十二の生肖肉を具へて各分段があるが、ただ鼻だけが本肉であつて、炙いて食ひ、糟にして食ふが更に美味だ。又、膽は肝に直接せずして月に隨つて諸肉の間に在り、正月は虎肉に在る』といつた。徐鉉は『象の膽は四時に隨ひ、春は前の左足に在り、夏は前の右足に在り、秋は後の左足に、冬は後の右足にある』といつた。淳化中、一頭の象が春期中に死んだので、太宗皇帝は膽を取ることを命ぜられた。ところがその膽を獲り得なかつたので鉉に問はせると、鉉は右の事實を以て對へたので、果して前の左足から取つたといふ。世間の言ひ傳へには、(三)荊蠻の山中にも野象がゐるといふ。然し楚粤の象はみな青黑だが、ただ西方の拂林、大食諸國には白象が多い。樊綽の雲南記にいづれもその事を言つてある。

時珍曰く、象は交、廣、雲南、及び西域の諸國に產し、野象の多きは群を成すものもある。その地の番民はいづれもこれを畜つて重い物の運搬に使ひ、酋長は飾つ

てそれに乗る。灰、白の二色があり、體軀は擁腫して面目が醜陋だ。大なるものは身長一丈餘あり、高さもそれに相當し、太さ六尺ばかりあり、肉は牛に數倍する。目は豕のやうに小さく、四足は柱のやうで、指がなくて爪甲がある。歩行には先づ左足を移し、臥すには臂を地に著けるが、頭は俯し得ず、頸も回らない。その耳は軃れ下り、その鼻は大きくして臂の如く、下垂して地に達し、鼻端は甚だ深くして開合するやうになり、中に小肉爪があつて能く針、芥の如き微小なものまでも拾ひ取り、物を食ひ水を飲むにもみな鼻を以て卷いて口に入れる。一身の力がみな鼻に在るものだ。故にこれが傷けば死ぬ。耳後に穴があつて鼓皮のやうに薄いものが覆ふてゐるがこれを刺しても死ぬ。口内には食齒があり、兩吻から二本の牙が出て鼻を夾み、雄の牙は長さ六七尺あるが、雌は纔に一尺餘である。牝と交尾するには水中に在つて胸と胸とを合せる。この點は諸種の獸類と異つてゐる。許愼は『三年にして一たび乳す』といひ、古訓には『五歳にして始めて產し、六十年にして骨が全部具はる』といつてある。その性能く久しく物を記憶し、芻豆、甘蔗と酒とを嗜むが、烟火、獅子、巴蛇を畏れる。南方の人民が野象を殺すには、多くはからくりの落し穽を作

（四）原書ニ脚トアルハ却ノ誤。

（五）崑崙ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

つて陷れ、或は象鞋を路に埋めてその足を貫く。生象を捕へるには雌象を媒として誘つて獲る。久しく飼ひ狎らせば漸次に人間の言語を解し、象使ひは鉤を以て象を自由に取扱ふが、左右前（四）後命ずるままになる。その皮は甲、鞭、鼓に作れるもので、濕ふた時は條に切つて器物を貫く用にもなる。

甄權曰く、西域では象牙を重んじて倚子や寢臺などを裝飾し、中國ではこれを貴んで笏にする。象は牙を蛻すると自ら埋めて貯へるもので、（五）崑崙の諸國では木牙で潛にすり換へて容易にそれを取る。

日華曰く、象の蹄底は犀に似たものだ。帶と作し得る。

牙　眞臘風土記に『象牙は、殺して取つたものを上とし、自死したものがそれに次ぎ、山中に蛻してあつて多年を經たものを下とする』とある。或は一歲に一回牙が換るともいふが、それは事實でない。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】　主治　【諸鐵、及び雜物の肉に入りたるには、牙を刮つた屑を水で和して敷く。立ろに出る。癇病を治するには、齒を刮つた屑を黄に炒り、研末して飲服する】（開寶）【諸物の咽中に刺りたるには、水に磨つ

て服すればやはり出る。舊梳屑が就中佳し」(蘇頌)【風癇、驚悸、一切の邪魅、精物、熱疾、骨蒸、及び諸瘡に主效がある。いづれも生屑を藥に入るが宜し」(時珍)

【發　明】　時珍曰く、世人は犀を然せば水怪を見得るといふことをば知つてゐるが、象を沈めれば水怪を驅除し得るといふことをば知らない。按ずるに、周禮に『壺涿氏は水蟲を掌る。その神を殺さんと欲するときは、棒木を以て象齒を貫いてこれを沈める。則ちその神死して淵は陵となる』とあり、註に「棒木とは山楡のことで、象齒を十字にしてその木に貫いて沈めるのだ。すると龍、罔象の類が死ぬ』とある。又、按ずるに、陶貞白は『夏期に藥を合せるには象牙を傍に置くがよし。合丹竈は象牙で竈を夾む。雷聲が震ふと能く光を發するものだ』といつた。これで觀ると象の邪を辟けることはまた怪を驅除するに止まらぬわけで、この物が能く心、肝の驚癇、迷惑、邪魅の疾を治するは宜なることだ。昔の世にこれを用ゐることを會得するものの罕だつたのは何故であらうか。

【附　方】　舊二、新四。【小便不通】脹急するには、象牙を生で煎じて服す。(救急)

【小便過多】象牙を灰に燒いて飮で服す。(總錄)【痘疹の收らぬもの】象牙屑を鋼銚

で黄紅色に炒つて末にし、七八分、或は一錢づつを白水で服す。（王氏痘疹方）【諸獸骨鯁】象牙を水に磨つて呑む。（永類方）【骨刺の肉に入りたるには】象牙を刮つて末にし、水で煮た白梅肉で調へて塗る。自ら軟になる。（簡要濟衆）【鐵箭の肉に入りたるもの】象牙を刮つて末にし、水で和して敷けば出る。

肉　〔氣味〕【甘く淡し、平にして毒なし】〔主治〕【灰に燒いて油で和して禿瘡に塗る。多く食へば人の體を重からしめる】（開寶）【生の煮汁を服すれば小便不通を治す。燒灰を飮服すれば小便の多きを治す】（日華）

〔發明〕時珍曰く、按ずるに、呂氏春秋に『肉の美なるものに旄象の（六）約あり』とあり、又、爾雅翼には『象の肉は肥えて脆かく、少し豨肉に類し、味は淡くして滑を含む』とある。して見ると、その小便を通ずるものはやはり淡、滲にして竅を滑する關係だ。燒けば火に從つて化するものだから、又、よく小便を縮めるのである。

膽　〔修治〕斅曰く、凡そ使ふには雜膽を用ゐてはならぬ。象膽はよく乾してから表面に青竹の文斑があり、光膩なものだ。その味は微し甘を帶びてゐる。藥に

（六）約、一本ニ肉ニ作ル。

入れるにはそのまま衆藥と和してはならぬ。必ず先づ擣いて粉にしたもので衆藥を和する。

氣味 【苦し、寒にして微毒あり】 主治 【目を明にし、疳を治す】（日華）【瘡腫を治するには水で化して塗る。口臭を治するには、綿で裹んで少量を齒根に貼り、早朝漱ぎ去る。數回で瘥える】（海藥）

發明 時珍曰く、象膽は目を明にし、能く塵膜を去る。熊膽と同功である。雷斅の炮炙論に『象膽は粘を揮ふ』とあるはこの事實をいつたのだ。

附方 新一。【内障目翳】偃月の如く、或は棗花の如くなるには、象膽半兩、鯉魚膽七箇、熊膽一分、牛膽半兩、麝香一分、石決明末一兩を末にし、糊で菉豆大の丸にし、一日二回、十丸づつを茶で服す。（總錄）

睛 主治 【目疾には人乳で和して目中に滴す】（藏器）

皮 主治 【下疳には灰に燒いて油で和して敷く。又、金瘡の合はぬを治す】（時珍）

發明 時珍曰く、象肉は壅腫したもので、人が斧刀で刺しても半日にして合する。故に近頃、金瘡の合はぬを治するにその皮灰を用ゐる。

（七）頻併ハ後重ノコトヲ云フカ。

骨　【主治】〔毒を解す〕（時珍）〔胸前の小横骨を灰に燒いて酒で服すれば、人をして能く浮ばしめる〕（開寶）

【附方】新一。〔象骨散〕脾、胃の虚弱で水穀が消化せず、噫氣し、呑酸し、吐食するもの、霍亂で膿血を泄瀉し、臍腹疼痛し、裏急し、（七）頻併して食思なきの諸證を治す。象骨四兩を炒り、肉豆蔻を炮き、枳殼を炒つて各一兩、訶子肉を炮き、甘草と各二兩、乾薑半兩を炮き、末にして三錢づつを水一盞半で八分に煎じ、滓を和して熱服する。食前、一日三回。（宣明方）

犀（本經中品）

和名　さい
學名　Dicerorhinus sumatrensis lasiotis, Sch.
和名　一角さい
學名　Rhinoceros unicornis, L.
科名　さい科

【釋名】**兕**　時珍曰く、犀の字の篆文は形を象したもので、その牸を兕と名け、また沙犀ともいふ。爾雅翼に『兕と牸とは字の音が相近い。羖を牯といふやうなものだ』とある。概して犀と兕とは一物であつて、古人は多く兕といひ、後代には多

(一)永昌ハ蟲部溪鬼蟲附錄鬼彈ノ註ヲ見ヨ。
(二)益州、交州、寧州ハ金部金ノ註、武陵ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

く犀といひ、北方音では多く兕といひ、南方音では多く犀といふだけの相異に過ぎない。詳細は下文を見よ。梵書には犀を朅伽といつてある。

集解 別錄に曰く、犀は(一)永昌の山谷、及び(二)益州に産する。永昌、卽ち今の滇南の地だ。

弘景曰く、今は武陵、交州、寧州諸地の遠き山に産する。犀に二角あつて、額上のものを勝れたものとする。又、通天犀角といふのがあつて、それは角に一條の白線があり、直線に端まで通つてゐて、夜中露して も濡れぬものだ。藥に入れて至つて神驗がある。或はこれは水犀の角で水中に産するものだともいふ。漢書に所謂駭雞犀といふは、米の中に置いて雞に食はせようとすると、みな驚駭して一向にその米を啄まうとせぬ。屋上に置けば烏や鳥も集つて來ないものだ。又、牸犀角といふがある。甚だ長くして文理は犀に似たものだが、藥に入れるに堪へない。



〔犀〕

恭曰く、牸とは雌犀のことで、文理が膩細で斑白が分明だから俗に斑犀といふ。器服としては上等だが、藥に入れては雄犀に及ばない。

藏器曰く、犀に水、陸の二種はない。ただその精と粗とを以て言ふだけだ。通天とは腦上の角のことで、歲を經て長く且つ鋭くなり、白星が端に徹するものだ。能く氣を出して天に通ずるので、能く神に通じ、水を破り、雞を駭す。故に通天といふのである。抱朴子が『この犀で魚を彫刻し、それを銜んで水に入れば水が三尺開く』といつたのはこの物のことだ。

頌曰く、犀角は、今は南海のものを上とし、黔、蜀のものがこれに次ぐ。犀は水牛に似て首は豬のやう、腹太く、脚卑く、脚は象に似て三蹄があり、色は黒い。舌上に刺があつて、好んで棘刺を食ふ。一毛孔に三毛が生えて豕のやうだ。一角のもの、二角のもの、三角のものもある。爾雅に『兕は牛に似たり。犀は豕に似たり』とあり、郭璞註に『兕は一角、色靑くして重さ千斤ある。犀は水牛に似て三角、一は頂上に在り、一は額上に在り、一は鼻上にある。鼻上のものは食角といひ、また奴角と名け、小さいが墮ちない。また一角のものもある』とある。劉恂の嶺表錄

(二)波斯トハ外國商人ヲ指ス。

異には『犀には二角あつて、額上に一角あるを兕犀といひ、鼻上に一あるを胡帽犀といふ。牯犀も二角ある。いづれも毛犀といふ』とある。しかし今は一般に一角の說が多く傳へられてゐる。

この數種の角はいづれも粟文のあるもので、紋の粗細を觀て價の貴賤をつけるのだが、高價なものには通天の花文がある。この角を有つ犀は必ず自らその影を惡み、常に濁水を飲んで自己の影を照し見ないやうにする。その絕品にはあらゆる物の形があるものだ。或は、犀の通天といふは病の爲に出來た紋理だともいふが、その事實か否かは判らない。角の文に倒挿ありといふものは一半已下が通じ、正挿ありといふものは一半已上が通じ、腰鼓挿ありといふものは中斷して通じない。その類の極めて多いものだ。故に(二)波斯は象牙を白暗と呼び、犀角を黑暗と呼ぶ。それは識別し難いものだといふ意味である。犀中の最も大なるものは墮羅犀といふもので、一株の重量七八斤ある。これは牯犀の額の角だといふことだ。その花文は多くは豆を撒いたやうなもので、斑色の深いものは帶胯にも作れるが、斑の散色で淺いものは器皿に作れるだけだ。或は、兕とは犀の雌で、やはり水牛に似て色青く、皮

(四)大觀ニ物下ニ命ノ字アリ。

(五)牛字、當作犀。

は堅厚で鎧に作れるといふことだが、的否のほどは判らない。唐醫呉士皐の言に『海外地方で犀を取るには、先づ山路に朽木を多く植ゑて豬や羊の棧のやうにして置く。犀は前脚が直くして常に木に凭りかかつて息ふもので、その朽ち爛れた木棧へ凭りかかると忽ち折れて犀が仆れ、少時の間は起ち上れない。それを格殺するのだ』といつてある。又『犀は毎歳一回角を蛻き換へて必ず自ら山中に埋めるもので、海外人は潛に木角を作つてすり換へる。再三すり換へてもその蛻脱する場處を離れないものだ。しかし蛻脱すると直ぐに取つては、埋藏所を他へ移して了つて判らなくなる』ともいつた。

○李珣曰く、通天犀とは胎中に在る時に天上の(四)物が過ぎるのを見て、それが角上に形はれたものだ。故に通天といふのである。但し月下で水盆を以て映して見るとそれが判る。按ずるに、五溪記に『山犀は竹木を食ふとその小便が終日盡きない。夷獠は弓矢を以てこれを採り、名けて黔犀といふ』とあり、又、異物志には『山東の海水中に(五)牛がある。絲竹の音樂を聞くことが好きで、彼地の者は音樂を奏して牛の出て聽くところを採る。鼻角と頂角とあつて、鼻角を上とするものだ』とある。

本草では山犀だけは判つてゐるが水犀の記述がない。

宗奭曰く、川犀、南犀は紋が細く、烏犀は顯著に露れた紋があり、黄犀は紋が甚だ少い。いづれも西番の紋の高くして雨脚の顯れてゐるものには及ばない。物の像が黄で外の黒いものを正透といひ、物の像が黒く外の黄なるものを倒透といふ。蓋し烏色を以て正とし、形像が物の形に肖たものを高價なものとする。通犀といふ以上は、必ず文頭が顯著にして黄黒が分明に、雨脚の潤滑なるものを第一となすべきものだ。

時珍曰く、犀は、西番、南番、滇南、交州の諸處に產する。山犀、水犀、兕犀の三種があり、又、毛犀といふこれに似たものもある。山犀は山林にゐるもので、一般に多く手に入るものだ。水犀は出て水中に入るので最も得難い。いづれも二角あつて、鼻角が長くして額角は短い。水犀は皮に珠甲があるが山犀にはない。兕犀とは犀の牸のことで、また沙犀ともいふ。ただ一角が頂にあるだけで、文理が細膩で斑白が分明だが、藥には入れられないものだ。蓋し牯の角は文が大きいが牸の角は文が細かいのである。洪武の初年に(六)九眞から曾て貢納したことのある獨角犀とい

(六)九眞ハ草部芳草類山薑ノ註ヲ見ヨ。

ふがそれである。陳藏器が、犀に水、陸はないといひ、郭璞が、犀には三角あるといひ、蘇頌が、毛犀を牯犀だといつたのは、いづれも訛傳に出でたものだ。此にいづれも正して置く。毛犀とは旄牛のことで、本條に記載してある。

犀角は、紋の魚子の形のやうなものを粟紋といひ、紋中に眼あるを粟眼といひ、黑中に黄花あるものを正透といひ、黄中に黑花あるものを倒透といひ、花中に復た花あるを重透といふ。いづれも通犀と名ける上級品である。花が椒、豆のやうな斑のものはこれに次ぐ。烏犀といふは純黑にして花のないもので、下級品である。その通天にして夜視ると光のあるものは夜明犀と名ける。故に能く神に通じ、水を開き、飛禽、走獸がこれを見てみな驚くのだ。又、山海經にある白犀といふは白色のもの、開元遺事にある辟寒犀といふは、その色が金のやうなもので、交趾から貢納し、冬期にも暖氣の人を襲ふものだ。白孔六帖にある辟暑犀といふは、唐の文宗皇帝が得たといふもので、夏期に能く暑氣を淸するものである。嶺表錄異にある辟塵犀といふは、簪、梳、帶胯に作ると塵が身に近づかないといふものだ。杜陽編にある蠲忿犀といふは、帶すれば人の忿怒を蠲て去らしめるといふものである。これはいづれ

も稀世の珍である。故に此に附記する。

犀角　外國では低密と名ける。

修治

弘景曰く、藥に入れるにはただ雄犀の生のものだけを佳しとする。犀片、及び一旦器に作つたことのあるものはいづれも蒸煮されてゐるから用ゐるに堪へない。

頌曰く、凡そ犀は、藥に入れるものに黑、白の二種あつて、黑きものを勝れたものとし、角尖はまた生犀に勝る。獨り水、火を經ないからといふだけではない。蓋し犀には捕へてから殺して取つたものを上とし、蛻角はこれに次ぐのである。

宗奭曰く、鹿では茸を取り、犀では尖を取る。その精銳の力が盡くそれにあるものだ。西番の生犀を磨つて服するが佳く、湯、散に入れるは屑にするものだ。

斅曰く、凡そこれを使ふには、奴犀、牸犀、病水犀、攣子犀、無潤犀を用ゐてはならぬ。ただ烏黑にして肌が皺み、折裂して光潤なるものを取る。錯屑して臼に入れ、細に杵いて一萬匝研つてから用ゐる。

李珣曰く、凡そ犀角は、鋸で曳き崩してから薄紙で裹んで懷中に入れ、蒸燥してから熱に乘じて搗くべきものだ。手に應じて粉の如くになる。故に歸田錄に『翡翠

は金を屑にし、人の氣は犀を粉にする』とある。

氣味　【苦く酸く鹹し、寒にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。李珣曰く、大寒にして毒なし。甄權曰く、牯犀角は甘く辛し、小毒あり。張元素曰く、苦く酸し、寒なり。陽中の陰であつて陽明の經に入る。

○之才曰く、松脂が使となる。雷丸、雚菌を惡む。時珍曰く、升麻が使となり、烏頭、烏喙を惡む。斅曰く、鹽を忌む。及び妊婦は服してはならぬ。能く胎氣を消するものだ。

主治　【あらゆる毒、鬼疰、邪鬼、瘴氣。鉤吻、鴆羽、蛇毒を殺し、邪を除き、迷惑、魘寐せず。久しく服すれば身を輕くする】（本經）【傷寒溫疫、頭痛寒熱、諸毒氣。人をして駿健ならしめる】（別錄）【中惡毒氣を辟け、心神を鎭め、大熱を解し、風毒を散じ、發背癰疽、瘡腫を治し、膿を化して水にし、時疾熱で火の如く、煩毒が心に入つて狂言し、妄語するを療ず】（藥性）【心煩を治し、驚を止め、肝を鎭め、目を明にし、五臟を安じ、虛勞を補し、熱を退け、痰を消し、山瘴、溪毒を解す】（日華）【風毒が心を攻めて毷氉として熱悶するもの、赤痢、小兒の麩豆、風熱、

驚癇に主效がある】(海藥)【灰に燒いて水で服すれば、卒中惡の心痛、飲食中の毒、藥毒、熱毒、筋骨中風、心風煩悶、中風失音を治してみな瘥える。水に磨つて服すれば、小兒の驚熱を治す。山犀、水犀の功用は相同じ】(孟詵)【磨汁は吐血、衄血、下血、及び傷寒の畜血、發狂譫語、發黃、發斑、痘瘡の稠密なるもの、內熱黑陷して或は痂を結ばぬものを治し、肝を瀉し、心を涼し、胃を淸し、毒を解す】(時珍)

發明 時珍曰く、犀角は犀の精靈の聚るところであつて、足の陽明の藥である。胃は水穀の海であつて、飲食物、藥物は必ず先づこれに受けるものだから、犀角は能く一切の諸毒を解するのである。五臟、六腑はいづれも氣を胃から稟け、風邪、熱毒は必ずこれを干すものだから、犀角は能く諸血、及び驚狂、斑痘の證を療ずるのである。抱朴子に『犀はあらゆる草の毒、及び衆くの木の棘刺を食ふ。それゆゑに能く毒を解するのだ。凡そ蠱毒の行はれる地方では、飲食する場合にその角でそれを攪きまはす。毒があればそれで白沫が生じ、毒がなければ生じないのである。これで毒藥を煮ると一向に毒熱がなくなる』とあり、北戶錄には『凡そ毒箭に中つたときは、犀角で瘡中を刺せば立ろに癒える。犀はあらゆる毒と棘刺とを食ふ

からに由るのである。昔、溫嶠が武昌の牛渚の磯下に立寄つたとき、そこは怪物が多いところで、嶠が犀角を燃いて照すと水族が形を現した』とあり、淮南子には『犀角を狐の穴へ置くと狐が歸らなくなる』とある。して見ると犀の精靈の邪を辟けて惑はしめぬといふことは、これで一層考へられる。

附方　舊六、新七。

【吐血の止まぬもの】鵞、鴨の肝のやうなものを吐くには、生犀角、生桔梗一兩を末にし、二錢づつを酒で服す。（總錄）

【中忤、中惡】鬼氣であつて、その證は、或は暮夜に厠へ行き、或は郊外に出て突然に地に倒れ、厥冷し、拳を握り、口、鼻から淸血を出し、須臾にして手當の方法がなくなり、尸厥のやうな狀態でただ腹が鳴らず、心腹が暖なだけのものである。これは直ぐに移動してはならぬ。その周圍に人が集つて火を燒き、鼓を打ち、或は蘇合香、安息香、麝香の類を燒き、その醒めるを候つて移動し、犀角五錢、麝香、硃砂各二錢五分を末にし、二錢づつを水で調へて服すれば卽效がある。（華佗方）

【臥して忽ち寤めぬもの】若し火で照せばその人は死ぬ。ただその顏に唾し、痛くその踵、及び大趾の甲際を嚙めば活きる。そこで犀角を枕にすれば魘が襲はなくなる。【小兒の驚癎】意識を失ひ、

舌を嚼み、仰目するには、犀角を水に濃く磨つて服すれば立ろに效がある。末にしてもよし。（廣利方）【痘瘡稠密】大人、小兒に拘らず、生犀を澀器中に入れて新汲水で磨り、その濃汁を冷して飲服する。（錢氏小兒方）【消毒、解熱】生犀角尖を磨つた濃汁を頻りに飲む。（同上）【服藥過劑】犀角を燒いて末にし、方寸匕を水で服す。（外臺）【中毒煩困】方は上に同じ。【雉を食つた中毒】吐下して止まぬには、生犀角末方寸匕を新汲水で調へて服すれば瘥える。（聖惠方）【蠼螋尿瘡】茱萸のやうな形狀で中央に白膿があり、惡寒、壯熱するには、犀角の磨汁を塗る。（千金方）【瘭疽毒瘡】よく十指に著いて代指のやうな狀態となり、根深くして肌に至り、能く筋骨を壞るもので、毒氣が臟に入れば人を殺す。これは燒鐵で烙し、或は灸を百壯し、日每に犀角汁を飲んで瘥を取る。（千金方）【山嵐瘴氣】犀角を水に磨つて服するが良し。（集簡方）【鮮血を下痢するもの】犀角、地楡、生地黃各一兩を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを水一升で五合に煎じ、滓を去つて溫服する。（聖惠方）

犛牛（綱目）

毛(モウ)、俚(リ)、來(ライ)の三音である。

和名　やく
學名　Bos grunniens, L.
科名　うし科

【釋名】　毛犀（廣志）　貓牛（漢書註）　犘牛　音は麻(マ)である。㸲牛　音は作(サク)である。竹牛（昨夢錄）　犨牛　音は抽(シユウ)である。時珍曰く、犛は髦である。その髦は(一)旌旄となるものだ。その體には長毛が多くして、身、角は犀のやうだから毛犀といふ。汲冢周書には犛牛と書き、顏師古は貓牛と書き、爾雅には犘牛と書いてあつて、發音がいづれも相近い。山海經には㸲牛と書いてある。西方の地では竹牛と呼ぶ。それは角の理が竹のやうだからだ。或は、竹は㸲の音の轉訛で、犨はまた竹の音の轉訛だともいふ。楊愼の丹鉛錄に『毛犀、卽ち象である。形狀は犀のやうで角が小さく、善く吉凶を知る。古人は貓豬と呼んだ。交、廣地方では豬神といふ』とあるはこの物だ。

【集解】　時珍曰く、犛牛は西南(二)徼外に產出する。深山中にゐる野牛であつて、形狀、及び毛、尾は俱に㸲牛に同じだが、㸲は小さくして犛は大きく、重量千斤の

(一) 旌旄ハ旗ノ先ニ附ケル毛毬、卽チ俗ニ白熊(ハグマ)ト云フモノ。

(二) 徼外ノ徼ハ境ニ通ズ。靑海、四川省西部、西藏、雲南地方ヲ指ス。

(三)荆山ハ今ノ湖北省南漳縣ノ西北ニ在リ。

(四)西夏ハ今ノ內蒙古鄂爾多斯、阿拉善、及ビ甘肅省ノ西北部ヲ佔有セル唐、宋時拓跋氏ノ一國名。

ものもある。その尾を名けて犛といふは、やはり旌旄、纓、帽を作る材料となるからだ。唐、宋時代には西徼諸州から貢納した。中山經に『(三)荆山。犛牛多し』とあり、郭璞註に『牦牛の屬で、その色黑し』とあり、又、作夢錄には『(四)西夏の竹牛は重さ數百斤あり、角は甚だ長くして黃と黑とが相間る。弓に作ると極めて勁い。彼の地の者はこれを犀角の僞物にするが、結局辨別のつかぬもの



〔犛　牛〕
——犏牛も相類す——

だ』とあり、曹昭の格古論には『毛犀、卽ち犛牛であつて、角の花斑はみな山犀に類するが、粟紋がなく、その理が竹に似てゐる。甚だ奇なるものだ。故に毛犀といふ』とある。これで觀ると、犛の角は牦に勝るが、牦の毛、尾は犛に勝ることになる。又、野牛といふこれと相類するものがある。いづれも左に附記する。

【附錄】　犩牛　音は危(キ)である。又、夔牛と名ける。牛のやうで大きく、肉の重さ數千斤ある。蜀の山中に產する。

（五）日南ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。
（六）潯州ハ唐ニ置ク、今ノ廣西省桂平縣ソノ舊治ナリ。
（七）大賓縣ハ隋ニ置ク、舊治ハ桂平縣ノ東南ニ在リ。

犛牛　廣志に『（五）日南、及び（六）潯州の（七）大賓縣に產する。色は靑黃で蛇と同穴に棲み、性鹽を嗜むので、その地の者は手を裏み鹽を塗つてこれを取る。その角は玉のやうで、器物に作り得る』とある。

海牛　齊地志に『登州の海島中に產する。形は牛に似て鼉脚、鮎毛。その皮は甚だ軟く、あらゆる器物の材料として用ゐられ、脂は燈火用となる』とある。寰宇記には潛牛と名け、廣志には牨牛と名けてある。

月支牛　玄中記に『西胡、及び大月氏國に產する。今日肉を割き取れば明日その創が復合してゐるものだ』とある。

山牛　形狀は牛のやうで、角には枝があつて鹿茸のやうだ。

角　［氣味］【酸く鹹し、涼にして毒なし】［主治］【驚癇、熱毒、諸血病】

黃　［氣味］【苦し、平なり】［主治］【驚癇、癲狂】（時珍）

［發明］　時珍曰く、犛牛にもやはり黃があつて、彼の地の者はそれを牛黃の僞物にするが、ただ堅くして香しくない。功用はやはり相近いさうである。その角は

また犀の僞物になるものだが、ただ粟紋がない。蘇頌の圖經に誤つて牯犀角(こさいかく)としたものはこの物だ。やはり使用し得るが、功力は犀に及ばない。昨夢錄、格古論に詳說してある。

犛牛 音は毛(マウ)である。(綱目)

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

【釋名】 **犣牛** 音は鬣(レフ)である。(爾雅) **犏牛** 音は偏(ヘン)である。時珍曰く、犛は旄と同じ。或は毛と書く。後漢書に『(一)冉驡夷(せんはうい)に犛牛を產する。一名犣牛(れふぎう)といひ、重さ千斤あり、毛は旄になる』とある。これで觀ると、旄牛なる名は蓋し此に取つたものだらう。顏師古は『犛牛、卽ち犏牛』といつたが、葉盛の水東日記には『毛牛と封牛(ほうぎう)とが交尾すれば犏牛が生れる。やはり毛牛に類するものだが、氣が偏するためにかやうなものになる。故にこれを犏といふ』とある。して見ると犏はまた毛の遺種かも知れぬ。

【集解】 時珍(つ)曰く、犛牛は甘肅の(二)臨洮(りんたう)、及び西南徼外に產する野牛で、その

(一)驡、一ニ駹ニ作ル。今ノ四川省茂縣ノ地ナリ。

(二)臨洮ハ石部鹵石項硇砂ノ註ヲ見ヨ。

(三)胡ハ頸下ノ垂皮。

(一)潘侯之山、未詳。

地では一般にこれを畜養する。形狀は水牛のやうで體が長く、力が多くして能く重荷を載せ、歩行が飛ぶやうに迅く、性の粗梗なものだ。髀・膝、尾、背、(三)胡下みな一尺ばかりの黑毛があり、その尾が最も長大にして斗の如くである。やはり自らその尾を愛して大切にするもので、草木がそれに引き掛かると止つて動かない。古代にはこれを取つて旌旄としたが、今は一般に纓、帽にする。毛は雜白色だが、茜で染めて紅色にする。山海經に『(一)潘侯の山、旄牛あり。狀牛の如くにして四足。節に毛を生ず』とあるはこの物である。その肉は美味なものだ。故に呂氏春秋に『肉の美なるものは犛、象の肉』とある。

喉靨　主治　【項下の癭氣】(時珍)

發明　時珍曰く、犛牛は、古方にはまだ用ゐられなかつたもので、近世臞仙の壽域方に、癭氣を治するにその喉靨を用ゐることを載せてあるが、やはり類に因る意味である。その方は、犏牛の喉脆骨二寸ばかりの一節で、兩邊に連つて扇動する脆骨を取り、或は煮、或は燒き、仰臥して頓服し、同時に巧舌、卽ち靨子を取り、嚼み爛して噙み、一時間ほどして嚥む。病人の容貌が必ず瘦減して癭が自ら內消す

る。二服に過ぎずして癒える。神妙無比だといふことだ。

野馬（綱目）

和名　のうま、もうこうま
學名　Equus przewalskii, Pol.?
科名　うま科



〔野馬〕

【集解】時珍曰く、按ずるに、郭璞は『野馬は馬に似て小さい。塞外に産する』といつた。今は西夏、甘粛、及び遼東の山中にもゐる。その皮を取つて裘に作る。その肉は、食ふと家馬の肉のやうだが、ただ地に落ちても沙が沾かぬものだといふ。爾雅には『驨は馬の如くにして鹿茸に似た一角がある。角なきものは騏といふものだ』とあり、山海經には『北海に獸あり。狀馬の如く、色青し、名けて騊駼といふ』とある。これはいづれも野馬の類のものだ。

肉

【氣味】【甘し、平にして小毒あり】

【主治】【人間が馬癇を病んで筋脈が自收不能となり、周痺し、肌肉不仁のもの】（思邈）　心鏡では、上記の證を治するに、肉一斤を豉汁で煮熟し、五味、葱白を入れて腌腊、及び羹、粥にして頻りに食ふ。白煮してもよし。

陰莖　【氣味】【酸く鹹し、温にして毒なし】【主治】【男子の陰の痿縮して精少きもの】（思邈）

【發明】時珍曰く、野馬は、孫思邈の千金方の記載に功用があるが、本草には收錄してない。此に採錄補記する。

野猪（唐本草）

和名　まんしうゐのしし
學名　Sus leucomystax, Temminck.
科名　ゐのしし科

【集解】宗奭曰く、野豬は陝、洛地方に甚だ多い。形は家豬のやうだが、ただ腹が小さくして脚が長く、毛は褐色だ。羣をなして行くもので、獵人はただその最後のものを射る。その前方のものを射中てると散走して人を傷けるからだ。その肉は色赤く、馬肉のやうで食つては家豬に勝る。牝の肉は更に美味だ。

誌曰く、冬期は林中に在つて橡子を食ふ。その黄は膽中にあるもので、三歳になると有る。やはり普通にあるものではない。

時珍曰く、野豬は處處の深山中にゐるが、ただ關西のものには時に黄があることもある。その形は豬に似て大きく、牙は象牙のやうに口の外に出てゐる。その肉は二三百斤あるものもある。能く虎と闘ふ。或は、能く松脂を掠め沙泥に曳いて身に塗り、それで矢を禦ぐものだともいふ。甚しく作物を害するもので、また蛇、虺を喫ふ。淮南子に『野彘には(一)艽蓿、(二)槎櫛あり、蘆を堀り、連比して以て宮室に象る。陰には以て雨を防ぎ、景には以て日を蔽ふ。亦たその知なり』とあり。范至能の虞衡志には『嶺南にある蠝婦なる一種の動物は、山豬に似て小さく、田禾を害する。ただその出るところに機軸紡織の器を置けば一向近かなくなる』とある。



〔野　　猪〕

肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】宗奭曰く、微に風を動ずる。誌曰く、

(一)艽蓿ハ獸窟ヲ云フ。
(二)槎櫛ハ木ノ根抵、木ノキリカブ。櫛櫱ト通ズ。

病を發せず、藥力を減じ、家豬と同じくない。但し靑蹄のものは食つてはならぬ。微し風を動するものだ。時珍曰く、巴豆の藥を服するものはこれを忌む。

主治　【癲癇。肌膚を補し、五臟を益し、人をして虛肥せしめ、風を發せずして虛氣せしめる】（孟詵）【炙いて食へば腸風瀉血を治す。十頓に過ぎず】（日華）

附方　舊一。【久痢下血】野豬肉二斤に五味を著けて炙き、空腹に食ふ。羹にしてもよし。（食醫心鏡）

脂　臘月に錬つて取る。主治　【錬淨して酒に和し、一日三囘服すれば、婦人をして乳多からしめ、十日後には三四人の兒に飮ませ得るやうになる。もと乳なきものでも出るやうになる】（孟詵）【顏色を悅ばしめ、風腫毒を除き、疥癬を治す】（日華）

黃　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【金瘡に血を止め、肉を生ず。癲癇を療ずるには、水に棗核ほどを研つて服す。一日二服すれば效がある】（唐本）【水に研つて服すれば、血痢、疰病を治す】（藏器）【惡毒風、小兒の（一）肝氣、客忤、天弔を治す】（日華）

膽　主治　【惡熱毒氣】（孟詵）【鬼疰、癲癇、小兒の諸疳には、水に棗ほどを

（一）大觀ニ肝ヲ疳ニ作ル。

研つて一日二回服す】(時珍) 記載は衞生方にある。

齒 [主治] 【灰に燒いて水で服すれば、蛇咬毒を治す】(藏器)

頭骨 [主治] 【邪瘧】聖惠方中に用ゐてある。

[附方] 新一。【積年の下血】野豬頭一箇、桑の西枝一握、附子一箇を共に瓶に入れて煆き、末にして二錢づつを粥飮で空心に服す。(聖惠方)

外腎 [主治] 【皮のまま燒いて性を存して研り、米飮で服す。崩中帶下、及び腸風瀉血、血痢を治す】(日華)

皮 [主治] 【灰に燒いて鼠瘻惡瘡に塗る】(時珍) 外臺方中に用ゐてある。

豪豬 (綱目)

和名 やまあらし
學名 Hystrix crustata, L.
Hystrix leucura, Sykes. (南方產ノモノ)
科名 やまあらし科

[釋名] **蒿豬**(唐本) **山豬**(通志) **獂貐** 音は原俞(ゲンユ)である。**貆豬** 音は丸(クヮン)である。**鸞豬** 時珍曰く、說文に『豪豕とは、鬣が筆管ほどのもので、

能く毫を激して人を射るからだ』とある。郭璞は『吳、楚ではこれを鸞豬と呼ぶ』といつた。星禽に『壁水貐は豪豬なり』とある。

集解　頌曰く、豪豬は、陝洛、江東の諸山中にいづれもゐる。髦間に箭のやうな豪があつて能く人を射る。



〔豪　豬〕

時珍曰く、豪豬は處處の深山中にゐるもので、多きは羣をなして作物を害する。形狀は豬のやうだが、項、脊に長さ一尺ばかりで粗くして筋ほどの棘鬣があり、その狀態は笄、及び帽刺に似たもので、本が白くして端が黑く、怒れば激し去つて矢の如く人を射る。羌人はその皮で鞾を作る。郭璞は『貆豬は自ら牝牡となつて孕む』といひ、張師正倦遊錄には『南海のある泡魚といふは、大いさ斗ほどあり、身に棘刺があつて、能く變化して豪豬となる』とある。巽は魚であり、坎は豕である。これは巽が坎に變ずるといふわけであらうか。

肉 【氣味】【甘し、大寒にして毒あり】頌曰く、多く食つてはならぬ。風を發し、人をして虛羸せしめる。【主治】【膏を多くし、大腸を利す】(蘇頌)

肚 及び **屎** 【氣味】【寒にして毒なし】【主治】【水病、熱風鼓脹には、共に燒いて性を存し、二錢匕を溫酒で服す。一具を用ゐれば消く】(孟詵)【乾して燒いて服すれば黃疸を治す】(蘇恭)【屎のあるまま燒き研つて酒で服すれば、水腫、脚氣、奔豚を治す】(時珍)

【發明】詵曰く、この豬は多く苦參を食ふものだ。故に能く熱風水脹を治するのだが、冷脹をば治せない。

時珍曰く、豪豬は本草には記載がなく、ただ孟氏食療本草の蝟の條に說いてあるだけだ。

熊 (本經上品)

和名 しなくま
學名 Ursus tibetanus, Cuv.
和名 うそりくま
學名 Selenarctos ussuricus, Heude.
科名 くま科

釋名　時珍曰く、熊は雄であつて、熊の字の篆文は形を象したものだ。俗に熊を豬熊と呼び、羆を人熊、馬熊といふは、それぞれ形の似たところに因つて區別したものだ。述異記に『陸に在るを熊といひ、水に在るを能といふ。卽ち鯀の變化したものだ。故に熊の字は能に從ふのである』とある。續搜神記には『熊は樹孔中に居るもので、東方の地では樹を擊つて「子路」と呼ぶ。すると熊が出て來るのだが、呼ばねば動かない』とある。又、狒狒もまた人熊と名ける。本條を見よ。

集解　別錄に曰く、熊は(一)雍州の山谷に生ずる。十一月に取る。

弘景曰く、今は東、西の諸山いづれにもゐるが、やはり容易には手に入らぬものだ。

頌曰く、今は雍洛、河東、及び(二)懷慶衞の山中にいづれもゐる。形は大豕に類して性の輕捷なるもので、好んで高い木に攀ぢ上り、人を見ると顚倒して自ら地上に飛び降りる。冬は蟄して穴に入り、春期になると出る。その足を蹯と名け、八珍の一として古代にはこれを重じたものだが、しかし胹ても熟し難いものである。熊は性鹽を惡むもので、食へば死ぬといふことが淮南子に記載してある。

(一)雍州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(二)懷慶衞ハ草部山草類知母ノ註ヲ見ヨ。

（三）跧伏ハ俯ヒ伏スル貌。

○○時珍曰く、熊は大豕のやうだが、目が竪につき、足は人のやう、色黒く、春、夏の臕(へう)が肥える時は皮が厚く筋が弩(は)り、毎(つね)に木に升つて氣を引き、或は地に墮ちて自ら快とする。これを俗に跌臕(てつへう)と呼ぶ。卽ち莊子の所謂『熊經、鳥申』である。冬期の蟄せる時は物を食はず、饑ゑるときはその掌を舐める。故にその美、掌に在りといふのであつて、これを熊蟠といふ。この物が山中を行くときには、數千里の長途でも必ず石巖、枯木に（三）跧伏(さんぷく)する場所があるもので、山間の住民はこれを熊館といふ。劉敬叔の異苑に『熊は性穢物(あいづつ)、及び傷殘を惡むもので、これを捕獲する者はそれ等の物を穴に置く。すると穴を塞いで了つて自死するものだ。或は棘刺で傷めると穴から出て爪で抓(か)き、骨まで抓いて斃死する』とある。陸佃の埤雅には『その膽は、春は首に近く、夏は腹に在り、秋は左足に在り、冬は右足に在る』とある。熊、羆はいづれも壯毅なもので陽に屬する。故に書經にはこれを二心なきの臣に喩(たと)へ、詩經には男子の祥としてある。



〔熊〕
──羆は大きい──

(四)羆魋
和名　まんしうくま
學名　Ursus mandshuricus (Heude)

附録　(四)**羆魋**　魋の音は頽(タイ)である。時珍曰く、熊、羆、魋は一類中の三種であつて、豕のやうで色の黒いものが熊、大きくして色の黄白なるものが羆、小さくして色の黄赤なるものが魋である。建平地方では魋を赤熊と呼ぶ。陸機が羆を黄熊といつたそのものだ。羆は頭が長く、脚が高く、猛憨多力にして能く樹木を抜き、虎もこれを畏れる。人間に遇ふと人のやうに立つて攫みかかるところから、俗に人熊と呼ぶ。關西では猳熊と呼ぶ。羅願の爾雅翼には『熊の種類で、豬熊といふは形が豕のやうだ。馬熊といふは形が馬のやうだ。卽ち羆である』といつてある。或は、羆は卽ち熊の雄だともいふ。その白脂は熊の白脂のやうだが理が粗くして味が減ずる。功用はやはり同じ。

脂　釋名　**熊白**　弘景曰く、脂、卽ち熊白なるものは背上の肪であつて、色は白くして玉のやう、味が甚だ美である。寒期にはあるが夏期には無い。その腹中の肪、及び身中の脂を煎錬したものもよし。薬用にはなるが啖ふわけには行かぬものだ。

修治　斅曰く、凡そこれを取つたならば、一斤毎に生椒十四箇を入れて共に

錬り、器に盛つて取收める。

氣味 【甘し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。日華曰く、涼なり。その脂を燈火に點ずれば、烟で人の眼を損ひ光明を失はしめる。

主治 【風痺の不仁、筋急。五臟、腹中の積聚、寒熱、羸瘦。頭傷、白禿、顏面の皯皰。久しく服すれば志を強くし、飢ゑず、身を輕くし、天年を長くする】(本經)【飲食嘔吐】(別錄)【風を治し、虛損を補し、勞蟲を殺す。酒で錬つて服す】(日華)【髮を長く黑くし、人の顏面を悅澤にする】(蘇恭)【顏面の皯黯、及び瘡を治す】(藥性)

附方 舊二、新一。【髮を長く黑くする】熊脂、蔓荊子末等分を和勻し、醋で調へて塗る。(聖惠方)【髮毛の黃なるもの】熊脂を髮に塗つて梳き散し、寢臺の底に入つて地に伏し、一時間ほどして出れば盡く黑くなる。脂一升を用ゐるに過ぎずして效がある。(千金(五))【白禿頭癬】熊白を傅ける。

肉 氣味 【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。弘景曰く、痼疾あるものは熊肉を食つてはならぬ。その疾は終身除けなくなる。鼎曰く、腹中に積聚寒熱あるものがこれを食へば永く除けなくなる。十月それを食へば神を傷めるか

(五)大觀ニ金下ニ翼字アリ。

ら食つてはならぬ。

主治 【風痺の筋骨不仁。功は脂と同じ】(孫思邈)【虛羸を補す】(孟詵)

發明 時珍曰く、按ずるに、劉河間は『熊肉は羸を振ひ、兎目は眎を明にする。その氣の有餘で不足を補ふのだ』といつた。

附方 舊二 【中風痺疾】中風で心、肺に風熱があり、手、足が風痺不隨となり、筋脈五緩し、恍惚し、煩燥するには、熊肉一斤を切つて豉汁の中に入れ、葱、薑、椒、鹽を和して腌腊にし、空心に食ふ。【脚氣風痺】五緩、筋急には、熊肉半斤を上記の方法で食ふ。(いづれも食醫心鏡)

掌 修治 聖惠方に『熊掌は臑難いものだが、酒、醋、水の三件を配合して共に煮れば熟して大いさ皮毬ほどになる』とある。

主治 【これを食へば風寒を禦ぎ、氣力を益すものだ】(日華)

膽 頌曰く、熊膽は陰乾して用ゐる。しかし、僞物が多いものだが、ただ粟一粒ほどを水中に滴して見て、一すぢの綫のやうになつて散ぜぬものならば眞物である。

時珍曰く、按ずるに、錢乙は『熊膽の佳きものは通明なもので、米粒ほどを水中

に點ずると飛ぶやうに動き廻るものが良し。他の膽は動いても緩漫なものだ』といつた。周密の齊東野語には『熊膽は善く塵を辟けるもので、眞僞を試驗するには、一器の淨水に表面に塵を散し、それに米粒ほどの膽を落すと凝つた塵が豁然として開くものだ』とある。

［氣味］【苦し、寒にして毒なし】權曰く、防已、地黃を惡む。［主治］【時氣の熱が盛で黃疸に變じたもの、暑期の久痢、疳䘌、心痛、疰忤】(蘇恭)【諸疳、耳、鼻の瘡、惡瘡を治し、蟲を殺す】(日華)【小兒の驚癇、瘈瘲には、竹瀝で豆二粒ほどを溶化して服す。心中の涎を去つて甚だ良し】(孟詵)【熱を退け、心を淸し、肝を平にし、目を明にして翳を去り、蛔、蟯蟲を殺す】(時珍)

［發明］時珍曰く、熊膽は苦くして心に入り、寒は熱に勝ち、手の少陰、厥陰、足の陽明の經の藥である。故に能く心を涼し、肝を平にし、蟲を殺すのであつて、驚癇、疰忤、翳障、疳痔、蟲牙、蛕痛の劑である。

［附方］舊四、新六。【赤目障翳】熊膽丸——膽少量を化開し、氷片一二斤と銅器に入れて點ける。甚だ奇である。或は淚が出て痒きには、生薑粉少しを加へて用

ゐる。(齊東野語)　【初生兒の閉目】胎中で熱を受けたるに由るものだ。熊膽少量を取て蒸した水で洗ふ。一日七八回試み、三日にして開かぬときは、四物に甘草、天花粉を加へて服す。(全幼心鑑)　【小兒の鼻蝕】熊膽半分を湯に化して抹する。(聖惠方)　【十年の痔瘡】熊膽を塗るが神效がある。一切の方も及ばない。(外臺)　【腸風痔瘻】熊膽半兩に片腦少量を入れて研り、豬膽汁を和して塗る。(壽域方)　【蛕蟲心痛】熊膽を大豆一粒ほどを水に和して服す。大いに效がある。(外臺)　【小兒の驚癇】方は主治の項にある。　【風蟲牙痛】熊膽三錢、片腦四分を用ゐ、豬膽汁で少量づつを調へて搽る。(攝生方)　【水弩に射られたとき】熊膽を塗り、更に雄黄を酒と共に磨つて服すれば癒える。(斗門方)　【諸疳の羸瘦】熊膽、君子末等分を研り勻ぜて瓷器で蒸し溶し、蒸餅で麻子大の丸にし、二十丸づつを米飲で服す。(保幼大全)

腦髓　主治　【諸聾】(蘇恭)　【頭旋を療ず。頂を摩でれば白禿、風屑を去り、髮を生ずる】(日華)

血　主治　【小兒の客忤】(蘇恭)

骨　主治　【湯にして歷節風、及び小兒の客忤を浴す】(孟詵)

麢羊（本經中品）

和名 かもしかノ一種
學名 Nemorhoedus caudata A. M. Redw.
科名 うし科



〔麢 羊〕

【釋名】 **羚羊**（俗） **麢羊** 音は鈐（キン）である。 **九尾羊** 時珍曰く、按ずるに、王安石の字說に『鹿なるものは同類が團結して角で外を環し圍ふやうにして自己を防禦する。麢なるものは獨棲し、角を木上に懸けて害を遠ける。如何にも靈なるものだ。故に文字は鹿に從ひ靈に從ふの省文であるが、後世では羚と書くやうになつた』とある。許愼の說文には『麢は山羊である。大きくして角が細い』とある。山海經には羬と書いて『狀は羊の如くにして馬尾なり』とある。費信の星槎勝覽には『(一)阿丹國の羚羊は、胸中から尾まで九塊を垂れてゐる。故に九尾羊と名ける』とある。

【集解】 別錄に曰く、羚羊角は(二)石城、及び(三)華陰の山谷に出る。採取に一定

(一)阿丹國トハ阿刺比亞ヲイフ。阿丹、卽チ亞丁。
(二)石城ハ草部蔓草類通草ノ註ヲ見ヨ。
(三)大觀ニハ陰山ニ出ヅトアリ、華谷ノ二字ナシ。陰山ハ蟲部卵生類石蠶ノ註、華陰ハ石部白石英ノ註ヲ見ヨ。

の時期はない。

弘景曰く、今は(四)建平、宜都、諸蠻の山中、及び西域に産し、多くは兩角であるが、一角のものを勝れたものとする。角は節多くして蹙蹙として圓く繞つたものだ。別に山羊角といふがある。それは極めて長く、一邊だけに節があつて、節もやはり疎大だ。藥用には入れない。これは爾雅に羱羊とあるそのもので、羌夷ではこれを羚羊と呼んでゐる。能く嶮峻な坂や崖を陟るものだ。

恭曰く、羚羊は(五)南山、(六)商洛地方に大いにゐる。今は(七)梁州、(八)眞州、(九)洋州にも産し、やはり貢納物としてある。その角は人の指ほどの細いもので、長さは四五寸で文があり、細に蹙つてゐる。山羊、或は野羊と名けるは、大なるものは牛ほどあり、角は鞍橋になる。又、山驢といふもあつて、大いさ鹿ほどあり、皮は靴に作れる。兩角あつて大小は山羊角ほどのものだ。俗間では一般にこれをも用ゐる。陶氏の所謂一邊に粗文のあるものとはこれを指したのだ。これは山羊ではない。

藏器曰く、山羊、山驢、羚羊の三種は相似たものだが、羚羊には不思議な特異性があつて、夜宿して他の危害を防ぐには、角を樹に掛けてその身軀を地に著けない

(四)建平ハ金部金ノ註、宜都ハ草部山草類巴戟天ノ註ヲ見ヨ。
(五)南山ハ終南山。草部山草類王孫ノ註ヲ見ヨ。
(六)商洛ハ鱗部蛇類烏蛇ノ註ヲ見ヨ。
(七)梁州ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。
(八)眞州ハ宋ニ置ク、今ノ江蘇省儀徵縣ナリ。
(九)洋州ハ草部山草類白及ノ註ヲ見ヨ。

（一〇）秦州ハ石部石膽ノ註、隴州ハ蟲部卵生類石蠶ノ註、龍州ハ草部毒草類附子ノ註、蜀州ハ草部隰草類大青ノ註、金州ハ金部錫ノ註、商州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

ものだ。角は中に彎り、深鋭で緊つて小さく、物に掛けた痕のあるものが眞物である。かやうに見判けると疎慢にして痕のないものは正しいものでないわけだ。眞の角は耳の邊に近けて聽くと集集と鳴るものを良しとする。陶氏が一角のものといふは謬だ。

○頌曰く、今は（一〇）秦、隴、龍、蜀、金、商州の山中にいづれもゐて、その地の番民が多く捕獲して賣りに出る。その形は羊に似て、青色で大きく、その角は長さ一二尺あり、人の手指の握つた痕のやうな節がある。また最も堅く勁いものだ。郭璞の爾雅註に『麢は羊に似て大きく、その角は細くして圓く鋭く、好く山崖の間にゐる。羱は吳羊に似たもので、その角は大きくして墮ちる。西方に產する』とある。本草の諸註は各々異つてゐるが、現に店舖で取扱れてゐるものに就いて觀察するに、それは爾雅の羚羊、陶註の山羊、蘇註の山驢と大體に於て相似たもので、現に一般に羱羊その物として用ゐられてゐる。長さ四五寸の細い角の中に往往にして中に彎つて角を磨つた痕の認められるものがあつて、詳細に諸說を檢討して見ると、それこそ眞の羱羊角なのだが、それをば世間で多く用ゐないのは何故であらうか。

又、閩、廣の山中に野羊といふ一種を産し、彼の地ではやはりこれを羚羊といつてゐる。陳氏は『耳の邊に近づけて聽くと鳴るものが良し』といつたが、現に牛、羊の諸角も、殺して取つたものならばみな聲が聽える。羚角に限つたことはない。自死したものの角ならば聲がないのだ。

宗奭曰く、諸角は耳に附けて見るとみな集集と聲が聽える。掛けた痕があるといふ一說だけで十分なもので、それ以上確實とはいへない。しかし僞作のものがあるから注意が肝腎だ。

時珍曰く、羚羊は羊に似て色靑く、毛粗く、兩角が短小だ。羱羊は吳羊に似て兩角が長く太い。山驢は身が驢で羚の角が生え、その角はやや大きくして節が疎慢なだけのものだ。陶氏は羚羊に一角のものがあるといひ、陳氏はそれを非としたが、按ずるに、寰宇志に『安南の高石山に羚羊を産する。一角で極めて堅く、能く金剛石を碎く』とある。して見ると羚にも元來一角のものがあるのだ。金剛石は西域に産するもので、狀態は紫石英のやうで、百錬しても化けず。何物で擊つても碎けぬものだが、ただ羚羊角で扣けば自然に氷のやうに泮けるものだ。又、貘の骨で佛

（一一）滑國ハ駝ノ註ヲ見ヨ。

（一二）晉陽ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。

（一三）懸甕之山ハ晉陽、卽チ今ノ山西省太原府ノ西南ニ在リ。女几之山ハ今ノ河南省宜陽縣ノ西ニ在リ。荊山ハ今ノ湖北省南漳縣ノ西北ニ在リ。綸山ハ山海經ニ女几之山ノ次ニ『又東北二百里曰宜諸之山』『又東北三百里曰綸山』トアリ。今所在未詳。

（一四）太行之山ハ石部石硫黄ノ註ヲ見ヨ。

骨と僞稱するものも、何物で打つても破れぬものだがこの角で擊てば碎ける。いづれも相畏の關係にあるからだ。羚羊皮は、西方の人は座褥に作る。

附錄 **山驢** 恭曰く、（前項を見よ）

時珍曰く、南史に『（一一）滑國に產する野驢には角がある』とあり、廣志に『驢羊は驢に似たものだ』とあり、山海經には『（一二）晉陽の（一三）懸甕の山、女几の山、荊山、綸山にいづれも閭多し』とあり、郭璞の註に『閭、卽ち羭であつて、驢に似て蹄に岐があり、尾は馬のやう、角は麢羊のやうだ。一名山驢といふ。俗間ではやはりその角を用ゐて羚羊に代へる』とあり、又、北山經に『（一四）太行の山、獸あり、䮝と名く。狀麢羊の如くして四角、馬尾、距あり、善く旋す。その名自ら叫ぶ』とある。これもやはり山驢の類のものだ。

羚羊角 **修治** 斅曰く、凡そこれを用ゐる場合には、神羊角といふものがある。甚だ長くして二十四節あり、內に天生の木胎がある。この角の有する神力は千牛に抵るものだ。凡そ使用するには單用してはならぬ。必ず折れない元の對のままのものを繩で縛り、鐵錘で銼細して幾重にも密に裹み、風に當らぬやうにし、それ

を少しづつ出して用ゐ、搗き篩つて極細にし、更に一萬匝研つて藥に入れる。かくすれば人の腸を刮する處を免れる。

【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦し、微寒なり。甄權曰く、甘し、溫なり。能く銀を縮する。【主治】【目を明にし、氣を益し、陰を起し、惡血注下を去り、蠱毒、惡鬼、不祥を辟け、常に魘寐せず】(本經)【邪氣、驚夢、狂越、僻謬を除き、傷寒時氣の寒熱、熱が肌膚に在るもの、濕風注毒が骨間に伏在するもの、及び食噎不通を療ず。久しく服すれば筋骨を强くし、身を輕くし、陰を起し、氣を益し、男性を利す】(別錄)【中風筋攣、附骨疼痛を治す。末にして蜜で服すれば卒熱悶、及び熱毒痢血、疝氣を治す。水に摩つて腫毒に塗る】(孟詵)【一切の熱毒風の攻注、中惡、毒風の卒死、昏亂して意識を失へるものを治し、產後の惡血が衝心して煩悶するを散ず。燒いて末にして酒で服すれば、小兒の驚癇を治し、山瘴、及び噎塞を治す】(藥性)【驚悸、煩悶、心胸の惡氣、瘰癧、惡瘡、溪毒を治す】(藏器)【肝を平にし、筋を舒べ、風を定め、魂を安じ、血を散じ、氣を下し、惡を辟け、毒を解し、子癇、痙疾を治す】(時珍)

【發明】 時珍曰く、羊は火畜であるが、羚羊は木に屬する。故にその角は厥陰・肝の經に入ることが甚だ捷だ。同氣相求めるのである。肝は木を主り、竅を目に開くもので、それに病が發すれば目暗、障翳となるが、羚羊角は能くそれを平にする。肝は風を主り、合に在つては筋となり、その發する病は小兒驚癇、婦人の子癇、大人の中風搐搦、及び筋脈攣急、歷節掣痛であるが、羚羊角は能くそれを舒べる。魂は肝の神であつて、發する病は驚駭不安、狂越、僻謬、魘寐卒死であるが、羚角は能くそれを安ずる。血は肝に藏されるもので、それに發する病は瘀滯、下注、疝痛、毒痢、瘡腫、瘻癧、產後の血氣であるが、羚角は能くそれを散する。相火が肝、膽に寄れば氣に在つては怒となり、病としては煩懣、氣逆、噎塞不通、寒熱、及び傷寒伏熱であるが、羚角は能くそれを降す。羚は性が靈であつて、筋骨の精が角にあるものだ。故にまた能く邪惡を辟けて諸毒を解し、佛牙を碎くのであつて、烟に燒けば蛇、虺を走らせるのである。本經、別錄に甚だ明にその功を記述してあるが、近世俗間で能くそれを發揚するもののないのは遺憾なことだ。

【附方】 舊七、新四。【噎塞不通】羚羊角屑を末にし、方寸匕を飲で服し、幷に

角で噎上を摩する。(外臺)【胸脇通滿】羚羊角を燒いて末にし、方寸匕を水で服す。(子母祕錄)【腹痛熱滿】方は上に同じ。【墮胎腹痛】出血して止まぬには、羚羊角を灰に燒き、三錢を豆淋酒で服す。(普濟)【產後の煩悶】汗を出し、人事不省なるには、千金では、羚羊角を燒いて末にし、方寸匕を東流水で服す。なほ癒えぬときは再服する。○又ある方では、芍藥、枳實等分を加へて炒つて研末し、湯にして服す。【血氣逆煩】羚羊角を燒いて末にし、方寸匕を水で服す。(肘後方)【臨產に分娩を催す】羚羊角一箇の尖を刮つて末にし、方寸匕を酒で服す。(產寶)【小兒の下痢】羚羊角中の骨を燒いて末にし、方寸匕を飮服する。(祕錄)【遍身の赤丹】羚羊角を灰に燒き、雞子淸で和して塗る。神效がある。(外臺)【瘡の如き赤瘢】瘙痒し、甚しきは人を殺す。羚羊角を水に磨り、それで數百遍摩るが妙である。(肘後方)【山嵐瘴氣】羚羊角末一錢を水で服す。(集簡方)

肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【惡瘡】(藏器)【五味を和して炒熟し、酒中に投じて一夜置いて飮めば、筋骨の急强、中風を治す。北方人は恒にこれを食つて蛇蟲傷を免れる】(孟詵)

肺 【氣味】【肉に同じ】 【主治】 【水腫鼓脹、小便不利】(時珍)

【發明】 時珍曰く、羚羊肺は、本草には收錄されてないが、千金翼に記載があり、大醫山璉が韋司業の水腫を治した莨菪丸にこれを用ゐたとある。蓋しその藥を引いて肺に入り、以て小便の上源を通ずる作用を取つたものだ。その方は、羚羊肺一具を用ゐ、沸湯で微し煠て曝乾して末にし、莨菪子一升を三年の醋に一伏時浸して蒸熱して搗き爛し、和して梧子大の丸にし、四十丸づつを麥門冬湯で食後に服す。口中が乾いて妄語するが效驗の現れであつて、數日間小便が大いに利して瘥える。羚羊が無いときは青羊膽を代用してもよし。

膽 【氣味】 【苦し、寒にして毒なし】 【主治】 【顏面の皯䵳で雀卵のやうな色なるには、二升を共に煮て三沸し、四五回塗るが良し】(時珍)

【附方】 新一。 【面䵳】 羚羊膽、牛膽各一箇、醋二升を共に煮て三沸し、頻りに塗る。(外臺)

鼻 【主治】 【炙き研つて用ゐれば五尸、遁尸、邪氣を治す】(時珍) 外臺の方中に用ゐてある。

(一)山羊（日用）

和名　鈌
學名　Ovis jubata, Peters.
科名　うし科

【釋名】 野羊（圖經） 羱羊　時珍曰く、羊にして原野に在るものだからかく名けたのだ。

【集解】 弘景曰く、山羊、卽ち爾雅の羱羊であつて、西夏に產する。呉羊に似て角が大きく、角は(二)墮ちる。能く峻坂を渉る。羌夷ではこれを羚羊角といふ。極めて長いがただ一邊に節があるだけで、節もやはり疎大だ。藥用には入れない。

恭曰く、山羊は大いさ牛ほどあり、或は野羊と名ける。善く死ぬまで鬪ふもので、角は鞍橋に作れるものだ。

頌曰く、閩、廣の山中に一種の野羊があつて、彼の地ではそれを羚羊といつてゐる。その皮は厚く硬く、炙いては食ふに堪へないが、その肉は頗る肥えたものだ。

呉瑞曰く、山羊は羚羊に似て色が靑い。その角に掛けた痕のあるものが羚羊であつて、無いものは山羊である。

時珍曰く、山羊に二種あつて、一種は角が大きくして盤環し、肉は百斤もあるも

(一)木村(重)曰く、北方ニ產スルテツセンカモシカハUrotragus raddeanus (Heude)ニテ山羊ト云ハル。

(二)典籍便覽ニ墮ヲ橢ニ作ル。

のだ。一種は角の細いものである。說文にはこれを莧羊——音は桓(クワン)——といつてある。陸氏は『羱羊は形狀驢のやうで羣行し、その角は甚だ大きく、一定の時期に角が墮ちる』といつた。暑期に塵や露がその上に溜つて草が生え、生えたままに戴いて行くものだ。故に代都賦に『羱羊草を養つて以て盤桓す』といつてある。



〔山羊〕

肉 氣味 【甘し、熱にして毒なし】頌曰く、南方の野羊は多く石香葇を噉ふ。故に腸藏が頗る熱する。多く食ふべきものではない。

主治 【男子が食へば、肥軟にして人に益あり。冷勞、山嵐、瘧痢、婦人の赤白帶下を治す】(蘇頌)【筋骨の急强、虛勞を療じ、氣を益し、產婦を利す。時疾の人には利せず】(吳瑞)

(一)鹿 (本經中品)

和名　あしあじか(亞細亞鹿)
學名　Cervus elaphus, Linne.
科名　しか科

(一) 木村(重)曰ク、高山地方ニハ Cervus affinis, Hodgson

住ミ、北支那ニハまんしゆうあかしか(Cervus Xanthopygus M. Edwards)アリ、其他しか屬種類多シ。

【校正】本經上品の白膠、中品の鹿茸を本書には一條に併記した。

【釋名】**斑龍**　時珍曰く、鹿の字の篆文はその頭、角、身、足の形を象したものだ。爾雅に『鹿は牡を麚——音は加(カ)——といひ、牝を麀——音は攸(イウ)——といひ、その子を麛——音は迷(メイ)——といひ、絕だ力あるを麉——音は堅(ケン)——といふ』とある。斑龍とは澹寮方に出てゐる名稱で、按ずるに、乾寧記に『鹿と遊龍と相戲るれば必ず異角を生ず』とあるところを見ると、鹿に龍なる名稱のあるは、或は此から出たものだらう。梵書にはこれを密利迦羅といつてある。

【集解】時珍曰く、鹿は處處の山林中にゐる。身は馬のやう、尾は羊のやうで、頭は側つて長く、脚は高くして步行が速い。牡には角があつて、夏至になると解る。大いさは小さい馬ほどで、地色は黃で白い斑がある。俗に馬鹿と呼ぶ。牝には角がなく、小さくして斑がなく、毛は黃白を雜へてゐる。俗に麀と呼ぶ。鹿は孕んで六月にして子を生む。鹿は性の淫なるもので、一頭の牡が常に數頭の牝と交る。これを聚麀といふ。性喜んで龜を食ひ、能く毒なき良草を擇り別けて、食ふときは相呼び、

(二)尾閭ニ朝ストハ口ヲ以テ尻骨ヲ嘗ムルヲ云フ。



〔鹿〕
——麃は大きく麋は同じ——

行くには旅を同うし、停つて居るときは角を外部へ向けて環陣になつて害を防ぎ、臥すには口を(二)尾閭に朝して督脈を通ずる。殷仲堪は『鹿は白色を以て正とす』といひ、述異記には『鹿は千歳にして蒼となり、また五百歳にして白となり、また五百歳にして玄となる。玄鹿は骨もまた黒い。これを脯にして食へば長生する』とあり、埤雅には『鹿は仙獸であつて、自ら能く性を樂み、六十年にして必ず角下に璚を懷き、斑痕が紫色になり、歩行すれば涎を出し、また急に走らない。故に「鹿は玉を戴いて角に斑あり、魚は珠を懷いて鱗紫なり」といふのだ』とある。沈存中の筆談には『北狄に駝鹿といふがある。極めて大きいもので、色は蒼黃で斑がなく、角が大きくして文があり、堅く瑩で玉のやうだ。茸もやはり用ゐられる』とあり、名苑には『鹿の大なるものを麈といふ。羣鹿がそれに從ひ、その尾を視て行動を定める目標とする。その尾は能く塵を辟けるもので、それで氈を拂

へば蠹がつかず、茜帛中に置けば歳久しく經つても紅色が黯くならない』とある。

用するときには燥す。

鹿茸　修　治　別錄に曰く、四月、五月の角を解するときに取つて陰乾し、使

恭曰く、鹿茸は夏期に採收する。陰乾しては百に一も完全に行かず、且つ臭くなり易い。ただ破つて火で乾すが大いに好し。

斆曰く、凡そ鹿茸を使ふには、黄精の自然汁に二晝夜浸して漉出し、切つて焙じて搗いて用ゐれば、人をして渴せしめることを免れる。又ある法では、鹿茸を鋸で片にして五兩づつに、羊脂三兩で天靈蓋末を拌ぜて塗り、慢火で炙いて內外を黃色で脆かにし、鹿皮で裹んで室中に置く。一夜經てば藥魂がそれに歸入する。そこで慢火で焙じ乾して末に搗いて用ゐる。

日華曰く、ただ酥で炙き炒つて研る。

宗奭曰く、茸上の毛に先づ酥を薄くむらなく塗り、烈焰中で灼いて毛が盡きるを候つて微し炙く。酥を用ゐねば火焰で茸を傷めるものだ。

時珍曰く、濟衆、濟生の諸方に、酥を用ゐて炙くとあるものと、酒で炙くといふ

ものと、酒で蒸し焙じて用ゐるといふものとある。各々その方に隨つて適當な方法を取るべきものである。

【發明】抱朴子曰く、南山に鹿多く、毎に一頭の雄が百數十の牝と遊び、春になると羸痩するが、夏に入つてただ菖蒲を食つて肥える。角の解する時になると共の茸は甚だ痛むものだ。獵人がこれを取るには、索で繫ぎ住めて茸を取り、然る後に鹿を斃すので、鹿の血がまだ散ぜずにあるものだ。

宗奭曰く、茸は、破れぬもの、及び血が出て了はぬものが最も得難い優良品だ。蓋しその力は盡く血中に在るものだからである。この物は紫茄のやうなものを上級品として茄子茸と名ける。それは得難いものといふわけで取分けて言ふのだが、しかし、これは太だ嫩くして血氣が具はらず、その實は力の少いものだ。堅いものはまた太だ老い過ぎてゐる。ただ長さ四五寸、形が分岐した馬鞍のやう、茸端が瑪瑙、紅玉のやうで、破ると肌が朽木のやうなものが最も善いのである。世間にはまた麋(三)角で僞造したものもあるから大いに注意を要する。

按ずるに、沈存中の筆談に『月令に「冬至、麋角解す。夏至、鹿角解す」とあつて、陰

(三)大觀ニ角ヲ茸ニ作ル。

陽がかやうに相反してゐる。今一般には、麋、鹿の茸を一種のものとしてゐるが、粗笨な考だ。或は麋、鹿の血を刺し取つて茸の代用にし、「茸もやはり血だ」といふものもあるが、これは大なる誤だ。麋茸は陽を補するに利あり、鹿茸は陰を補するに利あるもので、他の藥を佐とすることを條件として有功なのである。凡そ血を含む物としては、肉はやや長じ易く、筋はこれに次ぎ、骨は最も長じ難いものである。故に人間は胚胎から成人に至るまでに二十年を要して骨髓が始めて堅まるのであるが、ただ麋、鹿の角だけは生えるときから堅まるまで二个月ほどもかからないで、大なるものは二十餘斤ほどになるのだ。故にこれを計算して見ると、一晝夜に數兩だけ生え延びねばならぬわけである。凡そ骨の生えることの速さに於てこの物ほど速いものはないのである。草木が生長し易いといつても、やはりこれには及ばない。これは骨としての至强なるものであつて、能く骨、血を補し、陽道を堅くし、精髓を益する所以である。頭は諸陽の集中するところであつて、上に茸、角に鍾るのだから、凡百の血と比較になるべきわけがないではないか』といつてある。

時珍曰く、按ずるに、熊氏の禮記疏に『鹿なるものは山獸にして陽に屬するもの

だ。情淫して山に遊び、夏至には陰氣を得て角を解す。これは陽から退くの象である。麋なるものは澤獸にして陰に屬するものだ。情淫して澤に遊び、冬至に陽氣を得て角を解す。これは陰から退くの象である』といつてある。その他は角の項を見よ。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】別錄に曰く、酸し、微溫なり。甄權曰く、苦く辛し。○麻勃が使となる。○詵曰く、鹿茸は鼻で齅いではならぬ。中に小さい白蟲がゐて、肉眼では見えないが、人の鼻に入つて必ず蟲顙となる。藥では治し得ないものだ。

【主治】【漏下、惡血、寒熱、驚癇。氣を益し、志を強くし、齒を生じ、老いず】(本經)【虛勞で洒洒として瘧の如くなるもの、羸瘦、四肢酸疼、腰脊痛、小便數利、洩精、溺血を療じ、瘀血の腹に在るを破り、石淋、癰腫、骨中の熱疽で癢きを散じ、胎を安じ、氣を下し、鬼精物を殺す。久しく服すれば老に耐へる。男性の陰に近けてはならぬ。痿せしめるものだ】(別錄)【男子の腰腎の虛冷、脚膝の無力を補す。夜中夢に鬼と交接し、精が自ら溢出するもの、婦人の崩中、漏血、赤、白帶下に

（一）慢、本草洞詮ニ謾ニ作ル。

は、炙いて末にし、方寸匕を空心に酒で服す。筋骨を壯にする」（日華）【精を生じ、髓を補し、血を養ひ、陽を益し、筋を强くし、骨を健にし、一切の虛損、耳聾、目暗、眩運、虛痢を治す】（時珍）

【發明】　時珍曰く、澹寮方に『昔、西蜀の市中に嘗て一道人があつて、斑龍丸、一名茸珠丹といふを賣つてゐたが、毎に大醉すると「尾閭禁ぜざれば滄海竭く、九轉の靈丹は却て（一）慢說。ただ斑龍頂上の珠のみ有つて、能く玉堂關下の穴を補ふ」と高らかに歌ひ、社會の上下にそれが傳はつてゐた。その方は蓋し鹿茸、鹿角膠、鹿角霜を用ゐたものだ』とあり、戴原禮の證治要訣には、頭眩運で、甚しきは家屋が轉倒するやうに覺え、眼が暗黑になり、或は物が飛ぶやうに見え、或は一のものが二に見えるを治するに、茸珠丹を用ゐるが甚だ有效だとしてあり、或は、鹿茸半兩、無灰酒三盞を一盞に煎じ、麝香少量を入れて溫服するも效があるさうである。茸は頭に生ずるので類に因つて相從ふのだ。

【附方】　舊一、新八。【斑龍丸】諸虛を治す。鹿茸を酥で炙き――或は酒で炙くもよし――鹿角膠を炒つて珠にし、鹿角霜、陽起石を紅く煆いて酒に淬し、肉蓯蓉

を酒に浸し、酸棗仁、柏子仁、黄芪を蜜で炙き各一兩、當歸、黒附子を炮き、地黄を九蒸九焙して各八錢、辰砂半錢を各末にし、酒糊で梧子大の丸にし、空心に五十丸づつを溫酒で服す。(濟衆方)【鹿茸酒】陽事虛痿、小便頻數、顏色に光なきを治す。嫩鹿茸一兩を毛を去つて切片し、山藥末一兩を絹に裹み、酒壜中に七日間置いて瓶を開き、一日に三盞を飮み、茸を焙じて丸にして服す。(普濟方)【陰虛腰痛】反側し能はぬには、鹿茸を炙り、兎絲子と各一兩、舶來の茴香半兩と末にし、羊腎二對を酒で煮爛して泥に搗いたもので和し、梧子大の丸にして陰乾し、一日三回、三五十丸づつを溫酒で服す。(本事方)【精血耗涸】耳が聾し、口が渇き、腰痛し、白濁し、上燥し、下寒し、峻烈な補劑を用ゐるに堪へぬものには、鹿茸を酒で蒸し、當歸を酒に浸して各一兩を焙じて末にし、烏梅肉を膏に煮て搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。(濟生方)【腰膝疼痛】傷敗せるものには、鹿茸に酥を塗つて紫色に炙いて末にし、一錢づつを酒で服す。(續千金方)【小便頻數】鹿茸一對を酥で炙いて末にし、一日三回、二錢づつを溫酒で服す。(鄭氏家傳方)【虛痢で危困せるもの】血氣衰弱に因る者には、鹿茸を酥で炙いて一兩を末にし、麝香五分を入れ、燈

心で煮た棗肉で和して梧子大の丸にし、三五十丸づつを空心に米飲で服す。(濟生方)【飲酒で發つた泄】骨立し、食事不能となり、ただ酒を飲み、ために泄するものには、嫩鹿茸を酥で炙き、肉蓯蓉を煨いて一兩、生麝香五分を末にし、陳い白米の飯で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飲で服す。これを香茸丸と名ける。(普濟方)【處女の白帶】衝任の虛寒に因るものには、鹿茸を酒で蒸して焙じて二兩、金毛狗脊、白斂各一兩を末にし、艾を煎じた醋で打つた糯米糊で梧子大の丸にし、一日二回、五十丸づつを溫酒で服す。(濟生)

角　頌曰く、七月に角を採る。鹿の年久しきものはその角が更に好く、煮て膠にして藥に入れるにいよいよ佳し。斆曰く、鹿角は黃色にして緊つて重く、尖の好きものを擇ばねばならぬ。かかる角のある鹿は靈草を食ふもので、そこに衆くの鹿と異つたところがあるわけだ。

【修治】　詵曰く、凡そ鹿角、麋角を用ゐるには、いづれも截段し、錯屑して蜜で浸し、微火で焙じて少し變色せしめ、曝乾し、搗き篩つて末にし、或は燒いて飛し、丹にして服するが至つて妙である。角を一寸位に截つて泥で裹み、器中に入れ

て大火で一日間燒けば玉粉のやうになるものだ。

時珍曰く、按ずるに、崔行功の纂要方の鹿角粉の法は、鹿角を一寸位に截り、炭火で燒いて末に搗き、水で和して團にし、絹袋を三五重にして盛り、再び煆いて再び和し、かく五回繰返し、牛乳で和して再び燒いて研つて用ゐる。

【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】杜仲が使となる。

【主治】【惡瘡、癰腫、邪惡の氣、留血の陰中に在るを逐ひ、少腹血(五)痛、腰脊痛、折傷惡血を除き、氣を益す】(別錄)【猫鬼中惡、心腹(六)疼痛】(蘇恭)【水に磨つて汁を服すれば、脫精、尿血、夜夢鬼交を治す。醋に磨つた汁を瘡瘍、癰腫の熱毒に塗る。火で炙き熱して小兒の重舌、鵝口瘡を熨す】(日華)【蜜で炙いて研末して酒で服すれば、身を輕くし、骨髓を強くし、陽道の絕傷を補し、又、婦人の夢に鬼と交はるものを治す。淸酒で一撮を服すれば鬼精を出す。燒灰は婦人胞中の餘血が盡きずして死せんとするを治す。一日三回(七)、方寸匕を酒で服するが甚だ妙である】(孟詵)

【發明】時珍曰く、鹿角は、生で用ゐれば熱を散じ、血を行らし、腫を消し、邪を辟ける。熟して用ゐれば腎を益し、虛を補し、精を強くし、血を活す。霜を鍊

(五)大觀ニ血下ニ急ノ字アリ。
(六)大觀ニ疼ヲ痊ニ作ル。
(七)大觀ニ日三ノ次ニ夜一ノ二字アリ。

つて熬膏したものは滋補に專らなものだ。

附方

舊十六、新十九。【鹿角を服する法】鹿角屑十兩、生附子三兩を皮、臍を去つて末にし、二錢づつを空心に溫酒で服す。人をして睡を少からしめ、氣力を益し、神明に通ずる。（彭祖方）【腎消で尿數のもの】鹿角一具を炙いて搗き篩ひ、一日二回、方寸匕づつを溫酒で服す。（外臺）【骨虛勞極】顏面腫れて垢黑く、脊痛して久しく立つ能はず、血氣衰憊し、髮落ち、齒枯れ、甚しきは喜んで唾するものである。鹿角二兩、牛膝を酒に浸して焙じて一兩半を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に鹽酒で服す。（濟生）【腎虛腰痛】錐で刺すやうに覺え、動搖し能はぬには、鹿角屑三兩を黃に炒つて研末し、一日三回、方寸匕を空心に溫酒で服す。（肘後方）【卒に腰脊の痛むもの】轉側し能はぬには、鹿角五寸を赤く燒いて二升の酒中に投じ、一夜浸して飲む。（梅師）【婦人の腰痛】鹿角屑を黃に炒つて研り、一日五六回、方寸匕を酒で服す。（楊氏產乳）【妊娠腰痛】鹿角を長さ五寸に截り、赤く燒いて酒一升の中に投じ、また燒いてまた浸し、かく數回繰返して細研し、空心に方寸匕を酒で服す。（產寶）【產後の腹痛】血の盡きぬには、鹿角を燒いて研り、豉汁で方寸匕を

服す。一日二回。(子母秘錄)【妊娠下血】止まぬには、鹿角屑、當歸各半兩、水三盞を煎じて半減して頓服する。二服に過ぎず。(普濟方)【腹中の胎兒死亡】鹿角屑三寸匕を葱、豉を煮た湯で和して服す。立ろに出る。(百一方)【墮胎血瘀】下らずして狂悶し、寒熱するには、鹿角屑一兩を末にし、一日三回、一錢を豉湯で服す。須臾にして血が下る。(聖惠方)【胞衣不下】鹿角屑三分を末にし、薑湯で調へて服す。(産乳)【産後の血運】鹿角一段を燒いて性を存し、火毒を出して末にし、酒で調へて灌ぎ下せば醒める。(楊拱醫方摘要)【婦人の白濁】滑數し、虛冷するには、鹿角屑を黃に炒つて末にし、二錢を酒で服す。(婦人良方)【筋骨疼痛】鹿角を燒いて性を存して末にし、一日二回、一錢を酒で服す。【食後によく嘔するもの】鹿角を燒いて末にして二兩、人參一兩を末にし、一日三回、方寸匕を薑湯で服す。(肘後方)【小兒の噦疾】鹿角粉、大豆末等分を相和し、乳で調へて乳の上に塗つて飮ませる。(古今錄驗)【小兒の瘧疾】鹿角を生で研つて末にし、發作するに先だつて一字を乳で調へて服す。(千金)【小兒の滯下】赤、白を下すには、鹿角灰、髮灰等分を用ゐ、一日二回、三錢を水で服す。(千金方)【小兒の重舌】鹿角末を一日三回舌下に塗る。(姚和衆方)【小兒の流

誕】脾熱である。鹿角屑末一字を米飲で服す。(普濟方)【顏面の皯皰】鹿角尖を磨つた濃汁を厚く塗る。神效がある。【顏面の風瘡】鹿角尖を酒に磨つて塗る。(聖惠)【咽喉骨鯁】鹿角を末にし、含んで津を嚥む。(斗門方)【蹉跌損傷】血瘀で骨痛するには、鹿角末方寸匕を一日三回酒で服す。(千金方)【竹木の肉に入りたるもの】出でぬには、鹿角を燒いて末にし、水で和して塗れば立ろに出る。久しきものも一夕に過ぎぬ。(千金方)【蠼螋尿瘡】鹿角を燒いて末にし、苦酒で調へて服す。(外臺)【五色丹毒】鹿角を燒いて末にし、猪脂で和して敷く。(肘後方)【發背の初期】鹿角を灰に燒いて醋で和して塗り、一日五六回易へる。(千金方)【乳發の(八)初期】(九)治療せねば死に至る。鹿角を磨つた濃汁を塗り、幷に人をして嗍つて黃水を去らしめる。手に隨つて散ずる。(梅師方)【(一〇)吹奶の掀痛】鹿角屑を黃に炒つて末にし、二錢を酒で服してから梳で梳る。(唐氏經驗方)【下注脚瘡】鹿角を燒いて性を存し、輕粉を入れて共に研り、油で調へて塗る。(集要)【癰毒、腫毒】鹿角尖を磨つた濃汁を塗る。甚だ妙である。(瀕湖方)【癧疽の蟲あるもの】鹿角を燒いて末にし、苦酒で和して塗る。磨汁でもよし。【妖魅猫鬼】病人が肯て鬼を言はぬには、鹿角屑を搗いて末にし、

(八)大觀ニ發下ニ房字アリ。乳發ハ妬乳、即チ乳房炎。
(九)大觀ニ治上ニ急字アリ。
(一〇)吹奶ハ乳癰。

(二)雲中ハ秦ノ郡名、今ノ山西省北部、蒙古鄂爾多斯地方ヲ統ブ。漢ニハ二分シテ雲中縣、卽チ今ノ托克托縣ニ治ス。

水で方寸匕を服す。それで實を言ふものだ。(錄驗)

白膠 一名 **鹿角膠**(本經) 粉を **鹿角霜** と名ける。甄權曰く、白膠、一名黃明膠 時珍曰く、正誤は黃明膠の條に記載してある。

修治 別錄に曰く、白膠は(二)雲中に生ずる。鹿角を煮て作るものだ。

弘景曰く、今は用ゐる者が少い。やはり煮て作るものだ。角弓を合せるだけに用ゐる。その法は、先づ米の瀋汁に七日間漬けて軟にし、煮煎して阿膠を作る方法のやうにするだけだ。又ある法では、角を剉んで細にし、乾牛皮一片を入れると消け爛れ易い。さうせねば百年煮ても熱せぬものだ。

恭曰く、鹿角、麋角をただ濃く煮た汁を重ねて煎ずれば膠になるのだ。爛らさねばならぬわけはない。爛らさうとするにしても別段六ケ敷いことはない。陶氏は實際のことを知らないのだ。

詵曰く、膠を作る法は、細研して一寸ほどに截り、河水で七日間浸して軟かになつたとき煮る。

斅曰く、完全な角を採つて鋸で長さ三寸ほどに截り開き、物に盛つて急水中で一

百日間浸して取出し、刀で刮つて黄皮を去つて拭淨し、醶醋で七日間煮る。その間少しづつ醋を添へ、少しも歇めてはならぬ。成つた時は火にかけずにただ午前零時から午後八時まで一日ほど經てば角は軟に粉のやうになる。それを搗き爛し、一兩毎に無灰酒一盞に入れて煮れば膠に成る。それを研り篩つて用ゐる。

時珍曰く、今は一般に、煮爛して粉に成つたものを鹿角霜といひ、粉を熬つて膠にし、或はただ濃汁を熬つて膏にしたものを鹿角膠といふ。按ずるに、胡瑗の衞生方に『米泔で鹿角を七日間浸して軟にし、急流水中に入れて七日間浸して粗皮を去り、東流水を用ゐて桑柴火で七日煮て、少しづつ水を添へ、醋少量を入れて搗いて霜にして用ゐ、その汁に無灰酒を加へて熬つて膠にして用ゐる』とあり、又、邵以正の濟急方には『新しい角三對を一寸位に截つて盛り、長流水で三日間浸して刮り淨め、楮實子、桑白皮、黄臘各二兩を入れ、鐵鍋を用ゐて水で三晝夜煮る。少しも停めずに水が少くなつたときは湯を添へる。かくて一定時日に達したとき取出して刮り淨め、晒し研つて霜にする』とあり、韓悉の醫通には『新鹿角を一寸ほどに截つて嚢に盛り、流水中に七日間浸し、瓦缶を用ゐて水を入れ、桑柴火で煮る。毎一

斤に黄蠟半斤を入れて壺に掩住し、水が少くなつたときは少しづつ添へる。その角が軟になつたとき、竹刀で刮り淨めて搗いて霜にして用ゐる』とある。

氣味 【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、溫なり。○火を得て良し。大黄を畏る。

主治 【傷中、勞絕、腰痛、羸瘦。中を補し、氣を益す。婦人の血閉、子なきものに痛を止め、胎を安ずる。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べる】（本經）【吐血、下血、崩中の止まぬもの、四肢痛み、汗多く、淋露するもの、折跌傷損を療ず】（別錄）【男子の臟氣を損じて氣弱のもの、勞損吐血。婦人が服すれば子あらしめ、胎を安じ、冷を去り、漏下赤白を治す】（藥性）【炙いて搗き、酒で服すれば、虛勞を補し、肌を長じ、髓を益し、人をして肥健ならしめ、顏色を悅くす。又、勞嗽、尿精、尿血、瘡瘍、腫毒を治す】（時珍）

發明 斅曰く、凡そ鹿角を使ふは麋角に勝る。

頌曰く、今醫家では多く麋茸、麋角を用ゐる、力は鹿よりも緊いといつてゐる。

時珍曰く、蘇東坡良方に『鹿は陽獸であつて、陰を見て角が解し、麋は陰獸であつて、陽を見て角が解す。故に陽を補するには鹿角を用ゐるが勝り、陰を補するに

は麋角を用ゐるが勝る」かやうな不同のあるもので、ただ鹿は麋に勝るとか、麋は鹿に勝るといふのでは見解が疎笨だ』とある。按ずるに、この說は沈存中の鹿茸は陰を補するに利あり、麋茸は陽を補するに利ありといふ說と相反する。理と功との點から推考するに、蘇東坡の說の方が正しいやうだ。詳細は茸の項を見よ。

附方　舊七、新一。【異類有情丸】韓氏醫通に『この方は自製するもので、凡そ男子が中年にして衰へを覺えたならば服餌するがよし。蓋し鹿は純陽であり、龜、虎は陰に屬し、血、氣に情があつて各〻その類に從ふものだ。金石、草木の比ではない。その方は、鹿角霜——修治の方法は前項を見よ——を用ゐ、龜板を酒に七日間浸して酥で炙いて研り各三兩六錢、鹿茸を燻じ乾し洗淨して酥を塗つて炙いて研り、虎脛骨を長流水に七日間浸して蜜を塗り酥で炙き各二兩四錢を、水火煉蜜に獖豬脊髓九條を入れて搗いて梧子大の丸にし、毎空心に鹽湯で五、七、九、十丸を服す。もし厚味で飮を好むものには豬膽汁一二合を加へ、それで火を降すの意味を寓する。【盜汗、遺精】鹿角霜二兩、生龍骨を炒り、牡蠣を煆いて各一兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、四十丸づつを鹽湯で服す。(普濟)【虛勞尿精】白膠二

兩を炙いて末にし、酒二升に和して溫服する。(外臺)【虛損尿血】白膠三兩を炙り、水二升で一升四合に煮て分服する。(外臺)【小便の禁ぜぬもの】上熱下寒のものには、鹿角霜を末にし、酒糊で和して梧桐子大の丸にし、三四十丸づつを空心に溫湯で服す。(普濟)【小便頻數】鹿角霜、白茯苓等分を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを鹽湯で服す。(梁氏總要)【男子の陽虛】甚だ補益がある。方は上に同じ。【湯火灼瘡】白膠を水で煎じて稠くし、冷えるを待つて塗る。(斗門方)

齒 主治 【鼠瘻、留血、心腹痛。男子の陰に近づけてはならぬ】(蘇恭)

骨 氣味 【甘し、微熱にして毒なし】 主治 【胎を安じ、氣を下し、鬼精物を殺す。久しく服すれば老に耐へる。酒に浸して服するがよし】(孟詵)【酒に作つたものは、內虛に主效があり、絕傷を續ぎ、骨を補し、風を除く】(思邈)【灰に燒いて水で服すれば、小兒の洞注下痢を治す】(時珍)

附方 新一。【虛羸の補益】鹿骨煎——鹿骨一具、枸杞根二升を用ゐ、各、水一斗で汁五升に煎じ、和勻して共に煎じて五升にし、一日二回服す。(千金)

肉 氣味 【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、九月已後正月已前には食へる

が、他の月は食つてはならぬ。冷痛を發するものだ。臆の白いもの、豹の文のものはいづれも食つてはならぬ。鹿の肉脯は、炙いては動かず、水を見せて動くもの、或は曝しても燥かぬものはいづれも人を殺す。雉肉、菰、蒲、鮠魚、蝦と共に食つてはならぬ。惡瘡を發するものだ。禮記には『鹿を食ふには胃を去る』とある。

主治　【中を補し、氣力を益し、五臟を強くする。生のものは中風口僻を療する。片に割いて薄る】(別錄) 華佗は『中風口偏には、生肉を生椒と共に搗いて貼り、正しくなつたならば除く』といつた。【虛瘦弱を補し、血脈を調へる】(孟詵)【血を養ひ、容貌を生かし、産後の風虛、邪僻を治す】(時珍) 外臺に鹿肉湯といふがある。

發明　思邈曰く、壺居士の言に『鹿は性多く警烈なもので、能く良草を別つてただ葛花、葛葉、鹿葱、鹿藥、白蒿、水芹、甘草、薺苨、齊頭蒿、山蒼耳のみを食ひ、他の草をば食はない。處るには必ず山岡に居る。故に産するときに下澤に歸るものだ。神に饗するにその肉を以てするは、その性烈にして清淨なものだからだ。凡そ藥餌する人は、久しく鹿肉を食へば藥を服しても必ずその功力が現はれない。それはこの物は解毒の草を食物するので諸藥を制するためだ』といつてある。

（一二）三禮ハ天、地、人ノ三禮。唐虞ノ時、天ノ屬ヲ祭ルヲ天禮トイヒ、地ノ屬ヲ祭ルヲ地禮トイヒ、宗廟ノ屬ヲ祭ルヲ人禮トイフ。

弘景曰く、野獸の中では麞、鹿は食へるもので、生で羶腥でない。又、十二辰の中に入らず、八卦に屬する主たるものがない。且つ人を溫補し、生けるものにも死せるものにも尤がないので、道家ではこれを許して過を補ふものとする。その他のものは、雞、犬、牛、羊のやうなものでも、補益はあるが亡魂に於いて愆責があるから、いづれも食ふに足らぬとしてある。

宗奭曰く、（一二）三禮に鹿腊を採用したのは、やはりこの意味を取つたのだ。且つ味もやはり他の肉に勝る。

時珍曰く、邵氏の言に『鹿の一身はみな人に益あり。或は煮、或は蒸し、或は脯にし、酒と共にこれを食ふが良し』といつてある。大體に於て、鹿は仙獸にして純陽であり、多壽なるもので、能く督脈を通ずる。又、良草を食ふものだから、その肉、角は益あつて損ずることがない。陶氏の說はやはり妄誕だ。

頭肉 〔氣味〕【平なり】 〔主治〕【消渴、夜間鬼物を夢見るには煎汁を服す。膠にしたものがいよいよ善し】（蘇恭） ○宗奭曰く、頭は酒に釀せるもので、漿になるときやや葱、椒を益すべきものだ。

【附方】新一。【老人の消渇】鹿頭一箇を毛を去つて煮爛し、五味を和して空心に食ひ、汁を噉む。（鄙事）

蹄肉【氣味】【平なり】【主治】【諸風で脚膝の骨中が疼痛し、地を踐み能はぬには、豉汁、五味と共に煮て食ふ】（孫思邈）

脂【主治】【癰腫、死肌を主り中を溫め、四肢不隨、頭風に腠理を通ずる。陰に近けてはならぬ】（蘇恭）　時珍曰く、これは本經の麋脂の正文だが、蘇氏はこれを鹿脂に註した。二脂の功を或は同じとしたものかも知れぬ。

【附方】新一。【顏面の皯皰】鹿脂を一日二回塗る。（聖惠方）

髓　煉淨して藥に入れる。【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【男子、婦人の傷中、絕脈、筋急痛、欬逆。酒で和して服するが良し】（別錄）【蜜と共に煮て服すれば、陽道を壯にし、子あらしめる。地黃汁と共に膏に煎じて服すれば、骨髓を塡て、筋骨を壯にし、嘔吐を治す】（日華）【陰を補し、陽を強くし、精を生じ、髓を益し、燥を潤ほし、肌を澤かにする】（時珍）

【發明】頌曰く、髓は酒に作れるもので、唐の方に多くその法がある。

○○時珍曰く、鹿髓は近代の方では用ゐたものが稀だが、刪繁の方の肺虚毛悴を治する酥髓湯に用ゐてあり、御藥院方の滋補藥にその脊髓を酒に和して熬膏して丸にする藥があるが、甚だ道理のあることだ。白飛霞の醫通に『鹿腦、及び豬骨髓を取つて錬つて膏にし、毎一兩に錬蜜二兩を加へて錬り勻ぜ、瓷器に密收し、これを滋補の丸藥を和する劑とするが甚だ妙である』とある。凡そ腰痛は腎の虚寒に屬するもので、これで古方の摩腰膏を和し、薑汁で一粒を化して腎堂を擦れば、暖氣が丹田に透入して火の如くになり、大いに元陽を補す。この法は甚だ佳いものだが一般には知るものが稀だ。

附方 新一。【鹿髓煎】肺痿咳嗽、傷中脈絶を治す。鹿髓、生地黄汁各七合、酥、蜜各一兩、杏仁、桃仁各三兩を皮を去つて炒り、酒一升と共に搗いて汁を取り、先づ杏仁、桃仁、地黄の汁を煎じて半減してから、三味を入れて煎じて稀餳のやうにし、一日三回、一匙づつを含んで嚥む。（聖惠）

腦 **主治** 【面脂に入れば人をして悅澤ならしめる】（蘇頌） 【刺が肉中に入つて出でぬには、腦を敷き、燥けば易へる。半日にして出るものだ】（深師）

精

【主治】【虚羸、勞損を補す】(時珍)

【發明】韓懋曰く、王師は予に鹿鮻丸の方を授けて『鹿は純陽を稟けたものであつて、鮻は天地初分の氣、牝牡相感するの精である。醫書に、鹿の茸、角、血、髓は大いに補益あることを稱揚してあるが、この鮻は神に入るものである』といつた。その法は、初生の牡鹿三五頭を苑囿の中で馴養し、毎日人參の煎湯と一切の草藥とを與へてその飮食するに任せ、久しくして硫黃の細末を和し入れ、少量から多量に進め、燥するときは漸次に減じ、同じやうに幾度も繰返す。大約三年たてばその內に一旦毛が脫けて筋が露れ、氣盛にして陽極まる。その時に牝鹿を苑囿の外から隔て近づけて誘ひ、交尾せんとして得ずして精を外に洩られしめ、或は一回交尾させ、適當な手段を講じてその精を取つて瓦器に收める。香しく粘つて餳のやうなものだ。これを鮻といふのである。それを用ゐて鹿角霜一味を和して丸にし、空心に鹽酒で服す。大いに胎羸、虚瘵の危疾を起たしめる。凡そ滋補の丸藥を服するには、これに錬蜜を入れたものを用ゐて和劑するが絕だ妙である。

時珍曰く、按ずるに、老子に『骨弱く、筋柔にして握ること固く、未だ牝牡の合

を知らずして衄作るは精の至なり』とあつて、朘の發音は子催の切（スキ）赤子の陰である。ここに鹿精の名としてあるはやはり穩でないやうだ。

血 主治 【陰痿。虛を補し、腰痛、鼻衄を止める。折傷、狂犬傷】（蘇恭）【酒に和して服すれば、肺痿吐血、及び崩中帶下を治す】（日華）【諸氣痛で危からんとするには、これを飲めば立ろに癒える】（汪頴）【大いに虛損を補し、精血を益し、痘毒、藥毒を解す】（時珍）

發明 頴曰く、近世鹿血酒といふがあつて、それを服するものは『これは射生といふ人から得たもので、その人が藥物採收のため山に入つて道を失ひ、數日間饑渴して將に餓死せんとしたとき、ただ一頭の生きた鹿を捕獲し、血を刺し取つて數升を飲んだ。ところが飢渴が頓に除去し、歸宅した頃には血氣が充盛して通常人と異るものがあつた。かやうに有效なもので、これを服するには鹿の頭角の間の血を刺し取り、酒に和して飲むが更に佳いものだ』といふ。

時珍曰く、近世、韓飛霞の補益の方に斑龍宴の法があり、孫氏に痘毒を解する陰陽二血丸といふがある。いづれも古代には知らなかつたものだ。しかし沈存中が、

又、刺血を以て茸に代ふるを非なりとしたのもまた一説だ。

附方　新三。

【斑龍晏】用ゐるには、牡鹿一二頭を馴養して毎日人參一兩を煎じた水を與へて飮ませ、その滓をば土產の草料、米、豆に拌ぜて一定時に與へて食はせ、他の水草を雜へぬやうにして百日以上に達し、筋が露れるに及んで用ゐるのである。晏法は、前夜からその食料を減じ、翌早朝布でその鹿を床に縛りつけ、首を低く、尾を昂くし、力のある者に前足を抱いて押へさせ、角があるものならば角を執つて押へ、角のないものならば木を以て頭を囊し拘へて頭を動かぬやうにし、三稜針を用ゐてその眼の大眥の前の毛孔を刺す。これを天池穴と名ける。その時銀管の長さ三寸ばかりのものを鼻梁に向けて揷み、坐つてその血を啜ひ、藥酒數盃を飮み、再び啜ひ再び飮み、醉ふを以て度とする。鹿の鼻中から流出するものも酒に承け和して飮むがよし。飮み畢つたならば風に當らぬやうにして行き、升降工夫するを一晏といふのである。かくて刺した鹿の穴には肌を生ずる藥を敷いて養ふのであつて、一个月に一回試みる。一頭の鹿で六七年行へるものだ。男女、老少に拘らず、これを服すれば終身無病になつて長壽を保つ。これは仙家服食丹方二十四品の

一であつて、藥酒は八珍散に沈香、木香を加へて煮たものを用ゐる。【陰陽二血丸】小兒の痘瘡を治し、まだ出ぬものは稀ならしめ、已に出たものは減ぜしめる。鹿血・兎血を用ゐ、各〻青紙に盛つて灰上に置いて晒し乾し、乳香、沒藥各一兩、雄黃、黃連各五錢、硃砂、麝香一錢を末にし、煉蜜で綠豆大の丸にし、十丸づつを空心に酒で服す。兒の小なるものには丸數を減ずる。(孫氏集效方)【鼻血の時に作るもの】乾鹿血を炒り枯し、(一三)酒酹で二三回鼻を薰じてから、酒酹半盃で和して服す。

腎 氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【腎氣を補す】(別錄)【中を補し、五臟を安じ、陽氣を壯にする。酒に作り、及び粥に煮て食ふ】(日華)

附方 舊一。【腎虛耳聾】鹿腎一對を脂、膜を去つて切り、豉汁に粳米二合を入れたもので粥に煮て食ふ。また羹にしてもよし。(聖惠方)

膽 氣味 【苦し、寒にして毒なし】 主治 【腫を消し、毒を散ずる】(時珍)

筋 主治 【勞損。絕を續ぐ】(蘇恭) 【塵沙の眯目には、嚼み爛して日中に挼み入れる。それで粘出する】(時珍)

附方 舊一。【骨鯁】鹿筋を漬けて軟かにし、繩に搓つて緊く彈丸ほどの太

(一三)酒酹ハ酒糟。

さにし、筋の端を持つて鯁のある處まで呑み込み、徐徐に引く。鯁は筋に著いて出る。(外臺)

(一四)髑　主治　【氣瘻には、酒に漬けて炙き乾し、再び酒中に浸して汁を含嚥し、味が盡きたときは更に易へる。十具にして癒える】(深師)

皮　主治　【一切の漏瘡には、灰に燒いて豬脂で和して納れる。一日五六回易へ、癒えれば止める】(時珍)

糞　主治　【日を經て産ぜぬには、乾けるものと濕へるものと各三錢を研末し、薑湯で服す。立ろに效がある】(經驗)

胎糞　主治　【諸毒を解す】　時珍曰く、按ずるに、范曄の漢書に『(一五)冉、駹夷に産する鹿は藥草を食ふ。その胎中の麑の糞は毒を療じ得る』とある。

麋（本經下品）

和名　おほしか
學名　Cervus davidianus M. Redw.
科名　しか科

釋名　時珍曰く、陸佃は『麋は音聲を喜む』といひ、斑固は『麋は性淫迷す』

(一四)髑ハ咽喉ノ軟骨。

(一五)冉駹ハ西夷ノ二族名、今ノ四川省茂縣ノ地ナリ。

木村(重)曰ク、北支那ニテ麋ト稱スルハ Cervus mantchuricus Swinhoe ナリ。

といつたところから見ると、麋なる名稱はその意味を取つたものらしい。爾雅には『牡を麔——音は谷(キウ)——といひ、牝を麎——音は辰(シン)——といひ、その子を麇——音は夭(オク)——といふ』とある。

〔集解〕 別錄に曰く、麋は(一)南山の山谷、及び(二)淮海の邊に生ずる。十月に取る。

弘景曰く、今は(三)海陵の地方に最も多く、千百頭が羣をなす。牝多くして牡の少いものだ。

時珍曰く、麋は鹿の屬であつて、牡には角がある。鹿は山を喜んで陽に屬するが故に夏至に角を解し、麋は澤を喜んで陰に屬するが故に冬至に角を解す。麋は鹿に似てゐるが色が青黑で、大いさは小牛ほどあり、肉蹄と目下に二竅があつて夜目とする。故に淮南子に『孕女が麋を見れば子が四目となる』といつたのだ。博物志には『南方の麋は千百群をなし、澤草を食ひ、踐む處泥となる。名けて麋畯といふ。人因つて耕穫する。その鹿の息ふところを鹿場といふ。今獵人は多く分別せずして、往往にして麋を以て鹿とする。牡はなほ角の退けるので辨別もつくのだが、牝

(一)南山ハ終南山。
(二)淮海ハ安徽、江蘇地方。
(三)海陵ハ漢ニ縣ヲ置ク、今ノ江蘇省泰縣ソノ舊治ナリ。

は兩者を通じて麀鹿といつてゐる』とある。

麋脂　一名　**官脂**（本經）　時珍曰く、別錄には『十月に取り、脂を煉過して收用する』とあるが、周禮には『冬、狼を獻じ、夏、麋を獻ず』とあり、註に『狼膏は聚し、麋膏は散ずる。聚なれば溫、散なれば涼なものだから、それで時に順ふのだ』とある。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】桃李を忌み、大黄を畏る。

【主治】【癰腫惡瘡、死肌寒熱、風寒濕痺、四肢拘緩で不收のもの、風頭、腫氣。腠理を通ずる】（本經）【皮膚を柔にする。陰に近けてはならぬ。痿せしめるものだ】（別錄）【少年氣盛にして顏面瘡皰を生じたるには、脂を化して塗る】（時珍）

【正誤】弘景曰く、世間では、麋は一頭の牡が十餘頭の牝と交尾し、交尾し畢ると死ぬといつてある。その脂の地に墮ちて年を經たものを世人は取つて道脂と呼ぶ。酒で服するが至つて良し。かやうに麋なるものは性の婬佚なものだ。人の陰を痿すべきわけはない。ある方に『陰に近くべからず。陰をして痿せざらしむ』とあるが、この方が理由がある。

恭曰く、牝と遊び畢つて死ぬといふは虚傳だ。何處の山澤地方で聞いて見てもさやうな說はない。

肉 〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、多く食へば人をして房事を弱くし、脚氣を發せしめる。妊婦が食へば生れる子に目を病はしめる。弘景曰く、猪肉、雉肉と合せ食つてはならぬ。痼疾を發するものだ。蝦、及び生菜、梅、李と合せ食へば男子の精氣を損ずる。

〔主治〕【氣を益し、中を補し、腰脚を治す】(孟詵)【五臟の不足の氣を補す】(禹錫)

〔發明〕時珍曰く、按ずるに、陸農師は『鹿は陽を以て體とするので、その肉を食へば煗り、麋は陰を以て體とするので、その肉を食へば寒する』といつた。これで觀ると、別錄に、麋脂は人をして陰痿せしむとあり、孟詵が『多く食へば人をして房事を弱からしめる』といひ、また角と肉と功力が同じくないといふ說もやはりその意味だ。

茸 〔修治〕鹿茸と同じ。〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【陰

虛勞損、一切の血病、筋骨、腰膝の酸痛。陰を滋くし、腎を益す』(時珍)

麋角　修治　斅曰く、麋角は、頂根上に金線のやうな黃毛があり、兼て旁に小尖を生じ、色の蒼白なるものを以て上級品とす。

詵曰く、凡そ麋角を用ゐるには、五寸に截つて中を破り、黃に炙いて末にして藥に入れるがよし。

時珍曰く、麋、鹿の茸、角に就いては、今は一般に明に判別し得る者が罕で、陳自明が、小なるを鹿茸とし、大なるを麋茸としたのもやはり臆見だ。親しくその採取の時に立會て誤なきものに確信を置くに若くはない。麋角膠、麋角霜を造る方法は、いづれも鹿角膠、鹿角霜と同一方法である。又、集靈方には『麋角一雙を用ゐ、水に七日間浸し、皮を刮り去つて錯屑とし、銀瓶に牛乳を盛つてそれに一日間浸し、乳が耗るときは再び加へて耗らぬやうになつて止め、油紙でその瓶の口を密封し、別に鍋の中に大麥を三寸厚さに鋪いてその上に瓶を置き、再び麥で瓶の周圍を塡滿し、水を入れて一伏時浸し、水が耗るときは少しづつ加へ、屑が麪のやうに軟になつたとき取出し、焙じ研つて霜にして用ゐる』とある。

【氣　味】【甘し、熱にして毒なし】【主　治】【風痺、血を止め、氣力を益す】（別錄）【屑に刮つて香しく熬り、酒で服す。大いに人を益す】（弘景）記載は彭祖傳中にある。【酒で服すれば、虛勞を補し、精を添へ、髓を益し、血脉を益し、腰膝を暖め、陽を壯にし、色を悅くし、風氣を療じ、偏に男性を治す】（日華）【粉にして常服すれば、男子の冷氣、及び風の筋骨疼痛を治す。卒心痛の若きは一服で立ろに瘥える。漿水で磨つて泥にし、それを顏に塗れば光華あらしめ、赤白にして玉のやうに美しくなる】（孟詵）【陰を滋くし、血を養ふ。功力は茸と同じ】（時珍）

【發　明】詵曰く、麋角を常服すれば大いに陽道を益す。如何なる理由に因るか判らないが、肉と功力が同じくない。煎膠は鹿角膠と同功で、茸もやはり鹿茸に勝る。仙方で甚だ重ずるものだ。

恭曰く、麋茸の功力は鹿茸に勝り、角を煮た膠はまた白膠に勝る。詳細は鹿茸鹿角の項を見よ。

日華曰く、麋角は陰に屬するから、腰膝不仁を治し、一切の血病を補するのだ。

時珍曰く、鹿の茸、角は陽を補す。右腎、精氣不足のものに適する　麋の茸、角

は陰を補す。左腎、血液の不足のものに適する。これは千古の機微なる祕意であつて、既往に於て方法は具つてゐたけれども、理に就いてはまだ發揮し闡明されてゐなかつたので、論者の間に紛紜たる諸說が鬪はされたのだ。又、楊氏家藏方には虛損を治する二至丸といふがあつて、二者の角を竝用してあるが、但しその藥性が溫に過ぎ、陽虛、寒濕、血痺のものだけに適するに止まり、左腎には功力が與らない。孫思邈の千金方に『麋角丸には凡そ一百一十の方があるが、ただ容成子羔の服したものが特に衆くの方に傑出したもので、子羔はこれを服して羽化した』とある。此にその方を觀るに、二至丸に比して常服し得るもののやうである。いづれも左に集載する。

附方　新五。

【麋角丸】心神を補し、臟腑を安じ、骨髓を塡て、腰脚を理し、能く久しく立てるやうになり、耳を聰くし、目を明にし、髮の白きを黑に更へ、容貌の老いたるを少く還す。凡そ麋角は、その年の新角にして腦頂の連り著いてゐるものを取るを上とする。角根を見て斫つた痕のあるものも用ゐるに堪へる。蛻角で根下の平なるものは取るに堪へない。角を五具、或は四具、三具、二具、一具を一

剤とし、尖の部分一大寸を去り、卽ち角の長さ七八寸と思ふ勢を取り、適當に量つて截斷して鎊り、それを長流水中に竹器に盛つて懸けて十晝夜浸す。長流水のない場所ならば淨盆に水を滿てて浸して毎夜水を換へ、軟になつたとき取り出して皴皮を削り去り、銳利な鎊で鎊つて白い部分を取り、心まで取つて止め、その白い部分を清粟米泔に二夜浸す。初めの一夜を經たとき乾握して舊水を瀝去し、新絹上に置いて曝乾して惡物、粗骨皮、及び鎊つて平均しないものを擇り去り、大磁器中に無灰美酒を盛つた中に入れて浸し、二晝夜經てからその藥、及び酒を俱に淨釜中に入れ、初には武火を用ゐて一食頃ほど煮て、後に文火で微煎し、蟹の目のやうに沸き立つを柳木篦で徐徐に手を住めずに攪き廻し、時時に酒を添へて煎になるを度とする。煎ずる時刻はいづれも早朝に限り、手を下したならば夜を越してはならぬ。そこで屑が稀膠のやうになるを看て、牛乳五升、酥一片を用ゐ、漸次に左記の藥を下し、かくて麋角一條を黃に炙いて末にして諸藥を共に製し、檳榔、通草、秦艽、肉蓯蓉、人參、兎絲子を酒に二晝夜浸して別に搗いて晒乾し、甘草と各一兩を搗いて末にし、膠を再び一食頃煎じて稀稠粥のやうになつたとき火を止め、少時して諸藥

末を投じて相和し、稠く粘つて丸にし得るやうにして新器に盛つて貯へ、多人數の手で一時に梧子大の丸にする。もし手に粘るときは少し酥を手に塗る。これを服餌するの法は、空腹に酒で服するので、初めに三十丸を服し、一日に一丸を増加して五十丸までを度とし、一日二回、百日間服してその間房室を忌む。服して一个月經過すれば腹内の諸疾は自ら相驅逐する。微利することもあるが怪しむに及ばぬ。後には漸次に多く氣を泄し、能く食ふやうになる。氣を患ふものには枳實、青木香各一兩を加へる。服して二百日に達すれば面皺に光澤が生じ、一年にして齒の落ちたものは更生し、記憶力が強くなり、身體が輕くして風の如くになり、一日に數百里を歩行し得るやうになる。二年にして人をして肥飽して食物の量が少くなり、七十已上のものもこれを服すれば却つて少年のやうになる。三年にして腸が筋體となり、未だ實現せぬものを預見し得るやうになる。四年にして常に飽いて食物を攝取する必要がなくなり、自ら仙人を見るやうになる。三十已下からこれを不斷に服すれば顔貌が一定して變らなくなる。この藥を調合する時には、必ず淨室中に於てし、(四)陰人、雞、犬、喪中の子等に見られてはならぬ。婦人はこれを服するが尤も

(四)陰人ハ女子、去勢セル男子等ヲ指ス。

佳し。もし酒を飲み、麪を食つて口が乾き、眼が澀り、內熱するときは、直ちに三黃丸を服して微利する。かかることは一度發動するが已後は始めて適當な調和狀態となるものだ。(千金)【二至丸】虛損を補し、精血を生じ、風濕を去り、筋骨を壯にする。鹿角を細に鎊り、眞酥一兩、無灰酒一升で慢火で炒り乾して四兩を取り、麋角を細に鎊り、眞酥二兩、米醋一升で煮乾し、慢火で炒り乾して半兩を取り、蒼耳子を酒に一夜浸して焙じて半斤、山藥、白茯苓、黃芪を蜜で炙いて各四兩、當歸を酒に浸して焙じて五兩、肉蓯蓉を酒に浸して焙じ、遠志を心を去り、人參、沈香各二兩、熟附子一兩、以上を通じて末にし、酒で煮た糯米糊で梧子大の丸にし、一日二回、五十丸づつを溫酒、鹽湯の任意のもので服す。(楊氏家藏方)【麋角丸】五痿で皮が緩み、毛が瘁え、血脈が枯槁し、肌膚が薄著し、筋骨が羸弱となり、飲食物がまづく、四肢力なく、爪枯れ、髮落ち、眼昏く、唇燥くものを治す。麋角屑一斤を酒に一夜浸し、大附子を生で皮臍を去つて一兩半、熟地黃四兩を用ゐ、大麥一升を一半は底に藉き、一半は上に載せ、藥との間を二枚の帛で隔て、覆をして一日間炊いて藥と麥とを取出し、各焙じて末にし、藥を浸した酒に淸酒を添へて麥粉を煮て

作つた糊で和し、三千杵搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを食前に溫酒、或は米湯で送下する。一日三服。○ある方では、ただ麋角を鎊つて屑にしたものを酥で黃色に炒つて五兩、熟附子末半兩を酒糊で丸にして服す。【麋角霜丸】元臟を補し、顏色を駐める。麋角一副を水に七日間浸し、皺皮を刮り去つて鎊つて屑にし、一銀瓶內に盛つて牛乳汁で一日浸し、乳をば常に屑から二寸高さに滿て、乳が耗つたときは更に添へ、全く耗らなくなつたとき油單紙で二重に瓶の口を密封し、別に大麥一斗を別の瓶に入れ、約三寸厚さにした上に先の麋角を入れた瓶を置き、更に大麥で周圍を塡實して瓶の口だけを露出し、火を住めずに一伏時蒸す。もし鍋中の水が耗つたときは少しづつ熱湯を添へ、頻りに看て角屑が粉爛して麪のやうになるを須つて火を住めて取出し、細かな篩で乳を漉し去つて焙じ乾し、一劑を八兩づつとし、附子を炮製して皮を去り、乾山藥と各三兩と共に末にし、蒸した棗肉で和して梧子大ほどの丸にし、十五丸から二十丸までづつを空心に溫鹽酒で送下する。煉蜜で丸にするもよし。(總錄)【麋角丸】彭祖の丸である。人をして丁壯ならしめ、老いず、房室に氣力を勞損せず、顏色を衰へざらしめるは麋角に過ぎたるはない。その

（一）永昌郡ハ蟲部化生類鬼彈ノ註ヲ見ヨ。

法は、刮つて末にして十兩、生附子一箇を合せ、雀卵で和して丸にし、日に二十丸づつを溫酒で服す。二十日にして大いに效がある。また單に熬つて末にして酒で服するもよいが、やはり人をして老いざらしめる。しかしただ性が緩で附子を入れたものに及ばない。（彭祖服食經）

骨　【主治】【虛勞に至つて良し。煮汁を酒に釀して飮めば、人をして肥白にして顏色を美ならしめる】（禹錫）

皮　【主治】【靴韈にして用ゐれば脚氣を除く】（孟詵）

雙頭鹿（拾遺）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】**茶目機**　時珍曰く、茶目機は蔡茂機と發音する外國語であつて、博物志に記載がある。舊本には訛つて茶苴機と書いてある。又、余義と書くも茶苜の訛だ。

【集解】藏器曰く、按ずるに、張華の博物志に『茶苜機とは（一）永昌郡に產する

(二)雲陽縣ハ兩漢ニハ左馮翊郡ニ屬ス。今ノ陝西省鄜州淳化縣ノ西南ニ在リ。

兩頭鹿の名であつて、鹿に似て兩頭がある。その胎中の屎を四月に取る』とあり、范曄の後漢書には『(二)雲陽縣にある神鹿は兩頭にして能く毒草を食ふ』とあり、華陽國志には『この鹿は雲陽南郡の熊舍山に產する。卽ち余義のことだ』とある。

時珍曰く、按ずるに、盛弘之の荊州記に『武陵郡の雲陽山、黠蒼山に兩頭の獸を產する。鹿に似て前後に頭があり、一頭は食し、一頭は行く。山間の住民が時にこれを見ることがある』とあり、段成式の雜俎には『雙頭鹿の矢を耶希と名ける。夷人は鹿を耶といひ、屎を希といふ』とある。按ずるに、唐韻に屎の字を又音希としてあるはこの意味だ。

胎中屎　主治　【惡瘡、蛇虺の毒に敷く】(藏器)

麂（宋開寶附）

和名　きよん
學名　Muntiacus reevsii (Sel.ter)
科名　しか科

釋名　**麞**　卽ち古の麂の字である。時珍曰く、麂は味が甘く旨い。故に旨に從ふのだ。又、字說には『山中に虎がゐれば麂が必ず鳴いて告げる。その聲が几几

(一)均州ハ石部長石ノ註、房州ハ金部錫ノ註ヲヨ。
(二)湘漢ハ湖南、湖北。

といふやうに聞えるから麂といふのだ。大なるを麖(きやう)といふ』とある。

集解 馬志曰く、麂は東南の山谷に生ずる。

頌曰く、今は山林のある處にはいづれもゐるが、(一)均、房、(二)湘漢の地方に就中多い。麞(しやう)の類の動物だ。按ずるに、爾雅に『麂は大麕(だいきん)であつて、尾は旄(はう)のやう、足は狗のやうだ』とある。所謂毛長であつて、南人は往往にしてその肉を食ふ。しかし堅韌(けんじん)なもので、麞のやうに美味なわけには行かない。その皮は履(り)舃(せき)に作るが、諸皮に勝るものだ。又、麂に類して大なる一種があつて、麖と



〔麂〕
——牙麞——麖は大きい——

名ける。藥用には堪へないものだ。山海經に『女几の山、麖、麂多し』とあるはこの物だ。

宗奭曰く、麂は麞の屬であつて、麞より小さく、その口の兩邊に長い牙があり、鬪(たたかひ)を好む。その皮は第一等のもので、その右に出るものがないが、ただ皮に牙の

傷痕が多い。その聲は破鈸を撃つやうだ。四方いづれにもゐて、山の深い處に頗る多い。

時珍曰く、麂は大山中にゐる。麞に似て小さく、牡には短い角があり、黧黑色だ。脚は豹のやうで矮いが力が勁く、善く跳越する。この物が草莽中を行くには、ただ一筋の徑に循つて行くものだ。皮は極めて細膩で、それで作つた鞾韈は珍重される。或は、また好んで蛇を食ふものだともいふ。符瑞志に銀麂といふ白色のものがあり、今は施州の山中に一種の紅麂といふ紅色のものを產する。

肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【五痔病には、爊熟して薑、醋で食ふが大いに效がある】（藏器）

頭骨　氣味　【辛し、平にして毒なし】　主治　【灰に燒いて飮で服すれば飛尸を治す】（藏器）

皮　主治　【鞾韈にすれば濕氣、脚痺を除く】（時珍）

木村(重)曰ク、麞、一名牙麞。水邊ニ好ミテ住ス。Hydropotes inermis Swinhoe.

麞（別録中品）

和名 のろ（朝鮮語）
學名 Capreolus pygargus, Pall.
科名 しか科

釋名 麕 音は君（キン）である。また麏とも書く。時珍曰く、獵人が彩色のものを舞はすと、麞、麇がそれを注視する。麞は美しい文模様を喜むものだ。故に字は章に從ふのである。陸氏は『麞は性驚慞するものだから麞といふ。又、善く聚散するものだからまた麕と名ける。囷は圓倉のことだ』といつた。爾雅には『麕は、牡を麌――音は語（ゴ）――といひ、牝を麜――音は栗（リツ）――といひ、その子を麆――音は助（ショ）――といひ、大なるを麃――音は庖（ハウ）――といふ』とある。古語に『四足の美なるものに麃あり』とはこの物のことだ。



〔麞〕

集解 頌曰く、麞は現に陂澤の淺草の中に多くゐる。その類甚だ多く、麕とはその總稱である。牙あるものもあり、牙なきものもあり、その牙は物を噬齧し得

（一）苦、大觀ニ若ニ作ル。

ないものだ。

時珍曰く、麞は、秋、冬には山に居り、春、夏は澤に居り、鹿に似て小さく、角が無く、黃黑色のもので、大なるものも二三十斤に過ぎぬ。雄は牙があつて口外に出てゐる。俗に牙麞と稱するものだ。その皮は細軟で鹿皮に勝る。夏期には毛が生え換つて皮が厚く、冬期には毛が多くして皮が薄い。符瑞志に銀麞といふ白色のものがあつて、王者の刑罰が理に中る(あた)ときに出現するものだといふ。運斗樞には『樞星散じて麞鹿となる』とある。

【正誤】詵曰く、麞中から往往にして香を得ることがある。栗子ほどの大いさのもので、完全な香とはいへないが、やはり惡病を治す。

時珍曰く、麞に香はない。香のあるは麝であつて、俗に土麞と稱し、香麞(かうしやう)と呼ぶがそれである。此に正して置く。

肉【氣味】【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、八月から十一月までの間にこれを食へば羊に勝る。十二月から七月までの間は、これを食へば氣を動じ、多く食へば人をして消渴せしめ、瘦惡に（一）苦むものがこれを食へば痼疾を發する。鵠肉(こうにく)と

食合はせれば癥疾となるから食つてはならぬ。又、梅、李、蝦と食へば人を病ましめるものだから食つてはならぬ。

【主治】【五臟を補す】(別錄)【氣力を益し、人の顏面を悅澤にする】(思邈)【酒に釀して飲めば風を消祛するの功がある】(寧原)

【發明】弘景曰く、俗に、白肉を麞といふ。その膽は白くして驚怖し易い。

詵曰く、肉は麋肉と同じく酒に釀すが良し。道家ではその肉を以て供養して白脯と名け『十二辰に屬せずして腥膩でないから禁忌がない』といふ。

時珍曰く、麞は膽が白くして性怯え、水を飲んで影を見ると奔り出すものだ。道書に『麞鹿に魂なし』とある。

藏器曰く、心の粗豪なる人は、この物の心、肝を曝乾して末にし、酒で一具を服すれば小膽になる。怯なるものがこれを食へば、ますます怯になつて始末がつかなくなる。

【附方】舊一、新一。【乳を通ずる】麞肉を煮て食ふ。婦をして知らしめてはならぬ。(子母祕錄)【瘤を消す】麞肉、或は鹿肉を剖いて厚い脯にし、炙熱して搨す。

四回炙いて四回易へるがよし。膿が出て癒える。除けぬときは再び新肉を用ゐて試みる。(外臺祕要)

髓腦 【主治】【氣力を益し、人の顏面を悅澤にする】(別錄)【虛風を治す】時珍曰く、千金の暗風を治する薯蕷煎、虛損を治する天門冬煎にいづれもこれを用ゐてある。頌曰く、唐の方に麋髓、竝に麋骨の酒がある。いづれも下を補するものだ。

骨 【氣味】【甘し、微溫にして毒なし】【主治】【虛損、洩精】(別錄)【精髓を益し、顏色を悅くする】(日華) 時珍曰く、千金に、產後の虛損を治する麋骨湯といふがあつて、煮汁で藥を煎ずるものだ。

麝（本經上品）

和名　じやかうじか
學名　Moschus moschiferus, Linne.
科名　しか科

【釋名】**射父**（爾雅） **香麞** 時珍曰く、麝は香氣が遠く射るものだ。故に麝といふ。或は、麝父の香が來つて射るものだから名けたといふが、やはり通じる。その形が麞に似てゐるから俗に香麞と呼ぶのである。梵書には麝香を莫訶婆伽といつ

（一）中臺ハ未詳。益州ハ金部金ノ註、雍州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

（二）羌ハ石部鹵石類消石ノ註ヲ見ヨ。

てある。

集解　別錄に曰く、麝は（一）中臺の山谷、及び益州、雍州の山中に生ずる。春分に取つた香の生なるものが益〻良し。

弘景曰く、麝は形が麞に似て小さく、黑色だ。柏葉を常食とし、又、蛇を噉ふ。



〔麝〕
香麞

その香は正に陰莖前の皮の內に在つて、別に膜袋があつて裹まれてゐる。五月取つた香には往往にして蛇の皮、骨がある。今世間では蛇蛻皮で香を裹んで、かくすればいよいよ香しくなるといつてゐる。それは相使の關係だ。麝は夏期に蛇、蟲を食ふことが多く、寒になると香が滿ち、春に入ると臍の內が急痛するので自ら爪で剔き出し、それを屎、溺の中に入れて覆ひ、常に一箇處に溜めて置いて他處へは移さぬものだ。曾て偶然それを發見して一斗五升ほど收獲したものがある。この香は殺して取つたものよりも遙に勝るものだ。昔の人はこれを精、溺が凝つて出來るものといつたが、決してさやうなことはない。今は（二）羌夷に產するものが多く

は眞にして好きもので、(三)隨郡、(四)義陽、(五)晉溪の諸蠻中に產するものがこれに亞ぐ。益州から出るものは形が扁たく、それを皮膜で裹んであつて、多くは僞物だ。凡そ眞の香は一子が分れて三四子になるもので、血膜を刮り取り、他の物を雜ぜて四足の膝皮で裹んで賣るのだが、商人はそれをも僞造する。彼の地の者の言ふところでは、ただ一片を破つて看て、毛が共に裹の中に在るものならば勝れたものだといふが、今は活きたものから取るところを實見したものだけを眞物とする外はない。

頌曰く、今は陝西、益州、河東諸路の山にいづれもゐるが、(六)秦州、(七)文州の諸蠻中に就中多く、蘄州、光州にも時としてある。その香は甚だ小さくして一子の大いさ纔に彈丸ほどだが、往往にして眞物だ。蓋し彼の地では甚しく僞作を行はぬのだ。その香には三等級あつて、第一の生香をば遺香と名ける。これは麝が自ら剔出したものだ。しかし極めて得難いもので、その價は明珠と同じである。その香の聚つた場所は遠近に草木が生えず。或は黃に焦げてゐる。現に人が香を帶びて園林を通ると、そこの瓜果はみな實らないといふがその驗證だ。その次位のものが臍香であつて、捕獲して殺して取るものである。その三位のものは心結香であつて、これ

(三)隨郡ハ草部山草類丹參ノ註參照。
(四)義陽ハ草部山草類丹參ノ註ヲ見ヨ。
(五)晉溪、未詳。
(六)秦州ハ石部水銀ノ註ヲ見ヨ。
(七)文州ハ同部礜石ノ註、蘄州ハ草部隰草類艾ノ註、光州ハ草部石草類石斛ノ註ヲ見ヨ。

はその動物が人間や他の動物に捕逐され、驚畏のあまり失心し、度を失つて墜死したものを人間が捕つて取るのだが、心を破つて血が脾上に流出するを見ることもあつて、それで乾血塊を作るものもあるが、藥に入れるに堪へない。又、水麝香といふ一種がある。その香は更に奇なるもので、臍中がみな水になつてゐるのだ。その一滴を一斗の水に瀝し、それで衣服類を洒ふと、その香がなかなか失せない。唐の天寶年間に、(八)虞地方から嘗て一度獻上したことがあつて、それを御苑の中で養ひ、毎に針でその臍から刺し取つたが、眞雄黃末を捻りつけて置くと臍がまた癒合した。その香は肉麝に倍したといふ。この說は酉陽雜俎に記載してあるが、近頃では一向にその物がゐたといふことを聞かない。或はその物はゐても世間で識らぬのであらう。

愼微曰く、楊億の談苑に『(九)商、(一〇)汝の山中には麝の遺糞が多く、常に一箇處に在つて他に移らない。人間がそれを獲る。その性は臍を非常に愛惜するもので、人に逐はれて危急な場合には、巖に投じて爪を擧げてその香を剔裂し、禁られて死んでもなほ四足を拱してその臍を保護するやうにしてゐるものだ。故に李商隱の詩に

(八)虞トハ今ノ山西省平陸縣ノ虞城ノ地ヲ指スカ。

(九)商州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)汝州ハ隋ニ置ク、今ノ河南省臨汝縣ソノ治ナリ。

（一）大觀ニ自チ退ニ作ル

（二）當門子ハ麝臍中最上純眞ノ香料。

「巖に投ずるの麝（一）自ら香し」とあり、許渾の詩に「麝を尋ねて生香を采る」とある』とある。

時珍曰く、麝は山に居り、麞は澤に居る。この點で差別がつく。麝は西北に産するものが香が結實してゐる。東南に産するものは土麝といふもので、やはり用ゐられるが力が次位にある。南方の地の靈猫の嚢もその氣が麝のやうなものなので、世間ではそれを雜へる。本條を見よ。

麝臍香　修治　斅曰く、凡そ麝香を使用するには（二）當門子を用ゐるが尤も妙である。子の日にそれを開いて微し研つて用ゐる。必ずしも極く細くするには及ばない。

氣味　【辛し、溫にして毒なし】甄權曰く、苦く辛し、大蒜を忌む。李廷飛曰く、麝香は鼻に近けてはならぬ。白蟲があつて腦に入り、癩を患ふ。久しくその香を帶びれば關に透つて人をして異疾と成らしめる。

主治　【惡氣を辟け、鬼精物を殺し、三蟲、蠱毒、溫瘧、驚癇を去る。久しく服すれば邪を除き、夢寤、魘寐せぬ】（本經）【諸種の凶邪、鬼氣、中惡、心腹の暴

(一三)蛇蠱咬、蛇咬、蠱咬ノ意ナラン。

(一四)大觀ニ服字ナシ。

痛、脹急、痞滿、風毒を療じ、面䵟、目中の膚翳を去る。婦人の産難、墮胎。神仙に通ずる』(別錄)『佩服し、及び枕間に置けば、惡夢、及び尸疰、鬼氣を辟ける。又、蛇毒を療ず』(弘景)〇抱朴子に『山に入つて蛇を辟けるには、麝香丸を足の爪中に著けるが有效だ』とある。麝は蛇を噉ふところから禁厭としたものだ。『(一三)蛇、蠱咬、沙蝨、溪瘴の毒を治し、蠱氣を辟け、臟腑の蟲を殺し、瘧疾を治し、風痰を吐し、一切の虛損、惡病を療ず。子宮に納るれば水臟を暖め、冷帶下を止める』(日華)『熱水で一粒を研つて服すれば、小兒の驚癇、客忤を治し、心を鎭め、神を安じ、小便利を止める。又、能く一切の癰瘡膿水を蝕する』(藥性)又『十香丸に入れて(一四)服すれば、人をして百毛九竅をしてみな香しからしめる』といふ。『百病を除き、一切の惡氣、及び驚怖、恍惚を治す』(孟詵)『鼻窒で香臭を聞かざるを療ず』(好古)『諸竅を通じ、經絡を開き、肌骨に透り、酒毒を解し、瓜果の食積を消し、中風、中氣、中惡、痰厥、積聚癥瘕を治す』(時珍)

【發明】李杲曰く、麝香は脾に入つて內病を治す。凡そ風病の骨髓に在るものには、これを用ゐて風の邪をして出ることを得せしむべきものである。若し肌內に

在るものの場合にこれを用ゐるならば、反て風を引いて骨に入り、油が麪に入つた場合のやうで出すことが不能になる。

朱震亨曰く、五臟の風には麝香を用ゐてはならぬ。ために衞氣を瀉して口、鼻から出血するものだ。この場合は陰盛陽虛で、升有つて降なきものだから、陽を補し、陰を抑へねばならぬものであつて、腦、麝の輕揚、飛竄の劑を用ゐてはならない。婦人は血が主であつて、凡そ血海が虛して寒熱し、盜汗するは補し養ふべきものである。麝香の散、琥珀の燥を用ゐてはならぬ。

嚴用和曰く、中風不省のものには、麝香、淸油を灌いで先づその關を通ずる。それで後に語蹇、癱瘓の證を免れて、他の藥も有效になる。

時珍曰く、嚴氏は、風病には必ず先づ麝香を用へよといひ、丹溪は、風病、血病には必ず用ゐてはならぬといふ。いづれも妥當の論でない。蓋し麝香は走竄して能く諸竅の不利なるを通じ、經絡の壅遏せるを開くものだ。諸風、諸氣、諸血の諸痛、驚癇、癥瘕諸病の經絡壅閉、孔竅不利のものの場合、いかでこの物で引導をなして開き、通じてならぬといふことがあらうか。用ゐてはならぬのではない。ただ過ご

(一五)大觀ニ三四チ四五ニ作ル。

してはならぬのだ。濟生方では、瓜果を食つて成つた積で脹るものを治するにこれを用ゐ、飲酒で成つた消渇のものを治するにこれを用ゐて『果は麝を得れば壞れ、酒は麝を得れば敗れる』といつてある。これは麝を用うるの理を得たものだ。

附方　舊七、新十三。

【中風不省】麝香二錢を研末し、淸油二兩を入れ、和勻して灌ぐ。その人は自ら甦る。(濟生方)【中惡客忤】項强して死せんとするには、麝香少量を乳汁で兒の口中に塗つて效を取る。醋で調へてもよし。(廣利方)【小兒の驚啼】發歇不定なるには、一日三回、眞麝香一字を淸水で調へて服す。(廣利)【小兒の中水】單に麝のみを大豆三粒ほど奶汁で調へ、(一五)三四回に分服する。【破傷風水】毒腫して忍び難く痛むには、麝香末一字を瘡中に納れる。膿水を出し盡して效がある。(普濟方)【中惡霍亂】麝香一錢を醋半盞で調へて服す。(聖惠方)【小兒の邪瘧】麝香で墨を研つて「去邪辟魔」の四字を額上に書く。(經驗)【諸種の果物で積と成つたもの】脾を傷め、脹つて氣急するには、麝香一錢、生桂末一兩を飯で和して菉豆大の丸にし、大人は十五丸、小兒は七丸を白湯で服す。蓋し果は麝を得れば落ち、木は桂を得れば枯れるものだからである。(濟生)【消渴飲水】飲酒、或は果實を食

ひ、その過度が原因で、能く食ふが口渴して水を飲み、數〻尿するには、麝香當門子を酒で和して十餘丸にし、枳椇子の煎湯で送下する。蓋し麝香は酒を敗り、果を壞り、枳椇も酒を敗るものだ。(濟生)【偏、正頭痛】久しく除かぬには、晴朗な日に髮を分開し、麝香五分、皂角末一錢を薄紙に裹んで患部に置き、布で炒鹽を包んでその上から熨し、冷えれば易へる。かく數回繰返せば永く再發しない。(簡便單方)【五種の蠱毒】麝香、雄黃等分を末にし、生羊肝を指の大いさほど刀で割開したもので裹んで呑む。(衞生)【口內の肉毬】線のやうな根があり、五寸餘の釵股のやうなものを吐出し、それで能く物をば食ふが、捻れば心に徹して痛むものである。麝香一錢を一日三回水で服すれば自消する。(夏子益奇疾方)【分娩を催して出產を容易にする】續千金方では、麝香一錢を水で研つて服すれば立ろに下る。○濟生では、勝金散——母が弱くして難產なるを治す。麝香一錢、鹽豉一兩を舊青布で裹んで紅く燒いて末にし、秤錘を淬した酒で二錢を服すれば下る。郭稽中は『婦人の產難、及び橫、逆產は、兒枕が破れて敗血が子を裹むものだ。勝金散を服すればその敗血を逐ふて自ら生れる』といつた。【死胎の下らぬもの】麝香當門子一箇、桂心末二錢を

温酒で服すれば下る。（本事方）【痔瘡腫毒】麝香當門子、印城鹽等分を塗る。三回に過ぎず。（外臺）【鼠咬で瘡となつたもの】麝香で封ずるが妙である。（經驗）【蠶咬で瘡となつたもの】蜜で麝香を調へて傅ける。（廣利方）【山嵐瘴氣】麝香三分を水で服すれば解す。（集簡方）【蟲牙で痛むもの】香油を筯頭に抹して麝香末を蘸け、綿で裹んで炙熱して咬み、二三回換へる。その蟲は死んで根を斷つ。甚だ妙である。（醫方摘要）

肉 〔氣味〕【甘し、温にして毒なし】詵曰く、蠻人は常にこれを食ふが、麞肉に似て腥氣がある。これを食へば蛇毒を畏れぬといふ。〔主治〕【腹中の癥病】（時珍）

〔附方〕新一。【小兒の癥病】麝肉二兩を切つて焙じ、蜀椒三百箇を炒り、末に搗いて雞子白で和して小豆大の丸にし、二三丸づつを湯で服し、知あるを度とする。（范汪方）

(一)靈猫（拾遺）

和名 じやかうねこ
學名 Viverra genetta, L.
科名 じやかうねこ科

（一）木村（重）曰ク、いんどじやかうねこ學名 Viverra zibetha, L.

釋名　**靈貍**　蚧(かい)と書くは正しくない。**香貍**(雜俎)　**神貍**(離騷註)　**類**　時珍曰く、自ら牝牡となり、又、香氣がある。靈にして神なりと謂ふべきだ。

集解　藏器曰く、靈貓(れいべう)は南海の山谷に生ずる。形狀は貍(り)のやうで、自ら牡牝となる。その陰は麝のやうで、功もやはり相似たものだ。按ずるに、異物志に『靈貓は一體にして自ら陰陽をなす。その水道を刳(さ)いて囊を連ねたまま酒で洒(あら)つて陰乾すればその氣が麝のやうになる。麝香の中に雜入すれば區別がつかないもので、これを使用しても麝のやうだ』とある。

頌曰く、香貍は南方に產し、その地ではこれを膾生(くわいせい)に料理する。北方の地で狐を生に料理するやうな方法にするのだ。その氣は香しくして微し麝の氣がある。

時珍曰く、按ずるに、段成式は『香貍には四箇の外腎を有(も)つてゐる』といつた。して見ると、自ら能く牝牡するとは或はこれでいふのだらう。劉郁の西域記には『(二)黑契丹(こくきつたん)に香貍を產する。文は土豹に似て、その肉は食へる。糞、溺(ねう)はみな麝の氣のやうに香しい』とある。楊愼の丹鉛錄には『予は大理府にゐたとき香貓を見たが、貍のやうで、その文は金錢豹のやうなものだつた。これは楚辭に所謂「赤豹に

(二)黑契丹(カラキタイ)ハ南宋ノ時遼ノ耶律大石ガ西ニ走リ今ノ中亞細亞、及ビ新疆省地ヲ征服シテ西曆一一三二年ニ建國セル國號ナリ。

（三）亶爰之山、未詳。

乘つて文貍を載す」とあり、王逸の註に「神貍」としてあるもので、南山經に所謂「（三）亶爰の山、獸あり、狀は貍の如くにして髦あり、その名を類といふ。自ら牝牡となる。食ふ者は妬せず」とあり、列子にも「亶爰の獸は自ら孕んで生む。類といふ」とある。それが此の物を言つたのではないかと思はれる。又、星禽眞形圖の心月狐には牝牡兩體があるが、それが神貍そのものかも知れぬ』とある。予（時珍）が按ずるに、劉、楊二氏の說と異物志の所說と合致する。して見ると類とは靈貍をいふことに疑ない。類と貍とは文字の發音も相近い。



〔靈　猫〕
——文貍・香貍——

肉　氣味　【甘し、溫にして毒なし】

陰　氣味　【辛し、溫にして毒なし】　主治　【中惡氣、飛尸、蠱疰、心腹卒痛、狂邪鬼神、鬼瘧、疫氣、夢寐邪魘。心を鎭め、神を安ずる】（藏器）

貓（蜀本草）

和名　ねこ
學名　Felis domestica, L.
科名　ねこ科

【釋名】　家貍　時珍曰く、貓は苗（メウ）、茅（バウ）の二音がある。その名を自ら呼ぶものだ。陸佃が『鼠は苗を害し、貓はそれを捕る。故に文字は苗に從ふので、禮記に所謂「貓を迎へる」とはその田鼠を食はせるためだ』といつたが、やはり通ずる。格古論には『一名烏圓』とある。或は蒙貴（もうき）といふは貓のことだともいふが、それは誤だ。

【集解】　時珍曰く、貓は鼠を捕る小獸であつて、處處で畜（か）つてゐる。黄、黑、白、駁（ぶち）の數色あつて、身は貍のやうで面は虎のやう、毛が柔で齒が鋭く尾が長く、腰が短い。目が金鈴のやうなもの、及び上齶（じやうがく）に稜多きものを良しとする。或は、その睛は時刻を量れるもので、子、午、卯、酉の刻には一線のやうになり、寅、申、巳、亥の刻には滿月のやうになり、辰、戌、丑、未の刻には棗核（さうかく）のやうになる。その鼻端は常に冷で、ただ夏至の一日だけ煖だともいふ。性寒を畏れるものだが暑を畏

れない。能く地に畫いて食を卜ひ、月の旬の上下に隨つて鼠の首と尾とを嚙み、いづれも虎と同じである。陰の類のものにはかやうに相符合するところがある。この物は孕んで二个月で生み、一回に數疋の子を生む。恒に自らその生んだ子を食ふものもある。俗傳に、牝貓は牡がなくともただ竹箒で背を數回掃へば孕むといひ、或は、貓を竈の前で斗で覆ひ、箒の頭でその斗を擊いて竈神に祝つて求めても孕むといふ。これは雞子を竈に祝れば雛を抱くといふことと同じで、いづれも理論で推窮することの出來ないことだ。貓の病のときは烏藥水を灌ぐが甚だ良し。世間の言ひ傳ひに、薄荷は貓を醉はせ、死貓は竹を引くといふが、物類の相感に因つてさうしたことがあるのだ。



〔貓〕

肉 【氣味】【甘く酸し、溫にして毒なし】【主治】【勞疰、鼠瘻、蠱毒】

【發明】 時珍曰く、本草には貓、貍を一類として註解してあるが、しかし、貍肉は食に入るが、貓肉は佳くなく、また食品にも入らない。故にこれを用ゐるものは稀だ。胡濙の易簡方に『凡そ蠱毒を預防するには、少い時から貓肉を食ふ。それ

で蠱は害し得なくなる』とある。これはやはり隋書に所謂貓鬼、野道の蠱のことだらう。肘後には、鼠瘻核腫の或は已に潰れて膿血を出すものを治するに、貓肉を取つて普通の羹のやうにして空心に食ふとあり、『不傳の法だ』といつてある。昔は一般にみな瘻子を鼠涎の毒で起るとした。そこで淮南子に所謂『狸頭は癙、及び鼠に嚙まれた瘡を治す』とあり、又『狐目、狸腦、鼠その穴を去る』とある。いづれもその相制の意味を取つただけだ。

頭骨　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【鬼疰、蠱毒、心腹痛。蟲を殺し、疳、及び痘瘡の變黑せるもの、瘰癧、癙瘻惡瘡を治す】（時珍）

發明　時珍曰く、古方には多く貍を用ゐ、今は一般に貓を用ゐる。これは二種ではあるが、性氣が相同じものだから通用し得るのだ。孫氏は痘瘡倒黶を治するに、人、貓、豬、犬の四種の頭骨を用ゐた。方は人類にある。

附方　新九。　【心下の鼈瘕】黑貓頭一箇を灰に燒き、一日三回、方寸匕を酒で服す。（壽域）【痰齁發喘】貓頭骨を灰に燒き、三錢を酒で服すれば止まる。（醫學正傳）【貓鬼、野道】病で無意識に歌ひ哭くものである。臘月の死貓頭を灰に燒き、一日

二回、一錢匕を水で服す。（千金方）【多年の瘰癧】癒えぬには、貓頭、蝙蝠各一箇を倶に上に黒豆を撒いて共に燒いて性を存し、末にして摻り、乾くときは油で調へ、五香連翹湯を内服して效を取る。（集要）【走馬牙疳】黒貓頭を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。（壽域方）【小兒の陰瘡】貓頭骨を灰に燒いて傅ければ癒える。【鼠咬瘡痛】貓頭を灰に燒き、油で調へて敷く。瘥えるを度とする。（趙氏方）【癰疽の收斂】貓頭一箇を煆いて研り、雞子十箇を煮熟して白を去り、黃を煎じて油を出し、白蠟少量を入れ、灰を調へて傅け、その外部を膏で護住するが神妙である。（醫方摘要）【對口毒瘡】貓頭骨を燒いて性を存して研り、三五錢づつを酒で服す。（吳球便民食療方）

腦 紙上で陰乾する。 主治 【瘰癧、鼠瘻の潰爛せるには、莽草と等分を共に末にし、孔中に納れる】（時珍）記載は千金にある。

眼睛 主治 【瘰癧、鼠瘻には、灰に燒き、井華水で方寸匕を服す。一日三回】記載は外臺にある。

牙 主治 【小兒の痘瘡倒靨で死せんとするには、人牙、豬牙、犬牙と共に灰に燒いて等分を研末し、一字を蜜水で服すれば發し起る】（時珍）

【發明】時珍曰く、痘瘡が腎に歸すれば變黑するものだ。凡そ牙はみな腎の標であつて、能く腎に入つて毒を發する。藥の內に貓牙があればまた能く毒を解するものだが、熱證にも用ゐるがよいといふことだ。

舌　【主治】【瘰癧、鼠瘻には、生で晒して研つて敷く】(千金)

涎　【主治】【瘰癧には、刺し破つてこれを塗る】(時珍)

肝　【主治】【勞瘵に蟲を殺す。黑貓肝一具を生で晒して研末し、每月の一日と十五日との五更に酒で調へて服す】(時珍)記載は直指にある。

胞衣　【主治】【反胃吐食には、灰に燒いて硃砂末少量を入れ、舌下に壓す。甚だ效がある】(時珍)記載は楊氏經驗にある。

皮毛　【主治】【瘰癧の諸瘡、癰疽の潰爛】(時珍)

【附方】新六。【乳癰の潰爛せるもの】內に現はれるには、貓兒の腹下の毛を坩鍋中で煆いて性を存し、輕粉少量を入れ、油で調へて封ずる。(濟生祕覽)【瘰癧、鼠瘻】石菖蒲を生で研つて盒して微し破り、貓兒皮の毛のついたままを灰に燒き、香油で調へて傅け、內服には白斂末を酒で服す。多量に用ゐるを上とする。同時に

白斂を搗き爛して酒少量を入れて傅けるが效がある。(證治要訣)【鬢邊に生じた癤】貓の頸上の毛、豬の頸上の毛各一把、鼠屎一粒を燒いて研り、油で調へて傅ける。(壽域)【鬼舐頭瘡】貓兒の毛を灰に燒き、膏に和して傅ける。(千金)【鼻の擦破傷】貓兒の頭上の毛を剪り碎き、唾で粘して傅ける。(衞生易簡)【鼠に咬まれて瘡となつたもの】貓毛を灰に燒き、麝香少量を入れ、唾で和して封ずる。貓の鬚もよし。(救急易方)

尿　薑、或は蒜で牙、鼻を擦り、或は生葱で鼻中を紝せば遺出する。［主治］【蜒蚰、諸蟲の耳に入りたるとき、これを滴入すれば出る】(時珍)記載は儒門事親にある。

屎　［修治］臘月に採つて乾したものを泥固して燒いて性を存して貯へて用ゐる。［主治］【痘瘡の倒陷して發せぬもの、瘰癧の潰爛せるもの、惡瘡、蠱疰、蠍螫、鼠咬】(時珍)○痘黶には無價散といふがある。人類に掲げてある。【灰に燒いて水で服すれば、寒熱鬼疰で一定時なく發作するものを治するに極めて效驗がある】(蜀本草)

【附方】　舊一、新七。【小兒の瘧疾】烏貓の屎一錢、桃仁七箇を共に煎じて一盞を服す。立ろに瘥える。（温居士方）【腰脚の錐痛】支腿のものには、貓兒の屎を灰に燒き、唾津で調へて塗る。（永類鈐方）【蠱疰の腹痛】雄貓の屎を灰に燒いて水で服す。（外臺）【瘰癧の潰爛せるもの】臘貓屎を陰陽瓦で合せて鹽泥で固濟し、煆いて研末し、油で調へて搽る。（儒門事親）【鬼舐頭禿】貓兒屎を灰に燒き、臘豬脂で和して傅ける。（千金）【鼠咬で瘡となつたもの】貓屎を揉みつければ癒える。（壽域方）【蜒蚰で痛むもの】貓兒屎を塗れば三五回で瘥える。（心鏡）【齁哮痰欬】貓糞を灰に燒き、一錢を砂糖湯で服す。（葉氏摘玄）

貍（別錄中品）

和名　やまねこ
學名　Lynx microtid, M. Edwards.
科名　ねこ科

【釋名】　野貓　時珍曰く、按ずるに、埤雅に『獸にして里にあるものだから里に從ふので、窒居し（一）薶伏する獸だ』とあり、爾雅には『貍の子を隸——音は曳（エイ）——といふ、その足には蹯あり、その跡には凪——音は鈕（チュウ）——あり』と

木村（重）曰ク、別ニ野生ねこ（Felis Catus, L.）又おほやまねこアリ。

（一）薶伏ハ埋伏ニ同ジ。

ある。爪とは指頭の部分である。

【集解】弘景曰く、貍は類が甚だ多い。今は一般に虎貍を用ゐて貓貍を用ゐるものがないが、しかし貓貍もやはり好いものだ。又、色が黄にして臭いものもある。



〔貍〕

肉はやはり鼠瘻に主效がある。

頌曰く、貍は處處にゐるもので、その類が甚だ多く、虎の斑文のあるものは用ゐるに堪へるが、貓の斑のあるものは佳くない。南方にゐる一種の香貍は、その肉が甚だ香しいもので、微に麝の香がある。

宗奭曰く、貍は形が貓に類するもので、その文に二種あり、一は連錢のやう、一は虎文のやうだ。いづれも藥に入れられる。肉の味は狐と相遠からぬものだ。江南の一種の牛尾貍といふは、その尾が牛のやうである。その地方では多く糟食するが、藥に入れるといふことは聞かない。

時珍曰く、貍には數種ある。大いさは狐ほどのもので、毛は黄黑の雜色、貓のや

うな斑があつて、頭が圓く尾の大なるものは貓貍といひ、善く雞鴨を竊み取る。その氣は臭く、肉は食はれない。貙虎のやうな斑があつて、頭が尖り口の方なるものは虎貍といひ、善く蟲、鼠、果實を食ふ。その肉は臭くなく、食へる。虎貍に似て尾に黑白の錢文があつて相間るものは九節貍といひ、皮は(二)裘領にも用ゐられる。宋史に『(三)安陸州から野貓、花貓を貢す』とあるはこの二種である。豹のやうな文があつて麝香の氣をなすものは香貍といふ。卽ち靈貓である。南方には白面にして尾が牛に似たものがあつて、牛尾貍といひ、また玉面貍ともいふ。專ら樹上に上つてあらゆる果實を食ふもので、冬期に極めて肥える。その地では多く糟にして珍品とするが、大いに能く酒を醒すものだ。張揖の廣雅に『玉面貍を捕へて畜つて置けば、鼠がみな帖伏して敢て出なくなる』とある。貓貍に似た一種で、甚だ小さく、黃斑色で、澤中にゐて蟲、鼠、及び草根を食ふものを犭卂——音は迅(ジン)といふ。又、登州の島上にゐる海貍といふは、頭が貍で尾が魚である。

肉 [氣味] 【甘し、平にして毒なし】詵曰く、溫なり。正月に食つてはならぬ。神を傷める。時珍曰く、內則に、貍を食ふには正脊を去る。人に利あらざるた

(二)裘領ハけごろものゑり。
(三)安陸州ハ草部隰草類葈耳ノ註ヲ見ヨ

めだとしてある。○藜蘆と反す。

【主治】【諸疰】(別錄)【溫鬼毒氣で皮中を鍼で刺すが如きものを治す】(時珍) 記載は太平御覽にある。【羹、臛にすれば、痔、及び鼠瘻を治す。三頓に過ぎずして甚だ妙である】(蘇頌) 記載は外臺にある。【中を補し、氣を益し、遊風を去る】(孫思邈)

【附方】新二。【腸風痔瘻】下血し、年深きもの、日近きものに、如聖散——臘月の野貍一箇を鑵内に蟠らして炒り、大棗半升、枳殼半斤、甘草四兩、豬牙皂角二兩を共に鑵内に入れて上を蓋ひ、瓦に孔を穿ち、鹽泥で固濟して煆いて乾し、一箇の地坑を掘り、その中に瓦で十字に鑵を支へて置いて炭五秤で煆き、黑烟が盡きて青烟が出るやうになつたとき取り起し、濕土に一夜罨ふて置いて末にし、二錢づつを鹽湯で服す。ある方では、貍で羹を作り、その骨を灰に燒いて酒で服す。(楊氏家藏方)【風冷下血】脫肛し、疼痛するには、野貍一箇を大瓶に盛つて泥固し、火で煆いて性を存し、取り出して研り、麝香二錢を入れ、毎食前に二錢づつを米飲で服す。(聖惠方)

膏 【主治】【鼷鼠に咬まれて瘡となつたものには、これで摩り、並に貍肉を食

ふ】（時珍）

肝　主治　【鬼疰】（時珍）

附方　新一。【鬼疰で久しく經たもの】或は發し、或は止むには、野貓肝一具を瓶に盛つて熱豬血に浸し、口を封じて懸けて乾し、血を去り肝を取つて研末し、猢猻頭骨、虎頭骨、狗頭骨各一兩、麝香一分と末にし、醋糊で芡子大の丸にし、發する時手に一丸を把つて嗅ぐ。同時に緋帛で一丸を包んで中指に繫ける。（聖惠方）

陰莖　主治　【婦人の月經不通、男子の陰癩には、灰に燒いて東流水で服す】（別錄）

骨　頭骨が尤も良し。　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【風疰、尸疰、鬼疰の毒氣が皮中に在つて淫（四）濯して鍼で刺すやうに覺え、心腹に著き、痛走して一定の部位なきもの、及び鼠瘻惡瘡】（別錄）【灰に燒いて酒で服すれば、一切の遊風を治す】（保昇）【炒つて末にしたものは、噎病で飲食の通ぜぬを治す】（藥性）【灰に燒いて水で服すれば、野鳥の肉を食つた中毒を治す。頭骨を炙いて研り、或は灰に燒き、二錢を酒で服すれば、尸疰、邪氣の腹痛、及び痔瘻を治す。十服の後

（四）濯、大觀ニ躍ニ作ル。

に效驗が現れる】(孟詵) 宗奭曰く、骨を炙いて雄黃、麝香を入れ、丸にして服すれば痔、及び瘻を治するに甚だ效がある。【蟲を殺し、疳、瘰癧を治す】(時珍)

【發明】 頌曰く、華佗の尸疰を治するものに貍骨散といふがあつて、その頭を用ゐてある。

時珍曰く、貍骨、猫骨は性相近いものだから通用し得る。衞生寶鑑の諸風心痛を治する神應丹には貍を用ゐ、全身を燒いて藥に入れる。

【附方】 舊一、新一。【瘰癧腫痛】久しく瘥えぬには、貍頭蹄骨を用ゐ、いづれも酥を塗つて黃に炙いて散にし、每日空心に一錢匕を米飮で服す。(聖惠)【瘰癧の已に潰れたるもの】貍頭を灰に燒いて頻りに傅ける。(千金)

屎 五月に採收して乾す。【主治】【灰に燒いて水で服すれば、鬼瘧寒熱に主效がある】(孟詵)【灰に燒いて臘豬脂で和し、小兒の鬼舐頭瘡に傅ける】(千金)

(一)風貍(拾遺)

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

(一)木村(重)曰ク、和名 きのぼりねこ? 學名 Paradoxurus musanga, (Marsden)

校正　もとは貍の條下に附記してあつたが、本書では一條を分けて記載した。

釋名　**風母**（綱目）　**風生獸**（同）　**平猴**（同）　**狤𤞞**　音は吉屈（キックツ）である。

時珍曰く、風貍は能く風に因つて飛び上り飛び越え、死んでも風に當ればまた生き、また風疾を治す。故に風なる名を呼ばれたのだ。狤𤞞とは（二）詰屈たるものといふ意味である。

集解　藏器曰く、風貍は（三）邕州以南に生ずる。兎に似て短く、高い樹の上に棲息し、風を候て吹かれて他の樹に行き、果子を食ふ。その尿は乳のやうなものだ。甚だ得難いが、取つて飼養すれば得られる。

時珍曰く、今、十洲記の風生獸、廣州異物志の平猴、嶺南異物志の風母、酉陽雜俎の狤𤞞、虞衡志の風貍に就いて考ふるに、みな一物であつて、ただ文に大同小異があるだけのものだ。その獸は嶺南、及び蜀西の徼外の山林中に生じ、大いさは貍ほど、獺ほどで、狀態は猿猴のやうで小さく、目は赤く、尾は短くして無いかと思ふほどである。色は青黃で黑く、その文は豹のやうだ。或は『全身に毛がなく、

（二）詰屈ハマガリクネルナリ。

（三）邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。

ただ鼻から尾まで一筋に廣さ一寸ばかり、長さ三四分の青毛が生えてゐるともいふ。その尿は乳汁のやうだ。その性蜘蛛を食物とし、また薫陸香をも喫ふ。晝は蹐伏して動かぬこと蝟のやうで、夜になると風に因つて騰躍して甚だ捷く、巖を越え樹を渡ること鳥の空中を飛ぶやうなものだ。その地の者が網で捕るのだが、人間を見ると羞ぢ、叩頭して憐を乞ふやうな態度をする。人間がそれを打撃すると倏ちに死ぬが、口を風に向けると須臾にして復活する。ただその骨を碎き、その腦を破れば全く死んで了ふ。一には『刀で斫つても入らず、火で焚いても焦げず、打てば皮の嚢を打つやうなもので、



〔風貍〕
――廣西――

鐵でその頭を撃ち破つても風を得れば復た起つものだが、ただ石菖蒲でその鼻を塞げば死ぬ』といひ、一には『この獸は常に一の杖を持つてゐて、鳥獸を指すとその指された物が動けなくなる。人間を見るとそれを棄てて了ふのだが。そこで捕獲して撃打し、極端に苦しめるとその所在を指し示す。人間がそれを取つてそれで物を指せば欲する所のものが意の如くになる』ともいふ。この二説は十洲記、及び嶺南

志に記載されてあることで、事實か否(いな)か判らない。

腦　主治　【酒に浸して服すれば風疾を癒す】(時珍)　記載は嶺南志にある。

【菊花を和して十斤まで服すれば長生し得る】(十洲記)

尿　主治　【諸風】(藏器)　【大風疾】(虞衡志)

本草綱目獸部第五十一卷上　終

本草綱目獸部

第五十一卷　下

（一）木村（重）曰ク、南方產ノ狐ハ學名 Vulpes bengalensis, Shaw.

（二）益州ハ金部金ノ註テ見ヨ。

獸の二

狐（一）（別錄下品）

和名 きつね
學名 Vulpes vulpes, (L.)
科名 いぬ科



〔狐〕

【釋名】時珍曰く、埤雅に『狐は孤である。狐は性疑ふもので、疑へば同類と和合しないものだ。故にその文字は孤に從ふ』とある。或は『狐は虛實を知るもので、虛を以て實を擊つ。實はそれで孤だ。故に孤に從ふ』ともいふが、やはり通ずる。

【集解】弘景曰く、江東には狐がゐない。狐は北方、及び（二）益州に產する。形は貍に似て黃に、善く魅をなす。

恭曰く、形は小黃狗に似て、鼻が尖り尾が太い。全く貍には似てゐない。

頌曰く、今は江南に時にゐる。(三)汴洛に就中多く、性疑多く、聽覺が鋭敏だ。故に捕獲するには多く罝を用ゐる。

時珍曰く、南北いづれにもゐるが、北方に最も多く、黃、黑、白の三種あり、白色のものは就中稀で、尾に白い錢文のあるものが佳し。日中は穴に潛伏し、夜間に出て食物を竊み、聲は嬰兒のやう、氣は極めて臊烈だ。毛皮は裘に作れるもので、腋の毛の純白なるを狐白といふ。許愼は『妖獸であつて、鬼が乘移つてゐるものだ。三德を有するもので、其色は中和であり、前が小さくして後が大きく、死ねば丘に首する』といつた。或は『狐は(四)上伏を知つて阡陌を度らぬ』といひ、或は『狐は善く氷を聽く』といひ、或は『狐は媚珠を有つてゐる』といひ、或は『狐は百歲に達すると、北斗を禮して男、女の姿に變化し、淫を以て人を惑す。又、能く尾で擊つて火を出す』といつた。或は『狐魅は狗を畏れる。千年の老狐は千年の枯木を燃して照せば眞の形を現はす』といひ、或は『犀角を穴に置けば歸らなくなる』といふ。山海經には『(五)青丘の山、狐あり、九尾にして能く人を食ふ。これを食へば蠱せず』とある。

(三)汴洛ハ草部芳草類香薷ノ註ヲ見ヨ。

(四)上伏ハ三伏ノ上伏ナリ、暑ヲ恐ル故ニ炎天ニ穴ヲ出デテ阡陌ヲ彷徨セザルナリ。

(五)青丘之山、服虔註子虛賦ニ『青邱國ハ海東一百里ニ在リ』トアリ。杜光庭ノ嶽瀆名山記ニハ『瀛洲、東海ニ在リ一名青邱』トアリ。

鼎曰く、狐魅の狀態は、人を見て或は叉手して禮あるやうだが、或はただ揖しても態度をなさず、或は靜處で獨語し、或は裸形で人を見る。

肉 氣味 【甘し、溫にして毒なし】詵曰く、小毒あり。禮記に『狐を食ふには首を去る。人を害するためだ』とある。

主治 【腸と共に臛にして食へば、瘡疥の久しく瘥えぬを治す】(藏器) 【煮炙して食へば虛損を補す。及び五臟の邪氣、蠱毒寒熱の患者は多くこれを食ふが宜し】(孟詵) 【膾、生にして食へば、中を暖め、風を去り、虛勞を補す】(蘇頌)

附方 舊一 【狐肉羹】驚(六)癎で恍惚たもの、言語の錯謬するもの、度なく歌笑するもの、及び五臟の積冷、蠱毒寒熱の諸病を治す。狐肉一(七)斤、及び五臟を治淨し、豉汁を入れて煮熟し、五味を入れて羹にし、或は粥にして食ふ。京中では羊骨汁、鯽魚を豉汁に代へるが、やはり妙である。(食醫心鏡)

五臟 及び **腸肚** 氣味 【苦し、微寒にして毒あり】主治 【蠱毒寒熱、小兒の驚癎】(別錄) 【虛勞を補し、その臟それぞれに隨つて補す。惡瘡疥を治す。生で食へば狐魅を治す】(日華) 【羹、臛に作つたものは大人の鬼を見るを治す】(孟詵)

(六)癎、大觀ニ癇ニ作ル。
(七)一斤、大觀ニ一片ニ作ル。

○『肝を灰に燒いて風癇、及び破傷風の口緊、搐强を治す』（時珍）【古方に諸風驚癇を治する狐肝散といふがあり、また衞生寶鑑の神應散、普濟方の破傷中風を治する金烏散中にいづれもこれを用ゐてある。

附方　新四。【勞瘧、瘴瘧】野狐肝一具を陰乾し、五月五日の五更の初刻に北斗下の氣を受けて末にし、粳米で菉豆大の丸にし、一丸づつを緋帛に裹み、男は左、女は右の手の中指に繫ける。（聖惠）【鬼瘧寒熱】野狐の肝、膽一具を新瓶に入れて陰乾し、阿魏一分を末にし、醋糊で芡子大の丸にし、發作時に男は左、女は右に一丸を把つて嗅ぎ、同時に緋帛に一丸を包んで手の中指に繫ける。（聖惠）【中惡蠱毒】臘月の狐腸を燒いて末にし、方寸匕を水で服す。（千金）【牛の病む疫疾】恭曰く、狐腸を灰に燒いて水で灌ぐ。獺に勝るものだ。

膽　臘月に取收める。

主治　【人の突然に絶息したるには、雄狐膽を溫水に研つて灌ぎ、喉に入れば活きる。時を經過しては致し方がない】（蘇頌）記載は續傳信方にある。【邪瘧を辟け、酒毒を解す】（時珍）萬畢術に『狐血に漬けた黍は人をして醉はざらしめる』とあり、高誘の註に『狐血で黍米、麥門冬を漬け、陰乾して

丸にし、酒を飲む場合に一丸を舌下に置いて含めば酔はなくなる』とある。

附方 新一。【狐膽丸】邪瘧の發作不定なるを治す。狐膽一箇、砒霜各半兩、阿魏、麝香、黄丹、菉豆粉各一分を末にし、五月五日の正午に粽子尖で梧子大の丸にし、空心、及び發作前に二丸を冷醋湯で服す。熱物を忌む。（聖惠方）

陰莖 氣味 【甘し、微寒にして毒あり】思邈曰く、小毒あり。 主治 【婦人の不妊症、陰中痒、小兒の陰癩、卵腫】（別錄）【婦人の陰脫】（時珍）

附方 新一。【小兒の陰腫】狐陰莖を炙いて末にし、空心に酒で服す。（千金方）

頭 主治 【燒けば邪を辟ける。貍頭と共に灰に燒いて瘰癧に傅ける】（時珍）記載は千金にある。

目 主治 【破傷中風】（時珍）

發明 時珍曰く、狐目で破傷風を治する方は劉氏保壽堂方に記載があつて、『神效無比』とし、臘月に狐目を收取して陰乾し、時に臨んで二目一副を炭火で微し燒いて性を存して研末し、無灰酒で服すとある。又、淮南萬畢術に『狐目、貍腦は鼠がその穴を去る』とあるは、灰に塗れば鼠を辟けるといふことだ。

鼻　主治　【狐魅病には、豹鼻と共に煮て食ふ】（時珍）

唇　主治　【惡刺の肉に入りたるには、杵き爛らして鹽を入れて封ずる】（聖惠）

口中の涎液　主治　【媚藥に入れる】嘉謨曰く、これを取る法は、小口瓶に肉を盛つて狐の常に行く處に置くと、狐がつまみ取れぬのでその上を徘徊して瓶中に涎を入れる。それを取る。

四足　主治　【痔漏下血】（時珍）

附方　新一。【痔漏】反花し、瀉血するには、狐の手、足一副を陰乾し、穿山甲、蝟皮各三兩、黄明膠、白附子、五靈脂、蜀烏頭、川芎藭、乳香各二兩を剉細し、砂鍋に入れて固濟し、乾くを候つて炭火で紅く煅いて末にし、木香末一兩を入れ、芫荽煎酒で二錢を調へて服す。一日三回。屢〻效を擧げた（永類鈐方）

皮　主治　【邪魅を辟ける】（時珍）

尾　主治　【燒灰は惡を辟ける】（日華）○頭、尾の燒灰は牛疫を治す。水で和して灌ぐ。

雄狐屎　恭曰く、竹木、及び石の尖頭上に在るものがそれである。　主治

(八)喉、大觀ニ狀ニ作ル。

【これを燒けば惡を辟ける】(別錄)【瘟疫の氣を去る】(蘇恭)【肝氣で心痛し、顏色蒼蒼として死灰の如く、(八)喉に喘息する如くなるを治す。二升を灰に燒き、薑黃三兩を和して搗いて末にし、空腹に方寸匕を酒で服す。一日二回。甚だ效がある】(蘇頌)記載は崔元亮の海上方にある。【惡刺の肉に入りたるを療ずるには、燒いて臘月豬脂で封ずる】(千金)

附方 舊一、新一。【鬼瘧寒熱】雄狐屎、蝙蝠屎各一分を末にし、醋糊で芡子大の丸にし、發作時に男は左、女は右の手に一丸を把つて臭ぐ。【一切の惡瘻】中に冷瘜肉があるには、正月の狐糞を乾して末にし、一日二回、食前に一錢匕を新汲水で服す。(千金)

貉

音は鶴(カク)である。(衍義) 和名 たぬき、一名むじな 學名 Nyctereutes procyonoides (Gray) 科名 いぬ科

校正 もとは猯の條下に入れてあつたが、本書では一條を分出した。

［釋名］時珍曰く、按ずるに、字說に『貉と貛とは同穴に各處する。故に文字は各に從ふのだ』とあり、說文には貈と書き、狢とも書いてある。爾雅には『貈の子を貊——音は陌（ハク）——といひ、その雌を貓——音は惱（ナウ）——といふ』とある。原本に貊を貆としたのは訛だ。

［集解］宗奭曰く、貉は形が小狐のやうで、毛は黃褐色だ。

時珍曰く、貉は山野の間に生ずる。形狀は貍のやうで、頭は銳く、鼻が尖り、斑色でその毛が深く厚く、溫く滑かで裘服にするによし。貛と同穴にして異處するので、日中は潛伏し、夜間に出て蟲物を捕つて食ふ。穴から出るときは貛が隨つて出るものだ。その性睡ることを好む。人が畜ふこともあつて、竹を叩くと醒めるが、やはりまた寐て了ふ。故に人の好く睡るものを貉睡といふ。俗に渴睡と書くは謬だ。俗間では又『これは睡ることを好むわけではなく、耳が聾なのだ。それで人さへ見ればただ趨り出すのだ』といひ、考工記に『貉は汶を踰



〔貉〕

えれば死ぬ。その土地の氣に因つてである』とあり、王浚川は『北方では狐といひ、南方では貉といふ』といひ、星禽書には『氐土の貉は千歳の獨狐が變化したものだ』とあるが、いづれも誤だ。

肉 【氣味】【甘し、温にして毒なし】【主治】【元臟の虚勞、及び婦人の虚憊】（蘇頌）

貒 音は湍（タン）である。（唐本草）

和名 もうこあなぐま
學名 Meles leptorhynchus, M. Edwards.
科名 いたち科

【釋名】 **獾㹠**（藏器） **豬獾** 時珍曰く、貒は團である。その形狀の團く肥つたものだ。爾雅に『貒の子を貗といふ。その足は蹯で、その跡は厹がある』とある。蹯とは足の掌のこと、厹とは指頭の跡のことだ。



〔貒〕
——獾　豬——

【集解】 頌曰く、貒は犬に似て矮い。喙が尖つて黑く、足が褐色だ。獾、貉と三種は大體に於て相類するも

のだが、頭、足が小し別である。郭璞註爾雅に『貒、一名貛』といひ、一物と考へてゐるが、しかし方書に說いてあるその形狀には差別がある。

宗奭曰く、貒は肥えて矮く、毛は微灰色で、頭から脊に連る一筋の毛が黑く、尾は短く、嘴は尖つて黑い。蒸して食へば極めて美味だ。

時珍曰く、貒とは今の豬貛のことだ。處處の山野の中にゐて穴居し、形狀は小豬豘に似たものだ。形體が肥つて步行が鈍く、その耳は聾であつて、人を見れば走る。足短く、尾短く、喙尖り、毛は褐色だ。能く地に孔を穿ち、蟲、蟻、瓜果を食ふ。その肉は土氣を帶び、その皮毛は狗貛に及ばない。蘇頌の註したのは狗貛のことで、貒ではない。郭璞の『貛は貒なり』といふも誤だ。

肉　〔氣味〕【甘く酸し、平にして毒なし】〔主治〕【水脹の久しく瘥えずして垂死のものには、羹にして食はす。水を下して大いに效がある】（蘇恭）聖惠では、粳米、葱、豉で粥にして食ふ。【丹石を服して熱を動じたるもの、下痢赤白の久しく瘥えぬには、肉を煮て一夜露し、空腹に醬に和して一頓に食へば瘥える。瘦せた人は、煮て五味を和して食ふ。肌肉を長ずる】（孟詵）宗奭曰く、野獸の中では、た

だ貒肉だけが最も甘美で瘦人に益がある。【上氣虛乏、欬逆勞熱を治す。五味を和して煮て食ふ】(吳瑞)

膏 主治 【蜣蜋蠱毒で胸中に哽噎し、怵怵として蟲が行くやうに覺え、欬血するには、酒に和して服す。或は下し、或は吐し、或は自消する】(崔行功)

胞 主治 【蠱毒には、臘月に乾したものを湯に摩り、雞子ほどを空腹に服す】(唐本草)

骨 主治 【上氣欬嗽には、多く酒に硏り、一日二回、三合を服して瘥を取る】(孟詵)

貛 (食物)

和名 あなくま
學名 *Meles amurensis*, Schrenk.
科名 いたち科

釋名 **狗貛** 音は歡(クワン)である。**天狗** 時珍曰く、貛の字はまた貆にも書く。やはり形狀の肥えて鈍い貌の形容である。蜀地方では天狗と呼ぶ。

集解 汪穎曰く、狗貛は處處の山野にゐる。土に穴を穿つて居るもので、形

は家狗のやうだが脚が短く、果實を食物とする。數種あるが相似たものだ。その肉は味甚だ甘美なもので、皮は裘になる。

　時珍曰く、貒とは猪獾のこと、獾とは狗獾のことで、この二種は相似てゐるが、やや異ふ。狗獾は小狗に似て肥え、喙尖り、足矮く、尾短く、毛は深く褐色で裘領になる。やはり蟲、蟻、瓜果を食物とする。又、遼東、(一)女眞の地方に海獾といふがあつて、皮を衣裘の材料とするが、やはりこの類のものだ。



〔獾〕

——狗　　獾——

肉　氣味【甘く酸し、平にして毒なし】主治【中を補し、氣を益し、人に宜し】(汪頴)【小兒の疳瘦。(二)蛕蟲を殺すにこれを啖ふが宜し】(蘇頌)【功は貒と同じ】(時珍)

(一)女眞ハ鱗部無鱗魚類牛魚ノ註ヲ見ヨ。

(二)蛕、大觀ニ虻ニ作ル。

(一)左右江ハ禽部林禽類鸀鳿ノ註ヲ見ヨ。

(二)川西ハ四川省ノ西部。

木狗（綱目）

和名　こまてん
學名　Charronia flavigula, Raddes.
科名　いたち

集解　時珍曰く、按ずるに、熊太古の冀越集に『木狗は廣東、(一)左右江の山中に生ずる。形は黒狗のやうで能く木に登る。その皮は衣褥になる。能く血氣を運らし動ずるものだ。元の世祖は足疾があつて、これを取つて袴にした。それから一般に貴重視されたが、これは前代には聞かなかつたことだ』とある。予(時珍)が嘗て蜀人に聞いたことだが、(二)川西に玄豹といふがあつて、大いさは狗ほど、色は黒く、尾も狗のやうで、その皮を裘、褥にすれば甚



〔木狗〕——廣西——

だ暖だ。冬期に遠路を行くには、その皮で肉を包んで提へると數日間なほ温に食へる。彼の土でも珍貴なものとしてゐるといふのであつた。これはやはり木狗の屬である。故に此に附載するわけだ。

皮　［主治］【脚痺、風濕氣を除き、血脈を活し、腰膝を暖める】(時珍)

豺　音は儕(サイ)である。（唐本草）

和名　やまいぬ、一名ぬくて、一名おほかみ
學名　Canis lupus, L.
科名　いぬ科

［釋名］**豺狗**　時珍曰く、按ずるに、字說に『豺は能くその類に勝ち、又、祭を知る獸である。才ありといふべきだ。故に文字は才に從ふ』とあり、埤雅には『豺は柴である。俗に體の瘦せて柴の如しといふその意味だ』とある。

［集解］時珍曰く、豺は處處の山中にゐる。狼の屬であつて、俗に犲狗と名けるものだ。その形は狗に似てゐるが頗る白く、前が矮く、後が高くして尾が長い。その體は細く瘦せてゐるが健猛である。その毛は黃褐毛で(一)鬡鬇だ。その牙は錐のやうで物を噬む。羣行するもので、虎もこれを畏れる。又、喜んで羊を食ひ、その

(一)鬡鬇ハ亂レタル貌。

(二)大觀ニ其灰ノ二字アリ。
(三)大觀ニ頭骨ノ二字アリ。



〔豺〕

聲は犬のやうに聞える。世間ではその聲を惡んで魅を引くものとし、不祥なものとしてある。その氣は臊臭で惡むべきものだ。羅願は『世の語り傳ひに、狗は豺の舅だといふ。狗を見ると跪くものだ』といつた。やはり相制する關係があるのだ。

肉 氣味 【酸し、熱にして毒あり】詵曰く、豺の肉は、食へば人の精神を損じ、人の脂、肉を消し、人をして瘦せしめる。

皮 氣味 【熱なり】 主治 【冷痺、軟脚氣には、これを熟して患部を纏ひ裹めば瘥える】(蘇恭) 【諸疳痢、腹中の諸瘡を療ずるには、煮汁を飲み、或は灰に燒いて酒で服するもよし。(二)䘌齒瘡に傅ける】(孟詵) 又曰く、(三)灰に燒き酒に和して解槽に灌げば、牛、馬が良く馴れて人に附くやうになる。【小兒の夜啼で、あら

ゆる方法で奏效せぬを治す。狼屎中の骨と共に灰に燒き、等分を少量づつ水で服すれば定まる】（時珍）記載は總錄にある。

狼（拾遺）

和名　あかおほかみ
學名　Canis rutilus, Pall.
科名　いぬ科

【釋名】**毛狗**　時珍曰く、禽書に『狼は、食はんとする物を逐ふときは能く倒に立ち、先づその獸のいづれに向つて良きかを卜ふものだ。故に字は良に從ふ』とある。爾雅には『牡を貛といひ、牝を狼といひ、その子を獥——音は叫（ケウ）——といふ』とある。

【集解】藏器曰く、狼は狗ほどの大いさで色蒼く、聲を出して鳴くときは諸孔がみな沸く。

時珍曰く、狼は豺の屬であつて、處處にゐるが北方に就中多く、喜んでこれを食ふ。南方人の毛狗と呼ぶものがそれである。棲息するに穴を有つもので、その形は犬ほどの大いさで頭が鋭く、喙が尖り、頰は白く、脇が（一）騈び、前が高く、後が

（一）肋骨が並ビ現レルナリ。

(三)胡トハ頷下ノ肉ナリ。

廣く、脚は甚だ高くはない。能く雞、鴨、鼠などの動物を食ひ、その色は雜黃黑で、蒼灰色のものもある。その聲は大きくも小さくも鳴き、能く小兒の啼聲を出して人を魅するので、山野に住む俚人は就中この物の冬鳴くを惡む。その腸は直いものだ。故に鳴けば後竅がみな沸く、その糞を烽火に用うれば烟が直上に上つて斜にならない。その性善く顧みて食ふもので、動物を食つた跡は如何にも殘忍らしく踐み荒してある。老いるとその頷下に下垂した肉が袋のやうになる。(三)胡を跋み尾に疐き、進退兩ら患ふといふはそのわけだ。その象は上に奎星に應ずるものである。



〔狼〕

頴曰く、狽の足は前が短く、能く食ふべきものの所在を知り、狼の足は後が短くしてこれを負ふて行く。故に狼狽といふのだ。

狼筋 藏器曰く、狼筋は織り絡んだ袋子のやうでもあり、又、筋膠で作つたもの

(三) 脞ハ胃脘ナリ。

のやうでもあり、大いさは鴨卵ほどのものだ。物を盜んだ人間がある場合、これを熏ずるとその者の脚が攣縮する。それでその眞犯人を逮捕し得るものだといふ。或は、これは狽の(三)脞下(へいか)の筋だともいひ、又、これは蟲が作るものだともいふが、孰(いづ)れが事實なるや判らない。

時珍曰く、按ずるに、李石の續博物志に『唐の時に狽巾といふものがあつた。一には狽筋と書く。形狀は大きい蝸(くわ)のやうで兩頭が尖り、黃色を帶びたものだ。段祐といふものがあつて、金巾を失つたとき、奴婢を庭に集めてこれを焚いた。するとある婢が瞼を瞤(うご)かしたので、それが器を竊んだものだといふことが判明した』とある。これが陳氏の所謂狽筋であるが、予が謂(おも)ふに、さやうな事實は蓋し術者の作り事で、實際にさうした事實があつたわけではない。羅氏の爾雅翼の解に、狽脞中の筋で、雞卵よりも大きいといふも謬說(びうせつ)だ。

肉　[氣味]　【鹹し、熱にして毒なし】味は狐、犬に勝る。[主治]　【五臟を補益し、腸、胃を厚くし、骨髓を塡(み)てる。腹に冷積あるものはこれを食ふが宜し】(時珍) 記載は飲膳正要にある。

膏【主　治】【中を補し、氣を益し、燥を潤ほし、皺を澤かにする。諸惡瘡に塗る】(時珍)

【發　明】時珍曰く、臘月に煉淨して取收める。禮記に『狼の臅膏を小さく切り、稻米とにて飩となす』とあるは、狼の胸臆中の膏を米に和して粥糜に作ることであつて、古代には多く狼肉を食ひ、膏で飲食物を煎和したものだ。故に內則には、狼を食ふには腸を去るとしてある。周禮に『獸人は冬狼を獻ず』とあるは、その膏を取り聚めることである。諸種の方にもやはり時に狼の靨、牙、皮、糞を用うとあるが、本草にはいづれもその功用を記錄してない。ただ陳藏器が狼筋に就いて疑似の一說を述べてあるだけだ。缺陷といふべきである。本書には飲膳正要等の諸書に據つて補記して置く。

牙【主　治】【これを佩ぶれば邪惡の氣を辟ける。刮つて末にし、水で服すればば猘犬傷を治す。灰に燒いて水で方寸匕を服すれば、牛を食つた中毒を治す】(時珍)

記載は小品の諸方にある。

喉靨【主　治】【噎病には、日光で乾して末にし、半錢づつを飯に入れて食ふが

妙である】(聖惠)

皮　主治　【人を暖め、邪惡の氣を辟ける。〇嗉下の皮を搓つて條にし、頭を勒れば能く風を去り、痛を止める】(正要)　〇淮南萬畢術に『狼皮を戸に當てて置けば羊が外へ出ない』とある。

尾　主治　【馬の胸前に繫ければ邪氣を辟け、馬を驚かなくする】(正要)

屎　主治　【瘰癧には、灰に燒き、油で調へて封ずる。又、骨哽の下らぬを治するには、灰に燒いて水で服す】(時珍)　記載は外臺、千金方にある。

屎中骨　主治　【小兒の夜啼には、灰に燒いて二黍米ほどを水で服すれば定まる。又、能く酒を斷つ】(千金)

附方　新一。　【破傷風】狼虎の穿腸骨四錢を黃に炙き、桑花、蟬蛻各二錢を末にし、一錢づつを米湯で調へて服す。口の乾くものならば治せぬ。(經驗方)

兎　(別錄中品)

和名　しなうさぎ
學名　Lepus tolai, Pall.
科名　うさぎ科

木村(重)曰ク、支那ノ野兎ニ種類多シ。

(一)趺ハウヅクマル。
(二)趫ハ輕ク走ル貌。
(三)雄豪、未詳。

【釋名】 明眎 時珍曰く、按ずるに、魏子才の六書精蘊には『兎の字の篆文は形を象したものだ』とある。一には『吐して子を生むから兎といふ』ともいふ。禮記に、これを明眎といつてある。それは目が瞬かずして瞭然たるものとの意味である。說文には『兎の子を娩――音は萬(マン)――といひ、狡兎を㕙――音は俊(シュン)――といひ、毚――音は讒(ザン)――といふ』とあり、梵書には兎を舍迦といつてある。



〔兎〕

【集解】 頌曰く、兎は處處にゐるもので、食品としての上味である。

時珍曰く、按ずるに、事類合璧に『兎は貍ほどの大いさで毛は褐、形は鼠のやうで尾が短く、耳は大きくして鋭く、上唇が缺けて脾がなく、長い鬚があつて前足が短い。尻に九孔があつて(一)趺居し、(二)趫捷にして善く走り、(三)雄豪を舐めて孕み、五个月にして子を吐く。その大な

(四) 熒惑ハ星ノ名。

るをば㚟——音は綽(シャク)——といふ。これは兎に似て大きく、色が青く、首は兎と同じく、足は鹿と同じものだ。故にその文字はその形を象したのである。或は、兎には雄がなくて、中秋に月中の顧兎を望んで孕むなどいふが、荒唐無稽の說である。現に雄兎には二箇の卵がある。古樂府に「雄兎の脚撲速、雌兎の眼迷離」とあるに見てもその疑は破れるであらう』とある。主物簿には『孕環の兎は左腋に懷く。毛に文采あり、百五十年に至つて環腦に轉じ、能く形を隱す』とある。王廷相の雅述には『兎は潦を以て鼈となり、鼈は旱を以て兎となく。(四)熒惑明ならざれば雉、兎を生ず』とある。

肉 [氣味] 【辛し、平にして毒なし】詵曰く、酸し、冷なり。

時珍曰く、甘し、寒なり。按ずるに、內則に『兎を食ふには尻を去る。人に利あらぬものだ』とあり、風俗通には『兎髖を食へば多く人の面に髖骨を生ぜしめる』とある。

弘景曰く、兎肉は羹にすれば人を益する。妊婦は食つてはならぬ。子の脣が缺けるものだ。白雞の肉、及び肝、心と合せて食つてはならぬ。人の面を黃ならしめる。

獺肉と合せて食へば遁尸を病ましめる。薑、橘と共に食へば心痛し、霍亂せしめる。又、芥と共に食つてはならぬ。

藏器曰く、兎の尻には孔があり、子は口から出る。故に妊婦はこれを忌む。ただ唇が缺けるからといふだけではない。概して、久しく食へば人の血脈を絶ち、元氣、陽事を損して痿黄せしめる。八月から十月までは食へるが、その他の月には人の神氣を傷める。兎の死んで眼の合するものは人を殺す。

主治　【中を補し、氣を益す】(別錄)【熱氣、濕痺。痺渴を止め、脾を健にする。(五)炙いて食へば丹石の毒を壓す】(日華)【臘月に醬に作つて食へば小兒の豌豆瘡を去る】(藥性)【血を涼し、熱毒を解し、大腸を利す】(時珍)

發明　宗奭曰く、兎は明月の精であつて、白毛のものもある。それは金の氣を得たもので、藥に入れて就中效がある。凡そ兎は秋深き時期に入つて食ふべきもので、その時は金の氣が完全だが、春、夏になると味が變る。さやうなわけで醬にするには必ず五味を用ゐる。既往に豌豆瘡を患つたものがまた此の物を食へば發毒することが甚しい。斑爛して人を損ずる恐がある。

(五)多食、大觀ニ生喫ニ作ル。

時珍曰く、兎は冬期になると木の皮を齕み、已に金の氣を得て氣が内實するから味が美であるが、春になると草や麥を食つて金氣が衰へるから美味でない。今は俗間でこれを小兒に飼はせ、痘がひどく出ないやうにするのだといつてゐる。蓋しこれもその性寒にして熱を解するからのことだ。故にまた能く消渴を治し、丹石の毒を壓する。痘が已に出たものの場合、及び虛寒するものには警戒すべきものである。劉純の治例に『反胃、結腸の甚しきものは難治であるが、常に兎肉を食へば便が自ら通ずる』とある。またその性の寒、利することの證である。

附方　舊一。【消渴羸瘦】兎一疋を皮、爪、五臟を去り、水一斗半で煎稠して滓を去つて澄し冷し、渴したとき飲む。極めて重きものも二兎に過ぎぬ。（崔元亮海上方）

血　氣味【鹹し、寒にして毒なし】主治【血を涼し、血を活し、胎中の熱毒を解し、分娩を催して産を容易にする】（時珍）

附方　新六。【蟾宮丸】乾坤祕韞では、小兒の胎毒で、風寒に遇ふと痘疹を發するを治し、これを服すれば免れる。出るにしてもまた稀である。兎二疋を用ゐ、

臘月八日に血を漆盤内に刺し取り、それで細麪を炒熟したものを和して綠豆大の丸にし、三十丸づつを綠豆湯で服す。一兒に一劑づつを食はせれば、永く平安を得て甚だ效がある。○楊氏經驗方では、硃砂三錢を加へて酒で服し、兎砂丸と名けてある。

【兎血丸】小兒がこれを服すれば終身痘瘡が出ない。或は出ても稀だ。臘月八日に生兎一疋を取り、血を刺し取つて蕎麥麪少量を和し、雄黃四五分を加へ、乾くを候つて菉豆ほどの大いさの丸にし、初生小兒には乳汁で二三丸を送下する。全身に紅點を發出するがその徵驗である。但しその兒が成長してから常に兎肉を啖ふが尤も妙である。(劉氏保壽堂方)【催生丹】產難を治す。臘月の兎血で蒸餅を染め、紙に裹んで陰乾して末にし、二錢づつを乳香湯で服す。(指迷方)【心氣痛】瑞竹堂方では、臘兎血で茶末四兩、乳香末二兩を和し、搗いて芡子大の丸にし、一丸づつを溫醋で化して服す。○譚埜翁方では、臘月八月に活兎血を取り、麪を和して梧子大の丸にし、二十一丸づつを白湯で服す。

腦　主治　【凍瘡に塗る】(別錄)【分娩を催し、胎を滑する】(時珍)【髓と共に用ゐて耳聾を治す】(蘇恭)

附方　舊二、新二。【催生散】臘月の兎腦髓一箇を紙上に攤し、平均に夾んで陰乾し、剪つて符子にし、その表面に「生」の字一箇を書き、母が痛みの極まる時、釵股で夾んで燈火で灰に燒き、丁香を煎じた酒で調へて服す。(博濟方)【催生丹】臘月に取つた兎腦髓一箇を紙上に塗つて吹き乾し、通明乳香末二兩を入れて共に研り匀ぜ、臘日の前夜、卓子上に置いて星月の下に露し、茶果を供へ、齋戒して香を焚き、(六)北を望んで拜して『大道弟子某、世上の難生の婦人を救ふの藥を修合す。願くは威靈を降して此の藥を佑助し、速に生産せしめたまへ』と唱へ、禱り畢つて紙に藥を包んで一夜露し、夜明前に豬肉を搗き和して芡子大の丸にし、紙袋に盛つて風の透る場所に懸け、一丸づつを溫醋湯で服す。良久してなほ產まぬときは更に冷酒で一丸を服すれば(七)瘥える。これは神仙の方である。(經驗方)【手、足の皸裂】兎腦髓を生で塗る。(聖惠)【發腦、發背】及び癰疽、熱癤、惡瘡には、臘月兎頭を搗き爛らして瓶に入れて密封し、久しく封ずるほど佳し。それを帛上に塗つて厚く封ずる。熱痛は水のやうになる。頻に換へ、瘥を取つて止める。(勝金)

骨　主治　【熱中消渴には煮汁を服す】(別錄)　○頌曰く、崔元亮の海上方に

(六)大觀ニ北下ニ帝字アリ。

(七)大觀ニ產ニ作ル。

『消渇で羸瘦し、小便禁ぜぬを治するに、兎骨に大麥苗を和して煮た汁を服す。極めて效がある』とある。【煮汁を服すれば、霍亂吐利を止める】(時珍) ○外臺にこれを用ゐてある。【鬼疰、瘡疥、刺風を治す】(日華) 藏器曰く、醋に磨つて久疥に塗るが妙である。

頭骨 臘月に取收める。 氣味 【甘く酸し、平にして毒なし】 主治 【頭眩痛、癲疾】(別錄) 【皮と毛を連ねて燒いて性を存し、米飮で方寸匕を服すれば、天行の嘔吐の止まぬものを治す。瘥えるを度とする】(蘇頌) 記載は必效方にある。【毛を連ねて灰に燒いて酒で服すれば、產難、下胎、及び產後餘血の下らぬものを治す】(日華) 陸氏は葱湯を用ゐて服す。【燒いて末にし、婦人產後の陰脫、癰疽惡瘡に傅ける。水で服すれば、小兒の疳痢を治す。煮汁を服すれば、消渇の止まぬを治す】(時珍)

附方 舊一、新一。 【痘毒の預解】十二月に取つた兎頭の煎湯で小兒を浴すれば、熱を涼し、毒を去り、痘が出てゝ稀ならしめる。(飮膳正要) 【產後の腹痛】兎頭を炙き熱して摩すれば定る。(必效)

肝　主治　【目暗】（別錄）【目を明にし、勞を補し、頭旋、眼眩を治す】（日華）

○決明子を和して丸にして服すれば、甚だ目を明にする。【切つて洗ひ、羊肝を食ふ方法のやうにして生で食へば、丹石の毒發が上衝して目暗く、物を見得ざるを治す】（孟詵）

發明　時珍曰く、按ずるに、劉守眞は『兎肝が目を明にするは、その氣の有餘が不足を補ふに因る』といひ、眼科書には『兎肝は能く肝熱を瀉す。蓋し兎は目が瞭にして性の冷なるものだからだ』とある。

附方　新一。【風熱目暗】肝、腎の氣虚で風熱が上攻し、目が腫れて暗きには、兎肝一具、米三合を豉汁で和し、普通のやうに粥に煮て食ふ。（普濟）

皮毛　臘月に取收める。主治　【灰に燒いて酒で方寸匕を服すれば、産難、及び胞衣の出ぬもの、餘血が心を搶いて脹刺して死せんとするものを治し、極めて效驗がある】（蘇恭）【煎湯で豌豆瘡を洗ふ】（藥性）【頭皮の灰は、鼠瘻、及び鬼疰毒氣の皮中に在つて鍼で刺すやうに覺えるものに主效があり、毛灰は灸瘡の瘥えぬに主效がある】（藏器）【皮灰は婦人の帶下を治し、毛灰は小便不利を治す。その他は敗筆の

條を見よ】（時珍）

附方 舊一、新一。【婦人の帶下】兎皮を燒いて烟を盡して末にし、酒で方寸匕を服し、瘥えるを度とする。（外臺）【火燒の瘡】兎の腹下の白毛を貼る。毛が落ちて瘥える。（百一方）

屎 臘月に取收める。 釋名 明月砂（聖惠）翫月砂（集驗）兎蕈（炮炙論）

主治 【目中の浮瞖、勞瘵、五疳、疳瘡、痔瘻。蟲を殺し、毒を解す】（時珍）

發明 時珍曰く、兎屎は能く毒を解し、蟲を殺す。故に目疾、疳、勞、瘡、痔を治する方の中に往往これを用ゐてある。諸家の本草にいづれも言及しなかつたのはやはり缺漏だ。按ずるに、沈存中良方に『江陰の萬融が勞を病んで、四體が焚くやうに寒熱し煩躁したが、ある夜、ある人が腹に一の月を擁し、その光明が人をして心、骨みな寒からしめると夢みた。ところが寤めてから孫元規が使に藥を持たせて贈つて來たが、それを服して遂に平癒した。その方を訊ねて見ると明月丹であつたので、夢の意味が判つた』とある。

附方 舊二、新五。【明月丹】勞瘵を治し、蟲を追ふ。兎屎四十九粒、兎屎ほ

どの大いさの硇砂四十九粒を末にし、生蜜で梧子大の丸にし、十五日の月の前に水で甘草を一夜浸して五更の初刻に汁を取り、それで十七丸を服する。蟲が下つたならば急に鉗んで油鍋に入れて煎じ殺す。三日にして下らぬときは再服する。（蘇沈良方）

【五痔下痢】兎屎を炒つて半兩、乾した蝦蟇一箇を灰に焼いて末にし、綿で蓮子ほどの大いさに裹んで下部に納れ、一日に三回易へる。（聖惠方）【大、小便祕】明月砂一匙を臍中に置き、冷水を滴して透らすれば自ら通ずる。（聖惠）【痔瘡で(八)蟲を下すもの】止まぬには、翫月砂を慢火で黄に炒つて末にし、毎服二錢に乳香五分を入れ、空心に溫酒で服す。一日三服。卽ち兎糞である。（集驗方）【月蝕耳瘡】十五日の夜に兎屎を取り、蝦蟇の腹中に納れて共に焼き、末にして傅ける。（肘後）【痘瘡の目に入りたるもの】瞖を生ずるには、兎屎を日光で乾して末にし、一錢づつを茶で服すれば平安になる。（普濟方）【痘後の目瞖】直ちに山中に往き、東西の地上でわき目もふらずに兎屎十四粒を尋ね取り、雌雄の檳榔各一箇と共に磨り、地に落さずに井水で調へて服す。百に一も失たない。その效神の如きものだ。（蘭氏經驗方）

（八）大觀ニ蟲ヲ血ニ作ル。

敗筆（唐本草）

和名 やぶれたるふで
英譯 Warned brush-pencil

【集解】時珍曰く、上古には(一)殺青して竹帛に書いたものだが、(二)蒙恬の時に兎毫で筆を作り、後世ではまた羊、鼠の諸毛で作るやうになつたのだ。しかし兎毫のものだけを藥用に入れる。

筆頭灰【氣味】【微寒にして毒なし】【主治】【水で服すれば、小便不通、小便數難、淋瀝、陰腫、脫肛、中惡を治す】(唐本)【酒で二錢を服すれば、男子が交婚の夕の莖萎を治す】(藥性)【酒で二錢を服すれば難產を治す。漿飲で二錢を服すれば咽喉痛で飲食物の下らぬを治す】(時珍) 記載は范汪方にある。

【發明】時珍曰く、筆は、新しさを用ゐずして敗れたるを用ゐるは、その膠墨で沾濡してある點を取るのである。膠墨は能く小便、胎產を利するものだからだ。

【附方】舊二、新一。【小便不通】數にして微腫するには、陳久なる筆頭一箇を灰に燒いて水で服す。(外臺)【心痛の止まぬもの】敗筆頭三箇を灰に燒き、無根水で服すれば立ろに效がある。(經驗方)【難產の催生】勝金方では、聖妙寸金散――敗筆

(一)殺青ハ古代ニ文字ヲ竹簡ニ書セル當時、簡ヲ炙キテ汗ヲ出サシメ以テ書シ易ク、且ツ蠹ヲ辟ケタル方法ヲイフ。

(二)蒙恬ハ秦ノ將、始皇ノ晩年匈奴ヲ征ス。西紀前二〇〇年頃ノ人ナリ。

頭一箇を灰に燒いて硏り、生藕汁一盞で調へて服す。立ろに產する。もし母の虛弱の場合、及び元來冷疾があるものの場合は溫汁で服す。○陸氏の難產を治する第一方では、兎毫の筆頭三箇を灰に燒き、金箔三片と蠟で和して丸にし、酒で服す。

山獺（綱目）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

集解　○時珍曰く、山獺は廣の(一)宜州の嵠峒、及び(二)南丹州に產し、その土地では插翹と呼んでゐる。その性淫毒なもので、山中にこの物がゐるとあらゆる牝獸がみな避け去る。すると獺は配偶するものが無くなるので木を抱いて枯死して了ふ。猺峒の蠻女共は春期に大勢揃つて山に入り、山のさまざまの物を採ることを仕事とするが、獺が婦人の氣を嗅ぎつけると必ず躍つて來て抱きつき、骨に次いて入つて牢として脫けなくなる。そこでそれを扼殺して背負ふて歸るのだが。その陰を一箇取れば金一兩の値になる。木を抱いて死んだものを取れば就中珍しいものとして高價に値し、峒獠では甚だ珍重し、それをその蠻界から他に密賣すれば死刑に行

(一)宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。嵠峒ハ蠻族ノ棲息地。
(二)南丹州ハ宋ニ置ク、今ハ廣西省慶遠府ニ屬ス。モト蠻峒リ。

はれる。しかしその土地でもやはり普通にあるものではないので、方士は多くは(三)鼠璞や(四)猴胎で僞物を作る。その眞僞を試みる法は、ただ婦人の手でそれを摩擦して極熱せしめ、掌心に置いて強く氣を吹きかけると趯然として動くものが眞物だ。蓋し陰氣に感ずるからである。これ等の話は范石湖の虞衡志、周草窗の齊東野語の中にあるのだが、その形狀の記載がない。これも文獻としての缺漏だ。

陰莖 氣味 【甘し、熱にして毒なし】 主治 【陽虛陰痿で精寒して淸なるには、酒に少量を磨つて服す。猺人はこれを補助の要藥とする】（時珍）

骨 主治 【藥箭の毒を解す。少量を研つて敷けば立ろに消する】（時珍）

水獺（別錄下品）

和名 かはうそ
學名 Lutra sinensis, Gray.
科名 いたち科

釋名 **水狗** 時珍曰く、王氏の字說に『正月、十月に獺は二回魚を(一)祭する。本に報い始に反ることを知り、獸として多(二)賴なるもので、その形が狗に似てゐる。故に文字は犬に從ひ賴に從ふのだ。大なるを獱——音は賓（ヒン）——といひ、

(三) 鼠璞ハ鼠肉ノ未ダ腊セザル者ヲ云フ。
(四) 猴胎ハ猴ノはらごもり。
(一) 祭トハ捕リタル魚ヲ陳ネテ祭祀ノ如クスルトイフ意ナリ。
(二) 賴ハ恃ナリ、藉ナリトアリ。

猵といふ――音は編(ヘン)』とある。又、桓譚の鹽鐵論には、獨なるを猵とし、羣るを獺としてあつて、猨と獨とのやうに看做してある。

［集解］弘景曰く、獺は多く溪岸の邊に產する。兩種あるが、藥に入れるにはただ魚を以て天を祭るもののみを取る。一種の獱獺といふは、形は大きくして頸が馬のやう、身は蝙蝠に似たもので、藥用には入れない。

頌曰く、江、湖に多くゐる。四足俱に短く、頭と身、尾とみな偏く、毛は色が故い紫帛のやうで、大なるものは身と尾との長さ三尺餘あり、魚を食物として水中に居り、また木上にも休む。嘗て大水甕の中へ縻いで置いたところ、中で風のやうに旋轉して水がみな旋渦をなした。西戎ではその皮で(三)毳服の領や袖を飾る。垢が染著せぬもので、風霾翳日の如きはただそれで拭つただけで去るものだといふ。

時珍曰く、獺は形狀が青狐のやうで小さく、毛色は青黑で狗のやう、膚は伏翼のやう、尾長く、四足あり、水に棲息して魚を食物とする。能く(四)水信を知つて穴をつくるので、鄉人はそれで潦と旱とを占ふ。鵲巢で風を知るやうなものだ。古代には『熊は鹽を食つて死し、獺は酒を飮んで斃る』なる語があつたが、それは物

(三)毳服ハ毛衣。

(四)水信ハ水流ニ生ズル種種ノ變化ノ兆候ナリ。

(五)川、河ハ四川、湖北。

(六)大觀ニ祕下ニ澀字アリ。

(七)大觀ニ頭下ニ尾等ノ二字アリ。



〔水獺〕

に具はる性である。現に(五)川、河の漁夫は舟に住往にこの物を畜ひ馴して魚を捕らせるが、甚だ敏捷だ。また白色のものもある。或は『獱獺には雌なく、猨を以て雌とする。故に猨が鳴けば獺がそれを候つ』ともいふ。

肉【氣味】『甘く鹹し、寒にして毒なし』思邈曰く、甘し、温なり。弘景曰く、兎肉と雑へて食つてはならぬ。【主治】『煮汁を服すれば、疫氣、温病、及び牛、馬の時行病を療す』(別録)『水氣脹滿、熱毒風』(日華)『骨蒸熱勞で血脈が行らず、營衛が虚滿するもの、及び婦人經絡不通の血熱、大、小腸(六)祕。男子の陽氣を消するから多く食つてはならぬ』(蘇頌)

【發明】詵曰く、熱毒、風水虚脹の患者には、水獺一頭を取つて皮を去り、五臟、及び骨頭(七)のついたまま炙き乾して末にし、一日二回、水で方寸匕を服す。十

日にして瘥える。冷氣虛脹のものならばこれを服するが甚だ益がある。しかし只熱を治すだけで冷を治せぬ。その性の寒なるがためだ。

[附方] 舊一。【折傷】水獺一箇を支解し、罐に入れて固濟し、乾くを待つて燒いて性を存して末にし、黃米で煮た粥を患部に攤してその上から獺末を糝り、(八)布で裹む。立ろに疼痛を止める。(經驗後方)

肝 頌曰く、諸種の畜類の肝葉はいづれも一定した數があるが、獺の肝だけは一月に一葉、十二月に十二葉で、その間にまた退葉がある。これを用ゐるにはその形を見て調べる必要がある。調べねば僞物が多い。

[氣味] 【甘し、溫にして毒あり】甄權曰く、鹹し、微熱にして毒なし。頌曰く、肉、及び五臟はいづれも寒であるが、肝だけは溫である。[主治]【鬼疰、蠱毒。久嗽を止め、魚鯁を除く。いづれも灰に燒いて酒で服す】(別錄)【上氣咳嗽、虛勞(九)嗽病を治す】(藥性)【傳尸勞極で虛汗し、客熱するもの、四肢の寒瘧、及び產勞】(蘇頌)【蟲を殺す】(時珍)

[發明] 宗奭曰く、獺肝の勞を治することは實驗上認められる。

(八)布、大觀ニ帛子ニ作ル。

(九)大觀ニ嗽ヲ瘦ニ作ル。

○頌曰く、張仲景の冷勞を治するものに獺肝丸といふがあり、崔氏の九十種の蟲疰、傳尸骨蒸、(二〇)伏連(二一)殗殜、諸鬼毒、癘(二二)疾を治するものに獺肝丸といふがあつて、二方倶に妙なるものだ。

○詵曰く、疰病は一家族悉く患ふものだ。肝一具を火で燒き、水で方寸匕を服し、一日に再服する。

○○葛洪曰く、尸疰は五疰の一であつて、また諸鬼の邪を挾んで害をなし、その病が變動すると三十六種から九十九種に變化するが、大體に於て、寒熱し、沈沈默默として病に苦痛があることが判らぬが、全體に惡くないところもなく、月を積み年を累ね、淹滯して死に至り、死後には傳染して一家族を滅すものである。この症候を自覺したならば、ただ獺肝一具を陰乾して末にし、一日三回、方寸匕を水で服し、瘥えるを度とする。

○○時珍曰く、按ずるに、朝野僉載に『五月五日の正午に一本の竹を斫ると、竹節中に必ず神水がある。それを瀝取して獺肝を和して丸にすれば、心腹積聚の病を治するに甚だ效がある』とある。

(二〇)伏連、病源候論ニ解アリ。
(二一)殗殜ハ半起半寐ヲ云フ。
(二二)大觀ニ疾ヲ疫ニ作ル。

【附方】舊二、新一。【鬼魅】獺肝末を一日三回水で方寸匕を服す。（千金翼）【腸痔】血あるには、獺肝を燒いて末にし、一錢を水で服す。（肘後方）【下血】止まぬには、獺肝一副を煮熟し、五味を入れて食ふが妙である。（飲膳正要）

腎【氣味】肉に同じ。【主治】【男子を益す】（蘇頌）

膽【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【眼翳で飛蠅が上下するやうな黑花が見え、物を視て明ならぬには、點藥中に入れる】（蘇頌）

【正誤】宗奭曰く、古語に『蟾肪は玉を軟げ、獺肝は盃を分つ』とあつて、膽を竹刀、或は犀角の篦に塗り、それで酒の中へ畫けば酒が兩分するといふ意味だといふが、實驗上さやうなことはなかつた。蓋し妄傳である。但し盃の脣へ塗ると酒が盞面よりもやや高く盛り上るだけのことだ。誤のままに信じてはならぬ。

【附方】新一。【月經不通】獺肝丸――乾獺膽一箇、乾狗膽、硇砂、川椒を炒つて汗目を去り各一分、水蛭を黃に炒いて十箇を末にし、醋糊で菉豆大の丸にし、一日一服、五丸づつを當歸酒で服す。（聖惠方）

髓【主治】【瘢痕を去る】（時珍）

(一三)大觀ニ以爪ヲ取足ニ作ル。

【發明】時珍曰く、按ずるに、集異記に『呉主の鄧夫人が如意で頬を傷め、血流れて啼叫した。この時太醫が「白獺髓に玉と琥珀を雜ぜて傅ければこの痕がなくなる」といつた。そこで百金を出して白獺を購入し、それを膏に合せて痊えたが、ただ琥珀が多過ぎたのでやはり痣のやうな赤點が殘つた』とある。

骨 【主治】【これを含めば魚骨鯁を下す】(陶弘景) 【煮汁を服すれば嘔噦の止まぬを治す】(藥性)

足 【主治】【手、足の皴裂】(蘇恭) 【煮汁を服すれば魚骨鯁を治す。幷にこれで喉下を(一三)爪爬する】(藏器) 【末にして酒で服すれば勞瘵の蟲を殺す】(時珍)

皮毛 【主治】【煮汁を服すれば水癃病を治す。また褥、及び履屧に作つて著ける】(藏器) 【產母がこれを帶びれば產を容易にする】(張傑)

屎 【主治】【魚臍瘡には、研末して水で和して敷く。それで膿が出て痛が止まる】(一四)藏器曰く、また驢、馬の蟲顙、及び牛の疫疾にも主效がある。水に研つて灌ぐ。【下痢を治するには、燒いて末にし、早朝に一小盞を飲服す。三服にして癒える。赤には赤糞を用ゐ、白には白糞を用ゐる】(時珍) 記載は古今錄驗にある。

海獺（拾遺）

和名　らつこ
學名　Enhydra marina, Schreb.
科名　いたち科

【集解】藏器曰く、海獺は海中に生ずる。獺に似て大きく、犬のやうで脚下に胼拇のやうな皮があり、毛は水に著いても濡れない。その地のものはやはりその肉を食ふ。海中には又、(一)海牛、海馬、海驢などいふものがあつて、その皮毛は陸地に在つてはいづれも風潮が判るもので、やはり能くその毛が起つものだ。その說は博物志に記載されてある。

時珍曰く、獱より大きく、獺より小さい。やはりこれも獺である。今は一般にその皮を(二)風領とし、貂に亞ぐものとしてゐる。如淳の博物志の註に『海獱は、頭は馬のやう、腰以下は蝙蝠に、その毛は獺に似てゐる。大なるは五六十斤あつて、やはり烹て食へるものだ』とある。

(一) 木村(重)曰ク、海牛ハあざらし、海馬ハせいうち、海驢ハあじか及ビとど。らつこハ Enhydra lutris, (L).

(二) 風領ハエリマキ。

(一)木村(重)曰ク、オットセイ
學名　Callorhinus curilensis Jord. and Clark.

(二)突厥國ハ草部莨菪類白薬子ノ註ヲ見ヨ。

(一)膃肭獸

上は烏忽の切(チツ)下は女骨の切(トツ)である。（宋開寶附）

和名　チツトセイ
學名　Otaria ursina, Linn.
科名　あしか科

【釋名】 **骨豽** 說文には貀(こつ)と書いてある。肭と同じ。**海狗** 時珍曰く、唐韻に『膃肭は肥えたる貌だ』とある。或は骨貀と書く。それが訛つて骨訥(こつとつ)となつたのだ。いづれも外國名である。



〔膃肭獸〕

【集解】 藏器曰く、骨肭獸は西番、(二)突厥(とつけつ)國(こく)に生じ、胡人は阿慈勃他儞(あじぼたに)と呼ぶ。その形狀は狐に似て大きく、尾長く、臍は麝香に似て、黃赤色で爛骨のやうだ。

甄權曰く、膃肭臍といふは新羅國(しんらこく)の海中の狗の外腎であつて、それを臍が著いてあるままで取る。

李珣曰く、按ずるに、臨海志に『東海の水中

に游する。形狀は鹿の形のやうで、頭は狗に似て尾が長い。毎日(三)出て水面に浮んでゐる。(四)崑崙家が弓矢でそれを射て外腎を取り、百日間陰乾するのであつて、味の香美なものだ。

○頌曰く、今は東海の近海にもゐる。舊説では狐に似て尾が長いといふが、現に(五)滄州から提出した圖に據ると、これは魚類であつて、首は家のやう、兩足あり、その臍は紅紫色で上に紫の斑點があり、全く類似して居らぬ。醫家は多くこれを用ゐてゐる。異魚圖には『その臍を試驗するには、臘月に風の眞向に當る場所に盆に水を入れて置き、それに浸して凍らぬものが眞物だ』とある。

○斅曰く、膃肭臍には僞物が多い。海中に水烏龍といふ獸があつて、海人がそれを取つて腎を膃肭臍に充てる。しかしその物は自ら別であつて、眞物は一對が二重に薄皮に裹まれた丸い核のもので、皮上に自ら肉があり、毛は黄色で一毛孔に三莖づつ生えてゐる。これを器中に收めて置くと、年年濕潤を保つて新たなもののやうになつてゐる。或は、唾つた犬の頭上にこれを置くと、その犬が忽ち驚き跳ねて狂氣のやうになるものが眞物だといふ。

(三)大觀ニ毎下ニ遇字アリ。
(四)崑崙家トハ奴隷、使用人トルス馬來人ノコトヲイフカ。
(五)滄州ハ草部毒草類甘遂ノ註ヲ見ヨ。

宗奭曰く、今は登、萊州に產する。その形狀は狗でもなく獸でもなく、また魚でもない。ただ前脚は獸に似てゐるが尾は魚で、身には短くして密に淡青白の毛があり、毛上に深青黑の點があつて、久しく經つとそれも淡くなる。腹脇下は全く白色で、皮は厚くして牛皮のやうに靭い。邊境の軍將は多く取つて鞍韉を飾る。その臍は腹臍の積冷(六)衰、脾、腎の勞極を治するに有功なもので、別段試驗するまでもないものである。狐に似て尾が長いといふ話は今は一般に多く識られてゐない。

時珍曰く、按ずるに、唐書には『骨豽獸は遼西、(七)營州、及び(八)結骨國に產する』とあり、一統志には『膃肭臍は(九)女眞、及び(一〇)三佛齊國に產する。その獸は狐に似て脚高く、矢の如く走つて飛ぶやうなものだ。その腎を取つて油に漬け、膃肭臍と名ける』とある。これで觀ると狐に似たとの說は無いではない。蓋し狐に似たとか鹿に似たとかいふはその毛色だけのこと、狗に似たといふはその足の形のこと、魚に似たといふはその尾の形のことである。藥用に入れるは外腎であるが、臍といふは臍を連ねて取るからだ。又、異物志には『豽獸は朝鮮に產し、貍に似て蒼黑色、前兩足なく、能く鼠を捕る』とあり、郭璞は『晉の時、(一一)召陵の(一二)扶夷縣

(六)大觀ニ冷下ニ精字アリ。
(七)營州ハ今ノ河北省朝陽縣治ナリ。
(八)結骨國、即チキリキス國。今ノ新疆省トルパハタイヨリ唐努山烏梁海ニ至ルノ地方ナリ。
(九)女眞、或ハ九眞ノ誤カ。女眞ハ鱗部無鱗魚牛魚ノ註ヲ見ヨ。
(一〇)三佛齊ハ石部婆娑石ノ註ヲ見ヨ。
(一一)召陵ハ邵陵ノ誤ナリ。邵陵ハ昔ノ郡名。今ノ湖南省寶慶府ソノ治ナリ。
(一二)扶夷縣ハ夫夷縣

ノ誤。賓慶府新寧縣ノ東北ニ治ス。

である獸を捕獲した。狗に似て豹の文があり、角、兩脚がある』といつた。これに據ると豹には水、陸の二種あることになるから、藏器の所謂狐に似て尾が長いといふはこの類かも知れぬ。

膃肭臍　一名　**海狗腎**　［修治］　斅曰く、酒で一日間浸し、紙に裹んで香しく炙いて剉み搗き、或は銀器に入れ、酒で煎じ熟して藥に合せる。時珍曰く、漢椒・樟腦と共に貯藏すれば壞れない。

［氣味］　【鹹し、大熱にして毒なし】李珣曰く、味甘し、香美にして大溫なり。

［主治］　【鬼氣、尸疰、夢に鬼と交るもの、鬼魅、狐魅の心腹痛、中惡邪氣、宿血結塊、痃癖、羸瘦】（藏器）【男子の宿癥氣塊、積冷勞氣、腎精衰損、多色のために勞となつて瘦悴せるものを治す】（藥性）【中を補し、腎氣を益し、腰膝を暖め、陽氣を助け、癥結を破り、驚狂癇疾を療ず】（日華）【五勞、七傷で陰痿して力を少き、腎虛で背膊が勞悶し、顏色黑く、精冷なるに最も良し】（海藥）

［發明］　時珍曰く、和劑局方には、諸虛損を治するに膃肭臍丸といふがあり、當今の滋補の丸藥中に多くこれを用ゐてある。精不足の者はこれを補するに味を以て

するわけだ。概して蓯蓉、瑣陽の功と近似したものである。また糯米、法麴と共に酒に醸して服するもよし。

猾 音は滑(クワツ)である。（炮炙論）

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

【集解】斆曰く、海中に名を猾といふ獸がある。その髓を油の中に入れると、油が水に沾り、水中に火がついて消し止めやうがなくなる。ただ酒をそれに噴けば滅える。屋根のある場所には貯藏されないものだ。故に『水中に火を生ずることは猾髓に非ざれば能くすることなし』といふのである。

時珍曰く、この獸の髓が水中で火を生ずることは樟腦と同じやうなものだ。その功用も樟腦と似たものであらう。ただ現在ではそれに關する智識のあるものがない。

（一）南陽ハ草部山草類朮ノ註ヲ見ヨ。

獸の三　鼠類十二種

鼠（別錄下品）

和名　いへねずみ、一名くまねずみ
學名　Rattus rattus, Linne.
科名　ねずみ科

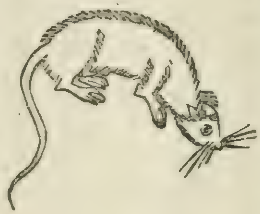
校正　もとは蟲魚部にあつたが、本書では爾雅に據つて獸部に移し入れた。

釋名　**䶉鼠**　音は錐（スヰ）である。**老鼠**（綱目）**首鼠**（史記）**家鹿**　時珍曰く、これは人家に普通にゐる鼠である。その尖りたる喙（くちさき）で善く家に穴を明けるところから、（一）南陽地方では䶉鼠といふ。壽命が最も長いところから俗に老鼠と呼ぶ。その性疑つて果さぬものだから首鼠といふ。嶺南地方ではこれを食ひ、名を呼ぶことを諱（い）んで家鹿と呼んでゐる。鼠の字の篆文（てんぶん）はその頭、齒、腹、尾の形を形容したものだ。

集解　弘景曰く、藥に入れるには牡鼠、卽ち父鼠を用ゐる。その膽は死んだ

と思ふと直に消えて了ふので容易に得られぬものだ。

時珍曰く、鼠は、形は兎に似て小さく、青黑色で、四齒があつて牙がなく、鬚が長く、眼が露出し、前の爪は四本、後の爪は五本あり、尾の文は織つたやうで毛がなく、その長さは身と等しい。五臟はいづれも完全にあつて、肝に七葉があり、膽は肝の短葉の間に在り、大いさ黄豆ほど、正白色で、貼りついてゐて垂れないものだ。衛生家寶方に『その膽は紅色だ』とあるわけは判らない。鼠は孕んで一个月にして生み、多きは六七子を産む。(二)惠州の蠻民は、初生のまだ目を閉ぢて毛の生えぬものを取つて蜜で養ひ、それを尊親への贈物とする。挾んで食ふのだが、その齒音が唧唧といふやうに聞えるところから、これを蜜唧といふ。淮南子に『魚は巴豆を食つて死し、鼠は巴豆を食つて肥える』とあり、段成式は『鼠は鹽を食つて身が輕くなり、砒を食つて死ぬ』といひ、易には艮を鼠とし、春秋運斗樞には『玉樞星散じて鼠となる』とあり、抱朴子には『鼠は壽命三百歳になると多く人に憑いてトふ。名けて仲といふ。能く一年中の吉凶、及



〔鼠〕

(二)惠州ハ宋ニ置ク、廣東省ニ屬シ民國ニ惠陽縣ニ廢入ス。

び千里外の事を知る』とある。鼠は類が頗る繁多なもので、爾雅や説文の記載だけでも後世では悉くは判らないのだが、右の二書そのものさへ全部をば記載し盡してはないのである。物象に對する研究の餘地は無窮といはねばならぬ。

附録　**鼨鼠**　音は終(シユウ)である。郭璞は『その大いさは拳ほど、その文は豹のやうなもので、漢の武帝が嘗てこれを獲得して終軍に問ふたといふそのものだ』といつてある。

鼮鼠　音は平(ヘイ)である。許愼は『一名䶃鼠。音は含(ガン)である。斑文がある』といつた。

䶉䶂　音は離艾(リカイ)である。孫愐は『小鼠であつて、相啣んで行くものだ』といつた。時珍曰く、按ずるに、秦記、及び草木子のいづれにも記載してある『群鼠數萬相啣んで行き、以て鼠妖をなす』といふがこの物だ。

鼩鼱　音は劬精(コウセイ)である。鼠に似て小さい。卽ち今の地鼠である。○又、爾雅、説文には鼸、鼶、鼮、鼣、鼭、鼤、䶅、䶈の八鼠を擧げてあるが、いづれも考證がない。○音は歉(ケン)斯(シ)廷(テイ)吠(ベイ)時(シ)文(ブン)鶴(カク)博(ハク)

である。

⑶**水鼠**　李時珍曰く、鼠に似て小さく、菱、芡、魚、蝦を食物とする。或は、小魚、小蟹の變化したものだともいふ。

氷鼠　東方朔は『北方遙かなる蠻地の積氷の下に生ずる。皮毛は甚だ柔なもので、席になる。これに臥せば寒を却け、これを食へば熱を已む』といつた。

火鼠　李時珍曰く、西域、及び南海の⑷火州に產する。その山には野火があり、春、夏に生じ、秋、冬に死息する。鼠はその中に產するので、甚だ大きく、その毛、及び草木の皮、いづれも布に織れるもので、汚れたときは燒けば淸淨になる。その布を火浣布といふ。

鼵鼠　音は突（トツ）である。郭璞は『⑸鳥鼠同穴山、今の⑹隴西首陽山の西南に在る。そこに棲む鳥を鵌——音は涂（ト）——といふ。形狀は家雀のやうで黃黑色だ。そこに棲む鼠を鼵といふ。形狀は家鼠のやうで、色が少し黃で尾が短い。鳥は穴の外に居り、鼠は穴の內に居る』といつた。

⑺**蹷鼠**　音は蹶（ケツ）である。爾雅に『北方に比肩獸といふがある。邛邛巨虛と伴

⑶木村(重)曰ク、水鼠ノ一種、みづもぐらねずみ。學名 Avicola amphibius, L. 一種かはねずみ。學名 Chimarrogale platicephalus(Tem.)

⑷火州、爪哇ヲ指スカ。未詳。

⑸鳥鼠同穴之山ハ甘肅省渭源縣ノ西南ニ在リ。

⑹隴西首陽山ハ甘肅省隴西縣ノ西南ニ在リ。

⑺和名しなとびねずみ　學名 Sicista concolor Büchner. 北支那ニとびうさぎアリ。學名 Allactaga mongolica,(Radde.)

ひ比び、甘草を嚙む。難あるときは邛邛巨虛が負ふて走る。その名を蟨といふ』とある。李時珍曰く、今の(八)契丹、及び(九)交河の北境に跳兎といふがゐる。頭、目、毛色はいづれも兎に似てゐるが、爪、足は鼠に似たもので、前足は僅に一寸ばかり、後足は一尺近くあり、尾も長くしてその端に毛があり、一たび跳ると數尺飛ぶが、靜止すると蹷き仆れる。これが卽ち蟨鼠である。土地の者は掘り取つてこれを食ふ。郭璞は邛邛巨虛を獸の名として、前は兎、後は鼠のものだといひ、張揖は漢書に註して『邛邛は靑獸にして狀馬の如く、巨虛は騾に似て小さい』といひ、本草では『巨虛を菴蘭子を食つて仙となる』としてある。これで見ると、これは動物中での非常に足の駿いものらしい。

牡鼠　[氣味]　【甘し、微溫にして毒なし】日華曰く、涼なり。牝鼠はいづれも藥に入れない。　[主治]　【踒折を療じ、筋骨を續ぐ。生で擣いて傅け、三日に一囘易へる】(別錄)　【豬脂で膏に煎じて打撲折傷、凍瘡、湯火瘡を治す】詵曰く、臘月に油で煎枯して滓を去り、熬膏して貯へて用ゐる。頌曰く、油で煎じ、蠟を入れて湯火傷に傅れば、瘢痕を滅するに極めて良し。【油で煎じて小兒の驚癇を治す】(日華)

(八)契丹ハ東三省、熱河、察哈爾、綏遠地方。
(九)交河ハ菜部胡蘿蔔ノ註ヲ見ヨ。

(一〇)大觀ニ鼠下ニ皮字アリ。

【五月五日に石灰と共に搗いて取收め、金瘡に傅ける。神效がある】(時珍) 【膏に煎じて諸瘡瘻を治す。臘月これを燒けば惡氣を辟ける】(弘景) 梅師は『正月元日の朝、住居の場所に鼠を埋めれば瘟疫を辟ける』といつた。

[發明] 劉完素曰く、鼠は善く穿つものだ。これを用ゐて瘡瘻を治するはその性に因つて用をなすのである。

[附方] 舊五、新八。【鼠瘻の潰爛せるもの】鼠一箇、乳髮を雞子一箇ほどを三歲の臘豬脂で煎じて消し盡し、その一半をば塗り、一半をば酒で服す。姚氏は不傳の妙法だといつた。(葛氏) 【諸種の瘢痕を滅す】大鼠一箇を臘豬脂四兩で銷盡するまで煎じて濾し淨め、一日に三五回、先づ布で拭つて赤くしてから塗り、風を避ける。(普濟方) 【瘡腫熱痛】靈鼠膏——大雄鼠一箇、淸油一斤を煎じ焦し、水に滴して散らぬやうになつたとき濾して再び煎じ、炒つた紫黃丹五兩を投じ、柳枝で手を住めず攪き勻ぜ、水に滴して珠に成るやうになつたとき黃蠟一兩を投じ、熬つて黑色を帶びた膏になつたとき甆瓶に收めて火毒を出し、用ゐるには攤して貼る。痛が去つて涼くなる。(經驗方) 【潰癰の合はぬもの】老鼠(一〇)一箇を燒き、末にして傅け

る。(千金方)【蛇骨で刺した場合】痛み甚しきには、死鼠を焼いて傅ける。(肘後)【破傷風病】角弓反張し、牙噤(がきん)し、肢强するには、鼠一頭を尾ともに灰に焼き、臘豬脂で和して傅ける。(梅師)【項强、身急するもの】活きた鼠を取つて五臟を去り、熱に乘じて貼れば瘥える。(一)【婦人の狐瘕(こか)】月經が潮せんとするために或は悲み、或は驚くもの。或は疾風暴雨に逢ひ、濕を被つて狐瘕となり、精神恍惚として月經が通じなくなり、胸脇、腰背が陰中に引いて痛み、小便難となり食慾があつても嘔せんとし、妊娠の狀態のやうになつたものである。その瘕に手、足の形が成れば死亡するが、まだ形の成らぬものは治療し得る。新鼠一箇を新絮(しんじよ)で裹んで黄泥で固め、地坑の中へ入れてその上を桑薪で一晝夜焼き、取出して絮を去り、桂心末六銖を入れて末にし、方寸匕づつを酒で服す。二服に過ぎずして自ら下るものだ。(外臺素女經)【出產を容易にする】鼠を取つて焼いて末にし、一日三回、井華水(せいくわすい)で方寸匕を服す。(子母祕錄)【乳汁の清(す)んで少きもの】死鼠一頭を焼いて末にし、方寸匕を酒で服す。その婦人に知らせてはならぬ。(同上)【杖瘡腫痛】まだ毛のない鼠を桑椹子(さうじんし)と共に麻油に入れて浸して釀し、その場合に取つて塗る。甚だ效がある。(西湖志)【湯火

(一)大觀ニ肘後方ノ三字アリ。

傷瘡】小老鼠を泥で包んで焼いて研り、菜油で調へて塗る。(談埜翁方)【小兒の傷乳】腹脹して煩悶し、睡を欲するには、鼠二箇を焼いて末にし、日毎に二錢づつを湯で服す。(保幼大全)

鼠肉　已下いづれも牡鼠を用ゐる。　氣味【甘し、熱にして毒なし】

主治【小兒の哺露大腹には、炙いて食ふ】(別錄)【小兒の疳疾で腹が大きくなり、食を貪るには、黃泥で裹んで焼き熟し、骨を去つて肉を取り、五味、豉汁を和して羹にして食ふ。骨を食つてはならぬ、甚だ人を瘦せしめるものだ】(孟詵)【骨蒸勞極で四肢勞瘦するに主效があり、蟲を殺す。及び小兒の疳瘦には、酒で熬つて藥に入れる】(蘇頌)【炙いて食へば小兒の寒熱諸疳を治す】(時珍)

附方　舊三、新一。【水鼓石水】腹が脹り、身の腫るには、肥鼠一箇の肉を取り、粥に煮て空心に食ふ。二三頓で癒える。(心鏡)【小兒の癥瘕】老鼠肉の煮汁で粥を作つて食ふ。(姚和衆方)【乳汁の通ぜぬもの】鼠肉を羹に作つて食はす。本人に知らせてはならぬ。(産書)【箭鏃の肉に入りたるもの】大雄鼠一箇の肉を取り、薄く批いて焙じ研り、二錢づつを熱酒で服す。瘡痒を感ずれば出る。(集要)

肝［主治］【箭鏃の出ぬには搗いて塗る。聤耳の汁を出すには、棗核ほどを用ゐて熱に乘じて塞ぐ。能く蟲を引くものである】(時珍)

膽［主治］【目瞖】(弘景)【目に點ければ青盲、雀目で物の見えぬを治す。耳に滴せば聾を治す】(時珍)

［發明］時珍曰く、(一三)癸は水位にして子に在り、氣は腎に通じ、竅を耳に開き、精を瞳子に注ぐ。その標は齒である。鼠もやはり子の宮、癸水に屬するので、その目が夜明だ。卦に在つては艮に屬し、その精は膽にあるものだ。故に膽は能く耳聾、青盲を治し、睛は能く目を明にし、骨は能く齒を生ずる。その對症はいづれも腎の病である。諸家の本草には、鼠膽の聾を治することを言つてないが、葛洪の肘後方に甚だその妙なることを稱揚してあつて『能く三十年の老聾を治す。卒聾の如きは三回に過ぎぬ。ある人が側臥して耳に膽を瀝し入れて膽一箇を盡したところ、須臾にして汁が下側の耳から出て、初の間はますます聾したが、十日にして痊えた』といつた。後世の多くの方はこれを祖とし、やはり多く用ゐてある。

［附方］舊一、新三。【耳の卒に聾閉せるもの】鼠膽汁二箇を滴す。雷鳴の時の

(一三)癸ハ北方。

やうにして通ずる。(本事方)【多年の老聾】衞生家寶方では、勝金透關散——活鼠一箇を繋いで熱湯に浸して殺し、喉を破つて膽を取る。眞紅色なるものがそれである。川烏頭一箇を炮いて皮を去り、華陰細辛二錢、膽礬半錢と末にし、膽で和勻して再び焙じ乾して研細し、麝香半字を入れ、鵝翎管で耳中に吹き入れ、口に茶水を含む。一日二回、十日にして效が現はれ、永く根本を除く。○聖惠では、久聾を治す。臘月に鼠膽二箇、熊膽一分を取り、水で和して旋めて綠豆大を取つて耳中に滴す。一日二回。【青盲で見えぬもの】雄鼠膽、鯉魚膽各二箇を和勻して滴す。立ろに效がある。(聖惠方)

鼠印　即ち外腎である。 主治 【人をして媚悅せしめる】時珍曰く、按ずるに、南宮從峋嶁神書の鼠印合歡の註に『雄鼠の外腎には印に似た文がある。兩腎相對して符篆の朱印の文を九遍捺したやうなものが尤も佳し。十一二月、或は五月五日、七月五日、正月元日の子の刻に、北面して子の方位に向つて割り取り、陰乾すると篆刻のやうになる。それを靑囊中に入れて下げ佩びる。男は左、女は右の臂上に繫けるのだ。人これを見て懽悅せぬものなし。求むるところ心の如くになる』と

ある。

脂　主治　【湯火傷】（蘇頌）【耳聾】（時珍）

附方　新一。【耳聾】鼠脂半合、靑鹽一錢、蚯蚓一條を共に和し化し、綿に蘸けて捻り、耳中に滴して塞ぐ。（聖惠方）

腦　主治　【針、棘、竹木の諸刺が肉中に在つて出ぬには、擣き爛して厚く塗れば出る。箭鏑、針、刃の咽喉、胸膈、諸隱處に在るには、肝と共に擣いて塗る。又、小兒の解顱に塗る。綿で裹んで耳を塞げば聾を治す】（時珍）記載は肘後、總錄にある。

頭　主治　【瘻瘡、鼻齇、湯火傷瘡】（時珍）

附方　舊一、新二。【鼻齇膿血】正月に鼠頭を取つて灰に燒き、臘月豬脂で調へて敷く。（外臺）【湯火傷灼】死鼠頭を臘豬脂で消盡するまで煎じて傅ける。瘢にならずして神效がある。（千金方）【酒を斷つて飮まなくする】臘鼠頭を灰に燒き、柳花末と等分を、就寢時に酒で一盞を服す。（千金）

目　主治　【目を明にし、能く夜中讀書し得る。術家でこれを用ゐる】（陶弘景）

發明　膽の項を見よ。

附方　舊一。【目澀り、好んで眠るもの】目一箇を取つて燒いて研り、魚膏で和して目眥に點入し、兼て絳囊に二箇を盛つて佩びる。(肘後)

涎　**氣味**　【毒あり】食物中に墜ちたものを食へば、人をして鼠瘻を生ぜしめ、或は金の如き黄を發する。

脊骨　**主治**　【齒が折れて多年生えぬには、研末して日日に揩る。甚だ效がある】(藏器)

發明　膽の項を見よ。○雷公炮炙論の序に『齒を長じ、牙を生ずるは雄鼠の骨末に頼る』とある。

附方　新一。【牙齒の疼痛】老鼠一箇を皮を去つて硇砂を上に擦り、三日にして肉の爛化し盡したとき骨を取り、瓦で焙じて末にし、蟾酥二分、樟腦一錢を入れ、少量づつを牙根上に點ければ立ろに止む。(孫氏集效方)

四足　及び　**尾**　**主治**　【婦人の胎を墮して出易からしめる】(別錄)　【燒いて服すれば分娩を催す】(日華)

皮　**主治**　【灰に燒いて瘻疽の口が冷えて合はぬものを封ずる。生で剝いで附骨疽瘡に貼れば膿を追出す】(時珍)

糞　弘景曰く、兩頭の尖つたものは牡鼠の屎である。**氣味**　【甘し、微寒にして毒なし】時珍曰く、小毒あり。食物中にあるものを誤つて食へは、人をして目黄となり、疸とならしめる。

主治　【小兒の疳疾大腹。葱、豉と共に煎じて服すれば時行、勞復を治す】(別錄) 頌曰く、張仲景、及び古今の名方に多くこれを用ゐてある。【癇疾を治し、目を明にする】(日華)【煮て服すれば、傷寒勞復の發熱、男子の陰易腹痛を治し、婦人の月經を通じ、死胎を下す。研末して服すれば、吹奶、乳癰を治し、馬肝の毒を解す。鼠瘻瘡に塗る。燒いて性を存して折傷、疔腫、諸瘡、貓、犬傷に傅ける】(時珍)

發明　時珍曰く、鼠屎は足の厥陰の經に入る。故に治するところの病はみな厥陰、血分の病であつて、前記の諸證がそれである。

附方　舊八、新十五。【傷寒勞復】外臺では、雄鼠屎二十箇、豉五合、水二升を一升に煮て頓服する。○活人書では、鼠屎豉湯——勞復發熱を治す。雄鼠屎十四箇、

(一三)大觀ニ半ニ作ル。
(一四)大觀ニ二七ヲ一七ニ作ル。
(一五)大觀ニ子母祕錄ニ作ル。

巵子十四箇、枳殼三箇を粗い末にし、水一盞、葱白二寸、豉三十粒を一盞に煎じたもので三回に分服する。【男子の陰易】及び勞復には、豭鼠屎湯——豭鼠屎の兩頭の尖つたもの十四箇、韮根一大把、水二盞を一盞に煎じて溫服する。粘汗を出すが效驗である。なほ汗せぬときは再服する。（南陽活人方）【大、小便祕】雄鼠屎末を臍中に傅ける。立ろに效がある。（普濟）【處女の月經閉止】牡鼠屎一兩を炒つて研り、空心に(一三)二錢を溫酒で服す。（千金方）【腹中の胎兒死亡】雄鼠屎(一四)十四箇を水三升で二升に煮て汁を取り、それで粥を作つて食へば胎が下る。【產後の陰脫】溫水で洗つて軟げ、雄鼠屎を烟に燒いて熏ずれば入る。（熊氏）【婦人の吹妳】鼠屎七粒と紅棗七箇を核を去つて包んで燒いて性を存し、麝香少量を入れて溫酒で調へて服す。（集要方）【乳癰の初期】雄鼠屎七箇を研末して溫酒で服す。汗を取つて散ずる。(一五)（壽域方）【乳癰の已に成つたもの】新しい濕ふた鼠屎、黃連、大黃各等分を末にし、黍米粥淸で和して四邊に塗れば散ずる。（姚僧坦方）【鼠瘻の潰壞せるもの】新鼠屎一百粒を五六十日間密器中に收め、杵き碎いて傅けるが效がある。（千金方）【疔瘡惡腫】鼠屎、亂髮等分を灰に燒き、瘡頭を針で刺して納れるが大いに良し。（普濟方）【鬼擊

吐血】胸腹刺痛するには、鼠屎を燒いて末にし、水で方寸匕を服す。人事不省のものには灌ぐ。(肘後方)【折傷瘀血】筋骨を傷損して疼痛するには、鼠屎を燒いて末にし、豬脂で和して傅け、急に裹む。半日に過ぎずして痛が止む。(梅師方)【馬肝の中毒】雄鼠屎二十一箇を水に和して研つて飮む。(梅師)【馬咬踏瘡】腫痛して熱を作すには、鼠屎十四箇、故(一六)馬鞘五寸を和して燒いて研末し、豬脂で調へて敷く。(梅師)【狂犬の咬傷】鼠屎二升を燒き、末にして傅ける。(梅師方)【猫に咬まれて瘡となつたもの】雄鼠屎を灰に燒き、油で和して傅ける。曾て實驗上效を認めた。(壽域)【小兒の齒の生えぬもの】雄鼠屎の兩頭の圓いもの二十一箇を用ゐ、一日に一箇でその齒を拭ふ。鹹、酸のものを食つてはならぬ。或は麝香少量を入れるが尤も妙である。(小品)【小兒の白禿】鼠屎を瓦で煅いて性を存し、輕粉、麻油と共に塗る。(百一方)【小兒の鹽齁】鼠屎を燒いて研り、水、酒で空心に服す。一歲に一錢を用ゐる。【小兒の燕窩瘡】瘡が生じたとき、鼠屎を研末して香油で調へて搽る。【毒蛇の螫傷】野鼠屎を水で調へて塗る。(邵眞人經驗方)

壤土　土部に記載してある。

(一六)馬鞘ハ馬鞭ノ柄。

（一）大觀ニ一名隱鼠ヲ亦名鼹鼠ニ作ル。

鼹鼠 音は偃（エン）である。（別錄下品）

和名 しなもぐら
學名 Scaptochirus moschatus, A. M. Redw.
科名 もぐら科

釋名 田鼠（禮記） 鼢鼠 音は憤（フン）である。隱鼠 時珍曰く、田鼠は地中を偃行し、能く土を壅して坌める。故にかかる諸名があるのだ。

集解 別錄に曰く、鼹鼠は土中に在つて行く。五月に取つて乾かして燔く。

弘景曰く、これは鼢鼠のことで、一名隱鼠といふ。形は鼠のやうで大きく、尾がなく、色黑く、鼻が尖つて甚だ強く、常に地中を穿つて行く。それを討ね掘つて取るのである。今は山林中に水牛ほどの大いさのもので、一名(一)隱鼠とい



〔鼹鼠〕
——鼢鼠——

ふがある。

藏器曰く、隱鼠は陰に地中を穿つて行き、日月の光を見ると死ぬ。深山の林木下の土中にゐる。大いさ牛ほどあるといふその物は、名は同じだが物は異ふのだ。

頌曰く、處處の田隴の間に多くゐる。月令に、田鼠化して鴽となるとはこの物だ。その形は鼠に類し、肥つて膏が多い。旱天の歳に田作物の害をなす。

宗奭曰く、鼢は脚が非常に短く、(二)僅に歩行し得るもので、尾の長さは一寸ばかり、目は極めて小さく、項が尤も短く、最も取り易いものだ。或は竹弓を仕掛けて置いて射て取り、それを鷹の餌とする。陶氏は水牛のやうなものを引用してこれを註釋したが、誤だ。

時珍曰く、許愼は『鼢は伯勞が變化したものだ』といひ、月令には『季春に田鼠變化して鴽となる』とあり、夏小正に『八月に鴽が鼠となる』とあつて、この二物は互交に變化すること鷹と鳩のそれのやうだ。鴽は鶉の類の鳥である。(三)隆慶辛未の年、夏、秋に大水があつて、(四)蘄、(五)黄の大江に沿ふた地は野一面に鼢鼠が出た。みな鱦魚が變化したもので、蘆稼の根を殆んど囓ひ盡して了つた。これで見ると鼢

(二)大觀ニ僅ヲ但ニ作ル。

(三)隆慶辛未ハ明ノ穆宗ノ治世、西暦一五七一年。

(四)蘄州ハ草部隰草類艾ノ註ヲ見ヨ。

(五)黄州ハ蟲部化生類蜈蚣ノ註ヲ見ヨ。

（六）大觀ニ諸字下ニ惡字アリ。

木村重曰北滿ニテ鼴鼠ト稱スルハもうこもぐらねずみ Myspalax fontaneri (M.-Edwards,) ナリ

に變化するものもただ一種だけではない。

肉〔氣味〕【鹹し、寒にして毒なし】〔主治〕【これを燔けば、癰疽、諸瘻蝕、惡瘡、陰䘌、爛瘡を療ず】（別錄）【久しく食すれば風を去り、瘡疥、痔瘻に主效がある】（藏器）【風熱の久積で、血脈が行らずして癰疽を結成したるを治し、消かす。又、小兒がこれを食へば蚘蟲を殺す】（蘇頌）

膏〔主治〕【諸（六）瘡を摩す】（藏器）

糞〔主治〕【蛇、虺の螫傷で腫痛するには、研末して豬脂で調へて塗る】（時珍）

壤土　土部に記載がある。

隱鼠（拾遺）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

〔釋名〕**鼴鼠**　音は偃（エン）である。**偃鼠**（綱目）**鼠母**（同）**鼶**　古役の反（ゲキ）に發音する。

〔解集〕弘景が鼹鼠の註に曰く、諸山林中にゐる獸に、大いさ水牛ほど、形は

（一）滄州ハ草部毒草類甘遂ノ註チ見ヨ。
（二）胡中ハ外國。

豬に似て灰赤色、下脚は象に似て、胸前、尾上みな白く、力があつて鈍(にぶ)いものがある。やはり隱鼠と名けるもので、その地の者はそれを取つて食ふ。肉はやはり牛に似たもので、多くは脯に作る。これは鼠の王であつて、その精溺(せいでう)が一滴地に落ちると一疋の鼠になる。凶災の年に多く出るものだといふ。

藏器曰く、これは獸の類であつて鼠の儔(たぐひ)ではない。大いさ牛ほどあつて前脚の短いものだ。皮を鞦(しう)、韂(せう)を作る材料にする。莊子の所謂『鼹鼠河を飮めども滿腹に過ぎず』といふそのものだ。陶氏は、これは鼠の王で、精滴が鼠に成るといつたが、各地の山間の住民に訪(たづ)ねて見てもさやうな話はない。また土中を行けるものでもない。これは妄説を陶が誤つて信じたのだ。

頌曰く、鼹鼠は（一）滄州、及び（二）胡中(こちう)に産する。牛に似たもので、首は鼠のやうで足が黑く、大なるは千斤あり、多く水中に伏し、また能く水を堰(せ)きとめて沫を放つ。彼地の者はその肉を食ふ。

時珍曰く、按ずるに、異物志に『鼠母は、頭、脚は鼠に似て口が銳く色蒼く、大いさ水牛ほどあるもので、狗を畏れる。現れるときは水災を主(つかさど)る』とあり、晉書

(三)宣城郡ハ草部山草類黃連ノ註ヲ見ヨ。

(四)褫脚一說ニ褫脚ノ褫ハ上ノ鼠ニ屬シ褫ハ彈ノ誤ニテ鼠彈ハ獸名ナラント云フ。

(五)晉寧縣ハ唐ニ置ク、今ハ雲南省滇中道ニ屬ス。

(六)倭國ハ石部水晶ノ註ヲ見ヨ。

に『(三)宣城郡に隱鼠を產する。大いさ牛ほどあり、形は鼠に似て、(四)褫脚は象に類するが、蹄は驢のやうで、毛は灰赤色、胸前、尾上は白色だ。力があつて鈍い』とあり、金樓子には『(五)晉寧縣境に大鼠を產する。形狀は牛のやうなもので、土地ではこれを偃牛といふ。時に山に遊びに出て毛を田畑へ落すと、それが悉く山鼠になり、作物を盡く荒して了ふ』とあり、梁書には『(六)倭國に山鼠といふ牛ほどのものがあり、又、大蛇があつて能くそれを呑む』とある。これに據ると隱鼠なるものは無いものではないので、陶氏の說も出處はあるのだ。諸家がこれを闢けたのは甚だ亂暴なことで、研究の粗漏である。又、爾雅に『鼫は、身は鼠に似てゐるが蹄は馬のやう、鬚が長く、一歲千斤の作物を賊する。秦地方ではこれを小驢といふ』とあるはこの物のことだ。

膏

主治 【痔瘻、惡瘡】(陶弘景)

鼫鼠

音は石(セキ)である。(綱目)

和名 無シ
學名 Citellus mongolicus ramosus, Thomas.
科名 りす科

【釋名】**碩鼠**　鼫と同じ。記載は周易にある。**鼩鼠**　音は酌(シャク)である。記載は廣雅にある。**雀鼠**　記載は埤雅にある。**鼨鼠**　音は俊(シュン)である。記載は唐韻にある。時珍曰く、碩は大であつて、鼠に似て大なるものだ。關西の地方音で鼫が轉じて鼩になり、鼩が訛つて雀になつた。蜀地方ではこれを鼨鼠といひ、その毛を取つて筆に作る。俊もやはり大の意味だ。



〔鼫　鼠〕

【集解】時珍曰く、鼫鼠は處處にゐる。土穴、樹孔中に棲むもので、形は鼠より大きく、頭は兎に似て尾に毛があり、青黄色だ。善く鳴き、能く人のやうに立つて前の兩足を交へて舞ふ。好んで粟、豆を食ひ、鼢鼠と同樣に作物に害をなすが、鼢は小さくして田に棲み、鼫は大きくして山に棲む。范成大は『(一)賓州の鼫鼠は專ら山豆根を食ふ。土人はその腹を取り、乾して藥に入れ、鼫鼠肚と呼ぶ』といつた。陸機が『この物も五種の技能があるもので、螻蛄と同じ名がある』といつたのは誤だ。

(一) 賓州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

肚　**氣味**【甘し、寒にして毒なし】　**主治**【咽喉痺痛、一切の熱氣には、研末して含嚥するが神效がある】（時珍）記載は虞衡志にある。

竹鼦

留（ル）柳（リウ）の二種に發音する。（綱目）

和名　やちねずみノ一種（木村重考定）
學名　Evotomys rutilus (Pallus.)
科名　はたねずみ科



〔竹　鼦〕

釋名　**竹㹠**　時珍曰く、鼦とはその肥えた有様を形容したもの、㹠とはその美なるを言つたものだ。

集解　時珍曰く、竹鼦は竹根を食ふ鼠であつて、南方に産する。土穴中に棲み、大いさ兎ほどのもので、その地では多く食ふ。味は鴨肉のやうだ。燕山錄に「羊を煮るに鼦を以てし、鼈を煮るに蚊

を以てす』とあるは物の性の相感である。

肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【中を補し、氣を益し、毒を解す】（時珍）

土撥鼠（拾遺）

和名　タラバカン（木村重孝定）
學名　Arctomys sibiricus, Radde.
科名　りす科

釋名　**䶅鼥**　音は駝撥（ダハツ）である。**荅刺不花**　記載は正要にある。時珍曰く、按ずるに、唐書にある䶅鼥鼠は即ちこの物で、䶅鼥とはその物の肥えた有様をいつたものだ。唐韻には竹䶅鼥——音は僕朴（ブハ）とある。俗に訛つて土撥となつたのだ。蒙古地方では荅刺不花と名ける。



〔土撥鼠〕
——搭刺不花——

〔集解〕藏器曰く、土撥鼠は西番の山澤の間に生ずる。土に穴を穿つて窠を作り、形は獺のやうだ。夷人は掘り取つて食ふ。魏志に『大秦國に產する辟毒鼠』とあるがこの物に近いやうに思はれる。

時珍曰く、皮は裘にもなり、甚だ暖く、濕が透らぬものだ。

肉〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、飲饍正要に【肥えてはゐるが、煮ては油がなく、味が短い。多く食つては消化し難く、微に風を動ずる。〔主治〕（野雞瘻瘡。煮て食へば肥美である】（藏器）

頭骨〔主治〕【小兒が夜臥して不安なるには、これを枕邊に懸ければ安らかになる】（時珍）

(一)貂鼠（綱目）

和名　くろてん
學名　Martes zibellina, (Linne.)
科名　いたち科

〔釋名〕栗鼠（爾雅翼）松狗　時珍曰く、貂は鼦とも書く。羅願は『この鼠は栗、及び松皮を食ふので、夷人は栗鼠、松狗と呼ぶ』といつた。

(一)木村(重)曰ク、ほくまんりすモ貂鼠ト云フ、學名 Sciurus vulg arsiman Tchiricus (Thon.) りす科

(二)丁零國ハ今ノシベリヤノエニセイ河上流バイカル湖ノ南方地方
(三)女眞ハ鱗部無鱗魚牛魚ノ註ヲ見ヨ。
(四)韃靼ハ草部山草類鎖陽ノ註ヲ見ヨ。



〔貂　鼠〕

集解　時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『貂は鼠の屬で、大きくして黃黑色のものだ。(二)丁零國に産す』とあるが、今は遼東、高麗、及び(三)女眞、(四)韃靼の諸蠻地にいづれもゐる。その鼠は大いさ獺ほどで尾が粗く、その毛は深さ一寸ばかり、紫黑色で蔚として輝かない。皮を用ゐて裘、帽の風領に作るが、寒期に風が當ると更に暖で、水が著いても濡れず、雪は直ぐに消える。面を拂ふと焰のやうで、眯を拭へば出る。亦た奇異なるものである。ただ火に近けると毛が脫け易い。漢の時の制度では、侍中の冠は金璫の首飾があつて、前に貂尾を挿み、それに蟬を附けたものであつた。それは內勁くして外溫かなるの表徵であつた。毛の黃色を帶びたものを黃貂といひ、白色のものを銀貂といふ。

肉　氣味　【甘し、平にして毒なし】

毛皮　主治　【塵沙の眯目はこの裘の袖で拂へば去る】（時珍）

黄鼠（綱目）

和名　はたりす（木村重考定）
學名　Citellus mongolicus ramosus, Thomas.
科名　りす科

釋名　**禮鼠**（韓文）　**拱鼠**（同上）　**䶅鼠**　音は渾（コン）である。**貔貍**　時珍曰く、黄鼠は、晴れた暖かなときには出て穴の入口に坐り、人を見ると、その前足を交へ拱いて揖するやうな眞似をして穴に竄入する。卽ち詩に所謂『鼠を相るに體あり、人にして禮無し』とあり、韓愈の文に所謂『禮鼠拱して立つ』とあるそのもので、古文にはこれを䶅鼠といひ、遼東地方では貔貍と呼ぶ。或は貔貍を竹䶉、貍䝞とするものもあるが、それは誤だ。胡人はまた令邦とも名ける。



〔黄　鼠〕

(一)延州ハ土部墨ノ註ヲ見ヨ。
(二)綏州ハ西魏ニ置ク。今ノ陝西省綏德縣ノ地ナリ。
(三)北胡ハ蒙古、シベリヤ地方。

集解　時珍曰く、太原、大同、(一)延、(二)綏に產し、また沙漠の諸地にはいづれもゐる。遼地方で就中珍貴なものとしてゐる。形狀は大鼠に類し、黃色のもので、足が短くして善く走り、極めて肥つたものだ。穴居するもので、その土窖に寢臺、倚子のやうな狀態のもののあるは牝牡のゐる場所である。秋期に豆、栗、草木の實を畜へて冬期を凌ぐもので、それぞれに小窖を作つて別に貯へてある。村落の者は水をその穴に灌いで捕獲する。味は極めて肥美で、豚子のやうで脆かい。皮は裘領になる。遼、金、元の時代には羊乳でこれを飼養し、それを上等の料理に供して珍饌とし、遙に遠方の地への贈にしたが、今は一向に重要視しない。鼠狼を最も畏れるもので、能く穴に入つて啣んで出る。(三)北胡にはまた青鼠といふがあり、皮はやはり用ゐられる。銀鼠といふは銀のやうな白色のもので、古代には鼲――音は吸(キフ)――鼠といつた。抱朴子に『南海の白鼠は重さ數斤あり、毛は布になる』とあり、百感錄に『西北に、黃鼠に類して喙が短く、目の無い獸がある。性狡く、善く人の足音を聞き別けて逃げ匿れ、なかなか捕獲し得ぬものだ。その地の者は瞎撞と呼ぶ』とあるも、やはり黃鼠の類のものである。

肉 [氣味] 【甘し、平にして毒なし】正要に『多く食へば瘡を發す』とある。

[主治] 【肺を潤ほし、津を生ず。膏に煎じて瘡腫に貼れば、毒を解し、痛を止める】(時珍)

[發明] 時珍曰く、黄鼠は、北方では食ふ物としてあるが、方書には記載がない。按ずるに、經驗良方に靈鼠膏といふがあつて『諸瘡腫毒を治し、痛を去り、熱を退ける。大黄鼠一箇を淸油一斤で慢火で煎じ焦し、水上で油を試みて散らぬやうになつたとき滓を濾し、澄淸して再び煎じ、次に紫に炒つた黄丹五兩を入れて柳枝で手を住めずに攪き匀ぜ、水に滴して珠に成るやうになつたとき、黄蠟一兩を下して黒く熬つて出來上る。それを三日間火毒を出し、普通のやうに攤して貼る。

鼬鼠 音は佑(イウ)である。(綱目)

和名 しないたち
學名 Putorius fontanierii, A. M. Redw.
和名 あるぷすいたち(木村重考定)
學名 Mustela alpina, Gebler.
科名 いたち科

[釋名] 黄鼠狼(綱目) 鼪鼠 音は生(セイ)を去聲に發音する。𪕶鼠 音は谷

(コク)である。**地猴** 時珍曰く、按ずるに、廣雅に『鼠狼、卽ち鼬なり。江東では鼪と呼ぶ。その色は黄赤で柚のやうだ。故にかく名けたのである。この物は鼠、及び禽畜を捕へることに健いもので、又、よく蛇虺を制す。莊子に所謂「騏驥の鼠を捕ふるは貍鼪に如かず」とあるは卽ち此の物だ』とある。



〔鼬鼠〕
——鼠狼——

集解　時珍曰く、鼬は處處にゐる。形狀は鼠に似て身が長く、尾が太く、黄色に赤を帶び、その氣は極めて臊臭だ。許愼の所謂『貂に似て大きく、色黄にして赤し』といふものがそれである。その毫と尾とは筆に作れるもので、嚴冬に用ゐても折れない。世に所謂、鼠鬚、栗尾とはこれをいつたのだ。

肉　氣味　【甘く臭し、溫にして小毒あり】　主治　【油に煎じて瘡疥に塗れば蟲を殺す】(時珍)

心肝　氣味　【臭し、微毒あり】　主治　【心腹痛。蟲を殺す】(時珍)

附方 新一。【心腹痛】黄鼠の心、肝、肺一具を陰乾し、瓦で焙じて末にし、乳香、沒藥、孩兒茶、血竭末各三分を入れ、一錢づつを燒酒で調へて服す。立ろに止まる。（海上仙方）

（一）鼷 鼠（拾 遺）

和 名 はつかねずみ
學 名 Mus molosinus, Temmink.
科 名 ねずみ科

釋名 **甘口鼠** 時珍曰く、鼷は鼠の最小なるもので、嚙まれても痛くない。故に甘口といふ。現に處處にゐる。

集解 藏器曰く、鼷鼠は極めて細やかなもので、ふと見ても見えぬ。人、及び牛、馬等の皮を食ふと瘡に成つて死に至るが、それでもこの物に食はれたと氣付かぬほどだ。爾雅に『螫毒あり』といひ、左傳に『郊牛角を食ふ』とあるものはいづれもこの物だ。博物志に『人を食ひば膚を殺し、人をして惡瘡を患はしめる』とあり、醫



〔鼷鼠〕──甘口──

（一）木村（重）曰ク、なんきんねずみ 學名 Mus wagneri, Evermann.

書に『正月鼠殘を食へば多くは鼠瘻となり、小孔より血を下す』とあるは、いづれもこの物のための病である。治法は、豬膏を以て摩り、及び貍肉を食ふが妙である。

鼷は功用なくして人の害をなすものだ。故に特に記述して置く。

食蛇鼠（綱目）

和名　マングース（木村重考定）
學名　Mungos sp.
科名　いたち科

【集解】時珍曰く、按ずるに、唐書に『罽賓國から食蛇鼠を貢したる。喙が尖り、尾は赤く、能く蛇を食ふ。蛇に螫れたときは、この鼠に嗅いで尿さすれば瘥える』とある。今はこの物に關する說を聞かぬのであるが、恐らくは時に貢納することもあるかも知れぬから、此の說を存して攷證に備へる。

尿

【主治】【蛇虺の傷螫】（時珍）

猬（本經中品）（一）

和名　はりねずみ
學名　Erinaceus dealbatus, Swinhoe.
科名　はりねずみ科

（一）木村(重)曰ク、ほくまんはりねずみ學名 Erinaceus amurensis, Schrenk. 他ニ支那全土ニはりねずみ種多シ。

校正 舊は蟲魚部に編入されてあつたが、本書は爾雅に據つて獸部に移し入れた。

釋名 **彙** 古の猬の字である。俗に蝟と書く。 **毛刺**(爾雅) **蝟鼠** 時珍曰く、按ずるに、說文には、彙の字の篆文を形を象したものにしてある。頭、足が鼠に似てゐるから鼠なる名があるのだ。

宗奭曰く、蝟皮は、胃逆を治し、胃氣を開くに有功だ。その文字を虫に從ひ胃に從つて書くは深い道理がある。



〔 蝟 〕

集解 別錄に曰く、猬は(二)楚山の川谷、田野に生ずる。取るに一定の時期はない。濕に中らしめてはならぬ。

弘景曰く、處處の野中に時にこの獸がゐる。人が觸れ犯すと、頭、足に藏してある毛で人を刺すので獲れないものだ。能く虎の耳中に跳ね入るものだが、鵲に遇ふと自ら

(二) 楚山トハ楚ノ山ナイフカ。

腹を仰むけて喙を受ける。物にはかやうな相制の關係があるのだ。その脂は鐵を烊し、中に少量の水銀を入れると鉛、錫のやうに柔になる。

○○○蜀圖經に曰く、猬の形は貒豘のやうで、大なるものは豘ほどあり、小なるものは瓜ほどである。脚は短く、尾の長さは一寸餘のものだ。蒼白色で脚の豬蹄に似たものが佳し。鼠のやうな脚のものはそれに次ぐ。肉を去り皮を取つて火で乾す。又、山枳鼠といふがあつて、皮は正に相似てゐるが、ただ尾端に兩岐があるだけの別である。又、虎鼠といふがあり、皮はやはり相類するが、ただ味が酸いだけの別がある。又、山豘といふがあり、頗る相似たものだが、皮は兎皮に類し、その色は褐であり、味は甚だ苦い。いづれも用ゐるに堪へない。

○○時珍曰く、猬の頭觜は鼠に、刺毛は豪豬に似たもので、跧り縮んだ形は芡の房、及び栗の房のやうで、攅毛して外を刺す。尿すれば開くものだ。炙轂子に『刺端が兩頭に分れたものを猬といひ、棘針の如きものを蜾といふ』とあつて、蜀圖經の說と同じくない。廣韻には『猬に似て赤色のものを暨居と名く』とある。

○○宗奭曰く、乾猬皮、幷に刺は、刷に作り、帛を治(三)紕するに甚だ佳し、世間には

(三) 紕ハ飾ナリ。刺繡縫ヒ、かがり糸ノ如キカ。

飼養する者もあつて、放ち去つても復た來るものだ。

正誤

恭曰く、猬は極めて獰鈍で、大なるは豘ほど、小なるは瓜ほどのものだ。鵲聲を惡む。故に腹を反し啄を受けてそれを抱き捕らんとするのである。蟜と蚌とのやうなものだ。虎の耳は雞卵も受け入れぬほどの狹いもので、且つ地上から三尺も高い。猬がいかでそれに跳入れやうか。野俗の鄙言が遂に立派な學問の記述に入つて來たもので、甚だ怪しかることだ。

宗奭曰く、唐本草の註に、陶氏の說を擯けたのは理として當然だ。

時珍曰く、按ずるに、淮南子に『猬は虎をして申せしめ、蛇は豹をして止らしむ』とあり、又『鵲屎は猬を中てる』とある。緯書には『火は金を爍す。故に鵲は蝟を啄む』とある。これで觀ると陶氏の說は妄りに言つたものではないのであつて、蘇氏がこれを斥け、寇氏がそれに和したのが正しくない。蜈蚣は龍、蛇を制し、蜒蚰、蛞蝓は蜈蚣を制する。大小、利鈍だけが標準になるものではない、物はただその天を畏れるものである。蜀圖經に所謂虎鼠とは卽ち鼩鼠であつて、やはり猬の中の一種だ。孫愐は『鼩鼠は能く飛んで虎、豹を食ふ』といひ、談藪には『虎が敢て山林

に入らずして草薄に居るのは、木上に貍鼠がゐるからだ。その鼠は虎が通るのを見ると咆い噪いで毛を拔いて投げつける。すると虎は必ず蟲瘡が生じ、潰爛して死に至るものだ』とある。貍と貍とは發音が近い文字だ。猬の能く虎を制すといふことは、これで觀るとますます確なことだ。ここにその誤を正して置く。

皮　【修治】細に剉み、黑く炒つて藥に入れる。【氣味】【苦し、平にして毒なし】甄權曰く、甘し、小毒あり。酒を配合するが良し。桔梗、麥門冬を畏る。

【主治】【五痔、陰蝕で、赤、白、五色の血を下して血汁の止まぬもの、陰腫痛が腰背に引くもの。酒で煮て殺す】（本經）【腹痛、疝積を療ず。灰に燒いて酒で服す】（別錄）【腸風瀉血、痔（四）痛の頭があつて多年瘥えぬものを治するには、炙いて末にし、（五）飮で方寸匕を服す。灰に燒いて鼻に吹けば衄血を止める。甚だ一切の藥力を解す】（藥性）

【附方】舊五、新八。【五痔下血】衍義には『猬皮に穿山甲等分を合せて燒いて性を存し、肉豆蔻一半を入れ、空腹に一錢を熱米飮で服するが妙だ』とある。○外臺では、猬皮を三指ほど、熏黃を棗の大いさほど、熟艾一錢を用ゐ、地に坑を掘つ

（四）大觀ニ病ニ作ル。
（五）大觀ニ飮上ニ白字アリ。

(六) 大觀ニ肘後方ヲ簡要濟衆ニ作ル。

てその中で調和し、取つて痔を熏ずる。口中に烟氣があるまでするが佳し。火氣がやや盡きたとき停め、三日間様子を見て更に熏ずる。三回にして永く痊える。風、冷を犯さぬやうにし、羹、臛を以て養生する。絶對に雞、魚、豬、生のもの、冷えたのものを忌み、二十日後に補の手當を加へる。【腸痔の蟲あるもの】猬皮を燒いて末にし、生油で和して塗る。(六)(肘後方)【腸風下血】白刺の猬皮一箇を銚に入れて爊き焦し、皮を去つて刺を留め、木賊半兩を黒く炒り、末にして二錢づつを熱酒で調へて服す。(楊氏家藏方)【蠱毒下血】猬皮を燒いて末にし、水で方寸匕を服す。毒を吐出するものだ。(千金方)【五色痢疾】猬皮を灰に燒き、二錢を酒で服す。(壽域方)【大腸脱肛】猬皮一斤を燒き、磁石を煆いて五錢、桂心五錢を末にし、二錢づつを米飲で服す。(葉氏摘玄)【鼻を塞いで衄を止める】猬皮一枚を燒いて末にし、半錢を綿で裹んで塞ぐ。(聖惠方)【鼻中の瘜肉】猬皮を炙いて末にし、一日三回、綿で裹んで塞ぐ。(千金)【眼睫の倒刺】蝟皮、棗針、白芷、青黛等分を末にし、左右の日に隨つて鼻中に嗅ぎ、口に冷水を含む。(瑞竹堂方)【反胃吐食】猬皮を灰に燒いて酒で服す。或は煮汁にし、或は五味に淹けて炙いて食ふ。(普濟)【小兒の驚啼】物で刺され

たやうな狀態なるには、猬皮三寸を燒いて末にし、乳房に傅けて兒に飮ます。（子母祕錄）【狂犬の咬傷】蝟皮、頭髮等分を灰に燒いて水で服す。（外臺方）

肉　［氣味］【甘し、平にして毒なし】藏器曰く、これを食ふには骨を去る。誤つて食へば人をして瘦劣して諸節を漸次に小さくする。［主治］【反胃には、黃に炙いて食ふ。また煮汁を飮む。又、瘻に主效がある】（藏器）【炙いて食へば下焦を肥らし、胃氣を理し、人をして能く食せしめる】（孟詵）

脂　［氣味］【肉に同じ】詵曰く、五金、八石を煮、雄黃を伏し、鐵を柔にし得る。［主治］【腸風瀉血】（日華）【溶かして耳中に滴せば聾を治す】（藏器）【禿瘡、疥癬に塗れば蟲を殺す】（時珍）

［附方］新一。【虎爪で傷められたとき】刺猬脂を日日に傅け、香油を內服する。

腦　［主治］【狼瘻】（時珍）

心　肝　［主治］【蟻瘻、蜂瘻、瘰癧、惡瘡には、灰に燒いて一錢を酒で服す】（時珍）

膽 主治 【目に點ければ涙を止める。水に化して痔瘡に塗る】（時珍）【鷹食病を治す】（寇宗奭）

附方 新一。【痘後の風眼】發すると兩瞼が紅爛して眵涙するには、刺胃膽汁を簪で點入する。耐へ切れぬほど痒いが、二三回で癒える。尤も烏鴉膽に勝るものだ。（董炳集驗方）

獸の四　寓類、怪類共八種

獼猴（類證）

和名　べきんざる
學名　Macacus tschiliensis M. Edwards.
科名　さる科

【釋名】　沐猴（史記）　爲猴（說文）　胡孫（格古論）　王孫（柳文）　馬留（倦游錄）　狙

時珍曰く、按ずるに、班固の白虎通に『猴は候であつて、人を見るに食を設け機を伏すれば、高きに憑つて四望す。候ふに善きものなり』とある。猴は好んで面を拭ふことと沐するが如きものだ。故に沐と謂つたのである。而るに後世の者が沐を母と訛り、又、母を獼と訛り、いよいよ訛つていよいよ判らなくなつた。說文には『爲の字は母猴の形を象したもので、卽ち沐猴のことだ。牝ではない』とある。猴は形が胡人に似てゐるから胡孫といふ。莊子には狙といつてある。馬を養ふ者がこれを廐中で畜つて置くと、よく馬病を辟けるので、胡地の俗に馬留と稱へるさうだ。梵書にはこれを摩斯咜といつてある。

（一）杙ハ畜類ヲ繫グ木橛ヲイフ。

集解

○○愼微曰く、獮猴とは數種あるものの總名であつて、禺屬である。色黃にして面赤く、尾の長いものを取つて用ゐる。人家で養つたものは病に主效がない。それは雜物を食つて本性に違ふものだからだ。按ずるに、抱朴子に『猴は八百歲にして變じて猨となり、猨は五百歲にして變じて玃となり、玃は千歲にして變じて蟾蜍となる』とある。



〔獮猴〕

○○時珍曰く、猴は處處の深山にゐる。形狀は人に似たもので、眼は胡人の愁しい時の表情のやうで頰が陷り、嗛がある。嗛は音歉（ケン）食物を藏めて置く處だ。腹には脾がなくして活動して食物を消化する。尻には毛が無くして尾が短く、手、足は人のやうで、やはり能く竪に行く。聲は嚄嚄として欬のやうだ。孕んで五个月にして子を生み、子を生むと多く澗で浴する。その性躁しく動き、物を害ふ。これを畜ふ者は（一）杙上に坐らせて鞭で指揮して動かすのだが、それで十日で馴れるものだ。その類には數種あつて、小さくして尾の短いものは猴、猴に似て髯の多いものは豦、猴に似て大なるものは玃、大きく

して尾が長く、目の赤いものは禺、小さくして尾が長く、鼻の仰ぐものは狖、狖に似て大なるものは果然、狖に似て小さいものは蒙頌、狖に似て善く躍越するものは獑猢、猴に似て臂の長いものは猨、猨に似て金尾のものは狨、猨に似て大いに能く玃、猴を食ふものは獨であつて病に主效がないものだ。いづれもそれぞれの類を以て附記する。

【附錄】玃　音は却（キヤク）である。時珍曰く、玃は老猴であつて、蜀西徼外の山中に生ずる。猴に似て大きく、色は蒼黑だ。能く人のやうに歩行し、善く人の物を攫んで持ち、また善く顧眄するところから玃といふのである。純ら牡のみで牝がないところからまた玃父と名け、また猳玃ともいふ。よく人間の婦女を取つて子を生ませる。又、神異經には『西方には𤝞と名ける獸がある。大いさは驢ほど、形狀は猴のやうで、善く木に攀ぢてゐる。純ら牝のみで牡がなく、羣居するもので、路に要して男子を執へて交接して孕む』とある。これも玃の類だが牝と牡と相反してゐる。

豦　音は據（キヨ）である。按ずるに、郭璞は『(二)建平の山中にゐる。大いさは狗

(二)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)崇吾之山、未詳。
(四)粤ハ今ノ廣東、廣西地方。
(五)巴徼ハ今ノ四川省西部ヲ指ス。

ほど、形狀は猴のやう、黄黑色で髯、鬣が多く、好く頭を奮ひ、石を擧げて人に擲つ』といひ、西山經に『(三)崇吾之山、獸あり。狀は禺の如くにして臂長く、善く投げる。名けて擧父といふ』とあるがこの物だ。

肉 氣味 【酸し、平にして毒なし】 主治 【諸風勞には酒に釀すがいよいよ佳し、脯に作つて食へば久瘧を治す】(愼微) 【これを食へば瘴疫を辟ける】(時珍)

發明 時珍曰く、異物志に『南方では、獼猴頭で鮓を作る』とあり、臨海志には『(四)粤民は喜んで猴頭羹を喫ふ』とあり、又、(五)巴徼地方では猴を捕獲して鹽で貯藏し、火で熏じて食ひ、甚だ美味だといふ。

頭骨 主治 【瘴瘧。湯にして小兒の驚癇・鬼魅寒熱を治す】(愼微)

附方 舊一。 【鬼瘧】進退不定なるには、胡孫頭骨一箇を燒いて硏り、空心に一錢を溫酒で服し、發作時に臨んで再服する。(聖惠方)

手 主治 【小兒の驚癇口禁】(愼微)

屎 主治 【蜘蛛咬に塗る】(愼微) 【小兒の臍風、撮口、及び急驚には、燒いて末にし、生蜜少量を和して灌ぐ】(時珍) 記載は心鏡、及び衛生方にある。

皮　愼微曰く、馬の疫氣を治す。時珍曰く、馬經に『馬廐に母猴を畜へば馬の瘟疫を辟ける』とある。

狨　戎(ジウ)松(ショウ)の二音がある。　(拾遺)

和名　ちべつとざる？　(木村重孝定)
學名　Mncacus tibctanus, David.?
科名　さる科

【釋名】 **猱**　難逃の切(ダウ)と發音する。時珍曰く、狨は毛が柔く長く、絨のやうで、藉き物にもなり、績いで織物にもなるところから狨といふのであつて、猱の字はやはり柔に從ふ。或は、西戎に生ずるから戎に從ふのだともいふ。猱の古文は夒と書いた象形である。現に長毛狗を猱といふはこの形象から取意したものだ。


〔狨〕

【集解】 藏器曰く、狨は(一)山南の山谷中に生ずる。猴に似て大きく、毛は長

(一)山南ハ唐ノ十道ノ一、草部隰草類漏盧ノ註ヲ見ヨ。

(一)川峡ハ巫山峡以西、今ノ四川省ノ地ナリ。

(二)猨、和名てながざる 學名 Hylobates lar, Linne.

(四)引氣ハ深呼吸。

(五)通臂ハ臂ニ關節ナキナリ。

くして黄赤色だ。世人はその皮で鞍褥を作る。

時珍曰く、楊億の談苑に『狨は(一)川峡の深山中に産し、その形狀、大小は猨に類し、尾は長くして金色をなす。俗に金線狨と名ける。輕捷にして善く木に攀ぢ、甚だその尾を愛惜するもので、人が藥矢で射て毒に中ると自らその尾を嚙む』とある。宋時代には、文、武官の三品以上の階級に狨座を用ゐることを許した。この獸の皮で褥に作つたものである。



〔猨〕

附録 (二)猨 時珍曰く、猨は善く援引するものだから猨といふ。俗に猿と書く。川、廣の深山中に産する。猴に似て長大なもので、その臂は甚だ長く、能く(四)引氣するところから壽命の長いものだ。或は、この物は(五)通臂だからかくいふのだともいふが、それは誤だ。臂骨で作つた笛は甚だ淸亮な

(六)獨、和名まんどりる
學名 Cynocephalus maimon, Linne.
(七)獨夫トハ暴戾ニ

ものである。その色には青、白、玄、黃、緋の數種あり、その性は靜にして仁慈なもので、好んで果實を食ふ。棲むには多くは林木にゐるもので、能く數丈を跳ね越える。地上に置くと泄瀉して死ぬものだが、ただ附子汁を飮ませるとそれを免れる。その行動は多く群をなし、鳴くときは善く啼き、一鳴三聲して凄切なること人の肝、脾に入る。范氏の桂海志に『猨には金絲のもの、玉面のもの、黑色、及び身、面倶に黑きものがあり、或は、黃なるが牡、黑なるが牝で、牝は能く嘯くが牡は嘯けぬともいふ』とあり、王濟の日詢記には『廣地方の者の言に、猨は初生には毛が黑で雄であるが、老いると黃に變じ、勢囊が潰れ去つて雄から雌に轉變し、黑きものと交つて孕む。それが數百歲にして黃がまた白に變ずるものだといふ』とある。予（時珍）が按ずるに、この說は列子の『貐は變化して猨となる』といひ、莊子の『獱、狙は猨を以て雌となす』といつたことと相合する。必しも妄說ではないかも知れぬ。

(六)**獨**　時珍曰く、獨は猨に似て大きく、その性獨なるもので、一鳴して止み、能く猨、猴を食ふ。故に諺に『獨が一鳴すると猨が散ずる』といふ。(七)獨夫なる言葉は蓋しこれから出たものだらう。或は、これは黃腰のことだともいふ。また虎の條

シテ全ク民ト背ク君主ノ貶稱ナリ。

(二)木村(重)曰ク、和名 てんぐをながざる 學名 Nasalis larvatus, Geoffr.

下を見よ。

肉 及び **血** 【氣味】 缺 【主治】 【これを食へば五痔病を調へる。久しくその皮に坐するも良し】(藏器)

脂 【主治】 【瘡疥にはこれを塗るが妙である】(同上)

(二)果然 (拾遺)

和名 ながざる
學名 Cercopithecus aethiope, Linne.
科名 さる科



[果然]

【釋名】 **禺** 音は遇(グウ)である。**狖** 音は又(イウ)である。或は貁(いう)、䶂(いう)とも書く。**蜼** 狖(イツ)壘(ルキ)の二音がある。或は猫(ねこ)とも書く。**仙猴** 時珍曰く、郭璞は『果然は自らその名を呼ぶ』といひ、羅願は『人がその一頭を捕へると全群擧(こぞ)つて啼いてそれについて來る。殺されるとも去らない。これを果然といふは來ることが必ず確(たし)かだといふわけだ。大なる

を然といひ、禺といひ、小なるを狖といひ、蜼といふ』といつた。南方の地では仙猴と名け、俗に猓猿と書く。

集解　藏器曰く、按ずるに、南州異物志に『交州に、果然獸といふその名を自ら呼ぶものがある。形狀は猨より大きく、その體は三尺に過ぎないが、尾の長さは頭を過ぎ、鼻孔は天に向ふ。雨が降ると木の上に挂つて尾で鼻孔を塞ぐ。その毛は長く柔く細く滑かく、白質に黑文があり、蒼鴨の脇邊の斑毛のやうな狀態のもので、これを集めて裘、褥に作ると甚だ温暖だ』とある。爾雅に「卬鼻にして長尾」とあるはこのものだ』とある。

時珍曰く、果然は(二)仁獸である。西南の諸山中に產する。樹上に棲み、形狀は猨のやうで、面は白く頰は黑く、髯多くして毛采は斑斕たるものだ。尾は身よりも長く、その末に岐があり、雨が降ると岐で鼻を塞ぐ。羣行するもので、老者が前行し少者が後に隨ひ、食物は互に相讓り、平常相愛し、生前は家庭的に相聚り、死亡すればその喪に會するやうに集る。柳子が所謂、仁讓、孝慈だとはこのことをいつたのだ。古代には蜼を畫いて宗彝といつた。やはりこの物の孝讓にして智あることを取つた

(二) 仁獸、動物ヲ餌トセヌコト。

(三) 騃ハ判斷力ノ鈍キヲイフ。

(四) 木村(重)曰ク、蒙頌、和名ねこざる 學名 (Galeopithecus volans, Pallas.

(五) 木村(重)曰ク、獑猢、和名ちべつとながざる 學名 Semnopithecus roxellanae, M. Edwards.

のである。或は、猶豫の猶は犹のことだともいふ。その性疑多く、人を見ると樹に登り、不規則に上下するので、甚しきは奔觸して頭を破り、脛を折ることもある。故に世間では心の疑つて決せぬものに比較して、俗に(三)騃愚なるを癡獨といふ。

附錄 (四)**蒙頌** 時珍曰く、蒙頌、一名蒙貴といふは、蜼のまた更に小さいもので、紫黑色だ。交趾に産する。畜つて鼠を捕らせると、猫、貍に勝る。

(五)**獑猢** 音は慚胡(ザンコ)である。許氏の説文には蹔蝴と書いてある。これは蝯、蜼の屬であつて、身は黑く、腰は帶のやうに白く、手に長毛があり、白色で握版の形狀に似てゐる。蜀地志に『獑猢は猴に似て甚だ捷い。樹上に在つて歘然として騰躍することと飛鳥の如きものだ』とある。

肉 氣味 【鹹し、平にして毒なし】 主治 【瘴瘧寒熱には、五味と共に臛に煮て食ひ、併にその皮に坐して效を取る】(藏器)

發明 時珍曰く、按ずるに、鍾毓の果然賦に『猴に似、猨に象て、顙黑く身靑く、佳品に非ざれども、ただ皮を珍とすべし』とあるが、呂氏春秋には『肉の美なるものは玃、猱の炙』とある。やはり性各々不同があるのかも知れぬ。

猩猩 本は狌と書いた。音は生(セイ)である。（綱目）

和名　しやうじやう
學名　Simia satyrus, Linné.
科名　ひとにざる科

釋名　時珍曰く、猩猩は能く言ひ、未來を知る。惺惺といふやうな意味である。

集解　時珍曰く、猩猩に就ては、爾雅、逸周書以下數十說あるが、大體を綜括していへば、(一)哀牢夷、及び(二)交趾、(三)封溪縣の山谷中に生じ、形狀は狗、及び獼猴の如く、毛は黃にして猨の如く、耳は白くして豕の如く、顏は人の如く、足も人の如く、髮長く、頭、顏は端正で、聲は小兒の啼聲のやうでもあり、犬の吠えるやうでもあり、群をなして伏して行くものといふことになる。阮汧は『封溪の俚人は酒、及び草履を道側に置く。すると猩猩がそれを見て、その人の祖先の姓名を呼んで罵つて去り、少頃してからまた來て相與にその酒を嘗め履を穿き、その間に擒へられる。それを檻に入れて飼養し、いよいよそれを烹て食はうとすると、彼等仲間で肥えたものを差出し、泣いてそれを送る。西胡ではその血を取つて(四)毛罽を

(一) 哀牢夷ハ石部水精ノ註ヲ見ヨ。
(二) 交趾ハ草部芳草類山薑ノ註ヲ見ヨ。
(三) 封溪縣、未詳。
(四) 毛罽ハ毛織物。

染めるが、齧まない。血を刺し取るには必ず箠つてその數を問ひ、一斗に至つて止む』といつた。又按ずるに、禮記にも『猩猩は能く言ふ』とあるが、郭義恭の廣志には『猩猩は言へない』といひ、山海經には『猩猩は能く人言を知る』とある。三說不同であるが、大體に於に猩猩は畧ぼ人の形に似た猨猴の類のものである。たとひ能く言ふにしても鸚鵡などのやうには行かぬので、また必ずしも盡くが阮氏の話のやうなものではないであらう。



〔猩　猩〕

又、羅願の爾雅翼には『古の猩猩に關する說明は、豕の如く、狗の如く、猴の如しといふのだが、今の猩猩に關する說明では狒狒と甚しい差異がない。婦人が髮を被つて袒足になつたやうで、膝がなく、群行し、人に遇ふと手でその形を掩ふ。これを野人といふ』とある。羅氏の說に據れば、後世の所謂、野人、野女、野婆といふものに似てゐる。これは同一物ではないかと思ふ。

(五)日南ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

(六)南丹州ハ山獺ノ註ヲ見ヨ。

附錄　**野女**　唐蒙の博物志に『(五)日南に野女といふがあつて、群行して夫を覓める。その形狀は、白色にして赤身に衣襦がない』とあり、周密の齊東野語には『野婆は(六)南丹州に產する。黃髮、椎髻、裸形、跣足でさながら老婆そのまゝだ。雌のみの群で牡がなく、山谷を上下すること飛猱の如く、腰から下は皮があつて膝を蓋ひ、每に男子に遇ふと必ず負ひ去つて交接を求める。嘗て勇敢な男に殺されたことがあつて、死んでから手で腰間を押へ隱してゐるのを剖いて見ると、一寸四角ばかりの印があつた。瑩として蒼玉のやうで、符篆に類似した文字があつた』とある。

時珍曰く、この二說と前項の阮氏、羅氏の說とを合せて考へると、野女とは猩猩そのものらしい。又、雄鼠の印には符篆のやうな文があり、治鳥の腋下には鏡印があるところから見ると、野婆の印篆も不思議はない。この物にも功用は有るべき筈だが、ただ一般に知られてない。

肉　氣味　【甘く鹹し、溫にして毒なし】　主治　【これを食へば味せず、飢ゑず、人をして善く走らしめ、窮年にも厭ふことなく、以て辟穀し得る】(時珍)　記

載は逸周書、山海經、水經にある。

【發明】 時珍曰く、逸周書に『猩猩の肉を食へば人をして味せざらしめる』とあつて、猩猩といつた意味も判る。古代には珍味としたものだ。故に荀子は『猩猩は能く言笑し、二足にして毛なし。而るに人はその羹を啜り、その肉を食ふ』といひ、呂氏春秋に『肉の美なるものは猩猩の唇、獾獾の炙』とあるがそれである。

狒狒 音は費（ヒ）である。（拾遺）

和名 ひひ
學名 Papio (Cynocephalus) hamadryas, L.
科名 さる科

【釋名】 𥝇𥝇 狒と同じ。また𥝇とも書く。**梟羊**（山海經） **野人**（方輿志） **人熊**

時珍曰く、爾雅には狒と書き、說文には𥝇と書いて冐に從ひ囟に從ひ禸に從ふの象形として、許愼は『北人は呼んで土螻となす。今人は呼んで人熊となす』といつた。按ずるに、郭璞の謂つた山都、卽ち狒狒であつて、稍や似て差別があるか、それとも同名異物かと思ふ。

【集解】 藏器曰く、狒狒は西南夷に產する。爾雅に『狒狒は人の如く、髮を被

り、走ること迅く、人を食ふ』とあり、山海經に『梟羊は、面は人で唇が長く、身は黑くして毛があり、踵を反して人を見ては笑ふ。笑ふときは上唇が目を掩ふ』とあり、郭璞は『交廣、及び(一)南康郡の山中にやはりこの物がゐる。大なるは長さ一丈餘あり、俗に山都と呼ぶ』といつた。宋の(二)建武中、獠人が雌雄二頭を進獻した。帝は土人丁鑾なるものに問はれると、鑾は『その面は人に似て紅赤色、毛は獼猴に似て尾あり、人の言葉を能くして鳥の聲の如く、善く生死を知り、力は千鈞を負ひ、踵で反つて膝がなく、睡るときは物に倚る。人を獲ると先づ笑つてから後に食ふ。獵人は竹筒に臂を貫いてこれを誘ひ、その笑ふ時を候つて手を抽き出して錐でその唇を額に釘し著け、(三)死するを候つて取るのである。髮は極めて長く、頭髮に作れる。血は靴、及び緋を染める材料になる。これを飲めば人をして鬼を見せしめるものだ』と答へた。帝はそこで畫工に命じてそれを描かせたといふ。

時珍曰く、按ずるに、方輿志に『狒狒は西蜀、及び(四)處州の山中にもゐて、人熊と呼ぶ。その地ではやはりその掌を食ひ、その皮を剝ぐ。(五)閩中の(六)沙縣の幼山にもゐる。長さ一丈餘、人に逢ふと笑ふものだ。山大人と呼び、或は野人、及び山魈

(一)南康郡ハ石部礜石ノ註ヲ見ヨ。
(二)大觀ニ建武ヲ孝建ニ作ル。
(三)大觀ニ額下ニ任其奔馳ノ四字アリ。
(四)處州ハ土部白瓷器註ヲ見ヨ。
(五)閩中ハ福建省。
(六)沙縣ハ唐ニ置ク。今ハ福建省建安道ニ屬ス。

といふ』とあり、又、鄧顯明の南康記には『山都は、形狀は馬來人種のやうで全身に毛が生え、人を見ると目を閉ぢ口を開いて笑ふやうに見える。好んで深澗中に棲み、石を翻して蟹を漁つて食ふ』とある。予（時珍）が按ずるに、鄧氏のいふものは北山經の山𤟤、述異記の山都、永嘉記の山鬼、神異經の山𤢖、玄中記の山精、海錄雜事の山丈、文字指歸の旱魃、搜神記の治鳥と倶に相類するところの山怪である。ここにいづれも附記して考證に備へる。


〔狒　狒〕

附錄　**山都**　時珍曰く、任昉の述異記に『南康に山都といふ神がゐる。形は人の如く、長さ二丈餘、色黑く、目赤く、髮黃にして、深山の樹中に高さ三尺餘の鳥卵のやうな狀態の窠を作る。その內部は甚だ光彩があり、體質の輕虛なもので、鳥毛で褥を作り、二枚連つてゐて、上は雄、下は雌である。能く變化して形を隱す

ので、見ることが罕だ』とある。その狀態から考へると木客、山𤢖の類のもののやうだ。

山𤟤　時珍曰く、北山經に『山𤟤は、形は犬のやう面は人のやうで、善く物を投げる。人を見ると笑ひ、その行くことは風の如きもので、これが現れると天下に大風がある』とある。

木客　又曰く、幽明錄に『南方の山中に生ずる。頭面、語言は全く人間に異らないが、ただ手、脚の爪が鈎のやうに利い。絕岩の間に棲み、死ねばやはり殯殮する。能く人間と交易するが、その形を見せない』とある。現に南方に鬼市といふがあるが、やはりこれに類するものだ。又、木客鳥といふがあるが、それは禽部に記載した。

山𤢖　又曰く、東方朔の神異經に『西方の深山に長さ一丈餘の人がある。袒身で、蝦、蟹を捕り、人間の住居へ來て火で炙いて食ふ。名を山𤢖といふ。その名を自ら呼ぶものだ。人がそれを犯し觸れば寒熱を發する。蓋し鬼魅である。所在にもゐるものだ。ただ爆竹の熚ける音を畏れる』とある。

(七) 東昌縣ハ今ノ山東省聊城縣ソノ舊治ナリ。

(八) 安國縣ハ今ノ河北省保定道ニ屬ス。

劉義慶の幽明錄には『(七)東昌縣の山岩の間に、人のやうで長さ四五尺、裸身で髮を被り、髮の長さ五六寸の物がゐる。能く呼び嘯いて聲を出すが、その形を現はさない。每に澗の中で蝦、蟹を取り、火のある處へ來て炙いて食ふ』とある。

永嘉記には『(八)安國縣に山鬼といふがある。形は人のやうで、脚が一本で長さ一尺許りのものだ。好く伐つた木や人の鹽を盜んで石蟹を炙いて食ふ。能く人をして病に罹らせ、また住居を焚かれるので、その地の者は敢てそれを犯さない』とある。

玄中記には『山精は人のやうなもので、足が一本で長さ三四尺、山蟹を食物とし、夜出て晝伏す。千歲の蟾蜍は能くこれを食ふ』とある。

抱朴子には『山精は、形は小兒の如く、獨足で後に向ふ。夜喜んで人を犯す。その名を魃といふ。その名を呼ばれると人を犯せないものだ』とある。

白澤圖には『山の精は、形狀は鼓の如くして色赤く、一足である。名を夔といひ、また揮文ともいふ。これを呼べば虎、豹を取らせ得る』とある。

海錄雜事には『嶺南に一本足で踵が反り、手、足みな三本指のものがゐる。雄を

山丈といひ、雌を山姑といふ。能く夜中人の門を叩いて物を貰ひに來る』とある。
神異記には『南方に魃といふがゐる。一名旱母といひ、長さは二三尺、裸形のもので、目は頂上に在る。風のやうに行走するものだ。これが現れると大旱するが、これに遇つたとき捕へて溷の中へ投げ込めば旱が除ける』とある。
文字指歸には『旱魃は山鬼であつて、これが棲む處には天が雨を降らさぬ。女魃は人家に入つて能く物を竊んで戸外に出し、旱魃は人家に入つて能く物を竊んで歸る』とある。
予（時珍）が謹で按ずるに、諸說は少しの差異はあるが、大體に於て怪類のものだ。今俗に所謂獨脚鬼がそのものである。近來處處にこれがゐて、能く形を隱して人家に入り、勝手に淫亂を振舞つて人に疾を起させ、火を放ち、物を竊み、人家に對して非常な害をなす。そこで法術でも驅除し得ず、醫藥でも退治し得ず。五通神、七郎諸神などと呼んで祀るといふ有樣だが、蓋し其の本原の實體がかやうな物だといふことが知られなかつたのだ。此にかく備に記載したわけは、ただ博く物を知るためのみではないのであつて、右の諸說中に、その名を呼べば害がないといひ、千歲

の蟾蜍は能くこれを食ふといつてあるは、治法の意味ではないかとも思はれ、類に觸れて研究して見たならば、必ず能く制し得るものがあるだらふと思ふからである。又、治鳥もやはりこの類のものだが、禽部に記載した。精怪の屬は甚だ夥しく、いづれも人に害をなすものだ。ただ白澤圖、玄中記、抱朴子、酉陽雜俎の諸書の記載に大抵悉してあるから、日常起居に注意すべきことだ。しかし、正人、君子は德が妖に勝つわけだから自ら敢て近かない。

肉【氣味】【毒なし】【主治】【脯にし、脂を連ねて薄く割いて炙き、熱して人の癬疥に貼る。能く蟲を引いて出す。頻に易へて瘥を取る】(藏器)

罔兩（綱目）

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

【集解】時珍曰く、罔兩は一に魍魎と書き、また方良と書く。周禮に『方相氏は戈を執つて壙に入り、以て方良を驅る』とあるそのものだ。罔兩は好んで亡者の肝を食ふものだから驅除したのである。その性は虎、柏を畏れるところから、墓上

には石虎を樹て柏を植ゑる。國語に『木石の怪は夔、罔兩、水石の怪は龍・罔象』とあるはこの物だ。述異記には『秦の時に(一)陳倉の人が獵に出て、豕のやう、羊のやうな獸を得た。二童子に逢つて訪ねて見ると、それは弗述といひ、また媼と名け、地下に在つて死人の腦を食ふものだ。しかしただ柏をその首に挿めば死ぬといつた』とある、卽ち罔兩である。藥石と關係はないことだが、死人には關係するから此に錄して置く。方相といふものには四目があり、二目のものをば魌といふ。いづれも鬼物であつて、古代には人の想像でさまざまの姿のものにしてあつた。昔、費長房は李娥藥といふを識つてゐて、その丸には方相腦を用ゐたといふから、その物はやはり邪を辟ける方藥に入れたのであらうが、その方法は傳を失した。

(一) 陳倉ハ草部山草類赤箭天麻ノ註ヲ見ヨ。

彭侯（綱目）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【集解】時珍曰く、按ずるに、白澤圖に『木の精を名けて彭侯といふ。形狀は黑狗のやうで尾がない。烹て食へる。千歳の木には賈胐といふ精がある。形狀は豚

のやうで、これを食へば味が狗のやうだ』とあり、捜神記に『吳の時、敬叔が大樟樹を伐ると、血が出て、中に人面、狗身の物がゐた。敬叔は「これは彭侯と名けるものだ」といつた。烹て食つたが味は狗のやうだつた』とある。

肉 【氣味】【甘く酸し、溫にして毒なし】【主治】【これを食へば邪を辟け、人の志をして壯ならしめる】(白澤)

封（綱目）

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

【集解】時珍曰く、按ずるに、江隣幾雜志に『徐積は(一)廬州の河の邊で手に指がなく、血がない一小兒を得たが、懼れて埋めて了つた。これは白澤圖に所謂封といふもので、これを食へば多力になるといふその物だ』とある。田九成の西湖志には『董表儀が屋を撤いて土を掘つたとき一肉塊を得た。術士は、それは太歲だといつたが、棄てても一向に害がなかつた』とある。又、山海經には、(二)敦隅の山、及び開明の南北、東南海外にいづれも視肉といふがあつて、郭璞の註に『聚肉であつ

(一) 廬州ハ草部芳草類白芷ノ註ヲ見ヨ。
(二) 敦隅之山、未[illegible]。

て、形は牛肝の如く、兩目があり、これを食つても盡きることなく、尋で復た舊(つい)のやうに生ずる』とある。いづれも封の類であつて食へるものだが、ただ一般に知られないだけである。又、海中にある一種の土肉なるものは、正黑にして長さ五寸、大いさ小兒の臂ほどのもので、腹があつて口、目がなく、足が三十あり、炙いて食へるといふ。これはまた蟲魚の屬にして封に類するものだ。

本草綱目獸部第五十一卷下　終

本草綱目人部

第五十二卷

本草綱目人部目錄第五十二卷

李時珍曰く、神農本草には人の物はただ髮髲の一種だけであつて、そこに人を物と區別される意味が現はれてあつたのだ。後世方伎の士が、骨、肉、膽、血、みな藥となると稱するに至つては、まことに殘忍極まることである。今この部では、凡そ人が用ゐた經驗があり、いづれも遺てるわけに行かぬもので、ただ人道に害なきものだけを詳述し、その慘忍、邪穢なるものは略して各條の下から切り棄て、通計三十五種とし、また分類をも加へぬことにした。舊本の二十五種から、本書では五種を服器部に移し入れ、玉石部から一種を移し入れた。

附註

神農本草經一種　梁の陶弘景註。
名醫別錄五種　梁の陶弘景註。
唐本草一種　唐の蘇恭。
本草拾遺八種　唐の陳藏器。
日華本草二種　宋人大明。
開寶本草一種　宋の馬志。
嘉祐本草四種　宋の掌禹錫。
證類本草一種　宋の唐愼微。
本草蒙筌一種　明の陳嘉謨。
本草綱目一十三種　明の李時珍。

魏吳普本草　李當之藥錄　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對　孫思邈千金
甄權藥性　唐孟詵食療　蜀韓保昇重註　宋寇宗奭衍義　元李杲法象
王好古湯液　朱震亨補遺　明汪機會編

人の一　凡三十五種　附二條

髮髲 本經　亂髮 別錄　頭垢 別錄　耳塞 日華
膝垢 綱目　爪甲 綱目　牙齒 日華　人屎 別錄
小兒胎屎 綱目　人尿 別錄　溺白垽 唐本 即ち人中白。
秋石 蒙筌　淋石 嘉祐　癖石 綱目　乳汁 別錄
婦人月水 嘉祐　人血 拾遺　人精 嘉祐　口津唾 綱目
齒垽 嘉祐　人汗 綱目　眼淚 綱目　人氣 綱目
人魄 綱目　髭鬚 證類　陰毛 拾遺　人骨 拾遺
天靈蓋 開寶　人胞 拾遺　胞衣水 拾遺　初生臍帶 拾遺
人勢 綱目　人膽 拾遺　人肉 拾遺　木乃伊 綱目
方民 綱目　人傀 綱目

右附方　舊六十七　新二百二十

人の一　凡三十五種　附二條

髮髲　音は被(ヒ)である　(本經上品)

和名　そりかみ
學名　Shaved hair

釋名　**鬆**　音は總(ソウ)である。(甄權)　**髢**　音は剃(テイ)である。また鬄とも書く。李當之曰く、髮髲とは童男の髮である。

弘景曰く、髮髲とは、正確には何物を指したのか判らない。髲の字は書籍の記載にない文字で、或は蒜の字にも書く。今は一般に斑髮を蒜髮と呼び、書家はまた亂髮を鬈とも呼ぶ。恐らく鬈のことらしい。童男といつた理由は明確ではないやうだ。

恭曰く、ここに髮髲といふは根のことだ。年久しいものを用ゐるが神效がある。字書に髲の字はない。卽ち髮の字の誤だ。既に亂髮(一)を擧げてあるのだから、髮髲で病を去るとは陳久なるものを用ゐるといふことで、船茹、敗天(二)翁、蒲席の場合の如き、いづれもこの例である。甄立言の本草に鬈と書いてあるが、鬈もやはり髮

(一)大觀ニ髮下ニ及頭垢與鬧髮叩矣、又頭垢功劣於髮髲猶ノ十七字アリ。
(二)大觀ニ翁ヲ公ニ作ル。

である。髮とは髮の美なる貌をいふのであつて、聲はあるが質はない。陶氏の說は非である。

宗奭曰く、髮髲、亂髮は自ら二種に別れるもので、髮髲は味苦い。即ち陳舊にして年歲を經たものだ。橘皮、半夏を陳きものを取つて藥に入れるが更に良いといふ意味のやうなものである。今は一般にこれを頭髮といふ。その亂髮の條中には髮を用ゐるといふ意味がない事實から見て、二者の意味は甚だ明だ。詮索の必要は全然ない。

時珍曰く、髮髲とは(三)剪髢して下した髮である。亂髮とは梳櫛して下した髮である。按ずるに、許愼の說文に『大人では(四)髡といひ、小兒では髢といふ』とあり、顧野王の玉篇に『髲は鬄なり、(五)鬄髮の髲なり』とあつて、二說に甚だ明だ。古代には刑人の鬄髮を髻に被せたものだ。故にこれを髲といつたのであつて、周禮に『王后・夫人の服に、髮髢を以て首飾となすものあり』とはこのことである。又、詩には『(六)鬒髮雲の如く、髢を屑とせず』とある。甄權が所謂、髮鬆。雷斅が所謂、二十の男子の頂心を剪下した髮といふがその正確を得たものだ　李當之がこれを童男の髮とし、陶弘景がこれを鬈髮とし、蘇恭がこれを髮根とし、宗奭がこれを陳髮と

(三) 剪ハハサム、髢ハソルナリ。
(四) 髡ハ髮ヲ去ルコトナリ。
(五) 鬄ハ剃リ取ツタ髮ナリ。
(六) 鬒ハクロカミ。

したのはいづれも誤である。且つ顧野王は蘇恭の前の時代に生存した人だ。恭が玉篇に髲の字のあることを知らなかつたのは攷究の粗漏である。毛萇の詩傳に『被の僮僮たる』とある被は首飾のことで、髪を編んで作るものだ。卽ちこの髲のことである。

【修治】斅曰く、髲髪とは、男子の年二十までの疾患なくして顔貌紅白なる者の頂心から剪下したもののことだ。丸藥、膏中に入れて用ゐる。先づ苦參水に一夜浸し、漉し出して瓶子に入れ、火で赤く煆き、放冷して研つて用ゐる。

時珍曰く、今は一般に、皂莢水で洗淨して晒し乾し、罐に入れ固濟して煆いて性を存して用ゐるが、やはり良し。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】別錄に曰く。小寒なり。【主治】【五癃關格不通。小便、水道を利し、小兒の（七）驚、大人の痓を療ず。仍て自ら神化に還す】（本經）【雞子黃と合せ煎じて消かして水にし、小兒の驚熱、百病を療ず】（別錄）【血悶、血運、金瘡傷風の血痢を止める。藥に入れるには、燒いて性を存して用ゐる。煎膏は肉を長じ、瘀血を消す】（大明）

（七）大觀ニ驚ヲ癇ニ作ル。

【發明】韓保昇曰く、本經に『自ら神化に還す』とある。李當之は『神化の事は未だ別方に見えぬ』といつたが、按ずるに、異苑に『人髮は變じて鱓魚となる』とあるから、神化の不思議とはかやうなことをいふのであらう。

又、藏器曰く、生人の髮を果樹上に掛ければ、烏鳥が敢て來つてその實を食はない。又、人が逃走したとき、その髮を取つて緯車上に置いて逆轉されると、迷亂してその行くべき方向が判らなくなる。これ等はいづれも神化である。

時珍曰く、髮は血の餘であつて、土中に千年埋めても朽ちず、枯れるまで煎じてもまた液があつて出る。誤つて食つて腹に入れば變じて癥蟲となり、煆いて調製して服餌すれば髮が白くならなくなる。これは正に神化の應驗だ。

【附方】舊二、新四。【石淋の痛澀】髮髲を燒いて性を存して研末し、一錢づつを井水で服す。(肘後方)【傷寒黃病】髮髲を燒いて研り、一日三回、水で一寸匕を服す。(傷寒類要)【胎衣の下らぬもの】亂髮、頭髮を口中に撩結する。(眞人方)【小兒の客忤】生人を見たために起るものには、來た人の顖上の髮十莖を取り、兒の衣帶少量を斷ち取り、合せて燒いて研末し、乳で和して兒に飮ませれば癒える。(千金方)【急肚疼

病】本人の頭髮三十根を燒いて酒で服し、同時に水で芥子末を調へて臍中を封ずる。雨のやうに大汗して平安になる。(談埜翁方)【瘭癌惡瘡】生髮灰二錢を米湯で服し、外部には生髮灰三分、皂莢刺灰二分、白芨一分を末にして乾して摻る。或は豬膽汁で調へる。(直指方)

亂髮(別錄)

和名 くしけづりがみ
學名 Matted hair

釋名 **血餘**(綱目) **人退** 時珍曰く、頭上を髮といひ、足の少陰、陽明に屬する。耳前を鬢といひ、手、足の少陽に屬する。目上を眉といひ、手、足の陽明に屬する。脣上を髭といひ、手の陽明に屬する。頦下を鬚といひ、足の少陰、陽明に屬する。兩頰を髯といひ、足の少陽に屬する。その經の氣血が盛なれば美にして長く、氣多く血少ければ美にして短く、氣少く血多ければ少くして惡く、氣血倶に少ければその部分には生えない。氣血倶に熱すれば黃にして赤くなり、氣血倶に衰へれば白くして落ちる。素問に『腎の華は髮に在り』とあり、王氷の註に『腎は髓を

（二）宦人ハ去勢セル人。

主り、腦は髀の海であり、髮は腦の華である。腦が減ずれば髮が素くなる』とあり、滑壽の註に『水は高原に出る。故に腎の華は髮に在る。髮は血の餘であつて、血は水の類である』とある。今の方家が髮を血餘と呼ぶは蓋しこの意味に本くのだ。龍木論にはこれを人退といつてある。葉世傑の草木子には『精の榮は以て鬚となり、氣の榮は以て眉となり、血の榮は以て髮となる』とあり、類苑には『髮は心に屬し、火氣を禀けて上に生ずる。鬚は腎に屬し、水氣を禀けて下に生ずる。眉は肝に屬し、木氣を禀けて側に生ずる。故に男子は腎氣が外に行つて鬚があり、女子、(二)宦人は鬚がなくして眉、鬢に異りがない』とある。說明は同じくないにしても、やはりそれぞれ道理はあるが、終局は經に因つて分類する方法の的確なるに及ばない。劉安君は『髮を落ちぬやうにするには、頭を滿千遍梳る』といひ、又『髮は多く梳るがよく、齒は數〻叩くがよし』といつた。いづれも精を攝し、腦を益するの理である。又、崑齋吳玉は白髮の辯を作つて『髮の白くなるには遲早、老少はあるが、いづれも壽命の長短とは關係なく、遺傳と環境の感應とに由るだけだ』といひ、古今の說を援證してあつて、やはり自ら道理がある。しかし文字が多いから此には採錄せぬ。

（二）大觀ニ吹之ヲ吹内ニ作ル。

【氣味】【苦し、微溫にして毒なし】【主治】【欬嗽、五淋、大、小便不通、小兒の驚癇。血を止める。鼻衄には、灰に燒いて吹（二）けば立ろに已む】（別錄）【燒灰は、轉胞、小便不通、赤白痢、哽噎、癰腫、狐尿刺、尸疰、疔腫、骨疽、雜瘡を療ず】（蘇恭）【瘀血を消し、陰を補するに甚だ捷だ】（震亨）

【發明】時珍曰く、髮は血の餘である。故に能く血病を治し、陰を補し、驚癇を療じ、心竅の血を去るのである。劉安君は、己の髮と頭垢等分を合せて燒いて性を存し、豆ほどの三丸づつを服して還精丹と名け、頭を白くならなくするといつた。又、老唐方でも、自己の亂髮を洗淨し、一兩づつに川椒五十粒を入れて泥固し、瓶に入れて黑く煆いて研末し、空心に一錢づつを酒で服し、髮を長く黑くするといつた。これはいづれも補陰の效驗であつて、椒を用ゐたのはその物の下に達する力を利用しただけである。

弘景曰く、俗間で嫗母が小兒のために作る雞子煎は、その父の頭を梳いた亂髮を雞子黃に雜へて熬り、良久して出る汁を兒に與へて服ませるのであつて、痰熱を去り、百病を療ずる。

附方　舊十六、新二十四。【孩子の熱瘡】亂髮一團梨子ほどの量と雞子黃十箇を煮熟し、共に銚中に入れて熬り、甚しく乾いて始めて液が出るやうにし、やがて盞中に入れ、液が盡きるを度とする。それを瘡上に傅けて苦參粉を粉すが神妙である。詳細は雞子黃の條下を見よ。(劉禹錫傳信方)【小兒の斑疹】髮灰三錢を飲で服す。(子母祕錄)【小兒の斷臍】卽ち清油で髮灰を調へて傅ける。傷めてはならぬ。水臍で濕ふて乾かぬにも傅ける。【小兒の重舌】死せんとするには、亂髮灰半錢を調へて舌下に傅け、住めずに用ゐる。(簡要濟衆)【小兒の燕口】兩角に瘡を生じたるには、髮灰三錢を飮汁で服す。(子母祕錄)【小兒の吻瘡】髮灰を豬脂で和して塗る。(聖惠方)【小兒の驚啼】亂油髮を燒いて研り、乳汁、或は酒で少量を服するが良し。(千金)【鼻血眩冒】死せんとするには、亂髮を燒いて研り、水で方寸匕を服し、同時に吹く。(梅師方)【鼻血の止まぬもの】血餘の燒灰を吹く。立ろに止んで永く發らない。男には母の髮を用ゐ、女には父の髮を用ゐる。○聖惠では、亂髮灰一錢、人中白五分、麝香少量を末にし、鼻に嗃ぐ。三奇散と名ける。【肺疽吐血】髮灰一錢を米醋二合、白湯一盞で調へて服す。(三因方)【欬嗽に血あるもの】小兒の胎髮灰に麝香少量を入

れて酒で服す。毎箇を一服とし、男は女のものを用ゐ、女は男のものを用ゐる。（朱氏集驗）【齒縫出血】頭髮を切つて銚內に入れて炒つて性を存し、研つて摻る。（華佗中藏經）【肌膚の出血】胎髮の燒灰を傅ければ止む。或は鼻中に吹入れる。（證治要訣）【諸竅の出血】頭髮、敗棕、陳蓮蓬をいづれも灰に燒き、等分を三錢づつ木香湯で服す。（聖惠方）【上、下の諸血】或は吐血し、或は心衄し、或は內崩し、或は舌上に出血して簪の孔の如くなるもの、或は鼻衄、或は小便出血には、いづれも亂髮灰方寸匕を水で服す。一日三服。（聖濟）【故なくして遺血するもの】亂髮、及び爪甲を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。（千金方）【小便尿血】髮灰二錢を醋湯で服す。（永類方）【血淋苦痛】亂髮を燒いて性を存して二錢に麝少量を入れ、米飮で服す。（聖惠方）【大便瀉血】血餘半兩を灰に燒き、雞冠花、柏葉各一兩と末にし、就寢時に二錢を酒で服し、翌朝溫酒一盞を投ずる。一服で效が現れる。（普濟）【胎產便血】髮灰二錢づつを飮で服す。（咎殷產寶）【婦人の漏血】亂髮を洗淨して燒いて研り、空心に溫酒で一錢を服す。（婦人良方）【月經不通】童男、童女の髮各三兩を灰に燒き、斑蝥二十一箇を糯米で黃に炒り、麝香一錢と末にし、一錢づつを食前に熱薑酒で服す。（普濟方）【婦人の陰

吹】胃氣が下泄し、陰吹して正に喧(かまびすし)きは、穀氣が實せるものである。豬膏髮煎で導くがよし。豬膏半斤、亂髮を雞子大にして三箇を用ゐ、和煎して髮が消(と)けて藥に成る。それを二回に分服すれば病が小便中から出る。(張仲景方)【女勞黃疸】大熱、大勞の時に交接し、後に水に入つたために發るもので、身、目倶に黃になり、發熱惡寒し、小腹滿急し、小便難となる。膏髮煎を用ゐて治す。卽ち前記の方である。(肘後方)【黃疸で尿の赤きもの】一日三回、亂髮灰一錢を水で服す。祕方である。(肘後)【大、小便閉】亂髮灰三指撮(しさつ)を半升の水に放つて服す。(姚氏)【乾霍亂病】脹滿し、煩躁するには、亂髮一團を灰に燒き、鹽湯二升に和して服し、吐を取る。(十便良方)【尸疰(しちゆ)中惡(ちうを)】子母祕錄では、亂髮を雞子大ほどを燒いて研り、水で服す。〇ある方では、亂髮灰半兩、杏仁半兩を皮尖を去つて研り、煉蜜で梧子大の丸にし、一日に二三十丸づつを溫酒で服す。【破傷中風】亂髮雞子大ほどを油のない器中で熬り、黑く焦して研り、好酒一盞をそれに沃(そそ)ぎ、何首烏末二錢を入れて灌ぎ、少頃して再び灌ぐ。(本草衍義)【沐髮して風に中(あた)つたとき】方は上に同じ。【髮を長く黑くする法】亂髮を洗ひ晒し、油で煎じて焦げ枯して研末し、それを髮に擦るが良し。(聖惠)【落ちた

耳、鼻に擦る】頭髮を瓶に盛つて泥固し、煆いて研末し、落耳鼻に擦り、熱に乘じて髮灰を蘸けて綴定し、軟い帛で縛つて動かぬやうにする。自ら生合する。（經驗良方）【聤耳の濃の出るもの】亂髮で杏仁末を裹んで塞ぐ。（聖惠方）【髮を呑んでそれが咽に在るとき】自己の亂髮を取つて灰に燒き、水で一錢を服す。（延齡至寶方）【蜈蚣の螫咬】頭髮を烟に燒いて熏ずる。【疔腫惡瘡】亂髮、鼠屎等分を灰に燒き、針して瘡内に入れるが大いに良し。（聖惠方）【瘡口の合はぬもの】亂髮、露蜂房、蛇蛻皮を各〻燒いて性を存し、食前に一錢を溫酒で調へて服するが神妙である。（蘇沈良方）【下疳濕瘡】髮灰一錢、棗核七箇を燒いて研り、洗つて貼る。（心鑑）【大風癘瘡】新竹筒十箇を用ゐ、中に黑豆一層、頭髮一層を裝塡し、稻糠火を以て盆の中で之を煨き、汁の滴出するを候つて盞に承けて取り、翎で瘡上に掃く。數日にして癒える。また諸瘡をも治す。（邵眞人經驗方）

頭垢（別錄）

和名　かしらのあか、一名ふけ
學名　Scurf

【釋名】梳上のものを**百齒霜**と名ける。弘景曰く、術に『頭垢は針を浮す』

とあるは肥膩のためだ。今は悦澤なる人のものを用ゐることになつてゐる。その垢は丸になる。

【氣味】【鹹く苦し、溫にして毒あり】

【主治】【淋閉不通】(別錄)【噎疾を療ずるには、酸漿で膏に煎じて用ゐれば立ろに癒える。又、勞復を治す】(弘景)【蠱毒、蕈毒に中りたるには、米飲、或は酒で化して服す。いづれも吐を取るを度とする】(大明)

【附方】舊九、新十五。【天行勞復】頭垢を棗核大にして一箇を含むが良し。(類要)【勞復の預防】傷寒の癒えた當初に勞復せぬやうにするには、頭垢を燒いて研り、水で梧子大の丸にし、一丸を飮で服す。(外臺祕要)【頭、身の倶に痛むもの】煩悶するには、頭垢を豆ほど水で服し、囊に蒸豆を盛つて熨す。(肘後)【小兒の霍亂】梳垢少量を水で服す。【小兒の哭疰】方は上に同じ。【百邪鬼魅】方は上に同じ。(いづれも千金)【婦人の吹乳】百齒霜を無根水で梧子大の丸にし、三丸づつを食後に屋上の倒流水で服し、左右に隨つて暖に臥して汗を取る。甚だ效がある。或は胡椒七粒を百齒霜と共に丸にし、熱酒で服す。汗が出て立ろに癒える。(衞生寶鑑)【婦人の乳癤】

梳垢五丸を酒で服せば退消する。【婦人の足瘡】年を經て癒えぬをば裙風瘡と名ける。男子の頭垢を桐油で調へ、隔紙膏にして貼る。(いづれも簡便)【臁脛に生じた瘡】頭垢、枯礬を研り勻ぜ、豬膽で調へて傅ける。(壽域方)【下疳濕瘡】蠶繭に頭垢を盛り、再び一繭で合定して紅く煆き、火毒を出して研つて摻る。(楊氏)【小兒の緊脣】頭垢を塗る。(肘後方)【菜毒、脯毒】凡そ野菜、諸脯肉、馬肝、馬肉の毒には、頭垢を棗核ほど含んで汁を嚥む。能く死人を起たしめる。或は白湯で服するもよし。(小品方)【自死肉の毒】故頭巾中の垢一錢を熱水で服して吐を取る。【猘犬の毒】頭垢、蝟皮等分を灰に燒き、水で一盃を服す。口噤するときは灌ぐ。○犬咬瘡の重發したるには、頭垢少量を瘡中に納れ、熱牛屎で封ずる。【諸蛇の螫毒】梳垢一團を尿で和して傅け、同時に梳を炙いて汗を出して熨す。(いづれも千金方)【蜈蚣の螫毒】頭垢、苦參末を酒で調へて傅ける。(篋中)【蜂蠆の螫毒】頭垢で封ずる。【蚰蜒の螫毒】上に同じ。(いづれも集簡)【竹木で肉を刺したとき】出ぬには、頭垢を塗れば出る。(劉涓子)【飛絲の目に入りたるとき】頭上の白屑少量を揩れば出る。(物類相感志)【赤目腫痛】頭垢を芥子一粒ほど納入して淚を取る。(摘玄方)【酸漿を噫吐するもの】漿水で頭垢

豆ほどを煎じて一盃を服すれば效がある。(普濟方)

耳塞(日華)

和名　みみくそ
學名　Ear wax

釋名　**耳垢**(綱目)　**腦膏**(日華)　**泥丸脂**　時珍曰く、修眞指南に『腎氣は脾の右畔上から耳に入り、化して耳塞となる。耳は腎の竅であつて、腎氣が通ずれば塞はないが、塞れば氣が不通となる。故にこれを塞といふ』とある。

氣味　【鹹く苦し、溫にして毒あり】

主治　【顚狂、鬼神、及び酒を嗜むもの】(大明)　【蛇蟲、蜈蚣に螫されたるには、これを塗るが良し】(時珍)

附方　新六。【蛇蟲の螫傷】人耳垢を蚯蚓屎で和して塗る。黃水を出し盡して立ろに癒える。(壽域方)　【破傷中風】病人耳中の膜、幷に爪甲上を刮つた末を用ゐ、唾で調へて瘡口に塗る。立ろに效がある。(儒門事親方)　【抓瘡を水で傷めたもの】腫痛して忍び難きには、耳垢で封ずる。一夜にして水が盡く出て癒える。鄭師甫は『余

が嘗てこの病の時、一人の乞丐からこの方を傳授した』といつた。【疔疽惡瘡】生人腦——即ち耳塞である——を鹽泥等分と研り勻ぜ、蒲公英汁で和して小餠にして封ずる。大いに有效だ。（聖惠）【一切の目疾】耳塞を晒し乾し、粟ほどづつを每夜點ける。（聖惠方）【小兒の夜啼】驚熱である。人耳塞、石蓮心、人參各五分、乳香二分、燈花一字、丹砂一分を末にし、五分づつを薄荷湯で服す。（普濟）

膝頭垢（綱目）

和名　ひざかしらのあか
學名　Dirt on the knee.

【主治】【唇緊瘡には、綿で裹んで燒き、研つて傅ける】（外臺）

爪甲（綱目）

和名　つめ
學名　A nail.

【釋名】筋退　時珍曰く、爪甲は筋の餘、膽の外候であつて、靈樞經に『肝は爪に應ず。爪厚くして色黃なるものは膽厚し。爪薄くして色紅きものは膽薄し。爪堅くして色靑きものは膽急なり。爪耎にして色赤きものは膽緩なり。爪直くして色

白きものは膽直し、爪惡くして色黑きものは膽結す』とある。

【氣味】【甘く鹹し、毒なし】

【主治】【鼻衄には、細に刮つて嗜げば立ろに癒える。衆人の甲もよし】（宗奭）【分娩を催し、胞衣を下し、小便を利し、尿血、及び陰陽易病、破傷中風を治し、目翳を去る】（時珍）【懷妊の婦人の爪甲の末を取つて目に點ければ翳障を去る】（藏器）

【附方】舊三、新二十。【斬三尸の法】太上玄科に『常に庚辰の日に手の爪を去り、甲午の日に足の爪を去り、毎年七月十六日にその爪甲を灰に燒き、水で和して服す。三尸、九蟲みな滅する。名けて斬三尸といふ。○一には、甲寅の日には三尸が兩手に遊ぶから手の爪甲を剪り去り、甲午の日には三尸が兩足に遊ぶから足の爪甲を剪り去るともいふ。【脚氣の消除】寅の日毎に手、足の甲を割き取つて少し肉を侵せば脚氣を去る。（外臺祕要）【破傷中風】手、足の十指の甲を香油で炒つて研り、熱酒で調へて呷つて服す。汗が出て好し。○普濟では、破傷風で手、足顫掉し、搐搦して已まぬを治す。人の手、足の指甲を燒いて性を存して六錢、薑制の南星、獨活、丹砂各二錢を末にし、酒で二回に分服する。立ろに效がある。【陰陽易病】手、

足の爪甲二十片、中衣襠一片を灰に焼き、温酒で三回に分服する。男は女のものを用ゐ、女は男のものを用ゐる。【小兒の腹脹】父母の指爪甲を焼いて乳房に傅けて飲ます。(千金)【小便轉胞】自ら爪甲を取つて灰に焼き、水で服す。【男、女の淋疾】同上。(いづれも肘後)【小便尿血】人指甲半錢、頭髪一錢半を焼いて研末し、一錢づつを空心に温酒で服す。(聖濟錄)【妊婦の尿血】夫の指甲を取つて灰に焼き、酒で服す。(千金方)【胞衣不下】本人の手、足の爪甲を取つて灰に焼き、酒で服し、力の強い婦人に抱き起させて竹筒で胸前を趕き下す。(聖惠)【諸痔腫痛】蠶繭内に男子の指甲を塡滿し、外部を童子の頂髪で纏へ裹み、焼いて性を存して研末し、蜜で調へて傅ける。同時に日日牛膽で制した槐子を呑む。甚だ效がある。(萬表積善堂方)【針刺の肉に入りたるもの】凡そ針が折れて肉に入りたるもの、及び竹木刺には、人指甲を刮つて末にし、酸棗を用ゐて擣き爛して塗る。翌日必ず出る。(聖惠方)【飛絲の目に入りたるとき】爪甲を刮つて末にし、津液と共に點ける。その絲は自ら聚つて拔出する。(危氏得效方)【物の目中に入りたるとき】左手の爪甲を刀で刮つて屑末にし、燈草に醮けて瞖上に點ける。三回にして出る。【瘢痘で瞖を生じたるもの】【一切の目

疾】いづれも木賊で爪甲を擦り取つた末、朱砂末等分を研り匀ぜ、露水で捜ぜて芥子大の丸にし、一粒づつを目の中へ入れる。(聖惠)【目に花翳を生ずるもの】刀で爪甲を刮つて細末にし、乳で和して點ける。(集簡方)【目に珠管を生じたるもの】手爪甲を灰に燒き、貝齒を灰に燒き、龍骨と各半兩を末にし、日に三四回點ける。(聖惠方)【積年の瀉血】あらゆる藥も效なきには、人指甲を炒り焦し、麝香と各二錢半、乾薑を炮いて三兩、白礬を枯らし、敗皮巾を灰に燒いて各一兩を末にし、一日二回、一錢づつを粥飮で服す。(聖濟總錄)【鼻に出る衄血】指甲を刀で刮り、細末にして吹けば止まる。試驗上效を認めた。(簡便方)

牙齒(日華)

和名 きば、は
學名 Teeth.

釋名 時珍曰く、兩旁なるを牙といひ、その中間のものを齒といふ。腎は骨を主り、齒は骨の餘であつて、女子は七个月で齒が生え、七歲にして齒が齔れ、二十一にして腎氣が平衡を得て眞牙が生え、四十九にして腎氣が衰へて齒が槁れ、髮

が素くなる。男子は八个月で齒が生え、八歳にして齒が齠れ、二十四にして腎氣が平衡を得て眞牙が生え、四十にして腎氣が衰へて齒が槁れ、髮が落ちる。銭乙は『小兒が變蒸し、蜕齒するは、花が苗に易るやうなもので、三十六齒に及ばぬものは蒸することがその數に及ばぬに由る』といつた。

【氣味】〔甘く鹹し、熱にして毒あり〕【主治】〔勞を除き、瘧、蠱毒の氣を治す。藥に入れるには燒いて用ゐる〕(藏器)〔乳癰のまだ潰れぬもの、痘瘡倒靨を治す〕(時珍)

【發明】時珍曰く、近世では、人牙を用ゐて痘瘡の陷伏を治し、神品として稱揚してゐるが、しかし、一概にこれを用ゐては甚しき害を貽すことがある。そもそも齒なるものは腎の標、骨の餘であつて、痘瘡の場合は、毒が腎から出て發展せんとする際に、外部から風寒、穢氣に冒されて腠理が閉塞し、血が澀つて行らず、毒が出る能はずして、或は變黑し倒靨するものである。この場合この物を用ゐるが宜しく、酒、麝を以てその力を發揮すれば、腎の經に竄入して毒氣を發出し、熱をして復た行らしめて痘が自から紅く活きる。蓋し劫劑である。けれども伏毒が心に

在つて昏昏として人事不省となり、また氣虛して色白く、痒塌して化膿が不能となり、熱痱、紫泡の證を呈するものの場合は、ただ毒を解し、虛を補すべきものである。苟もこれを誤用するならば、鬱悶し、聲が啞し、反つて救ふべからざる狀態に陷れる。非常に警戒すべきことである。高武の痘疹管見に『左仲恕は「變黑して腎に歸するものは宜しく人牙散を用うべし」といつたが、そもそも旣に腎に歸した以上、いかで人牙で能く復た治しやうか』といつてある。

附方　舊一、新七。【痘瘡倒黶】錢氏の小兒方では、人牙を燒いて性を存し、麝香少量を入れ、半錢を溫酒で服す。○聞人規の痘疹論には『人牙散は、痘疹が方に出て風寒に外部を襲はれたために、或は黑く變じ、或は青紫となるものを治す。これは倒黶であつて、宜しく肌を溫めて發散し、熱氣をして復た行らしめて、斑をして自ら出でしむべきものである。人齒の脫落したものを用ゐ、多少に拘らず瓦罐で固濟して煅き、火毒を出して研末し、出づることが思はしからずして黑陷するものには、豶豬血で調へて一錢を服す。涼藥を服したために血が澀つて倒陷したものの場合には、麝香を入れて溫酒で服す。その效神の如し』とある。○無價散――人牙、

猫牙、豬牙、犬牙等分を火で煆いて研末し、蜜水で一字を調へて服す。【乳癧のまだ潰れぬもの】人牙齒を焼いて研り、酥で調へて貼る。(肘後方)【五種の聤耳】膿血水を出すには、人牙を焼いて性を存し、麝香少量と末にして吹く。これを偏牙散と名ける。(普濟方)【漏瘡、惡瘡】水が乾き、肌を生ずる。人牙灰、油髪灰、雄雞內金灰各等分を末にし、麝香、輕粉少量を入れ、油で調へて傅ける。(直指方)【陰疽の發せぬもの】頭が凹んで沈黯し、疼まず、熱無く、內補散を服しても起きぬには、必ず左の方を用ゐる。人牙を煆き、穿山甲を炙き各一分を末にし、これを二服に分け、當歸、麻黃を酒で煎じたもので服し、外用としては薑汁で麪を和して傅ける。○又ある方では、川烏頭、硫黃、人牙を煆き、これを末にして酒で服す。やはり妙である。(楊仁齊直指方)

人屎(別錄)

和名　くそ
學名　Human feces.

—人中黃を附す—

【釋名】人糞(別錄)　大便　時珍曰く、屎糞なるものは糟粕の變化したもの

だ。故に文字は米に從ふの會意である。

〔氣　味〕【苦し、寒にして毒なし】〔主　治〕【時行大熱で狂走するもの、諸毒を解するには、末に擣き、沸湯を沃いで服す】（別錄）【傷寒熱毒には、水に漬けて飲むがいよいよ善し。新なるもので丁腫を封ずれば一日にして根が爛れる】（蘇恭）【骨蒸勞復、癰腫、發背、瘡瘻、痘瘡の起らぬもの】（時珍）

糞清〔釋　名〕**黃龍湯**（弘景）**還元水**（菽園記）**人中黃**　弘景曰く、城市に近い土地で、空罌の口を塞いで糞中に納れ、積年にしてそれに溜る汁を取るが、甚だ黑くして苦いものだ。それを黃龍湯と名ける。瘟病で死に垂たるものを療じてみな瘥える。

大明曰く、臘月に淡竹を截り青皮を去り、それを浸滲して汁を取り、天行熱疾の中毒を治す。これを糞淸と名ける。皂莢、甘蔗を浸して天行熱疾を治するを人中黃と名ける。

震亨曰く、人中黃は、竹筒の中に甘草末を入れて兩端を竹木で塞ぎ、冬期にそれを糞缸中に浸して立春に取出し、風の當る場所に懸けて陰乾し、竹を破つて甘草を

取り、晒し乾して用ゐるものだ。

汪機曰く、棕皮、綿紙の上に黄土を鋪き、糞汁をその土上に澆ぎ、淋して清汁を濾し取り、その汁を新甕中に入れて椀でよく覆ひ、一年間土中に埋めて取出せば、泉水のやうに清んで全く穢氣がなくなる。年久しきものほど佳し。竹筒で滲取する方法に比すれば更に妙である。

主治 【天行熱狂、熱疾中毒、蕈毒、惡瘡】(大明) 【熱毒、濕毒。大いに五臟の實熱を解す。飯に和して丸にしたものは痰を清し、食積を消し、陰火を降す】(震亨)

附方 舊十三、新二十。【勞復、食復】人屎を灰に焼き、方寸匕を酒で服す。(千金方) 【熱病發狂】奔走して癲狂のやうでもあり、鬼神を見るやうでもあり、久しく汗を發せず、また人事不省なるには、人中黄を大罐に入れて泥で固濟し、半日煆いて火毒を出して研末し、新汲水で三錢を服す。なほ退かぬときは再服する。(斗門方) 【大熱狂渴】乾いた陳い人屎を末にし、陰地の清淨な黄土に五六寸の小坑を作り、その末二三匙を坑中に入れ、新汲水で調勻して良久して澄清し、それを少しづつ與へて飮ませれば解す。世俗にこれを地清といふ。(寇宗奭衍義) 【勞極骨蒸】また伏連

傳尸とも名ける。この方が甚だ效驗がある。人屎、小便各一升、新粟米飯五升、六月六日の麴半餅を餅に盛つて封じ、密室中に十四日間置けば、いづれも消けて惡氣もなくなる。それを毎早朝一合を服し、正午に再服する。神效がある。(張文仲備急方)

【骨蒸熱勞】人屎の乾けるものを取つて燒いて外を黑くし、水中に入れて澄淸し、毎早朝一小升を服し、日暮に童便一小升を服す。瘥えるを度とする。旣にして常服するには、坑を作つて屎三升を燒き、夜間水三升に漬け、少しづつ減じて服す。この方は神妙なるものである。如何がはしい人物に濫りに傳へてはならぬ。(外臺祕要)

【嘔血吐痰】心煩し、骨蒸するものには、人中黃を末にし、毎服三錢を茜根汁、竹瀝、姜汁で和勻して服す。(丹溪心法)　【鼻衄の止まぬもの】人屎尖を灰に燒き、一二錢を水で服し、幷に鼻中に吹く。(千金方)　【噎膈反胃】諸藥の奏效せぬには、眞阿魏一錢、野外の乾いた人屎三錢を末にし、五更に薑片に蘸けて食ふ。能く死人を起たすものだ。これは趙王園の方である。(永類鈐方)　【噎して食物の下らぬもの】人屎を蘿蔔の中に入れ、火で三炷香の間煉つて取り出して研り、三錢づつを黃酒で服す。三服で效がある。(海上名方)　【痘瘡の起らぬもの】儒門事親では、痘瘡倒黶、及び灰

白下陷を治す。童子糞の乾いたものを新瓦で煆き、毎一兩に龍腦一分を入れて研勻し、半錢乃至一錢づつを蜜水で調へて服す。○四靈無價散――痘瘡黒陷で腹脹し、危篤なるものを治す。これは劫劑である。人糞、貓糞、豬糞、犬糞等分を臘月初旬に取收め、高燥な土地の黄土窖に埋め、十八日に至つて取り出し、沙罐に盛つて鹽泥で固濟し、炭火で煆いて烟の盡きるを度とし、取出して末にし、麝香少量を入れて研勻し、瓷器に密封して取收め、一歳には一字、二歳には半錢、三歳には一錢を蜜水で調へて服す。須臾にして瘡が起つ。これは毒を以て毒を攻めるので、火化のものを用ゐるは從治の意味である。【發背で死せんとするもの】燒屎灰を醋で和して傅け、乾けば易へる。（肘後方）【一切の癰腫】まだ潰れぬには、乾人屎末、麝香各半錢を研勻し、豆ほどを津で調へて頭に貼り、その外廓を醋麪で錢のやうに作つて貼つて護る。膿潰したならば藥を去る。（宗奭衍義）【丁腫の初期】刮り破つて熱屎尖を傅け、乾けば易へる。十五回に過ぎずして根が出て立ろに瘥える。（千金）【五色丹毒】黄龍湯二合を飲み、幷に塗るが良し。（千金方）【九漏の蟲あるもの】乾人屎、乾牛屎を綿を隔てて貼る。蟲はその氣を聞いて出る。若し痒いときは易へ、蟲が盡

きたならば止める。(千金)【疳で口、鼻を蝕するもの】唇、頬を穿つものである。綿で人屎を裹んで貼る。必ず蟲が出るものだ。(十便良方)【小兒の唇緊】人屎灰を傅ける。(崔知悌方)【小兒の陰瘡】人屎灰を傅ける。(外臺祕要)【產後の陰脱】人屎を赤く炒つて末にし、一日二回、酒で方寸匕を服す。(千金方)【鬼舐頭瘡】小兒糞を臘豬脂で和して傅ける。(千金方)【金瘡腸出】乾人屎末を粉せば入る(千金方)【鍼瘡出血】止まぬには、人屎を燒き研つて傅ける。(千金方)【馬血の瘡に入つたとき】腫痛するには、人糞を雞子の大いさほど服し、幷に塗る。(千金方)【毒蛇の咬螫】人屎で厚く封ずれば消する。(千金)【蠱毒、あらゆる毒】及び諸熱毒、時氣熱病で口、鼻に出血するには、人屎尖七箇を灰に燒き、水で調へて頓服し、溫に覆ふて汗を取れば癒える。輕視してはならぬ。この方は神驗あるものだ。(外臺祕要)【諸毒卒惡】熱悶して死せんとするには、新糞汁を水に和して服す。或は乾いたものを燒いて末にし、漬けて汁を飲む。破棺湯と名ける。(蘇恭)【藥箭の毒を解す】毒箭に三種ある。交、廣の夷人は焦銅を用ゐて箭鏃を作り、嶺北の諸處では蛇、毒螫物の汁を筒中に取つて箭鏃を漬ける。この二種は纔に皮肉を傷れば洪膿が沸爛して死ぬ。これに中つたときは、直

ちに汁を飲み、弁に塗る。ただこれが最も妙である。また一種は射罔煎を箭鏃に塗るもので、やはり此の方が宜し。(姚僧坦集驗方)【野葛芋毒】【山中の毒菌】死せんとするには、いづれも糞汁一升を飲めば活きる。(肘後方)【漏肉脯の毒】人屎を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。(肘後方)【惡犬の咬傷】左盤龍、卽ち人屎で厚く封ずる。數日にして癒える。(蘭氏經驗方)【心腹急痛】死せんとするには、人屎を蜜と共に擂りまぜ、新汲水に化して服す。(生生編)

小兒胎屎 (綱目)

和名　かにくそ
學名　Feces of young born infant

【主治】【惡瘡。瘜肉を食し、面印字を除き、一个月にして痊える】(藏器)【小兒の鬼舐頭を治するには、灰に燒いて臘豬脂で和して塗る】(時珍)

人尿

奴弔の切(ジョウ)と發音する。また溺とも書く。 (別錄)

和名　ひとのいばり
學名　Human urine

【釋名】溲(素問)　小便(素問)　輪廻酒(綱目)　還元湯　時珍曰く、尿は尸に

從ひ水に從ふの會意である。方家でこれを輪廻酒、還元湯といふは隱語であつて、飲めば胃に入り、精氣を遊溢して脾に輸り、脾氣は精を散じて上に肺に歸し、水道を通調して下に膀胱に輸る。水道は闌門であつて、水穀を分泌することを主り、糟粕は大腸に入り、水汁は膀胱に滲入する。膀胱は州都の官、津液の府であつて、氣が化すれば能く出るのである。陰陽應象論に『淸陽は天となり、濁陰は地となり、地氣上つて雲となり、天氣下つて雨となる。故に淸陽は上竅に出で、濁陰は下竅に出づ』といつてある。

〔氣味〕【鹹し、寒にして毒なし】〔主治〕【寒熱頭痛、溫氣。童男のものが尤も良し】(別錄)【久嗽の上氣失聲、及び癥積滿腹に主效がある】(蘇恭)【目を明にし、聲を益し、肌膚を潤ほし、大腸を利し、陳きを推して新しきを致し、欬嗽肺痿、鬼氣疰病の停久なるものを去るにこれを服するが佳し。冷を恐れるときは熱湯に和して服す】(藏器)【勞渇を止め、心、肺を潤ほし、血悶熱狂、撲損瘀血が內に在つて運絕するを療じ、吐血、鼻衄を止める。皮膚の皴裂、難產、胎衣不下、蛇、犬咬】(大明)【陰を滋くし、火を降すことが甚だ速だ】(震亨)【蟲を殺し、毒を解し、瘧、

中喝を療ず】（時珍）

弘景曰く、初に頭痛を起したときには、直ちに人尿數升を飲めば、やはり多くは癒える。葱、豉と合せて湯にして服するがいよいよ佳し。

【發明】

宗奭曰く、人溺は童子のものに限るが佳し。産後に一盃を溫飮すれば、敗血、惡物を壓し下す。七日以上飮むものもあるが、それは過多である。恐らく久しい間に血臟が寒し、人をして帶病を發せしめるものだ。しかし一般にはやはりそれに氣がつかない。氣血が虛して熱なき場合には就中多く服しては宜しくない。この物は性が寒である。故に熱勞の方中に用ゐてあるのだ。

震亨曰く、小便は火を降すことが甚だ速だ。嘗て見た一老婦人は、年八十を逾えて容貌四十位に見えるので、そのわけを詢ねて見ると、常に惡病があつて、人の敎で人尿を服し、四十餘年に及んだといふことであつた。且つ老健にして他病がなかつた。而るに何ゆゑにこれを性寒だから多く服するは宜しくないといへようか。凡そ陰虛火動の爍くが如き熱蒸は服藥は無益のものだ。小便以外では除けない。

時珍曰く、小便は性溫であつて寒ではない。これを飮めば胃に入り、脾の氣に隨

つて上に肺に歸し、下に水道に通じて膀胱に入る。これはその舊路である。故に能く肺病を治し、火を引いて下するのである。凡そ人の精氣は、清めるものは血となり、濁るものは氣となり、濁の清めるものは津液となり、清の濁るものは小便となる。小便と血とは同類のものだ。故にその味は鹹くして血に走り、諸種の血病を治するのである。

按ずるに、褚澄の遺書に『人の喉に竅があれば欬血して死亡する。喉には物を停めないもので、毫髮のものでもあれば必ず欬血し、既に滲入すれば愈々滲し、愈々欬し、愈々欬すれば愈々滲する。ただ溲溺を飲めば百に一も死なないが、若し寒涼のものを服するならば百に一も生きない』とある。又、吳球の諸証辨疑には『諸虛の吐衂、喀血には必ず童子小便を用うべきもので、その效甚だ速だ。蓋し溲溺は陰を滋くし、火を降し、瘀血を消し、吐衂、諸血を止めるものである。但し十二歲以下の童子から取り、その童子には烹炮の肉食、鹹、酸の食物を絶ち、多く米飲を與へて水道を助ける。使用するには、一盞づつに薑汁、或は韭汁二三點を入れて徐徐に服し、日に二三服を進める。寒い氣候の際は重湯で溫めて服す。久しくして自ら

效がある』とあり、又、成無已は『傷寒少陰の證で下利して止まず、厥逆して脈なく、乾嘔して水を飲みたがるには、人尿、豬膽汁の鹹、苦、寒の物を白通湯、薑、附の藥の中に加へる。その氣が相從つて格拒の患を去るものだ』とある。

附方 舊七、新三十八。【極端なる頭痛】童便一盞、豉心半合を五分までに煎じて溫服する。(聖濟總錄)【熱病咽痛】童便三合を含めば止む。(聖惠方)【骨蒸發熱】三歲の童便五升を一升に煎じ取り、蜜三匙を和して二碗づつを服し、半日にして更に服す。かくて後は常に自己の小便を取つて服す。輕きは二十日、重きは五十日で瘥える。二十日後には蚰蜒のやうな蟲がありて身內に居り、常に出て十歩の內で病人の小便の臭氣を聞いて瘥えるものだ。台州の丹仙觀の張といふ道士はこれを病み、自ら服して神驗があつた。(孟詵必效方)【男子、婦人の怯證】男には童女の便を、女には童男の便を用ゐ、排尿中の初と終とを棄てて中間のものを取り、日に二回進め、乾燒餠を食つて壓する。一个月餘で全癒する。(聖惠)【久嗽涕唾】肺痿で時時に寒熱し、頰赤く、氣急するには、童便を頭、尾少量を去つて五合に大粉甘草一寸を四片に破つて浸し、一夜露して甘草を去り、早朝に頓服する。或は甘草末一錢を入れて共に

服するもよし。一日一劑。尿を取る童子は五辛、熱物を食ふことを忌む。(姚僧坦集驗)【肺痿欬嗽】【鬼氣疰病】停久せる臭溺を日日に溫服する。(集驗方)【吐血、鼻洪】人溺、薑汁を和勻して一升を服す。(日華子)【齒縫衂血】童便を溫熱にして含めば立ろに止む。(聖惠方)【消渴の重きもの】衆人の溺坑中の水一盞を取つて服す。病人に知らしてはならぬ。三回にして瘥える。(聖惠方)【癥積滿腹】諸藥にて瘥えぬには、人溺を一回に一升を服す。下血し、片塊が二十日にして出る。(蘇恭本草)【絞腸沙痛】童子小便を服すれば止む。(聖惠方)【卒然の腹痛】人をしてその腹に騎つて臍中に溺せしめる。(肘後方)【下痢休息】杏仁を皮を去つて麪で炒つて硏り、猪肝一具を切片して水で血を洗淨し、淸淨な鍋に入れて一重は肝、一重は杏仁を鋪き盡し、童便で共に煎じ乾し、放冷して任意に食ふ。(聖惠方)【瘧疾の渇すること甚しきもの】童便に蜜を和し、煎沸して頓服する。(簡便方)【瘴癘諸瘧】新久を問はず、童便一升に白蜜二匙を入れ、攪ぜて白沫を去つて頓服する。碧綠の痰を吐出させて妙である。さなくば結局除けない。(聖惠)【中暍昏悶】夏期に人が道途中で熱死したるには、急に陰處に移し、道上の熱土を掬つて臍上を擁ふて窩を作り、人をしてそれに溺を滿たさ

しめる。暖氣が臍に透つて甦る。そこで地漿、蒜水等の藥を服す。○林億は『この法は張仲景から出たもので、その意味は到底常識では考へ及ばず、本草でも關らぬところであるが、實に救急の大術である。蓋し臍なるものは命の蔕であつて、暑暍傷氣の場合に臍を溫めるのはその元氣を接する所以の意味である』といつた。【中惡で醒めぬもの】人をしてその面上に尿せしめれば甦る。これは扁鵲の法である。(肘後方)【三十年の痼】【一切の氣塊】【宿冷惡病】苦參二斤、童子小便一斗二升を六升に煎じ取り、糯米、及び麴を和して普通の方法のやうにして酒に作つて服す。但し腹中の諸疾はみな治す。酒は二三年そのまゝに置いても壞れない。多く人命を救つて神效があつた。(聖惠)【金瘡中風】自己の小便で日に二三回洗ふ。水に入つても妨げない。(聖惠)【金瘡出血】止まぬには、人尿五升を飲む。(千金方)【打傷瘀血】心を攻めるものには、人尿一升を煎じて服す。一日一服。(蘇恭本草)【折傷、跌撲】童便に少量の酒を入れて飲む。陳きを推し新きを致し、その功甚だ大なるものだ。○薛已は『予が居庸にゐたとき、車が轉覆して負傷者七人が地に仆れて呻吟するを見て、いづれもこれを灌がせてみな無事なるを得た。凡そ一切の傷損には、壯者、弱者、

及び瘀血の有無を問はず、いづれもこれを服するがよし。若し脇脹し、或は痛み、或は發熱し、煩燥し、口渇するものならば、ただこの物一甌を服するが他の藥に比して勝るものだ。他の藥も效はあるけれども、瘀血が反て人を誤る場合なきかを恐れるが、童便は臟腑を動ぜず、氣血を傷らず、萬に一も失がない。戰地で多くこれを用ゐ、屢〻實驗上效を奏した』といつた。（外科發揮）【杖瘡腫毒】童便を服するが良し。（千金方）【火燒悶絶】人事不省なるには、新尿を二三升頓服する。（千金方）【刺の肉中にあるもの】小便を温めて漬ける。（千金）【人に手指を咬まれたとき】瓶に熱尿を盛つて一夜浸せば癒える。（通變要法）【蛇、犬の咬傷】日華子は『熱尿を患部に淋ぐ』といつた。○千金方では、蝮蛇の傷を治するには、婦人をして瘡上に尿せしめるが良し。【蛇が人の足に纏ふたとき】直ちにそれに尿せしめれば解ける。（肘後方）【蜂蠆の螫傷】人尿で洗ふ。（肘後方）【蜘蛛の咬毒】久しくして臭き人溺を大甕中に入れて坐つて浸し、同時に烏雞屎を炒つて酒に浸して服す。かくせねば毒のために死ぬ恐がある。（陳藏器本草）【あらゆる蟲の耳に入りたるとき】小便を少しづつ滴入する。（聖惠方）【勞聾の久しく經過したもの】童子小便を熱に乘じて少しづつ頻りに滴す。

(聖惠方)【赤目腫痛】自己の小便を熱に乘じて淋し、洗つて目を少頃の間閉ぢる。これは眞氣を以て邪熱を退け去るのである。(普濟方)【腋下狐臭】自己の小便で熱に乘じて兩腋下を洗ふ。一日數回洗へば久しくして自ら癒える。(集簡方)【傷胎血結】心腹痛するには、童子小便を取り、日に二升を服するが良し。(楊氏產乳)【胎兒死亡】人尿二升を煮沸して飲む。(千金方)【土菌の中毒】【合口椒の毒】人尿を飲む。(肘後方)【諸菜の毒を解す】小兒尿を乳汁に和し、二升を服す。(海上方)【分娩を催し、胞を下す】人溺一升に葱、薑各一分を入れて煎じ、二三沸して熱飲すれば下る。(日華子本草)【痔瘡腫痛】熱童尿に礬三分を入れ、一日二三回洗へば效がある。(救急方)

溺白垽

音は魚勤の切(ギン)である。 (唐本草) 和名 いばりのをり 學名 Sediment of human urine.

釋名 **人中白** 時珍曰く、滓淀を垽といふ。これは人溺の澄んだ下の白垽のことだ。風と日光とで久しく乾いたものを良しとする。藥に入れるには、いづれも瓦で煆いて用ゐる

〔氣味〕【鹹し、平にして毒なし】大明曰く、涼なり。〔主治〕【鼻衄、湯火灼瘡】（唐本）【燒き研つて惡瘡を治す】（蘇恭）【傳尸熱勞、肺痿、心膈の熱、羸瘦、渴疾】（大明）【火を降し、瘀血を消し、咽喉、口齒に瘡を生ずる疳䘌、諸竅の出血、肌膚の汗血を治す】（時珍）

〔發明〕震亨曰く、人中白は、能く肝火、三焦の火、竝に膀胱の火を瀉して小便中から出すものだ。蓋し膀胱なるものはこの物の故の道である。

時珍曰く、人中白は、相火を降し、瘀血を消する。蓋し鹹は能く潤下して血を走らすものであるからである。現に一般に口舌諸瘡を病むものに用ゐて奏效するは、火を降すの證驗である。張杲の醫說に『李士常は鼻衄に苦んで僅に喘いでゐるばかりであつたが、張思順が人中白散を用ゐて即時に血が止つた。又、延陵の鎭官魯棠は器から水を傾け注ぐやうに鼻血が出て白衣が紅く變じ、頭が空空然たる有樣だつたが、張潤之が人中白の藥で治療すると直ちに止つた。いづれも再發しなかつた』とある。これはいづれも血を散ずる證驗である。

〔附方〕舊一、新十四。【大衄、久衄】人中白一團雞子大、綿五兩を燒いて研り、

二錢づつを溫水で服す。（聖惠方）【諸竅の出血】方は上に同じ。【鼻衄の止まぬもの】五七日にして住まぬには、人中白を新瓦で焙き乾し、麝香少量を入れて溫酒で調へて服す。立ろに效がある。（經驗方）【膚から汗血を出すもの】方は上に同じ。【偏、正頭痛】人中白、地龍を炒つて等分を末にし、羊膽汁で芥子大の丸にし、一丸づつを新汲水に化し、鼻中に注いで嗜ふ。これを一滴金と名ける。（普濟方）【水氣腫滿】人尿を丸になるまでに煎じ、小豆一粒ほどづつを一日三服する。（千金方）【脚氣で漏となつたもの】跟に一孔が生じ、深さ五分ほどになつて異常に痛むには、人中白を煆いて出る水を瘡口に滴入する。（戴原禮證治要訣）【小兒の霍亂】尿滓末を乳房につけて服ませるが良し。（千金方）【鼻中の息肉】人中白を瓦で焙じ、一錢づつを溫湯で服す。（朱氏集驗方）【痘瘡倒陷】臘月に取收めた人中白を火で煆いて末にし、三錢を溫水で服す。陷つたものが白く出る。（儒門事親）【口舌に生じた瘡】溺桶垽七分、枯礬三分を研り勻ぜて用ゐ、出る涎を拭ひ去る。數回にして癒える。（集簡方）【小兒の口疳】人中白を煆き、黃蘗を蜜で炙き焦し、末にして等分に氷片少量を入れ、靑（一）皮で拭ひ淨めて摻る。累に效があつた。（陸氏經驗方）【走馬牙疳】小便盆內の白屑を取下して瓷瓶

（一）皮、一本布ニ作ル。

中に入れ、鹽泥で固濟して紅く煆いて研末し、麝香少量を入れて貼る。これは汴梁の李提領の方である。○又ある方では、婦人尿桶中の白垢を火で煆いて一錢、銅綠三分、麝香一分を和勻して貼る。就中神效がある。【痘疹煩熱】人中白、或は老糞缸の白垢を洗淨して研末し、二錢づつを白湯、或は酒で服す。(痘疹便覽方)

秋石（蒙筌）

和名　しうせき
學名　A drug manufactured from human urine.

【釋名】秋冰　時珍曰く、淮南子に『丹成り號して秋石といふ』とある。その色が白くして質の堅きをいつたのだ。近來は一般に人中白を煉つて白質にしたものをもやはり秋石と名け。これもまた精氣の餘だといふ。再びそれに蒸溜の方法を加へて精致に製したものを秋水といふ。これは蓋し海水で鹽を煎じる關係に倣つたものだ。方士はまた鹽を爐火に入れて煆いて僞物を作るから注意する必要がある。

嘉謨曰く、秋石は、秋期を須つて童子溺を取り、毎缸に石膏末七錢を入れて桑條で攪ぜ、澄んでから清液を傾け去り、かく二三回繰返してから秋露水一桶を入れて

攪ぜて澄まし、かく數回繰返して滓穢を滌淨し、鹹味を減除し、二重の紙を灰上に鋪いてその上で晒し乾し、完全になつたとき取起し、上層にある輕く淸いものが秋石であつて、下層にある重く濁つたものをば刮り去る。古人が名稱を付した根據は實にこの事實に本いたものだ。男には童女の溺を用ゐ、女には童男の溺を用ゐるはやはり一陰一陽の方法である。世間一般の醫師は秋期に取らずして、人の溺を雜收してただ皂莢水で澄し、晒したものを陰煉といひ、煅いたものを陽煉といつてゐるが、全然正しい方法に合はない。その名稱と實際と合致するわけがあらうか。利益を計つて人を敗ふものである。病に應ずべきわけはあるまい。況や火煉を經れば性が却つて溫に變ずるに於てをやだ。

【氣味】〔鹹し、溫にして毒なし〕【主治】〔虛勞冷疾、小便遺數、漏精白濁〕(時珍)〔腎水を滋くし、丹田を養ひ、本に返し、元に還し、根に歸し、命を復し、五臟を安じ、三焦を潤ほし、痰欬を消し、骨蒸を退け、堅塊を軟げ、目を明にし、心を淸し、天年を延べ、壽命を益す〕(嘉謨)

【發明】時珍曰く、古人が惟だ人中白、人尿を取つて病を治したのは、その血

を散じ、陰を滋くし、火を降し、蟲を殺し、毒を解する功力を取つたものであつて、王公貴人がその不潔を嫌ふところから、方士が更に人中白に加工して煆き煉つて秋石なるものを精製したのである。葉夢得の水雲錄には極めて陰、陽二煉の妙を稱してあるが、瑣碎錄を見ると『秋石は味鹹くして血を走らす。水をして火を制せざらしめるものだ。久しく服すれば人をして渴疾とならしめる』とある。蓋しこの物は旣に煆煉を經てゐるので、その氣は溫に近い。これを服する人は多くは淫慾の人で、この功力を藉りて放縱を極め、虛陽を妄りに興奮せしめるから眞水を愈〻涸らすのである。渴せぬわけには行かぬ筈だ。況や甚しきは陽藥を加へてその邪火を助けるといふ有樣なるに於てをや。これはただ丹田の虛冷のものだけが服するによいのである。淋を病む者に就いて觀察するに、水虛し、火極り、ために煎熬して沙となり石となるのであつて、小便を煉つて成る秋石もこれと同一理だ。

【附方】　新十二。『秋石還元丹』久しく服すれば、あらゆる病を去り、骨髓を强くし、精血を補し、心を開き、志を益し、下元を補暖し、顏色を悅くし、食慾を進め、久しくして臍下が常に火のやうに暖になり、諸般の冷疾がみな癒える。年久し

き冷勞虛憊の者もこれを服すればやはり壯盛になる。その法は、男子の小便十石を用ゐ、——更に多ければ尤も妙である——先づ一箇の大鍋を空室中に措へて据ゑ、その鍋の口の上に深い瓦甑を載せ、その接目を紙筋を石灰に杵き込んだもので泥り固めて風の通らぬやうにし、乾いてから、小便をその鍋に七八分目まで入れ、竈の下から火を焚いて煮る。湧き出るときは少しづつ冷小便を添へる。かくて煎じ乾いたものが卽ち人中白である。それを好き罐子に入れ、十分に固濟して炭爐の中に入れて煆き、かくて二三兩を取つて二回研つて粉のやうにし、煮た棗瓤で和して綠豆大の丸にし、五七丸づつから漸次に十五丸まで增加し、空心に溫酒、或は鹽湯で服す。その藥は常に火に近づけて置く必要があり、或は時にまた火で三五日養ふ。かくすれば功力が更に大なるものだ（經驗良方）

【陰陽二錬丹】世間で錬る秋石はただ火錬の一法だけだが、この藥は必ず陰陽二煉の方を兼ねて至藥となるのであつて、火煉したものは陽中の陰であり、火を得て凝り、水に入れれば釋けて形體がなくなる。蓋し質が去つて味が存するのだ。これは離中の虛である。水煉したものは陰中の陽であつて、水を得て凝り、曝せば潤ふて千

歳にも變らず、味が去つて質が留る。これは坎中の實である。この二物はいづれも心、腎の二臟から出て小腸に流れ、水、火、螣蛇、玄武の正氣が外に天地の水火を假りて凝つて體をなすものであつて、これを服すれば還つて太陽の相火を補するものだ。二臟は實に養命の本である。空心に陽煉を服し、正午に陰煉を服する。この法は存外普通の方法ほど手は懸らぬが、功用は比較にならない。久疾にこれを服すればみな癒える。ある人は瘦疾に罹り、且つ嗽し、諸種の方藥でも奏效しなかつたが、これを服して瘳えた。ある人は頭を病んで腹が鼓り、日久しくして喘滿を加へ、殆んど危篤に瀕したが、やはりこれを服して平安を得た。

〇陽煉法——人尿十餘石を各〻桶に盛り、每一石に皂莢汁一碗を入れ、竹杖で急に百千回攪ぜ、澄むを候つて淸を去り滓を留め、全部を一桶に集め、前の如く攪ぜ澄して濃汁一二斗を取り、濾淨して鍋に入れて熬り乾し、刮下して細に擣き、再び淸湯で煮化し、筲箕に紙を鋪いて淋過して再び熬り、かく數回繰返して雪のやうに白色になつたとき止め、沙盒に入れて固濟して火で煆いて固形となして傾け出す。もしなほ藥とならぬときは更に一二回煆いて色を瑩玉のやうにし、細研して砂盒に

入れ、固濟して頂火で七晝夜養つて取出し、土の上に攤して火毒を去り、末にして棗膏で桐子大の丸にし、三十丸づつを空心に溫酒で服す。

○陰煉法——人尿四五石を大缸に盛り、新水一半を入れて千回攪ぜ、澄んでから淸を去つて垽を留め、また新水を入れて攪ぜ澄し、かくて臭氣がなくなるまで澄して取下し、膩粉のやうになつたものを曝乾して刮り下し、再び研つて男子を產んだ母の乳で和して膏のやうにし、烈日で晒乾する。蓋しこれは太陽の眞氣を假るのである。かく九回して末にし、棗膏で和して梧子大の丸にし、每正午に三十丸づつを溫酒で服す。（葉石林水雲錄）

【秋氷乳粉丸】元陽を固くし、筋骨を壯にし、天年を延べ、老衰せず、あらゆる病を却ける。秋氷五錢、初產に男兒を產んだ母の乳を晒した粉五錢、初產に女兒を產んだ母の乳を晒した粉五錢、乳香二錢五分、麝香一分を末にし、煉蜜で芡子大の丸にして金箔を衣にかけ、烏金紙で包んで黃蠟の匱に收めて氣の洩れぬやうにし、每月乳汁で化して一丸を服し、かくて日に乳汁を飲んでその力を助ける。

○秋氷法——童男、童女の尿垽各一桶を大鍋中に入れ、桑柴火で熬り乾して刮り

下し、河水一桶に入れて攪ぜ化して紙を隔でて淋過し、復た熬つて刮下し、再び水で淋して錬る。かく七回繰返すとその色が霜のやうになり、或は一斤ほど取れることもある。それを罐に入れ、上を鐵燈盞で蓋ふて鹽泥で固濟して升騰させ、三炷香の時間を經て、秋石の色が玉のやうに白く見えるとき再び研り、再び前のやうに燈盞上で升騰し、水で徐徐に擦る。その場合多くしてはならぬ。多ければ結晶せぬものだ。少くしてもならぬ。少ければ升せぬものだ。かく辰の刻から未の刻に達して火を退けて冷ます。その盞上に升起したものが秋氷であつて、味は淡くして香しい。卽ち秋石の精英である。これを服すれば腎水を滋くし、元陽を固くし、痰火を降す。前記の場合に升騰せぬものは普通の秋石であつて、味は鹹く苦い。それを肉に蘸けて食つてもやはり小補がある。(楊氏顧貞堂經驗方)

【直指秋石丸】濁氣が淸を干し、精が散じて膏淋となり、黃、白、赤、黯にして肥膏、蜜、油のやうな狀態のものを治す。秋石、鹿角膠を炒り、桑螵蛸を炙き各半兩、白茯苓一兩と末にし、糕糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを人參湯で服す。(仁齋直指方)【秋石交感丹】白濁遺精を治す。秋石一兩、白茯苓五錢、兎絲子を炒つて五錢を

末にし、百沸湯一盞、井華水一盞で煮た糊で梧子大の丸にし、一百丸づつを鹽湯で服す。(鄭氏家傳方)【秋石四精丸】思慮、色欲の過度で心氣を損傷し、遺精し、小便數なるを治す。秋石、白茯苓各四兩、蓮肉、芡實各二兩を末にし、蒸棗肉で和して梧子大の丸にし、空心に三十丸づつを鹽湯で服す。(永類鈐方)【秋石五精丸】常服すれば補益する。秋石一兩、蓮肉六兩、眞川椒紅五錢、小茴香五錢、白茯苓二兩を末にし、棗肉で和して梧子大の丸にし、二十丸づつを鹽湯、溫酒で空心に服す。○秋石法――童男、童女の潔淨にして體氣に疾病なきものから、沐浴し衣を更へさせて各一石を聚める。潔淨なる飮食物、及び鹽湯を與へ、葱、蒜、韭、薑、辛辣のもの、羶腥のものを忌ませる。尿が缸に滿つるを待ち水で攪ぜ澄して人中白を取り、各〻陽城の瓦礶を用ゐて鹽泥で固濟して鐵線で縛り、一炷香の間火にかけ、その都度鐵線を換へて七回火をかけ、然る後に男のものと女のものとを秤つて平均に和して一處にして研り、河水に化して紙を七層にして濾過し、それを熬ると秋石になり、その色は雪のやうに白くなる。それを潔淨にして香しく濃き乳汁で和し、日中に晒し夜間に露して乾いたときは乳汁を添へ、かくて日精、月華を四十九日間取り、その日數

に達したとき取つて貯へて藥に調合する。（劉氏保壽堂經驗方）【腫脹して鹽を忌むもの】ただ秋石を飲食に拌ぜ、腫脹が消いてから、鹽を罐に入れて煆いて少しづつ用ゐる。（摘玄方）【赤、白帶下】眞秋石を研末し、蒸棗肉と擣いて梧子大の丸にし、六十丸づつを空心に醋湯で服す。（摘玄方）【噎食反胃】秋石一錢づつを白湯で服するが妙である。（醫方摘要）【丹を服して發熱したもの】ある人は、伏火丹藥を多く服して腦後に瘡が生じ、熱氣が冉冉として上つたが、ある道人に（一）風市に數十壯灸することを教へられて癒えた。しかし時に復た作つたが、又、陰煉秋石を大豆黃卷の煎湯で服することを教へられて遂に癒えた。その陰陽を和したのである。（王淸明餘話方）

淋石（宋嘉祐）

和名　りんせき
學名　Bladder stone.

【校正】玉石部より此に移し入る。

【集解】藏器曰く、これは石淋患者の尿中から出るもので、あだかも小石のやうなものだ。それを取收めて用ゐるのである。

（一）風市ハ風府ノ誤、經穴ノ名、腦後ニアリ。

時珍曰く、これは淫慾の人の精氣が鬱結し、陰火が煎熬して遂に堅質となつたもので、正に滾水が鹼を結し、鹵水を煎じると鹽となり、小便を煉つて秋石となると同一關係だ。

〔氣味〕【鹹し、溫にして毒なし】〔主治〕【石淋を水に磨つて服すれば、砕石が溺に隨つて出るものである】（大明）【噎病吐食。俗に澀飯病と名ける】（藏器）

癖石（綱目）

和名　ひとのはらのなかのいし
學名　Calculus in the human body.

〔集解〕時珍曰く、人間が專心すると癖となり、それが癥塊を病むやうになれば凝結して石となるものだ。牛黃、狗寶、鮓答の類の如きはいづれも諸獸の病である。かの星が隕ちて石となり、沙淋、石淋、及び釋氏の顱顖が結して舍利子となるはいづれも精氣が凝結する結果である。故に格物論に『石は氣の核だ』とある。羣くの書に記載されてある寶圭が石に化し、老樹が石に化したといふやうなものは、いづれも無情が變異したもの、魚、蛇、蝦、蟹がみな能く石に化するは有情の變異で

ある。世說の記載に、貞婦が山に登り夫を望んで石となつたとあるは、蓋し志一にして分たず、それで無情に入つたものだ。宋史の記載に、石工が石を採る際に石穴に陷入し、三年經つて掘り出したときはさながら活けるもののやうであつたが、風に當ると遂に化して石になつたとあるは、蓋し石氣を呑納することが久しくして、そのために倶に化したものだ。かやうに人間の生ける形體すら全く石に化するとすれば、頑心癥癖の石に化するも當然なことである。程子遺書に『波斯人が古墓を發掘したとき、肌膚がすべて盡きてただ心だけが石のやうに堅くなつたものが現れた。鋸で切開いて見ると、中には畫いたやうな山水があつて、旁に一女子が欄に凭つて眺め入つてゐるのであつた。蓋しこの女は山水を愛する癖があつて、それがかやうに融結したのだ』とある。宋濂は『ある僧は(一)大般三昧の法を行つてゐたが、示寂後火葬すると、心だけが化せずして、佛像のやうな狀態で金でも石でもないものになつてゐた。又、ある者は禪觀の法を行つてゐたが、死後火葬すると心の中に完全な觀音像が包まれてあつた』といつた。醫書には『ある者が癥を病み、死後火葬すると石のやうな塊があつた』とある。これはいづれも癥癖が頑凝して石と成つ

(一)大般ハ般舟ノ誤。

た事蹟である。故に併せて此に記録する。

主治　【堅癖を消し、噎膈を治す】（時珍）

乳汁（別録）

和名　ちちしる
學名　Human milk.

釋名　**嬭汁**（綱目）　**仙人酒**　時珍曰く、乳なるものは化の信である。故に文字は孚化に從ふ省文だ。方術家ではその名を隱して、仙人酒とか、生人血とか、白硃砂などの種種の名稱をつけてある。蓋し乳なるものは陰血の變化したもので、脾、胃に生じて衝任に攝し、また受胎せぬうちは下つて月經となり、受胎すると留つて胎兒の營養となり、出産すれば赤が白に變じて上に乳汁となつて出るのであつて、これは造化玄微の自然の妙である。邪術家は處女を不自然に採んで乳を取り、月經を反して乳に造るなど、諸種の如何はしき名稱や方法を言ひふらして貪愚の者を誑すが、それはみな妖人の所爲であつて、王法の誅するところ、君子の當に斥くべきものである。凡そ藥に入れるには、いづれも初産の男兒を産んだ無病の

婦人の乳の白くして稠きものを取るが佳し。色の黃赤なるもの、淸んで腥穢なるもの、涎の如きものならばいづれも用ゐてはならぬ。妊娠中に出る乳は忌嬭といふ。小兒がそれを飮めば吐瀉して疳鬾の病となる。最も有毒なものである。

【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】大明曰く、涼なり。【主治】【五臟を補し、人をして肥白にして悅澤ならしめ、目赤痛で淚多きを療ず。(一)獨肝牛の肉の毒を解するには、濃豉汁と合せて服するが神效がある】(別錄)【雀屎を和すれば目中の弩肉を去る】(蘇恭)【氣を益し、瘦悴を治し、皮膚を悅くし、毛髮を潤ほす。眼に點ければ淚を止める】(大明)

【發明】弘景曰く、漢の張蒼は年老いて齒が無かつたが、妻妾百數人を置き、常に人乳を服した。故に百歲餘にして身體が瓠のやうに肥えてゐた。

宗奭曰く、人乳汁が目を治するの功多きは何故かといへば、人は心が血を生じ、肝が血を藏し、脾が血を受けて視力が生ずるのだ。蓋し水が經に入つて血に成るのである。又曰く、上には乳汁となり、下には月水となる。故に乳汁は血なることが了解される。これを眼に點けるのだから當然相宜しかるべきわけではないか。血は

(一)猨猴ノ屬ニ狨獨アリ、獨肝ハ之ヲ指スカ。

陰なるものだから性は冷である。臟寒の人は乳餅、酥・酪の類の如きは多く食つてはならぬ。牛、羊の乳でもやはり陰陽の造化の外に出ないわけだ。老人にして口瘡を患つて飲食不能なるものは、ただ人の熱乳を飲むが甚だ良し。

時珍曰く、人乳には定性がない。その人が平和にして飲食が冲淡であればその乳は必ず平である。その人が暴躁にして酒を飲み、辛を食ひ、或は火病があればその乳は必ず熱である。凡そ乳を服するには必ず熱飲すべきもので、晒曝して粉にして藥に入れるならば就中佳し。南史に『宋の何尙之は積年の勞病であつたが、婦人の乳を飲んで瘥えた』と記載してあり、又『穰城に年二百四十歳の老人があつたが、ただ曾孫の嫁の乳を飲んでゐた』といつてある。按ずるに、白飛霞の醫通に『人乳を服すれば大いに能く心氣を益し、腦髓を補し、消渇を止め、風火の證を治す。老を養ふに適するやうである。一吸每に紙で鼻孔を塞ぎ、唇を按して齒に貼け、乳を漱して口津と相和し、然る後に氣を鼻中から明堂より腦に入らしめて徐徐に嚥下し、かく一回に五七吸する。漱せずして吸んでは、酪を飲んで腸、胃に止るに少しも異らない』とある。

(二)重樓ハ臟腑ヲ指ス、菜蔬ノ下ニアリ。

【附　方】　舊三、新十二。【服乳の歌】仙家酒、仙家酒、兩箇の壺盧に一斗を盛る。五行釀出す眞醍醐、人間を離れず處處に有り。丹田若し是れ乾涸する時は、嚥下せば(二)重樓の枯朽を潤ほす。淸晨に能く一升を飮まば、老を返し童に還して天地久し。

【虛損勞瘵】德生丹——無病の婦人の乳三酒盃を用ゐ、磁碟を晒して極熱してその中に乳を入れ、次に麝香末少量、木香末二分を入れて調勻して服す。服し畢ると顏と膝が倶に赤くなり、醉ひるが如くにして唾を思ふものだ。ただ白粥を少しづつ食つて養ふ。(集簡方)【虛損風疾】接命丹——男子、婦人の氣血衰弱、痰火上升、虛損の證を治す。又、中風不語、左癱右緩、手、足疼痛、動履不便、飮食慾減少の諸證を治す。人乳二盃——香しく甜く白きものを佳しとす——を用ゐ、好き梨汁一盃を和勻し、銀、石器に入れて頓に滾らし、毎日五更に一服する。能く痰を消し、虛を補し、血を生じ、壽命を延べる。これは人を以て人を補するのであつて、その妙これに及ぶものはない。(攝生衆妙方)【中風不語】舌根が强硬せるものには、三年の陳醬五合、人乳汁五合を相和して硏り、生布で汁を絞り、隨時に少しづつ與へて服ませる。良久して發語するものだ。(聖惠方)【卒に言語不能のもの】人乳半合、美酒半升を和

して服す。(范汪方)【失音不語】人乳、竹瀝各二合を温服する。(摘玄)【月經不通】日に人乳三合を飮む。(千金方)【眼熱赤腫】人乳半合、古銅錢十文を銅器中で磨つて變色せしめ、稀稠適度の煎にして瓶に貯へ、日に數囘點ける。或は乳に黄連を浸し、蒸熱して洗ふ。(聖惠方)【初生兒の尿せぬもの】人乳四合、葱白一寸を煎滾し、四囘に分服すれば利す。(劉涓子鬼遺方)【初生兒の吐乳】人乳二合、(三)蘧篨篦少量、鹽を粟二粒ほどを共に煎沸し、牛黄を米粒ほど入れて與へて服ます。(劉涓子鬼遺方)【癰の膿の出ぬもの】人乳汁で麪を和して傅ける。曉方になると膿が手を觸れられぬほど出て出盡る。(千金方)【臁脛に生じた瘡】人乳、桐油等分を和勻し、鵝翎で掃いて塗る。神效がある。(摘玄)【蛇を噉ふ牛の毒】蛇を噉ふ牛は毛髮が後に向ふもので、その肉は人を殺す。ただ人乳汁一升を飮めば立ろに癒える。(金匱要略)【牛、馬の中毒】人乳を飮むが良し。(千金)【あらゆる蟲が耳に入りたるとき】人乳を滴らせば直ちに出る。(聖惠方)

(三)蘧篨篦ハ竹ムシロノ竹片ニ云フ。

婦人月水（宋嘉祐）

和名　さはり、一名つきのみづ
學名　Menstrual discharge.

——月經衣を附す——

【釋名】　**月經**（素問）　**天癸**（素問）　**紅鉛**　時珍曰く、女子は陰類であつて、血を以て主とする。その血は上は太陰に應じ、下は海潮に應ずる。月には盈虧があり、潮には朝夕があり、月事の一月に一回行ると相符合するものだ。故にこれを月水、月信、月經といふ。經は常であつて常軌があるといふ意味だ。天癸とは天一の生ずる水である。邪術家がこれを紅鉛といふは出鱈目の名稱だ。婦人の經は一个月に一回行るが常態であつて、或は先じ、或は後れ、或は通じ、或は塞るは病である。しかしまた異常變態の者もあるので、古人はいづれも言及してないが、心得て置かねばならぬことだ。行期にただ吐血し、衄血し、或は眼、耳から出血するだけのものがある。これは逆行といふものだ。三个月に一回行るものがある。これは居經といふもので、俗に按季と名ける。一年に一回行るものがある。これは避年といふものだ。一生行らずして受胎するものがある。これは暗經といふものだ。受胎後にも

毎月行經があつて子を產むものがある。これは盛胎といひ、俗に垢胎と名ける。受胎後數月にして血が忽ち大いに下つて胎の隕はぬものがある。これは漏胎といふものだ。これ等は氣血の有餘、不足として取扱はれてゐるが、やはり異常である。婦人は十四歲にして天癸が初めて來り、四十九歲にして天癸が絕えるが通常であるが、楮記室所載の、平江の蘇達卿の女は十二で懷妊したといふやうに、十二、十三の女が子を產むこともあり、遼史所載の、丞普の妻は六十餘で二男、一女を生んだといふやうに、五十、六十で子を產む婦人もある。これ等はまた異常中での尤なるものだ。醫を學ぶものはかやうなものをも取扱ふ場合のあることに留心せねばならぬ。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】【主治】【毒箭、幷に女勞復を解す】（弘景）

（一）月經衣【主治】【金瘡の血の湧出するには、炙き熱して熨す。又（二）、虎、狼の傷、及び箭鏃の腹に入りたるに主效がある】（藏器）

【發明】時珍曰く、婦人が月經期に入れば惡液で腥穢になる。故に君子はこれを遠ける。それはその不潔のために能く陽を損じ、病を生ずるからであつて、膏を煎じ、藥を修治する場合、痘が出た場合、持戒の人、性命を修鍊する人がいづれも

（一）大觀ニ月字ナシ。
（二）大觀ニ又字下ニ燒末傅ノ三字アリテ主字ナシ、

これを忌避するもそのためである。博物志に『(三)扶南國に奇術があつて、その術を行ふと刀で斫つても刃が入らなくなるが、ただ月水を刀に塗るとその斫られた人が死ぬ。これは穢液が人の神氣を壞るからだ。故に藥を合せるにはこれに觸れることを忌む』とあつて、この說は甚だ據るところがある。當今の方士は邪術で愚人を誑し、その法で童女の初行の經水を取つて服食し、先天紅鉛といふものだなど巧みに名稱を付し、多くの方に配合して、參同契にある金華、悟眞篇にある首經はいづれもこの物だなどといひ、愚人はそれを信じ、穢滓を祕方と思つて呑嚥してゐるが、往往にして丹瘮を發出する。殊に嘆くべく、惡むべきことである。按ずるに、蕭了の眞金丹の詩に『一等の(四)旁門、性淫を好み、强陽に復た去つて他の陰を採る。口に天癸を含んで稱して藥となし、似恁く洳沮として枉て用心す』とある。嗚呼、愚人はこれを觀て自ら悟るがよい。凡そ紅鉛の方は、本書にはいづれも採錄せぬ。

附方　舊七、新五。

【熱病勞復】男子が熱病後に交接して再發し、忽ち卵縮して腸に入り、腸痛して死せんとするには、婦人月經の赤衣を燒いて末にし、熟水で方寸匕を服すれば定まる。(扁鵲方)【女勞黃疸】呼吸短く、聲沈むには、婦人月經を

(三)扶南國ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四)旁門トハ異端ト言フガ如シト云フ。

血衣に和して燒灰し、一日二囘、方寸匕を酒で服す。三日にして瘥える。(孟詵必効方)【霍亂困篤】童女の月經衣を血共に灰に燒き、方寸匕を酒で服す。あらゆる方で瘥えぬものに用ゐる。(千金方)【小兒の驚癇】發熱するには、月候血を取つて靑黛を和し、一錢を水で調へて服す。口に入れば瘥える。その兒の大小を量つて加減する。(聖惠方)【婦人をして嫉妬せしめぬ法】婦人の月水衣に蝦蟇を裹み、厠の前一尺の地に五寸深さに埋める。(張華博物志)【癰疽發背】一切の腫毒。胡燕窠土、鼠坌土、楡白皮、栝樓根等分を末にし、婦人月經衣を水で洗つてその汁で和し、腫上に傅けて乾けば易へる。潰れたものはその四圍を封ずる。五日にして瘥える。(千金方)【男子の陰瘡】月經中を忌まずして房事を行ひ、陰物の潰爛せるには、處女の血衣を瓦上で燒いて性を存して研末し、麻油で調へて傅ける。【藥箭の毒を解す】交州の夷人は焦銅で毒藥を作り、それを鏃鋒につける、その箭に中れば沸爛して須臾に骨が壞れるものだ。ただ月水、屎汁を服すれば解す。(博物志)【箭鏃が腹に入りたるとき】或は肉中に聚血あるには、婦人月經衣を灰に燒き、方寸匕を酒で服す。(千金方)【馬血が瘡に入りたるとき】【剝馬刺傷】婦人の月水を塗るが神效がある。(姚僧坦集驗方)

【虎、狼の傷瘡】月經衣を燒いて末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。（陳藏器）

人血（拾遺）

和名　ひとのち、一名のり
英名　Human blood.

【集解】時珍曰く、血はやはり水のやうなもので、水、穀が中焦に入つて泌別し、薰蒸してその精微を化し、上に肺に注いで中に流溢し、外に布散し、中焦に汁を受けて變化して赤くなり、隧道に行つて全身にその力を及ぼす、これが血である、命けて營氣といふ。血と氣とは名を異にして類を同うするもので、淸めるものは營といひ、濁れるものは衞といふ。營は陰に行り、衞は陽に行り、氣は煦むることを主り、血は濡らすことを主る。血は、體は水に屬し、火を以て用となすものだ。故に『氣は血の帥なり』といふのであつて、氣が升れば升り、氣が降れば降り、氣が熱すれば行り、氣が寒すれば凝り、火が活すれば紅くなり、火が死すれば黑くなり、邪が陽經を犯せば上逆し、邪が陰經を犯せば下流する。蓋し人身の血はみな脾に生じ、心に攝し、肝に藏し、肺に布いて腎に施化するものである。仙家で

これを煉つて化して白汁とするは、陰盡きて陽の純なるものとなるのだ。萇弘が忠死したとき、血が化して碧となつたこと、人血が土に入つて年久しく經てば燐となることは、いづれも精靈の極である。

【氣味】【鹹し、平にして毒あり】【主治】【羸病の人にして皮、肉が乾枯し、身上に麩片が起るもの、又、狂犬の咬傷で寒熱して發せんとするものには、いづれも血を刺し取つて熱飮する】(藏器)

【發明】時珍曰く、肉乾き麩起るは燥病であつて、卒かに潤してはならぬ。人血を飮んで潤ほすといふけれども、人の血は刺し取れるわけに行くものでない。そもそも燥を潤し、狂犬を治する藥は他に夥しくあるものだ。この物に限つたわけはない筈である。この方の創始者は甚しい殘忍な人だ。恐らく子孫が續かぬであらう。虐兵殘賊の更に殘忍の甚しきものには、酒に人血を入れて飮むものもあるが、それは天罰を免れぬ人間で、必ずその報を受くべき者共だから責めるまでもない。血を用ゐた諸方のうち、ただ理に悖らぬものだけを下に收附する。

【附方】新六。【吐血の止まぬもの】その吐出した血塊を取り、黑く炒つて末

にし、三分づつを麥門冬湯で調へて服す。蓋し血は元に歸せねば積つて上逆するものだ。血を以て血を導き、元に歸すれば止むのである。（吳球諸證辨疑）【衄血の止まぬもの】聖濟總錄では、白紙一枚に一面に衄血を承けて取り、（一）燈上で灰に燒いてそれを一服とし、新汲水で服す。用ゐたことをその病人に知らしてはならぬ。○儒門事親では、本人の衄血を紙撚に蘸けて眼中に點ける。左には右に點け、右には左に點ける。この法は大いに妙である。【金瘡內漏】瘡中から出た血を取つて水で和して服す。（千金）【產乳血運】釅酷に產婦の血を和し、棗の大いさほどを服す。（聖惠方）【小兒の赤疵】父の脚中から血を取つて貼れば落ちる。（千金方）【小兒の疣目】針でその四邊を決り、患瘡の膿汁を取つて傅ける。水を忌む。三日にして潰れ落ちる。（千金）

人精（宋嘉祐）

和名　ひとのせいえき
英名　Semen.

【集解】時珍曰く、營氣の粹は化して精となつて命門に聚る。命門は精血の府であつて、男子は二十四歲にして精が一升六合に滿つる。養つて充實すれば三升ま

（一）燈ハ登ノ誤ナラン、登ハ瓦缶ナリ。

でになるが、損して喪つても一升までにはならぬ。精を髄といふは、精は血に非ざれば化せぬものだからである。精を寶といふは、精は氣に非ざれば養へぬものだからである。故に血が盛なれば精が長じ、氣が聚れば精が盈つる。邪術家は愚人を誑すに、童女と交姤せしめて女の精液を飲ましめ、或は己の精にその天癸を和して呑嚥し服食せしめ、それを鉛汞と呼び、祕方としてゐる。放恣、貪淫にして穢滓を甘じ、その天年を促めるは愚の甚しいものだ。誰を尤めやうわけもない。按ずるに、鮑景翔は『神は氣の主であつて、神が動けば氣がそれに隨ひ、氣は水の母であつて、氣が聚れば水が生ずる。故に人の一身に貪心が動けば津が生じ、哀心が動けば涙が生じ、愧心が動けば汗が生じ、慾心が動けば精が生するのだ』といつた。

氣味 【甘し、溫なり】 主治 【鷹屎を和すれば瘢を滅する】(弘景) 【金瘡出血、湯火瘡に塗る】(時珍)

附方 舊三、新一。【面上の黶子】人精で鷹屎白を和して塗る。數日にして癒える。(千金方) 【身、面の粉瘤】人精一合を青竹筒に盛つて火上で燒き、その汁を器に承けて取つて器中に密封し、數〻塗り、效を取つて止める。(肘後方) 【瘰癧腫毒】婦人

の精汁を頻りに塗る。【湯火傷灼】痛まず、癒え易く、痕を無くする。肘後では、人精、鷹屎白を用ゐて日毎に塗る。○千金では、婦人の精汁を頻りに塗る。

口津唾（綱目）

和名　つば、一名つばき
英名　Saliva.

【釋名】靈液（綱目）神水（綱目）金漿（綱目）醴泉　時珍曰く、人の舌下には四竅あつて、二竅は心氣を通じ、二竅は腎液を通じ、心氣は舌下に流下して神水となり、腎液は舌下に流入して靈液となる。道家ではこれを金漿、玉醴といふ。溢れては醴泉となり、聚つては華池となり、散じては津液となり、降つては甘露となり、それが臟腑を灌漑し、肢體を潤澤する結果となる。故に修養家では、津を嚥み氣を納めるを淸水が靈根に灌ぐといふ。人は、能く終日唾せねば精氣が常に留つて顏色が槁れぬ。若し久しく唾するならば、精氣を損じて肺病となり、皮膚が枯涸する。故に遠唾は近唾に如かず、近唾は唾せざるに如かずといふのである。人に病あるときは、心、腎の働が交渉せずして腎水が上らなくなるところから、津液が乾い

て眞氣が耗するのである。秦越人の難經には『腎は五液を主り、肝に入つては涙となり、肺に入つては涕となり、肝に入つては涎となり、心に入つては汗となり、それ自らの臟に入つては唾となる』といつてある。

〔氣味〕【甘く鹹し、平にして毒なし】〔主治〕【瘡腫、疥癬、皶皰には、五更にまた物言はぬ時の唾を頻りに塗擦する。又、目を明にし、瞖を退け、腫を消し、毒を解し、邪を辟け、水銀を粉にする】（時珍）

〔發明〕時珍曰く、唾津は人の精氣が變化したものだ。誰人でも毎朝口を漱で齒を擦り、津で目を洗ひ、また常時に舌で拇指を舐めてそれで目を揩れば、久くして光明にして昏まない。又、能く瞖を退ける。凡そ雲瞖ある人は、ただ毎日人に舌で數回舐めさせれば、久くして眞氣が薫じ、また自然に毒が散じて瞖が退く。范東陽の方に『凡そ人が魘死した場合には、呼び叫んではならぬ。ただ痛く脚跟、及び拇指の甲際を咬み、多くその面に唾し、徐徐に喚べば自ら意識が囘復する』とある。按ずるに、黄震の日抄に『晉の時、南陽の宗定伯が鬼に遇つたとき、何者かと訊ねると「自分は新死鬼だ」と答へた。「何が惡ひか」と訊ねると「唾が好きでな

いだけだ」と答へた。急にそれを捉へると化して羊になつた。恐らくそれは變化のものであつたらしい。そこで大いに唾し、それを賣つて千錢を得たといふ。これで見ると鬼は眞に唾を畏れるものらしい』とある。

附方　新四。【代指腫痛】唾に白硇砂を和して麪を捜ぜて椀子に作り、それに唾を盛り滿て、硇末少量を著けて指を浸す。一日にして瘥える。(千金方)【手、足の發疣】白粱米粉を鐵鐺で赤く炒つて研末し、衆人の唾で和して一寸厚さに傅ければ消く、(肘後方)【腋下狐氣】自己の唾を腋下に擦り、數回擦つてから指甲でその垢を去り、熱水で數回手を洗ふ。かくすれば十餘日で癒える。【毒蛇の螫傷】急に小便で血を洗ひ去り、直ちに口中の唾を取つて頻りに塗る。(楊拱醫方摘要)

齒垽　居近の切(キン)と發音する。(宋嘉祐)　和名　はかす、一名はくそ　英名 Tartar.

釋名　**齒垢**

氣味　【鹹し、溫にして毒なし】　主治　【黒蝨に和して研つて塗れば、箭

頭、及び惡刺を出し、癰腫を破る】(蘇恭)【蜂螫に塗る】(時珍)

【附方】新二。【竹木の肉に入りたるとき】針で撥いて盡きぬものには、人齒垢で封ずる。それで爛れぬものだ。(葉氏通變要法)【毒蛇の螫傷】先づ小便で血を洗ひ去り、次に牙垽で封じて護る。甚だ妙なるもので、且つ痛腫せぬ。(醫方摘要)

人汗(綱目)

和名　ひとのあせ
英名　Sweat.

【集解】時珍曰く、汗は心に出て、内に在つては血となり、外に在つては汗となる。故に『汗を奪へば血なく、血を奪へば汗無し』といふのである。

【氣味】【鹹し、毒あり。飲食にこれを食へば人をして疔毒を生ぜしめる】(時珍)

眼涙(綱目)

和名　なんだ、一名なみだ
學名　A tear.

【集解】時珍曰く、涙は肝の液である。五臟、六腑の津液はみな上に目に滲す

るもので、凡そ悲、哀、笑、欬すれば火が中に激し、心の系が急して臓、腑がみな搖き、搖けば宗脈が感じて液道が開け、津が上に溢れるから涕泣が出るのであつて、あたかも甑上の水が滴るやうな關係である。

【氣味】【鹹し、毒あり。凡そ母が哭して泣を子の目に墮せば、子をして睛を傷め、瞖を生ぜしめる】(時珍)

人氣（綱目）

和名　ひとのいき
英名　Breath.

【主治】【下元の虛冷には、日に童男女をして、一定時に衣を隔て氣を臍中に進めしめるが甚だ良し。凡そ人の身體、骨節の痺痛するには、人をして更互に(一)呵熨せしめれば、久くして經絡が通透する。又、鼻衄、金瘡には、それを噓すれば能く血を斷たしめる】(時珍)

【發明】時珍曰く、醫家の所謂、元氣、相火、仙家の所謂、元陽、眞火は同一であつて、天はこの火に非ざれば物を生ずること能はず、人はこの火に非ざれば生

(一)呵熨トハ口ヲ近ケテ熱氣ヲ吐キカケテ暖メルコトナリ。

（二）群書拾唾ニ云、上丹田ハ眉間、中丹田ハ胸、下丹田ハ臍下ナリ。

を有すること能はざるものだ。故に老人、虛人は、十四歳以前の少い女と共に寢てその薰蒸を藉るが最も有益である。杜甫の詩に『老を暖むるは燕玉に須つ』とは正にこの意味である。但し淫を行つて寶を喪ひ生を促めてはならないだけである。近頃、術家では童女をして氣を進めて鼻竅、臍中、精門に入れて（二）三田に通ぜしめ、それを接補と稱してゐる。これも一種の低級な方法だが、その方法が的正でなければ反つて疾を惹き起すことになる。按ずるに、謝承の續漢書に『大醫史循が禁中に宿直の時、寒疝の病が發し、火を求めたが折柄火がなかつたので、衆人が口で更互にその背に嘘した。すると翌朝までに遂に癒えた』とあり、劉敬叔の異苑には『孫家の奴隷は、虎傷、蛇噬で死に垂たるものを治するに氣を以て禁つたが、みな平安を得た』とある。又、葛洪の抱朴子に『人は氣の中に在り、氣は人の中に在る。天地萬物は氣を須つて以て生ぜぬはない。善く氣を行ふものは、内は以て身を養ひ、外は以て惡を卻ける。しかしこれを行ふには法があるので、子の刻から巳の刻までを生氣の時といひ、午の刻から亥の刻までを死氣の時といふ。常に生氣の時を以て鼻中に氣を引いて入れ、多く出し少く閉ぢてこれを數へ、九九、八八、七七、六

六、五五の數の順に數へて止め、そこで微に吐く。耳に聞えるやうにしてはならぬ。これを習つて自由に出來るやうになつたならば千數まで增して數へる。これを胎息といふ。或は、春は東方の青氣を食ひ、夏は南方の赤氣を食ひ、秋は西方の白氣を食ひ、冬は北方の黑氣を食ひ、四季を通じて中央の黃氣を食ふもまた大いに效がある。故に善く氣を行ふものは、以て飢渴を避くべく、以て年命を延ぶべく、以て水上を行くべく、以て水中に居るべく、以て百病を治すべく、以て瘟疫を去るべく、氣を以て水を噓すれば水が逆流し、火を噓すれば火が遙滅し、沸湯を噓すればその湯を手で探ることが出來、金瘡を噓すれば血が自ら止み、兵刃を噓すれば刺しても入らなくなり、箭矢を噓すれば矢が反つて自を射り、犬を噓すれば吠えず、虎、狼を噓すれば伏して退き、蛇、蜂を噓すれば動かなくなる。吳越のある禁咒行氣の法は、大疫の患者と同牀に臥しても傳染せず、精魅ある者に遇ひ、或は聲を聞き、或は形を現し、石を擲ち、火を放たれても、これを禁ずればみな自ら絕える。或は毒蛇に傷けられてもこれを噓すれば癒える。百里を隔てた處に在つても遙に我が手を以て男は左、女は右を噓呪すれば平安を得る。そもそも氣は無形に出でるものだ

が、その效はかやうなものである。況や穀を絶ち、天年を延べるをや』とある。予（時珍）が按ずるに、これは吾が徒の浩然の靈氣を內に養ふといふことであつて、符篆家が祖氣を取るといふはこの法をいふのである。但し彼等の徒はいづれも氣餒せる庸人である。ただ眞似事をした位では、到底さやうな效驗のありさうなことはない。

人魄（綱目）

和名　ひとのたましひ
英名　Human spirit.

［釋名］　時珍曰く、これは縊死者の直下にある麩炭のやうなもので、即時に掘り取れば手に入るものだが、やや遲れると深く入つて了ふものだ。掘らずに置くと必ず再び縊死者を出す。蓋し人は陰、陽の二氣を受けて形體を合成し、魂、魄が聚つて生るのであつて、散ずれば死ぬ。死ねば魂は天に昇り、魄は地に降るのである。魄は陰に屬し、その精が沈淪して地に入り、化してこの物となるのだ。やはり星が隕ちて石となり、虎が死ぬと目光が地に墜ちて化して白石となり、人血が地に入つて燐となり碧となるやうな關係である。

〔主　治〕【心を鎭め、神魄を安ずる。驚怖、顚狂を定めるには、水に磨つて服す】（時珍）

髭（一）鬚（證類）

和名　ひげ
英名　Beard.

〔釋　名〕時珍曰く、脣上にあるを髭といひ、頤下にあるを鬚といひ、兩頰にあるを髯といふ。詳細は亂髮の條を見よ。

〔主　治〕【燒き研つて癰瘡に傅ける】（愼微）

〔發　明〕愼微曰く、唐の李勣が病んだとき、醫師が『鬚灰を取つて服すれば止む』といつた。太宗皇帝はそれを聞いて、遂に自ら髭を剪つて灰に燒き、それを賜はつて服ませ、また癰に傅けさせたので立ろに癒えた。故に白樂天の詩に『鬚を剪り藥に燒いて功臣に賜ふ』といふ句がある。又、宋の呂夷簡が疾んだとき、仁宗皇帝は『古人は、髭、疾を治すべしといつたさうだ。今、朕も髭を剪つて與へ、藥に合はせて朕が意を表はさう』といはれた。

（一）髭ハ鼻下ノひげ。鬚ハあごノ下ノひげ。

陰毛（拾遺）

和名 いんぶのけ
英名 Hair of the sexual organ.

【主治】【男子の陰毛は蛇咬に主效がある。口に二十條を含んで汁を嚥めば、毒を腹に入らしめない】（藏器）【横產、逆產には、夫の陰毛十四莖を燒いて研り、豬膏で和して大豆大の丸にして呑む】（千金方）【婦人の陰毛は五淋、及び陰陽易病に主效がある】（時珍）

【附方】新二。【陰陽易病】病後の交接で卵腫し、或は腹に縮入して絞痛し、死せんとするには、婦人の陰毛を灰に燒いて飲服し、同時に陰を洗つた水を飲む。（聖濟總錄）【牛の脹病で死せんとするもの】婦人の陰毛を草に裹んで與へて食はせれば癒える。（外臺祕要）

人骨（拾遺）

和名 ひとのほね
英名 Human bones.

【釋名】時珍曰く、許愼は『骨は肉の核である』といつた。靈樞經には『腎は

骨を主る』といひ、骨度篇といふがあつて、骨の大小、長短、廣狹を甚だ詳細に論じてある。原本を見よ。

【主治】【骨病、接骨、臁瘡。いづれも焚き棄てたものを取る】（藏器）

【發明】時珍曰く、古人は暴された骨を掩ふてやることを仁德として、毎に陰報を獲たものであるが、方伎者流は利欲の心から人骨を收めて藥餌とする。仁術はさやうなものではあるまい。且つ犬も犬の骨をば食はないのである。しかるに人が人の骨を食ふとは何たることであらう。父の白骨には肉親の子が血を刺して瀝せば滲み込むといふ。又、酉陽雜俎に『荊州で、ある者が脛を損じたとき、張七政が藥酒で麻醉させて肉を破つて骨一片を取り去り、膏を塗つてやるとそれで癒えた。ところが二年經つて復た痛むといひ出したが、その時、張は「それは取り去つた骨が寒えたのだ」といひ、その骨を尋ねさせるとまだ牀下にあつたので、湯で洗つて綿で裹んで收めさせると、痛は遂に止んだ』とある。氣の相應ずることはかやうなものである。枯骨知なしといかで言へやうぞ。心ある人は十分考ふべきことである。

【附方】新四。【（一）代杖】人骨を燒いて末にし、空心に三錢を酒で服すれば、

（一）代杖トハ杖刑ヲ

受ケテモ損傷セヌ方法。

一泥丸ハ頭ヲ指ス。

杖刑を受けても腫れず、瘡とならぬ。久しく服すれば皮もやはり厚くなる。（醫林集要）【接骨】燒いた童子の骨一兩、乳香二錢、喜紅絹一寸四方を灰に燒いて末にし、熱酒で調へて服す。豫め桐木片で扎定して置く。立ろに效がある。（醫林集要）【臁瘡】燒いた人骨の碎けたものを末にして摻る。（壽域神方）【折傷】死んだ童子の骨を煆き、香瓜子仁を炒り乾し、末にして好酒で服す。痛を止めること極めて速だ。（扶壽精方）

天靈蓋（宋開寶）

和名　しやれかうべ
英名　Bones of the human skull.

【釋名】腦蓋骨（綱目）仙人蓋（綱目）頭顱骨　志曰く、これは死人の頂骨の十字に解けたもののことで、方家でその名を婉曲に呼んだだけだ。

藏器曰く、これは天生、天賜のものだ。一身の骨を蓋押するもので、顖門の未だ合はぬものはないのである。

時珍曰く、人の頭は圓なること蓋の如く、穹窿にして天に象り、(一)泥丸の宮、神靈の集るところである。修煉家では『坎を取つて離を補し、その純乾に復して聖胎

囟成すれば顱顖を開いて出入する』といふ。故に天靈蓋などの諸名があるのだ。

【發明】藏器曰く、凡て腐爛したものを用ゐるほど佳いものである。三指ほどの濶さの一片を拾ひ取り、煻灰火に一夜罨ひ、腥穢の氣が盡きてから、童尿で甆鍋子中に入れて一伏時煮て漉し出し、屋根下に深さ一尺の一坑を掘つてその中に骨を一伏時置く。かくすれば藥魂が歸して神妙である。陽人には陰人のものを使ひ、陰人には陽人のものを使ふ。

好古曰く、方家では、檀香湯で洗つて酥で炙いて用ゐることもあり、或は燒いて性を存して用ゐることもある。男の骨は色が赤くならぬが、女の骨は色が赤いからそれで見別がつく。

【氣味】【鹹し、平にして毒なし】時珍曰く、毒あり。【主治】【傳尸、尸疰、鬼氣、伏連、久瘴、勞瘧で寒熱時なきものには、燒いて黑くして研細し、白飲で和して服す。やはり丸、散に合せて用ゐる】(開寶)【肺痿、乏力、羸瘦、骨蒸、盜汗等を治す。酥で炙いて用ゐる】(大明)【心經の蘊寒の氣を退ける】(本草權度)

【發明】楊士瀛曰く、天靈蓋は尸疰を治す。尸疰は鬼氣であつて、伏してまだ

起たないものだ。故に淹纏せしめるのである。枯骸枕骨を得て治すれば、魂氣が飛越して復た人に附かないから瘥えるのである。

陳承曰く、神農本經には、人部にただ髮髲の一物を掲げただけである。その他はみな後世の醫家や、或は禁術者流、奇怪なる者共が始めたものだ。近ごろ醫家で天靈蓋を用ゐて傳尸病を治するものを見るが、一も效のあつたためしはない。殘忍にして神を傷ることだ。全然有識者の考ふべきことではない。苟もそれに易へられるものがあるならば、識者としては飽くまでもその方面に心を盡すべきものであつて、それでもなほ必ず已むを得ぬ場合ならば、年深く漬朽して尸氣の絶無になつたものを用ゐるは差閊あるまい。

附方 舊一、新十。【天靈蓋散】勞蟲を追ひ取る。天靈蓋を二指の大いさほどを取つて檀香の煎湯で洗ひ、酥で炙き、一氣に『雷公神電母聖逢傳尸便須定急急如律令』と七遍咒を唱ひ、尖檳榔五箇、阿魏二分、麝香三分、辰砂一分、安息香三分、甘遂三分と末にして毎服三錢を用ゐ、童尿四升を銀、石器に入れ、葱白、薤白各十四莖、青蒿二握、桃枝、甘草各五寸長さのもの二莖、柳枝、桑枝、酸榴枝各七寸長

さのもの二莖と共に一升までに煎じ、それを二回に分け、五更の初刻に前の藥を調へて服す。一服で蟲が下らぬときは、約そ人が六十丁ほど歩行する時間を隔てゝまた一服を進め。曉方に再び進める。それで取り下す蟲物はその形狀さまざまであるが、急に擒へて油鐺に入れて煎じる。その蟲の嘴が青、赤、黃色のものならば治癒するが、黑、白色のものは難治である」しかしやはり傳染の患をば斷ち得るものだ。凡そこの藥を調合するには、豫め居室から遠い淸淨な室內で齋戒し、病人にその藥氣を聞かせ、または雞、犬、猫の畜類、喪中の者、婦人、一切の穢に觸れた物に見せてはならぬ。蟲が下つて後は白粥で補ふ。數日の後に夢に人が哭泣して別れ去るを見るがその效驗である（上淸紫庭仙方）【虛損骨蒸】千金方では、天靈蓋を梳の大いさほどを黃に炙き、水五升で二升に煮取り、三回に分服する。起死の神方である。
○張文仲の備急方では、人頭骨を炙いて三兩、麝香十兩を末にし、千杵擣いて梧子大の丸にし、一日二回、七丸づつを飲で服す。若し胸前に靑脈が出たならば、針で刺してその血の色を看る。まだ黑くならぬものならば七日で瘥える。【小兒の骨蒸】體瘦せ、心煩するには、天靈蓋を酥で炙き、黃連と等分を硏末し、一日二回、半錢

づつを米飲で服す。(聖惠方)【諸瘧寒熱】天靈蓋を煆いて研末し、水で一字を服して效を取る。(聖惠方)【膈氣不食】天靈蓋七箇を用ゐ、一箇毎に黑豆四十九粒を層層に隔てて封じ、水火で升降し、楊梅色になつたとき冷まして取出し、豆をば去つて用ゐず、研末して一錢づつを溫酒で服す。(孫氏集效方)【靑盲で視力なきもの】方は龍腦香の條を見よ。【痘瘡の陷伏】灰平になつて長ぜず、煩燥し、氣急するには、天靈蓋を燒いて研り、三分を酒で服す。○ある方では、雄黃二分を入れる。その瘡は自然に起發する。(痘疹經驗方)【下部の疳瘡】天靈蓋を煆いて研末し、先づ黃蘗湯で瘡を洗淨してから摻る。神效がある。○又ある方では、紅褐色の小さい紅棗等分を入れて共に燒いて研る。(劉氏經驗方)【臁瘡濕爛】人頂骨を燒き研つて二錢、龍骨三錢、金絲硫黃一錢を末にし、陰乾した冬蘿蔔芽を熬つた水で洗つてから貼る。(劉松石保壽堂方)【小兒の白禿】大豆、髑髏骨を各灰に燒いて等分を臘豬脂で和して塗る。(姚僧坦集驗方)

人胞(拾遺)

和名 えな
英名 The placenta.

〔釋名〕　胞衣（拾遺）　胎衣（綱目）　紫河車（綱目）　混沌衣（綱目）　混元母（蒙筌）　佛袈裟（綱目）　仙人衣　時珍曰く、人胞は衣のやうに人を包んであるものだから胞衣といふ。方家ではこれを諱んで別に諸種の名稱を呼ぶ。丹書には『天地の先、陰陽の祖、乾坤の橐籥、鉛汞の匡廓であつて、胚胎が將に兆さんとし、九九の數が我に足りたときに乘じてこれに載る。故にこれを河車といふ。その色には紅と綠と紫とあるが、紫のものを良しとする』とある。

〔修治〕　吳球曰く、紫河車は、古方では男、女を分たなかつたが、近世、男には男のものを用ゐ、女には女のものを用ゐる。一には、男の病には女を用ゐ、女の病には男を用ゐるといふ。初產のものを佳しとし、次には健壯無病の婦人のものを取るもよし。これを取つたならば、淸米泔で擺淨して竹器に盛り、長流水中で洗つて筋膜を去り、再び乳香酒で洗つて篚籠に盛り、烘り乾して研末する。また瓦で焙じて研ることもあり、酒で煮て擣き爛すこともあり、甑で蒸して擣いて晒すこともあるが、蒸したものを佳しとする。董炳は『今世間では、いづれも酒で煮、火で焙り、及び筋膜を去るが、大なる誤だ。火で焙り、水で煮るとその子が多くは育たな

(一)䭔鉀ハ餅ナ云フ。

いものだ。ただ蒸し擣いて藥に和するが最も良し。筋膜なるものは初めに結した眞氣だから剔り去つてはならぬ』といつた。

[氣味]【甘く鹹し、溫にして毒なし】[主治]【血氣羸瘦、婦人の勞損、面䵟で皮の黑きもの、腹內の諸病で漸次に瘦せるものには、淨治して五味を和し、(一)䭔鉀の法のやうにして與へて食はす。その婦人をして知らしめてはならぬ】(藏器)鉀は音甲(カフ)、餅である。【男、女一切の虛損勞極、癲癇で失志して恍惚たるものを治し、心を安じ、血を養ひ、氣を益し、精を補す】(吳球)

[發明]震亨曰く、紫河車で虛勞を治するには、骨蒸の藥を佐とすべきものだ。氣虛には補氣の藥を加へ、血虛には補血の藥を加へる。側柏葉、烏藥葉と共に酒で洒して九蒸九曝し、これと共に丸にすれば大いに能く補益する。これを補腎丸と名ける。

時珍曰く、人胞は、陳氏の本草に記載されてはあるが、昔は一般に用ゐることが甚だ少れだつた。近來、丹溪朱氏がその功を言つてから時に用ゐられるやうになり、括蒼の吳球が大造丸の一方を創始してから尤も世間に行はれるやうになつたの

だが、その方の藥味は平、補のものであつて、人胞を加へてなくともやはり服餌されるものである。その說明はその方の項に詳記する。

按ずるに、隋書には『琉球國では、婦人が出產すると必ず子衣を食ふ』とあり、張師正の倦游錄には『(二)八桂の獠人は、男を產むとその胞衣を五味で煎調し、親族が集つて啖ふ』とある。かかることは、諸種の獸類が子を產むと自らその衣を食ふと同じ意味だ。人類のすることではない。崔行功の小兒方に『凡て胎衣は天德、月德の吉方に藏むべきもので、深く埋め緊く築いて置けば生れた男子が長壽であるが、もし豬、狗に食はれるとその兒は顚狂になる。蟲蟻に食はれるとその兒は瘡癬になる。烏、鵲が食へばその兒が惡死する。火中に棄つれば兒が瘡爛するものだ。近來は社廟、汚水、井、竈、街巷にはこの物が禁制となつた』とある。按ずるに、これはやはり、銅山西に崩れ、洛鍾東に應ずる自然の理である。今またこれを蒸煮し炮炙し、藥に和し擣いて餌ふといふことは、人を以て人を補し、その同類を取るのだとはいひながら、人が人を食ふのであつて、ただ崔氏の禁を犯すだけの問題ではない。琉球、獠人と幾ばくの相違があらうか。似寄つたものだ。

(二)八桂ノ獠人トハ廣西省ニ棲ム蠻族ヲ指ス。

【附方】　書一、新六。

【河車丸】婦人の瘵疾、勞嗽、虛損、骨蒸等の證を治す。紫河車、初產の男子のもの一具を用ゐ、長流水中でよく洗淨し、煮て細く擘いて焙じ乾して研り、山藥二兩、人參一兩、白茯苓半兩と末にし、酒糊で梧子大の丸にし、麝香で七日間養ひ、三五十丸づつを鹽湯で溫服する。(永類鈐方)

【大造丸】吳球曰く、紫河車、卽ち胞衣であつて、兒が胎中に孕まれてあるときは臍が胞に系かり、胞は母の脊に系つて母の蔭を受けるもので、父精、母血が相合して生成し、眞元の鍾るところのものだ。故に河車といふ。後天の形を稟けるものではあるが、實は先天の氣を得るものであつて、超然として他の金石、草木の類の比すべきものではない。予は每にこれを用ゐて效を擧げてゐるが、婦人に用ゐて就中妙である。蓋しその自ら出るところに本いて各〻その類に從ふのである。子なきもの、及び女のみを多く生むもの、月經不調のもの、小產、難產のものがこれを服すれば必ず子を有たせ、危篤にして將に絕命せんとするものも、一二服で更に一二日は活かせる。その補陰の功の極めて重きこと百發百中である。久しく服すれば、耳聰く、目明に、鬚髮は黑くなり、天年を延べ、壽命を益し、造化を奪ふの功があ

る。故に大造丸と名ける。紫河車一具、男には女胎を、女には男胎を初産のものを用ゐ、米泔で洗淨して新瓦で焙じ乾して研末し、或は淡酒で蒸熟して擣き晒して研末する。氣力が尤も完全で且つ火毒がない。敗龜版の年久しきものを童尿に三日間浸して酥で黄に炙いて二兩、或は童尿に浸して石上で磨淨し、蒸熟し晒して研るが尤も妙である。黄蘗を皮を去つて鹽酒に浸して炒つて一兩半、杜仲を皮を去つて酥で炙いて一兩半、牛膝を苗を去り酒に浸し晒して一兩二錢、肥えた生地黄二兩半を、砂仁六錢、白茯苓二兩を入れて絹袋に盛つて瓦礶に入れ、酒で七回煮て茯苓、砂仁をば去つて用ゐず、地黄を膏に杵いてから用ゐ、天門冬を心を去り、麥門冬を心を去り、人參を蘆を去り各一兩二錢、夏期には五味子七錢を加へ、各、鐵器に觸れぬやうにして末にし、地黄膏と共に酒を入れた米糊で小豆大の丸にし、八九十丸づつを空心に鹽湯で服す。冬期には酒で服す。婦人には龜版を去つて當歸二兩を加へ、乳で煮た糊で丸にする。男子の遺精、婦人の帶下にはいづれも牡蠣粉一兩を加へる。

○世間の醫士は陽藥を用ゐて滋補するが、ただ無益なるのみならず、害をなすことが少くない。蓋し邪火は只だ能く火を動ずるだけで、物を生ずることは不可能な

ものだ。龜版、黄蘗は陽を補し、陰を補するもので、河車の佐としたのである。加ふるに、杜仲で腎を補し、腰を強くし、牛膝で精を益し、骨を壯にするもので、四味通じて足の少陰の經の藥である。古方には陳皮を加へて補腎丸と名けたものだ。生地黄は血を涼じ、陰を滋くするもので、茯苓、砂仁の力が加へてあり、黄蘗と共にすれば少陰に走るもので、白飛霞はこの四味を以て天一生水丸としたものである。天、麥門冬は能く肺氣を保護して火炎せしめず、肺氣をして下行して水を生ぜしめる。しかしその性は降があつて升がないものだが、人參を加へて元氣を鼓動すれば升あり降あるわけとなる。故に地黄と共に用ゐて固本丸といふのである。又、麥門冬、人參、五味子の三味は生脈散と名け、いづれも肺の經の藥である。この方の配合の意味は、大體に於て金、水の二臟を以て生化の原とし、河車を加へて大造の功をなすといふが目的である。ある一人の弱を病んで陽事大痿したものが、これを服して二劑にして體、貌が頓に異り、續けて四人の子を生んだ。ある一婦人は年六十にして已に衰憊してゐたが、これを服して壽九十に達して尤も强健であつた。ある者は病後に聲が出なくなつたが、これを服して氣壯にして聲が出るやうになつた。

ある者は痿を病んで半年間足が地に立てなかつたが、これを服して後は能く遠路を行けるやうになつた。(諸證辨疑)

【五勞、七傷】吐血し、虚瘦するには、初産の胞衣を長流水中で洗つて惡血を去り、淸汁が出るやうになつて止め、酒で煮爛して泥のやうに搗き、白伏神末を入れて和して梧子大の丸にし、百丸づつを米飮で服す。鐵器を忌む。(朱氏集驗方)【久癲失志】氣虚し、血弱するものには、紫河車を淨治し、煮爛して食ふ。(劉氏經驗方)【大人、小兒の癇疾】初産の胎衣一具を長流水中で洗淨してから水で浸し、春は三日、夏は一日、秋は五日、冬は七日浸して焙じ乾して末にし、羌活、天麻、防風各半兩、白殭蠶、白附子各一兩、南星二兩、川烏一箇、全蠍二十一箇を末にし、糊で梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、五十丸づつを好酒で服す。(乾坤祕韞)【諸蠱毒を解す】草蠱、蛇蠱、蜣螂蠱に拘はらず、その狀態が咽に入つて刺痛し、死せんとするには、胞衣一具を取つて洗ひ、切つて曝乾して末にし、一錢匕を熟水で調へて服す(梅師方)【目赤で瞖を生ずるもの】初産孩兒の胞衣を曝乾し、焙じて細末に研り、日日に目眥上に傅け、癒えれば止める。(千金)

胞衣水（拾遺）

和名　えなのみづ
英名　Placenta-water.

修治　藏器曰く、これは衣を地下に七八年埋め、化けて水になり、澄徹にして水のやうになつたものである。南方の地では、甘草、升麻と諸藥を和して缾に盛つて埋め、三五年後に掘り出して取つて藥にする。

氣味　【辛し、涼にして毒なし】　主治　【小兒の丹毒、諸熱毒發で寒熱して歇まず、狂言し、妄語するもの、頭上の無辜病、髮竪ち、虛痞する等の證。天行熱病はこれを飲めば立ろに效がある】（藏器）　【反胃久病には、一鍾を飲む。蟲が出るものである】（時珍）

初生臍帶（拾遺）

和名　ほぞのを
英名　The umbilical cord.

釋名　命蒂　時珍曰く、胎が母の腹に在つては臍が胞に連り、胎息は母に隨

ふ。胎が母の腹を出ると臍帯が既に剪れて、一點の眞元が命門、丹田に屬し、臍が乾いて自ら落ちる。瓜の蒂が脱ちるやうなものだ。故に臍は人の命の蒂である。その物は心、腎の中に當つて、前は(一)神闕に直り、後は命門に直るから臍といふのであつて、臍の意味は齊である。

[主治]　【燒いて末にして飲服すれば瘧を止める】(藏器)　【胎毒を解す。臍瘡に傅ける】(時珍)

[附方]　新三。　【臍汁の乾かぬもの】落下した臍帯を綿で裹み、燒き研つて一錢、當歸の頭末一錢、麝香一字を摻る。(全幼心鑑)　【胎毒の預解】小兒の初生十三日にその本身から剪下した臍帯を灰に燒き、乳汁で調へて服す。痘患を免れ得る。或は硃砂少量を入れる。(保幼大全)　【痘風赤眼】初生小兒の臍帶血を熱に乘じて點けるが妙である。(海上方)

人勢（綱目）

和名　まら、一名へのこ
英名　The human pinis.

(一)神闕ハ臍上ノ穴。

【釋　名】**陰莖**　時珍曰く、人の陰莖は藥物ではない。陶九成輟耕錄の記載に『杭州の沈生は、姦を犯した事件が露現して、刀を拔いて自らその勢を切り落した。ところが流血が甚しく、月を經ても合はなかつたが、ある人が、その切落した勢を尋ね出して粉に擣き、酒で服ませると數日ならずして癒えた』とある。これを觀ると(一)蚕室に下る者には、この法は必ず心得べきことである。故に此に附記する。

【主　治】【蚕室に下つて創口の合せぬもの】(時珍)

人膽 (拾遺)

和名　ひとのゐ、一名ひといきも
英名　The human gall.

【氣　味】【苦し、涼にして毒あり】【主　治】【鬼氣、尸疰、伏連】(藏器)【久瘧、噎食、金瘡】(時珍)

【發　明】時珍曰く、北虜の戰場中で、多く人膽汁を取つて金瘡に傅けるが、極めて效はあるけれども、但し再び他の藥を用ゐると必ず傷爛する。先に他の藥を敷いた場合にはこれは用ゐられないといふ。これは殺場に於ける救急の法であつて、

(一)蚕室ハ宮刑ノ獄名、地下ノ暗室。

膽を收めて乾して用ゐても害にはならない。しかしともすると殘忍な軍人などの中には、人を殺してその膽を取り、酒に和して飲んで『人間を勇壯にする藥だ』などといふものもある。これは戰爭中に於ける勝手な振舞に過ぎぬとはいひながら、君子のなすことではない。

附方　新三。【連年の久瘧】【噎食して下らぬもの】生人膽一箇に糯米を盛り滿て、麝香少量を入れ、竈の突上で陰乾して、一半の靑きものは瘧を治し、一半の黑きものは噎を治す。いづれも末にして五十粒を服し、瘧には陳皮湯を用ゐて服し、噎には通草湯を用ゐて服す。（いづれも普濟方にある）【鬼瘧で病狀の進退するもの】不定なるには、人膽、硃砂、雄黃、麝香等分を末にし、醋糊で綠豆大の丸にし、一丸づつを綿に裹んで鼻中に納れる。直ちに癒える。男子は左に、女は右に納れる。一丸で二人を治し得る。（聖惠方）

人肉（拾遺）

和名　ひとのにく
英名　The human flesh.

主治　【瘵疾】（藏器）

發明　時珍曰く、張杲の醫說に『唐の開元中、明醫陳藏器が本草拾遺を著して、人肉は羸瘵を療ずるといふことを記載した。そこで世間の低級な者の間には、この病に罹るものがあると股の肉を切取るものが多い。按ずるに、陳氏の先の世には股を割き肝を割いたものがあつたのであらう。それでその咎が陳氏に報い、その筆でその著書に書かせ、その惑を破ることに就ての立論をなさしめずして罪したものと思はれる。本草に輕しく言をなすべきわけはない』といつてある。嗚呼、身體、髮膚これを父母に受く、敢て毀傷せずといつてある。父母は如何に危篤の病に罹つたにしても、子孫のその支體を殘傷して、自ら肯てその骨を食はうといかで考へられようか。さやうなことは愚民の見といふものだ。按ずるに、何孟春の餘冬錄に『江伯兒は、母が病の時脇肉を割いて進めたが、癒えなかつた。そこで神に己が子を殺して謝禮を致さうと禱つた。すると母の病が癒えたので、遂に三歲になつた己の子を殺して了つた。その事實がやがて太祖皇帝の聞に達し、帝はその倫を絕ち理を滅することを怒つて、杖刑を科した上に流罪に行ひ、その問題を禮部の議に附されて

「予は、親に事へては、病あれば拜して良醫に托する。天に呼び神に禱るに至つては、懇切の至情如何にも已むを得ぬことであつて、氷に臥し股を割くといふやうなこともあるが、その事柄も、今のやうな後世になると、愚昧の徒の一時の激發から、わざわざ奇矯を衒つて世を驚し俗を駭し、表彰でも受けて特別に賦役の免除でも蒙らうといふやうな者も出て來るわけだ。股を割いたその上には肝を割くやうになり、肝を割いたその上には子を殺すといふやうなことにもなる。道に違ひ生を傷ることとこれより甚しきはない。自今かかる者のあつた場合には、表彰すべき者の例に入れてはならぬ」と仰せられた』とある。嗚呼、聖帝の風敎に關する叡慮はまことに高く古の上に出でたものだ。如何にも蓮しいことである。又、陶九成の輟耕錄には『古來兵亂の際には、人肉を食つて想肉と呼び、或は兩脚羊と稱へた』とある。かやうなものは人間性を有たぬ盜賊のことで、誅を加へる價値さへもない者だ。

木乃伊（綱目）

和名　みいら
英名　A mummy.

（一）天方國ハ今ノアラビヤ。
（二）遼ハ今ノ遼東。

【集解】時珍曰く、按ずるに、陶九成の輟耕錄に『（一）天方國に、年七八十で、捨身して衆生を濟度せんと發願したものがあつて、飲食を絶つてただ身を澡ひ、蜜を喫つてゐたが、一个月ばかり經つと大、小便までみな蜜になつた。やがて死んだので、國人はそれを石棺に殮め、中に蜜を滿てて骸を浸し、棺に年月を鐫んで埋葬した。百年經つて後、その棺を開いて見ると、屍は蜜劑に成つてゐて、肢體を折傷したものが少量を服すると立ろに癒えた。これは彼の國中でもやはり多くはないものだといふ。またこれを蜜人とも呼ぶ』とある。陶氏が記載したやうなものが果してあるものか否かは判らないが、姑く卷末に附記して博識の人に俟つ。

方民（綱目）

和名　しはうのたみ
英譯名　Inhabitants of different localities

李時珍曰く、人は性を乾坤に稟けて形を一氣に囿むもので、目が横に、足は二本あつてみな同じものではあるが、風土、氣習に因つて自然に一樣でない。それは蠻は頭にゐるものは黑く、家は（二）遼にゐるものは白く、水に食するもの

は腥く、草に食するものは羶い。膏粱の美食と藜莧の粗食とでは腸胃に天淵の相違があり、葛褐の粗服と羅紈の美服とでは肌膚に玉石の相違がある。居處と營養とが異れば同様に行かぬことはやはり自然の勢である。故に五方、九州の水土にそれぞれの差異があれば、その人民の生、長、氣、息がやはり殊るわけである。されば方民を集め部末に附錄し、醫診の參考に資する次第である。

【東方は海に濱し、水に傍ふ魚鹽の地であつて、その民は魚を食ひ、鹹きを嗜み、色黑くして理疎く。その病には瘡瘍が多く、その治に宜きは砭石である。〇西方は陵に居り、風多く、水土が剛彊であつて、その民は衣を著けずして褐を著け、華食にして脂が肥えてゐる。その病は內に生じ、その治に宜きは毒藥である。〇北方は地高く、陵に居り、風寒く氷冽であつて、その民は野處して乳食する。その病は臟寒で滿を生じ、その治に宜きは灸焫である。〇南方は地下く、水土弱く、霧露の聚るところで、その民は酸を嗜んで胕を食し、理緻にして色が赤い。その病は多く攣痺であつて、その治に宜きは微鍼である。〇中央は地平にして濕し、その民は雜を食つて勞せず、その病は多く痿躄であつて、その治に宜きは導引、按蹻である】（素問）

(二)青州、梁州、兗豫ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(三)荊揚ハ草部隰草類地膚ノ荊州、朮ノ揚州ノ註參照。
(四)墟土ハ黒ク剛キ土地。
(五)息土ハ肥エタル土地。耗土ハ瘦セタル土地。
(六)墳衍、水涯ヲ墳トイヒ、下平ヲ衍トイフ。
(七)幽州ハ草部山草類人參ノ註、幷州ハ石部石髓ノ註ヲ見ヨ。
(八)痺ハ淋閉、リンビヤウ。

【九州題を殊にし、水泉各〻風聲を異にし、氣習の剛柔が同じくない。(二)青州はその音は角、羽、その泉は鹹に酸があり、その氣は舒遲、その人の聲は緩である。○(三)荊揚はその音は角、徵、その泉は酸に苦があり、その氣は慓輕、その人の聲は急である。○(四)梁州はその音は商、徵、その泉は苦に辛があり、その氣は剛勇、その人の聲は塞である。○(五)兗豫はその音は宮、徵、その泉は甘に苦があり、その氣は平靜、その人の聲は端である。○雍冀はその音商、羽、その泉は辛に鹹があり、その氣は駃烈、その人の聲は捷である。○徐州はその音は角、宮、その泉は酸に甘があり、その氣は悍勁、その人の聲は雄である】(記載は括地象にある)

【堅土の人は剛、弱土の人は懦、(六)壚土の人は細、(七)息土の人は美、耗土の人は醜である】(記載は孔子家語にある)

【山林の民は毛あつて瘦せ、木氣を得るところが多い。川澤の民は黒くして津があり、水氣を得るところが多い。丘陵の民は團にして長く、火氣を得るところが多い。(八)墳衍の民は晳にして方である。金氣を得るところが多い。原隰の民は豊にして痺し、土氣を得るところが多い】(記載は宋太史集にある)

【荊州は一男二女。揚州は二男五女。青州は二男二女。兗州は二男三女。(九)幽州は一男三女。(一〇)幷州は二男三女。豫州は二男三女。雍州は三男二女。冀州は五男三女】(記載は周禮にある)

【土地に人の生ずるには、各〻類を以て應ずる。故に山氣は男多く、澤氣は女多く、水氣は瘖多く、風氣は聾多く、林氣は(一一)癃多く、木氣は(一二)傴多く、石氣は力多く、下氣は(一三)尰多く、險氣は癭多く、谷氣は痺多く、丘氣は狂多く、廣氣は仁多く、陵氣は貪多く、暑氣は夭多く、寒氣は壽多く、輕土は利多く、重土は遲多く、淸水は音小さく、濁水は音大きく――(濁水は人輕く、遲水は人重し)――中土は聖賢多し】(記載は淮南鴻烈解にある)

人傀

公回の切(クワイ)と發音する。怪異である。　(綱目)　和名　あやしきたみ　英譯名　Extraordinary human being.

李時珍曰く、(一)太初の時に天地(二)絪縕の一氣が人を生じて、そこで男と女とがあり、男、女が精を構へてその〻の自ら化し生ずるやうになつた。草木の始

(九)傴ハ傴僂、セムシ。
(一〇)尰ハ腫病。

(一)太初ハ天地開闢ノ時。
(二)絪縕ハ混沌別レテ天地トナリシ時分ノ有樣。

に生じた子は一氣であるが、後に根と子とがあつて、それが種となつて相繼いで生ずるやうなものである。人の變化には常理の外に出るものがあつて、それはやはり(三)司命の師の知るべきところ、博雅の士の識るべきところである。故に人傀を撰集し、部末に附錄して多聞冑(四)咎の徵に備へる。

【易に『一陰、一陽、これを道と謂ふ。男女精を構へ、萬物化生し、乾道は男となり、坤道は女となる』とある。これは蓋し男女生生の機をいつたもので、やはりただ陰陽、造化のみの良に能くするところである。齊の司徒褚澄は『血先づ至つて精を裹めば男を生み、精先づ至つて血を裹めば女を生む。陰、陽均しく至れば非男、非女の身となり、精と血と散分するは(五)駢胎、(六)品胎の兆である』といつた。道藏經には『月水が止んで後一、三、五の日は男となり、二、四、六の日は女となる』とあり、東垣李杲は『血海が始めて淨くなつてから一、二日は男となり、三、四、五は女と成る』といひ、聖濟經には『氣に因つて左動し、陽がそれを資ければ男となり、氣に因つて右動し、陰がそれを資ければ女となる』とあり、丹溪朱震亨は褚氏の說を非とし東垣の說を是とし、聖濟の左、右の說を主として立論し、子宮の

(三)司命之師、楚辭註ニ『司命、主知生死、輔天行化、誅惡護善也』トアリ。
(四)咎徵ハ天咎ノ徵候。
(五)駢胎ハ雙生兒。
(六)品胎ハ三ツ子。

左右の系に歸してあつて、諸氏の說は十分行き屆いたものであるが、予(時珍)が竊に謂ふに、褚氏の說も非なりと斷言は出來ず、東垣の說も完全とはいひ難い。蓋し褚氏は精、血の先、後から觀察し、道藏は日數の奇、偶から觀察し、東垣は女の血の盈虧から觀察し、聖濟と丹溪とは子宮の左右から觀察して言つたもので、それぞれ一見識を執つてゐるのだが、綜括的に觀れぱその間の關係が自ら會得されるわけである。かの男獨り女獨りの胎ならば日數で論ぜられようが、騈胎、品胎は如何にして感ずるものかの問題になると、やはり日數で論ずるわけに行かぬであらう、これを諸史記載に就いて調べて見ても、一產に三子、四子を生んだものも甚だ多く、その子には半數は男、半數は女のものもあり、或は男が多く女が少く、男が少く女の多いものもあり、西樵野記には、吾が明朝の天順年間に、揚州の民家で一產に五男を生んで、みな成育したといふ記載もある。これで觀ると、一、三、五の日を男とし、二、四、六の日を女とするの說のやうなわけとは受取れまい。一日に男を受胎して二日に復た女を受胎するといふ道理があらうか。これは褚氏、聖濟、丹溪の精と血と、子宮の左、右で論ずる方が根據があるのであつて、道藏、東垣の日數で論

（七）猥生ハ雙胎デナイ妊娠ヲ云フ。

ずる方が疑はしいのである。王叔和の脈經では脈の左、右の浮、沈で（七）猥生の男、女を辨じ、高陽生の脈訣には脈の縱横、逆順を以て駢、品の胎形を別けたが、恐らくはこれも臆度であつて確見ではない。王氷の玄珠密語には『人三子を生めば太平を主り、人三女を生めば國が淫して政を失し、十子を生めば諸侯が位を競ひ、人が肉塊を生めば天下が饑荒する』といつたが、これは社會人事に就いて論じたのだから、氣化の感ずるところであつて、全然その關係が別の問題だ。そもそも乾を父とし、坤を母とするは常理であるが、五種の非男は父たることが不可能であり、五種の非女は母たることが不可能であるのは問題だ。これは非男は陽氣の虧けたるを得、非女は陰氣の塞りたるを得たるものではあるまいかと思ふ。五不女とは、螺、紋、鼓、角、脈である】

　螺とは、牝竅の内部が旋つて物があり、螺のやうな構造のものである。紋とは、竅が小さいもの、卽ち實女である。鼓とは竅が全然なく、鼓のやうに皮で塞つたものである。角とは角のやうな物があるので、古代に陰挺と名けたものがそれである。脈とは一生涯經水の不調なもの、及び崩帶の類のものがそれで

ある。

【五不男とは、天、犍、漏、怯、變である】

天とは、陽痿して用ゐられぬもの、古代に天宦といつたものがそれである。犍とは、去勢したもので、(八)寺人がそれである。漏とは精寒して固からず。常に自ら遺洩するものである。怯とは、擧つても强くなく、或は敵を見て興らざるものである。變とはその體が男、女を兼ねるもので、俗に二形と名けるものだ。晉書には、これを亂氣の生ずるところとして、人痾といつてある。その類に三種あつて、男に値へば女になり、女に値へば男になるものがあり、半月は陰で半月は陽になるものがあり、妻にはなれるが夫にはなれぬものがある。これはいづれも體は具はつても用をなさぬものだ。

【胎は十个月に滿ちて生れるが常理であるが、七月、八月で生れるもの、十二三月で生れるもの、十四五月で生れるものがある。或る者は氣虛だといふが、虞搏の醫學正傳には『十七八月から二十四五月で生れるものがある』とあり、劉敬叔の異苑には『太原の溫磐石の母は孕むこと三年にして生んだ』とある。これはまた氣虛に

(八)寺人ハ宮中近侍ノ小臣ヲイフ。後世コレヲ宦者トイヒ、マタ內監トモイフ。

（九）黄牛羌ハ黄牛峽ノ誤、地名ナリ。湖北省宜昌縣ノ西ニ在リ。

（二〇）奇恒ノ奇ハ孤奇ニシテ屬スル所ナキノ意、特殊ノ器官タルヲ云フ。

してもかやうに久しきに至るわけはなささうに思はれる」

現に妊娠七个月で子を生むものがあつて、多くは成育するが、八个月で生れるものは多くは成育し難い。七は變ずるが八は變ぜないのである。○魏略には『（九）黄牛羌の人は、妊娠する事六个月で子を生んだ』とある。○博物志には『獠人は妊娠七个月で生れる』とある。○晉書には『苻堅の母は妊娠十二月で生んだ。劉擢の母は妊娠十三月で生んだ』とある。○漢書には『堯、及び昭帝はいづれも妊娠四个月で生れた』とある。○三十國春秋には『劉聰の母は妊娠十五月で生んだ』とある。○捜神記には『黄帝の母は名を附寶といふ。妊娠二十五月にして帝を生んだ』とある。

【胞門、子臟は（二〇）奇恒の府であつて、人を生むの戶たる所以が常理であるが、脇から産し、額から産し、背から産し、髀から産するもののあるは如何なる故であらうか。これは子臟に氣を受けることが駁雜にして、その系に不同があり、宋史の記載にある男陰が脊に生じ、女陰が頭に生ずるの類のやうなものではあるまいか」

史記に『陸終氏の娶つた鬼方の女は、孕んで左脇から三人を出し、右脇から

三人を出し、その六人の子孫に千年の間國を傳へた。天の將に興らんとするときは必ず尤物がある。修巳の背が拆けて禹が生れ、簡狄の胸が拆けて契が生れたやうなものだ』とある。○魏志には『黃初六年、魏郡の太守孔羨の上表に「汝南の屈雍の妻王氏は去年十月十二日を以て男兒を生み、右腋の下、小腹の上から出たが、その母は自若として何等畏れ痛むところもなく、今では瘡が已に癒えて、母、子全く安かだ」といつてある』とある。○異苑には『晉の時、魏興の李宣の妻樊氏は義熙年間に懷妊して生れなかつたが、額上に瘡があつて、兒はその瘡から出た。長じて軍將となり、名を胡兒といつた』とある。○又『晉の時、常山の趙宣の母は普通人と同樣に妊娠したのだが、髀上が痒いので搔くと瘡になり、兒がその瘡から出て、母、子共に平安であつた』とある。○野史には『莆田の尉舍の左旁に住んでゐた町人の妻が生んだ男子は股髀の間から出て、瘡が合して母子共に恙なかつた。屈雍の事實の旁證となることで、浮屠氏が「釋迦は摩耶の右脇から生れた」といふが、やはりこの理である』とある。
○嵩山記には『陽翟のある婦人は、妊娠三十月にして子を生み、母の背から出

て、五歳にして山に入つて道を學んだ』とある。〇瑯琊鈔には『吾が明朝の成化中、宿州の一婦人は妊娠して脇が癰のやうに腫れ、臨月に及んで兒がその癰から出生し、瘡の痾は隨つて合した。その子の名を佛記兒といつた』とある。

時珍曰く、吾が明朝の隆慶五年二月、唐山縣の民婦が妊娠して左脇が腫起し、兒が脇から生れて俱に恙なかつた。

【陽は生じ陰は長ずるが、孤陽は生ぜず、獨陰は長ぜざるが常理である。しかし思士は妻ずして感じ、思女は夫あらずして孕み、婦女にして鬚を生じ、男子にして湩を出し、男子にして兒を產むもののあるは何故であらうか。それはその氣脈に時に變易があるので、女國では自ら孕み、雄雞が卵を生むの類のやうなわけではあるまいか】

史記に『姜源は巨人の跡を見て、それを履んで棄を生んだ。有娀氏が鳥卵を含んで契を生んだのも、いづれも夫なくして孕んだのだ』とある。〇宣政錄には「宋の宣和の初年、朱節の妻は年四十にしてある夜頷が痒くなり、翌朝に至つて長さ一尺餘の鬚が生えた』とある。〇草木子には『元の至正年間、京師の

(二)達ハ蒙古語ノ達魯花赤ノ略、官長ノ義ナリ。一達婦トハ、アル一蒙古官人ノ妻ノ意ナリ。

一(二)達婦は髭鬚の長さ一尺餘になつた』とある。○漢書には『南陽の李元は一家悉く疫死して、ただ一人の孫だけが生き殘つた。その孫は生れて數十日經つたばかりだつたので、下男の李善といふものが自ら乳を哺ませると、ために乳から湩が出た』とある。○唐書には『元德秀の兄の子は襁褓にして親を喪つたので、德秀自ら乳を與へてゐたが、數日にして德秀の乳の中から湩が流れ、物を食へるやうになつてから止つた』とある。○宋史には『宣和六年、都城にゐた青果を賣る男が孕んで子を生んだ。產婆が取上げ得ないで七人まで易へて始めて分娩したが、その男は逃げ去つた』とある。○西樵野記には『明の嘉靖乙酉の歲、橫涇の傭農孔方は忽ち膨脹を患ひ、憒憒として數月經つと脇から一肉塊を產した。割いて見ると一人の兒で、肢體、毛髮悉く具つてゐた』とある。

【男は生れて覆ひ、女は生れて仰ぐ。水に溺れた場合もやはりその通りで、陰、陽の賦性は一定して變らないのが常理だが、しかし男が女に變化し、女が男に變化するもののあるは何故であらうか。それは乖氣が妖を致し、變亂して常に反するものではあるまいか。京房の易占には『男が化して女となるは宮刑が濫れるからだ。女

が化して男となるは婦政が行はれるからだ』とあり、春秋潛潭巴には『男が女に化すれば賢人が位を去り、女が男に化すれば賤人が王となる』とある。これは社會人事に關係させた說明ではあるが、しかし、その臟腑、經絡の變易の機微なることは測るべからざるものである』

漢書には『哀帝の建平中、豫章の男子が化して女子となり、人に嫁いで一子を生んだ』とある。○續漢書には『獻帝の建安二十年に、越嶲の男子が化して女子となつた』とある。

〔李時珍曰く、吾が明朝の隆慶二年、山西の御史宋纁の疏に『靜樂縣の民李良雨は妻張氏を娶つて四年になつたが、後に貧窮してその妻を去り、自身は他人に傭はれてゐた。ところが、隆慶元年正月、たまたま腹痛を起し、時に作り時に止んでゐたが、二年二月九日に大いに痛んで止まず、四月中に至つて腎嚢が覺えず退縮し、腹に入つて婦人の陰戶となつた。次の月には經水も行つて來たので、始めて女粧に換へた。時に年二十八であつた』とある。○洪範五行傳には『魏の襄王の十三年、女子が化して男子となつたものがあつた』とある。

○晉書には『惠帝の元康中、安豐の女子周世寧は漸次に化して男子となり、十七八に至つて性氣が完全になつた』とある。○又『孝武皇帝の寧康の初年、南郡の女子唐氏は漸次に化して男子となつた』とある。○南史には『劉宋の文帝の元嘉二年、女子が化して男となつたものが燕にあつた』とある。○唐書には『僖宗の光啓二年春、鳳翔の郿縣の女子朱齔は化して男子となり、十日ばかりで死んだ』とある。

【人は物に異るが常理であるが、しかし人が物に化し、物が人に化するもののあるは何故であらうか。これは人もやはり太虚中の一物であつて、いづれも氣交に囿まれる。その靈を得れば物が人に化し、その靈を失へば人が物に化するのではあるまいか。それとも譚子の所謂、至姪の者は化して婦人となり、至暴の者は化して猛虎となるといふやうに、心の變ずる結果は變ぜぬわけに行かず、孔子の所謂、物老いれば群精これに附して(三)五酉の怪となるやうなものであらうか】

譚子の化書には『老楓が化して羽人となるは、無情から有情へゆくものだ。賢婦が化して貞石となるは、有情から無情へゆくものだ』とある。○世說には

(三)五酉ハ怪物ノ名、孔子ガ陳ニ在ツタ時ニ見タモノデアル。衡波集トイフ書ニ出テ居ル。

（一三）殛ハ誅ニ同ジ。

『武昌の貞婦は、夫を望んで化して石となつた』とある。〇宋史には『崑山の石工は石を採る際に石穴に陷入し、三年經つて掘出したときは活きてゐるもののままであつたが、風に當ると遂に化して石となつた』とある。〇幽冥錄には『陽羨の小吏吳龕といふものが、溪中で五色の浮石一箇を拾つて歸り、それを床の邊へ置くと、夜になると化して女子となつた』とある。〇左傳には『堯が鯀を羽山に（一三）殛すると、その神が化して黃熊となつて淵に入つた』とある。黃熊は龍の類のものだ。〇續漢書には『靈帝の時、江夏の黃氏の母は火に浴して化して黿となり、淵に入つた』とある。〇搜神記には、魏の文帝の黃初中、淸河の宋士宗の母は室内で浴して化して鼈となり、水に入つてゐたが、時にまた家に還ることもあつた』とある。〇異苑には『宋の文帝の元嘉中、高平の黃秀は山に入つて數日のうちに遂に化して熊となつた』とある。〇淮南子には『牛哀は病んで七日にして化して虎となり、その兄を搏ち殺した』とある。〇郡國志には『藤州の夷人は往往にして化して貙となる』とある。貙は小さい虎で指の五本あるものだ。〇博物志には『江漢には貙人といふがあつて、能く化して

虎となる』とある。○唐書には『武后の時、郴州の左史が病のために虎に化せんとしたが、擒へられて止んだ。しかし虎の毛が生えてゐた』とある。○又『憲宗の元和二年、商州の役夫が化して虎になるところだつたが、大勢の者が水を沃けたので果さなかつた』とある。○顧微の廣州記には『貞陽縣の俚民は年十五六の一人の兒に牛を牧はせてゐたが、その兒が日日に牛に舐められて甚だ快く感じてゐるうちに、舐められた處が悉く白くなつた。ところが突然その兒が病死したので、牛を殺し、客を招いでその牛を食はせたところ、食つた者が男、女二十餘人悉く化して虎になつた』とある。○隋書には『文帝の七年、相州の一沙門が化して蛇となり、樹を繞つて抽き出たところを見ると、長さ二丈ばかりあつた』とある。○抱朴子には『狐、狼、猴、玃は三百歳にしてみな能く人に變ずる』とある。

【參同契に『燕、雀は鳳を生ぜず、狐、兎は馬を字まず』とあるが常理であるが、しかし人にして蟲、獸、神鬼、怪形、異物を産む者のあるは何故であらうか。これはその視聽、言動が邪思に觸れ、形に隨つて感應してさやうな結果をなすものでは

（一四）崑崙トハ馬來半島ヲ指ス。

あるまいか。又、人にして卵から生れ、馬から生れる者もあるは何故であらうか。これは神異の憑るものがあつて、或は感遘するものがあるためにさやうな結果をなすものではあるまいか】

博物志に『徐の偃王の母は卵を産んでそれを棄てた。ところが孤獨の老母が拾ひ取つて覆ひ抱くと一兒が生れた。後に徐國を繼いだ』とある。○異説には『漢末に馬が人を生み、名けて馬異と呼んだ。長ずるに及んで胡地へ逃亡した』とある。

【人は四肢、七竅を具へるが常理である。しかし荒裔の外には、三首、比肩、飛頭、垂尾の民がある。これは邊徼の餘氣の生ずるところで、鳥獸と同じく、吾が同胞の民と同例に論ずるわけに行かぬとはいひ、しかしやはり異なることである】

山海經に『三首國は一身三首である。（一四）崑崙の東に在る』とある。○爾雅には『北方に比肩民といふがあり、半體相合し、迭に食ひ、迭に望む』とある。○南方異物志には『嶺南の溪峒中に飛頭蠻といふがある。項に赤痕があり、夜になると耳を翼にして飛び去り、蟲物を食ひ、曉方に近くまた還つて來て故の

やうになる。搜神記の記載に、吳の將軍朱桓の一婢は、頭が能く夜中に飛んだとあるはこの種のものだ』とある。○永昌志には『西南徼外に濮人といふがあつて、龜のやうに長さ三四寸の尾があり、坐らんとするときは先づ地を穿つて孔を作る。若し誤つてそれを折ると死亡する』とある。

【かやうなわけで、天、地の造化は無窮であり、人、物の變化も無窮である。賈誼の賦に所謂『天地は爐であつて造化は工である。陰陽は炭であつて萬物は銅である。合散し消息するにいかで常則があらう。されば千變萬化して、未だ始より極るところはない。忽然として人となるも何ぞ(一五)控摶するに足らう。化して異物となるも又何ぞ患ふるに足らう』とは、やはり變化はみな一氣に由るものだといふ意味である。學識未熟の者が、一隅の見を恃み、いかで古今、六合の窮なき變化の事物を概指して、迂怪なことだなどといかでいひ得ようぞ】

本草綱目人部第五十二卷　終

(一五)控摶、文選註ニ愛生ノ意ナリトアリ。孟康ハ「控ハ引ナリ。摶ハ持ナリ。人生忽然、何ゾ引持スルニ足ラント言ヒ、自ラ貴惜スルナリ」トイフ。

昭和六年十一月十一日印刷
昭和六年十一月十五日發行

頭註國譯本草綱目（第十二冊）
非賣品

監修兼 白井光太郎
翻譯者 鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地

發行者 和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 氣賀林一
東京市日本橋區通三丁目八番地

刊行所 春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行

東京
春陽堂
出版